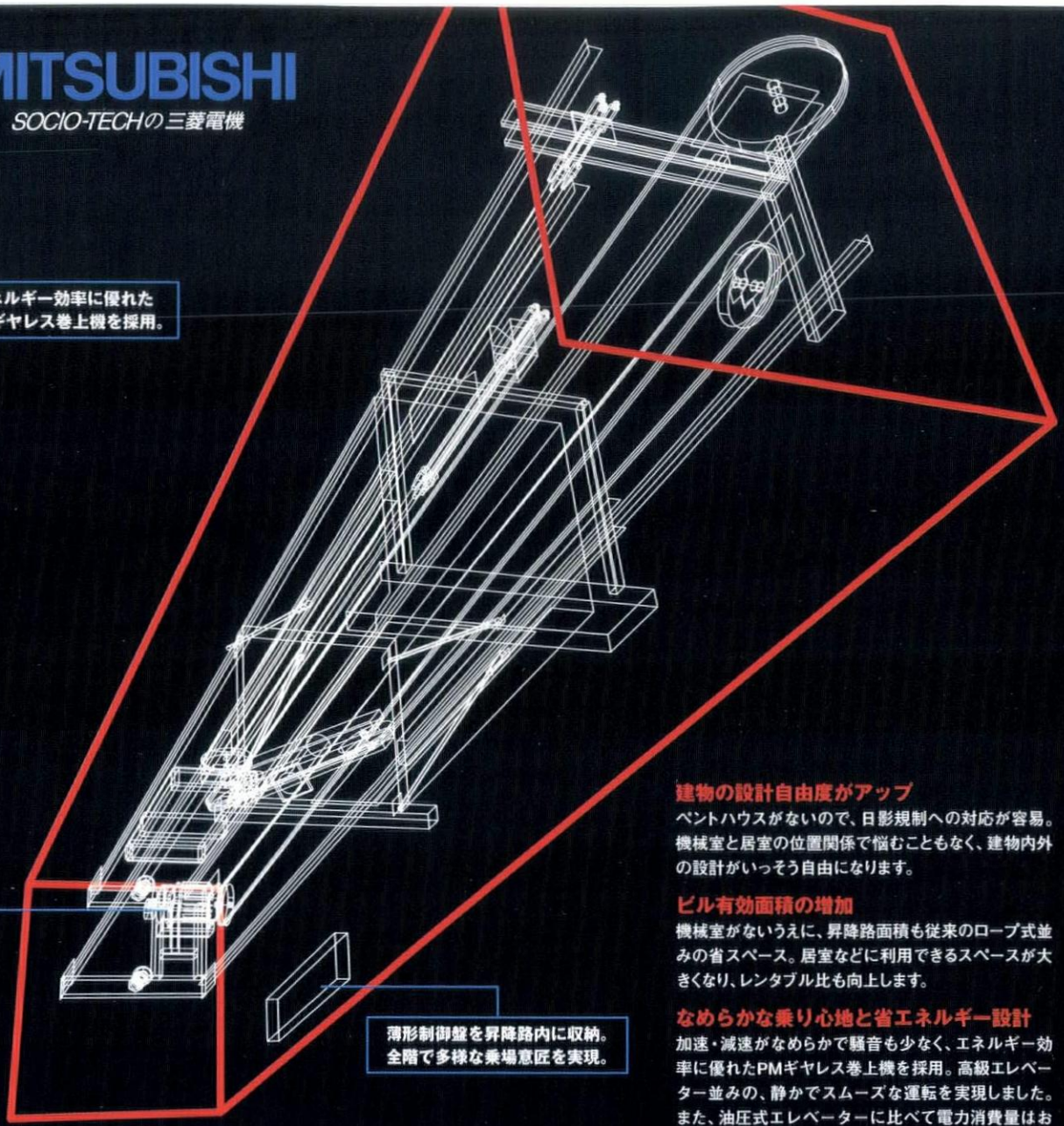
MITSUBISHI

SOCIO-TECHの三菱電機



建物の設計自由度がアップ

ペントハウスがないので、日影規制への対応が容易。機械室と居室の位置関係で悩むこともなく、建物内外の設計がいっそう自由になります。

ビル有効面積の増加

機械室がないうえに、昇降路面積も従来のロープ式並みの省スペース。居室などに利用できるスペースが大きくなり、レンタブル比も向上します。

なめらかな乗り心地と省エネルギー設計

加速・減速がなめらかで騒音も少なく、エネルギー効率に優れたPMギヤレス巻上機を採用。高級エレベーター並みの、静かでスムーズな運転を実現しました。また、油圧式エレベーターに比べて電力消費量はおよそ1/3になります。

環境に配慮

油圧式エレベーターでは避けることのできなかった廃油処理の必要もありません。「環境にやさしいエレベーター」、これも〈エレパック〉の優れた特長です。

昇降路だけのエレベーター

三菱〈エレパック〉誕生。

機械室にあったすべての機器を昇降路内にすっきり収納しました。もちろん制御盤も昇降路内に設置。エレベーター乗場の出入口わきなどに置く必要はありません。昇降路だけのエレベーターですから、設計の自由度がアップ、すべての階で多様な乗場デザインを可能にします。

新登場

ELEPAQ（エレパック）

三菱エレベーター／機械室レスタイプ

Efficient, Reliable & Comfortable
Vertical Transportation Systems
All Over The World

•

効率がよく（Efficient）
信頼性に優れ（Reliable）
快適な移動空間の創造（Comfortable）
エレベーターの3つのキーワードを基に
そのすべてにおいて、世界トップクラスの製品を
全世界に向けて提供します。

三菱電機株式会社

お問合せ・資料のご請求は……三菱電機株式会社　〒107-6150 東京都港区赤坂5-2-20（赤坂パークビルヂング）
本社ビル事業部　TEL.(03)5573-3793

SD

9812 space Design

スペースデザイン ISSN 0563-0931
第411号1998年12月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

特集

SDレビュー1998

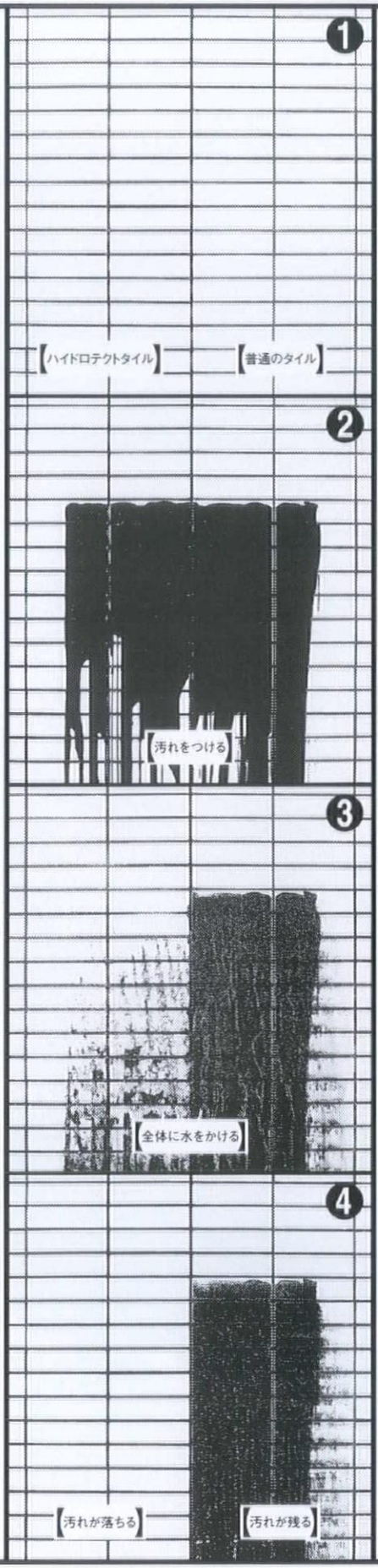
SD Review 1998



Monthly Journal of Art and Architecture

TOTO
HYDROTECT

実証、ハイドロテクトの力。



汚れを防ぎ、汚れを流す。
TOTO ハイドロテクトタイル

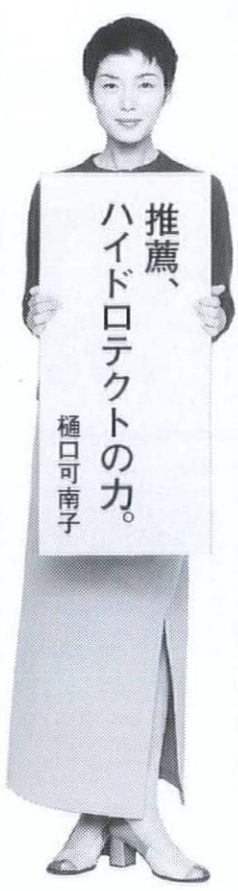
◎ハイドロテクトは、光と水の新技術／外装タイルの汚れに対し、絶大な効果を発揮するハイドロテクト。その仕組みは、太陽の光を活かして汚れを分解し、同時に、水がなじみやすくなるタイル表面を作りだすというもの。汚れは固着せず、雨でも流れてしまいます。今話題の〈光触媒〉をベースにTOTO独自の発想が生んだ、全く新しい技術なのです。設計プランにあわせて、ぜひお使いください。

◎ハイドロテクトで、経費節約／ハイドロテクトタイルなら、通常5年おきの外装の洗浄が、20年おきで充分。メンテナンス費用が削減でき、建物の資産価値も高く保てます。

◎ハイドロテクトは、白・淡色系の外装に／メンテナンス費用の問題が解決すれば、白・淡色系のタイルも大胆に使えるはず。さらにハイドロテクトタイルは洗浄に洗剤を必要としないので周辺環境にも優しいタイルです。

※お問い合わせ・カタログのご請求は、〒154-8540 東京都世田谷区桜新町2-24-2 TOTOタイル・建材企画部まで。TEL.03-5451-1071 FAX.03-5451-1197

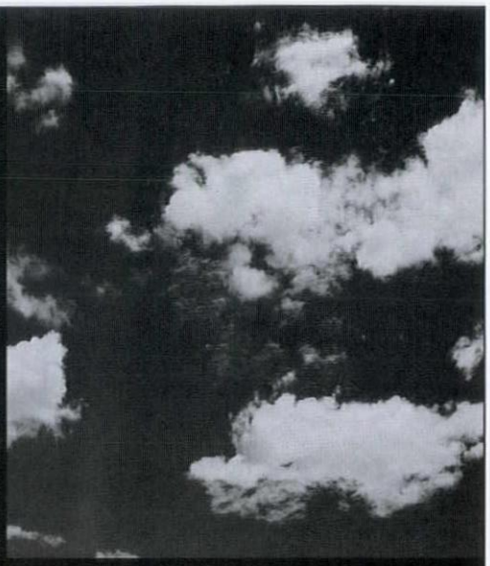
世界のタイルを、きれいにしたい。



インターネットホームページ http://www.toto.co.jp/

これは実験です。（決してマネしないで下さい）

National/Panasonic



A V & C F L A P S

AUDIO
音響システム

VISUAL
映像システム

COMMUNICATION
通信システム



COMPUTER
コンピューターシステム

ここにはあります人と自然と技術の調和が

FOOD
食品流通システム

LIGHT
照明システム

AIR & AQUA
空調・水管理システム

PASSAGE
搬送システム

SOFTWARE&
SYSTEM
ソフトウェア・
システム



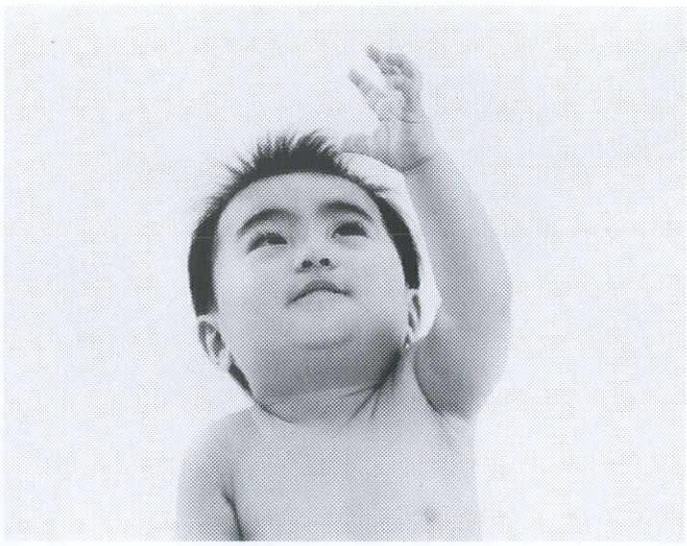
松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。

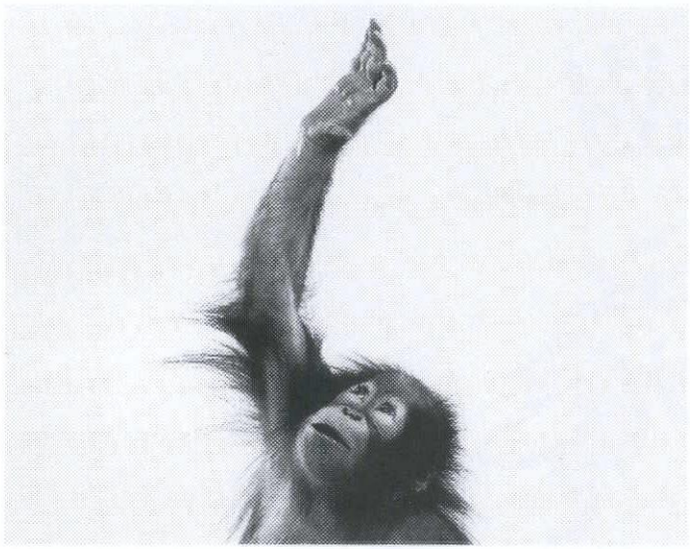
松下電器産業株式会社

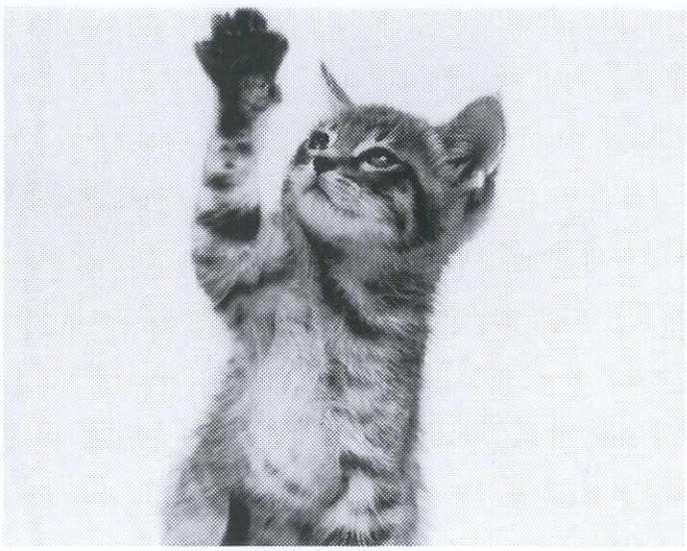
建設システム営業本部 ☎03-5460-2931
北海道支店 ☎011-207-7722
東北支店 ☎022-711-3551
新潟支店 ☎025-246-1031
関東支店 ☎0286-37-2241
神奈川支店 ☎045-651-5051
建設システム営業本部中部支店 ☎052-951-6010
長野支店 ☎0262-26-3990
北陸支店 ☎0762-23-1121
静岡支店 ☎054-247-5155
建設システム営業本部関西支店 ☎06-949-2111
中国支店 ☎082-247-5272
四国支店 ☎0878-26-1711
九州支店 ☎092-431-1100
沖縄支店 ☎098-869-2926

KANDENKO









大切なのは、
何かをつかもうとする心。

電気は光・熱・情報・音響などに姿を変え、私たちの暮らしを支えています。関電工はこうした電気を、住宅で、オフィスで、劇場で、工場で、環境への配慮と安全性を第一に具体的なシステムや設備のカタチでお届けしています。そしてつねに、さらなる可能性を広げようと、新たな夢を描き、日夜さまざまな研究を続けています。今までも、これからも、関電工の技術はいつもあなたの近くにいます。

いつも、人に優しい技術で未来へ。

関電工

本社：〒108-8533 東京都港区芝浦4丁目8番33号
☎：NTT 03(5476)2111 TTNet 03(4431)2111

広告についてのお問合せの際は≪SDを見て≫と御明記願います　A3

自由の女神さま、
グラリときたら、ユラリと踊ってください。



東京湾の海風がほのかに香るお台場海浜公園に、今年、フランスから、どえらいVIPがやってきました。「自由の女神像」です。

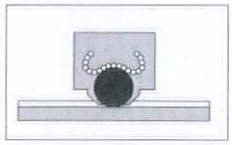
ちなみに、アメリカ合衆国建国100年を記念してフランスが寄贈したのが「ニューヨークの自由の女神」。その返礼にアメリカがフランス革命100年を記念して贈ったのが、この「パリの自由の女神」です。もし日本で地震に遭って"パリッ"なんてことでもあったら、それこそシャレではすみません。

地震対策には知恵が必要です。大切なお預かりもの、ということに加え、女神は年齢100歳をはるかに超えるご老体なのですから。(失礼!)もちろん地震のことなど考えてつくってあるはずもありません。そしてわたしたちは、こんな課題に挑戦しました。「女神の本体には一切補強を加えないで、震度7の揺れに耐えること。」

この難問を解決したのが、「台座の下に入れた6基の免震装置」です。台座の下のボールがコロコロころがり、地震の揺れを吸収。像に加わる力を1/5以下に減らします。これで、もしほんとうに大地震が来たとしても、女神さまは台座ごとユラユラ踊っているように見えるんじゃないかな。もちろん、地震なんて来ない方がいいことは、言うまでもありませんが…。

以上、わたしたち鹿島の仕事の一部を、ここにご報告いたします。

*免震装置の仕組み



ボールベアリングが転がる動きで地震の揺れを吸収します。オイルダンパが動きすぎを制御するので心配ありません。なお、免震装置の下には、マットスラブによる直接基礎を施し、地下12mまでの地盤改良工事も行っています。

*自由の女神像



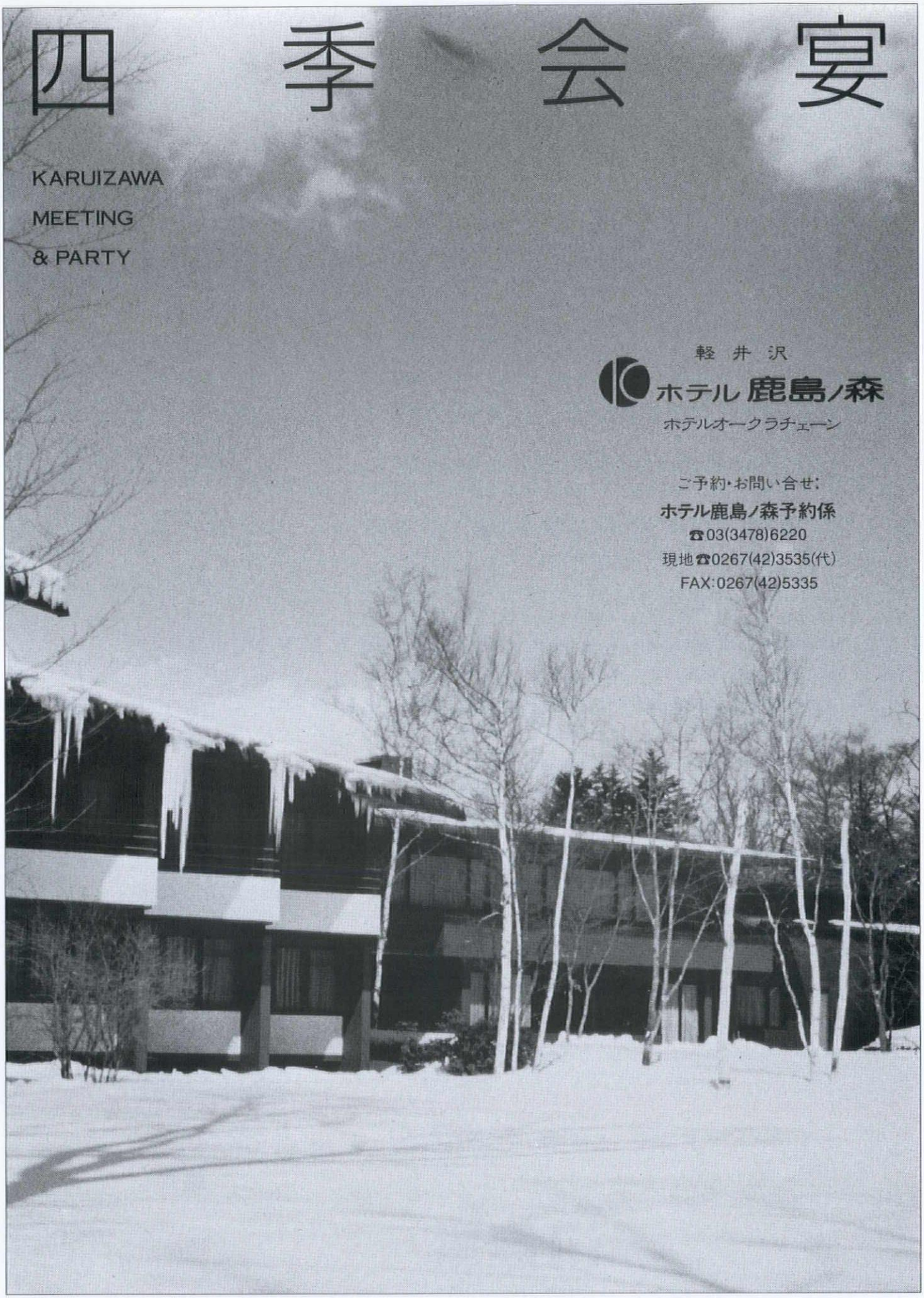
1998年1月までお台場海浜公園に展示されています。

自由の女神像移築
主催　「日本におけるフランス年」実行委員会
　　株式会社フジテレビジョン
共催　東京都

J'aime la France

鹿島

東京都港区元赤坂1-2-7　〒107-8388
http://www.kajima.co.jp/


四季会宴
KARUIZAWA
MEETING
& PARTY
軽井沢
ホテル鹿島ノ森
ホテルオークラチェーン
ご予約・お問い合せ:
ホテル鹿島ノ森予約係
☎03(3478)6220
現地☎0267(42)3535(代)
FAX:0267(42)5335



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

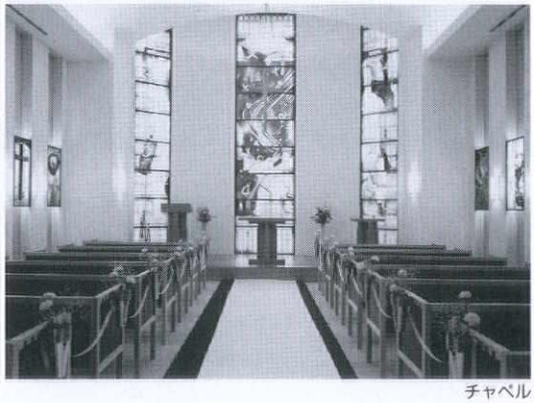
すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。
ドアマンに迎えられホテルに一歩脚を踏み込めば、
あなたの新しい物語がはじまります。

〔客室&施設〕

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。(シングル¥15,000～ ツイン¥25,000～) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した2,000㎡の"ガーデンプール"。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル〈3F〉。ガーデンプールの一角に設けられたガーデンチャペル〈5F屋外〉。厳粛な神殿(八幡殿＝やひろでん)〈3F〉。●最大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプのヘルスクラブ"ジ・イースト"。●都内初のホテル直結型多目的ホール"イースト21ホール"。

〔レストラン&バー〕

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……【プラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカンムードのメインバー……【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚…【鉄板焼 木場(21F)】●心に残る夜景…【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



チャペル

HOTEL East 21 TOKYO

地下鉄東西線『東陽町駅』より徒歩7分。
東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

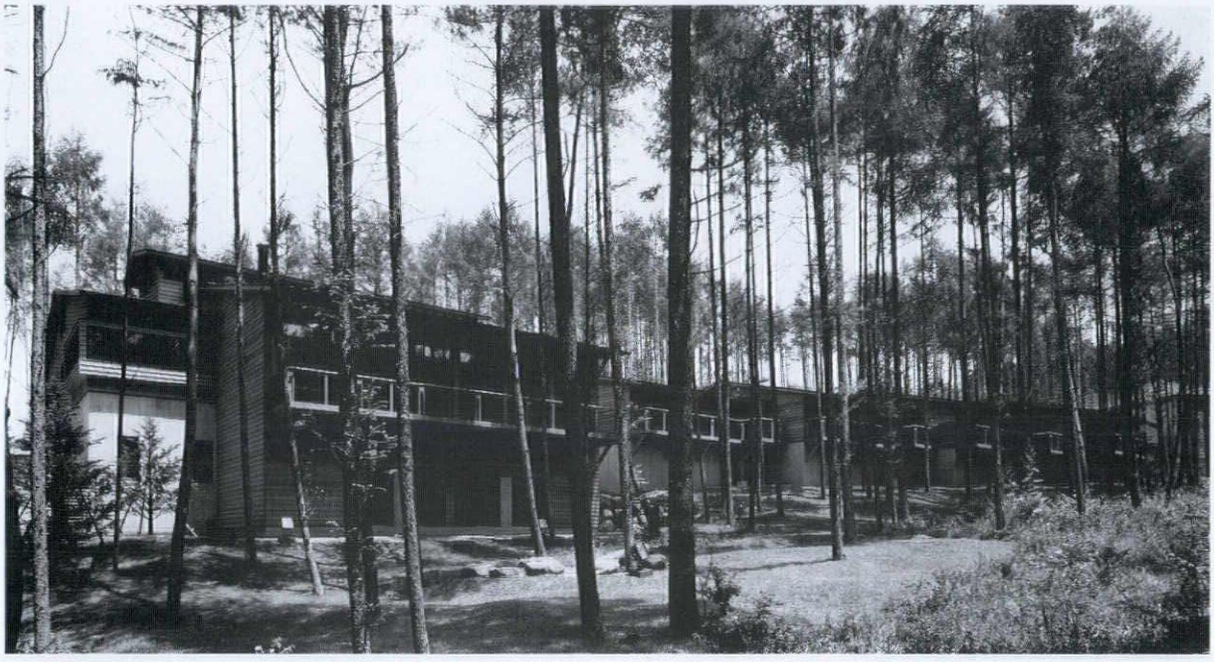
ホテル イースト21東京

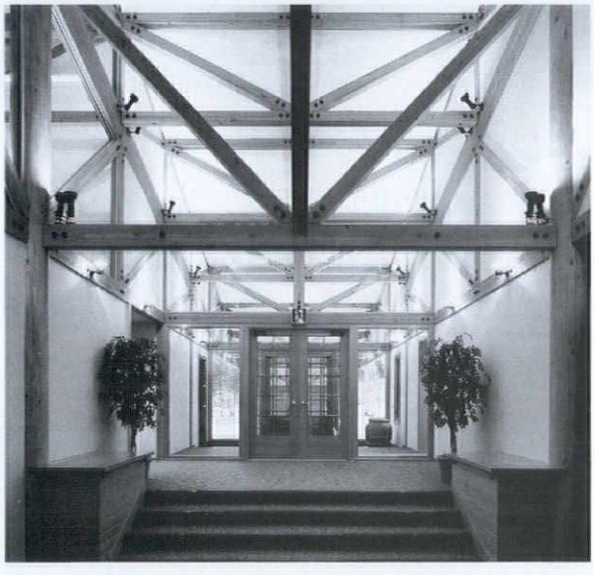
〒135-0016 東京都江東区東陽6-3-3
TEL.03(5683)5683㈹ FAX03(5683)5775



大興物産の海外建材シリーズ

No.6　木製品(ツーバイフォー,集成材)







大興蓼科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、
企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。
〒107-8318 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL 03-5474-6054 FAX 03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ　**大興物産株式会社**

本　社　〒107-8307 東京都港区元赤坂1－6－4 安全ビル

本　社	☎(03)5474-6060 FAX(03)5474-6076	札幌営業所	☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074	四国営業所	☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
東京支店	☎(03)5474-6072 FAX(03)3423-1915	東北営業所	☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867	九州営業所	☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
横浜支店	☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996	関東営業所	☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719	シンガポール オフィス	☎65-3440590　FAX65-3446714
名古屋支店	☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179	北陸営業所	☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248		
大阪支店	☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074	広島営業所	☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270		

快適さは…安全、確実が基本。

快適な環境づくりに、豊かな経験。



●技術と伝統の…
内線工事■外線工事

東光電気工事株式会社

本社　〒101-8350 東京都千代田区西神田1-4-5　TEL.(03)3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・広島・福岡

マルチメディアのNEC

NEC

凄いを、軽く。



Windows®98搭載、
軽量ミニノート新モビオ誕生。

- A5サイズで薄さ28.5mm、携帯性にすぐれた超軽量約770g。
- マグネシウム合金を採用したスタイリッシュなボディデザイン。
- 最大で約5.6時間※1の長時間バッテリ駆動を実現。
- CPUにはMMX®テクノロジPentium®プロセッサ200MHzを搭載。
- メインメモリ32MB標準搭載（最大96MBまで増設可能）、HDD約2.1GBの大容量。
- ファンクションキーによる簡単操作でメールの送受信ができる「モバイルメール」をプリインストール。
- 会社や自宅のパソコンとデータ連携ができるシンクロナイズ機能にも対応。



Windows®98をモバイルしよう。

ミニノート新基準「モビオ」

mobio NX

Windows®98搭載 MB20C/UV modelT4 標準価格238,000円（税別）・modelU4※2 標準価格248,000円（税別）・modelV4 標準価格258,000円（税別） Windows®95搭載 MB20C/UV modelA4 標準価格238,000円（税別）

●8インチTFT液晶ディスプレイ搭載で見やすい画面。●一太郎Office8※3［一太郎8.0 with パワーアップキット］または、MicrosoftExcel 97 & Word 98 & Outlook™ 97 for Windows/MicrosoftOutlook™98 for Windows（modelV4）など、ビジネスソフトインストールモデルも同梱。●PC Card Standard準拠のPCカードスロット（typeII×1）を標準装備。オフィスでは社内ネットワーク端末として、外出先では電話回線（アナログ）と接続して電子メールやインターネットメールが利用できるLAN&FAXモデムカード（別売）など、豊富なPCカード拡張機器（別売）が利用可能です。

おかげさまで PC98-NXシリーズ 累計販売台数 2000万台

さらに信頼されるパソコンへ

国内累計出荷台数（1998年9月現在）

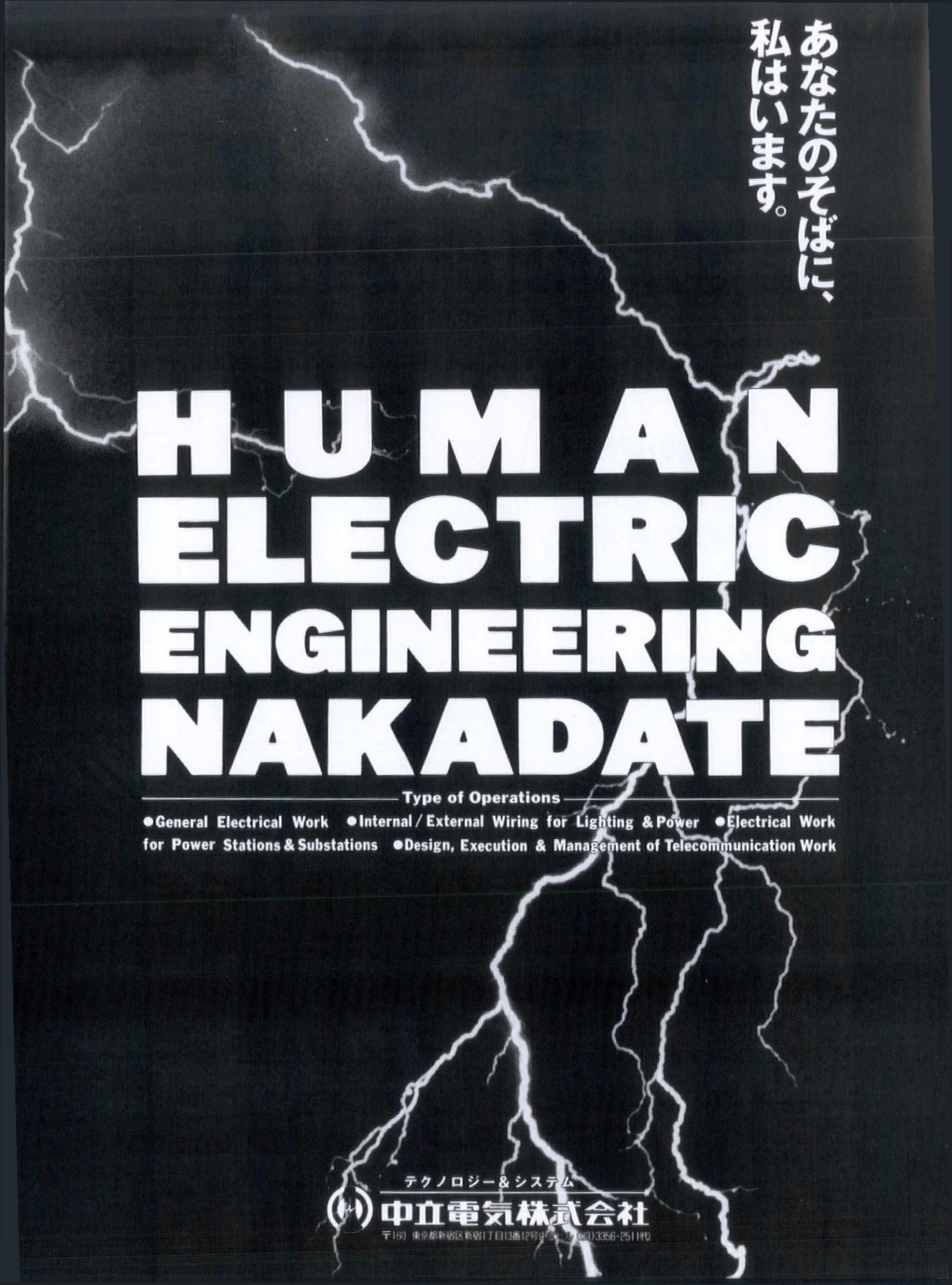
MMX® intel inside pentium® PROCESSOR

※ソフトウェア、周辺機器等は、Windows95またはWindows98のもとで動作可能なものをご確認の上ご使用ください。Windowsの正式名称はMicrosoftaWindowsaOperating Systemです。Microsoft、Windows、Outlookは米国Microsoft Corporationの米国およびその他の国における登録商標です。Intel Insideロゴ、PentiumおよびMMXは、Intel Corporationの登録商標または商標です。一太郎、FullBandは、株式会社ジャストシステムの登録商標または商標です。「一太郎Office8」は、株式会社ジャストシステムの著作物であり「一太郎Office8」にかかる著作物その他の権利は、すべて株式会社ジャストシステムに帰属します。その他の会社名、商品名は、各社の商標または登録商標です。本パーソナルコンピュータは、オペレーティングシステムを標準搭載しています。※ご使用の際は、必ず「取扱説明書」をよくお読みのうえ、正しくお使いください。※1）別売の大容量バッテリパックを装着し、APMモードを使用した場合。バッテリ駆動時間はご使用状況によって異なります。※2）一太郎9アップグレード対象商品。一太郎office8のユーザ登録をされた方を対象に、一太郎9発売直前になりましたら順次ご案内を送付いたします。（対象となる登録期間：平成10年6月12日～平成10年12月31日まで）

PC98-NXシリーズに関する情報を右記の情報提供サービスにより提供しています。

●FAX情報サービス：「NECパソコン情報FAXサービス」東京 03-3769-9821 大阪 06-304-9821 mobio NX 6014（8枚）※枚数は変更になる場合があります。
●インターネットでのmobio NXの情報はこちへ98 http://www.nec.co.jp/98/ ●NECパソコンインフォメーションセンター：フリーダイヤル 0120-60-9821
受付時間 9:00～17:00（祝日を除く）※フリーダイヤルは携帯電話・PHSではご利用いただけません。市外局番は不要です。

〈本広告に関するカタログを差し上げます。〉ハガキに郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号、勤務先を明記のうえ、〒108-8001 東京都港区芝5-7-1 NEC10-28530 mobio NX（SD 11／25）係までお送りください。


あなたのそばに、
私はいます。
HUMAN
ELECTRIC
ENGINEERING
NAKADATE
Type of Operations
●General Electrical Work ●Internal / External Wiring for Lighting & Power ●Electrical Work for Power Stations & Substations ●Design, Execution & Management of Telecommunication Work
テクノロジー&システム
中立電気株式会社
〒160 東京都新宿区新宿1丁目13番12号中立ビル TEL(03)3356-2511㈹

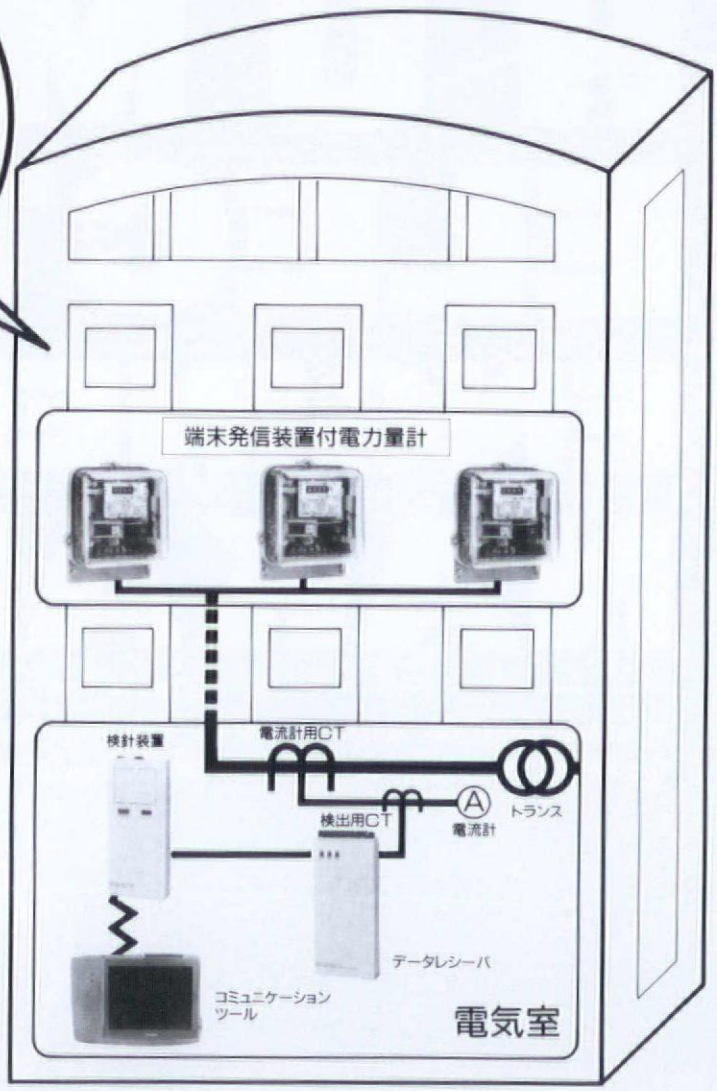
検針の大崎が初めて実用化

OSAKI

電力線通信方式集中検針システム
POWER LINE CARRIER-ONE-O **PLC-10**

カンタン シンプル ローコスト の電力線通信検針システム

**リニューアルetc.
既設の建物に
お手軽に
導入できます。**



電力線通信方式とは?

通信経路として、**屋内配電線**を利用します。
ですから……

専用のケーブルの敷設が不要なので……

- ■工事が簡単
- ■システムがシンプル
- ■導入がローコスト
- ■既設の建物(ビル、寮など)に手軽に導入できる
- ■増設にも即対応可能

コンパクトだから……

- ■設置場所を選ばない

検針の大崎だから

- ■電気のほか水道、ガスも検針

大崎電気工業株式会社

本　社　〒141-8646 東京都品川区東五反田2-2-7　☎03-3443-7171
システム・機器営業部第二課　☎03-3443-7176　FAX03-3443-0265
大阪支店　☎06-373-2556
営業所　札　幌☎011-251-6622／仙　台☎022-223-3747／北関東☎048-653-5901／千　葉☎043-221-5714
横　浜☎045-664-5561／広　島☎082-243-1611／沖　縄☎098-832-7406

繊細な色柄とソフトな質感で
空間をやさしく彩る、
ビニル床シートです。

学校や病院、公共施設などのパブリックスペースでは、よりソフトで温もりの感じられる空間づくりが求められています。こうしたトレンドにお応えし、ロンシールでは幅広い用途で活躍する汎用性の高いビニル床材として、ロンリウムナチュールを開発。雲柄をベースに数種のチップを散りばめたソフトなデザインが、空間にやさしい表情を与えます。また重歩行にも耐える耐久性も備えながら、価格を抑えることによってコストパフォーマンスも追求したビニル床シートです。



ビニル床シート

ロンリウム ナチュール

用　途

学校・幼稚園等文教施設、病院・養護老人ホーム等　医療福祉施設、庁舎等公共施設の一般室・廊下・通路・階段、レストラン・喫茶店・デパート・ショッピングセンター・オフィスなどのロビー・エレベーターホール・湯沸室など。

規　格

- 12色
- 2.0㎜(2.5㎜※)厚さ×1820㎜ 幅×9m長さ
  ※受注生産品

お客様の満足が私たちの目標です
ISO 9001 認証取得

特　長

●雲柄に加え、微細な繊維状・粒状など数種のチップが深みのあるデザインと温もりを醸しだしています。また、ビーチを思わせるソフトでやさしい質感を備えています。カラーは12色。さまざまな空間イメージにお応えできる多彩なラインアップです。

●歩行時のショックをやわらげる適度な柔軟性・弾力性、さらには適度な防滑性を備えているため、快適な歩行感が得られます。

●継ぎ目はスーパーシームシーラーによる液溶着ですから接合部が目立たず、一枚フロアのような美しい仕上がりで、かつ十分な強度を実現しています。また、下地によくなじむうえにカッティングも軽く、細部の施工が容易です。

●重歩行に耐える、すぐれた耐久性を備えていますから、仕上がり時の美しさを保ちます。

●酸、アルカリ、アルコール類、塩類などへの耐薬品性にすぐれています。

●一体化した床面をつくることができるため、汚れが取れやすく日常のメンテナンスが容易です。



ときめきの生活空間をサイエンスする
ロンシール工業株式会社

●本社 建装部／〒130-8570 東京都墨田区緑4-15-3　☎03(5600)1821
●大阪支店／〒532-0011 大阪市淀川区西中島3-9-13大北ビル ☎06 (304) 2700
インターネットホームページアドレス http://www.lonseal.co.jp/

●営業所
札幌 ☎011(271)0411　大宮 ☎048(664)1511　静岡 ☎054(251)3712　広島 ☎082(211)2700
盛岡 ☎019(624)6925　土浦 ☎0298(32)8813　名古屋 ☎052(935)7063　高松 ☎087(831)4177
仙台 ☎022(265)4771　千葉 ☎043(246)5851　金沢 ☎076(292)1161　福岡 ☎092(472)5857
新潟 ☎025(243)3791　横浜 ☎045(662)7370　岡山 ☎086(231)6011　鹿児島 ☎099(258)6571

最先端のハーモニー。

さまざまな先端技術が調和して、「快適」という名のハーモニーを奏でる。トーエネックのエンジニアリングは、まさにそんなイメージです。電気設備をはじめ、情報通信・冷暖房・空調・防災設備など…。システム設計から施工・保守まで、高度で総合的な技術力を活かし、全国主要都市を拠点に幅広いネットワークでみなさまにお応えしています。オフィスビルやマンション、ホテル、工場、さらにはコミュニティ施設。あらゆるスペースを、心地よい技術のハーモニーで包み込みたい。インテリジェント&ヒューマン。私たちは、トーエネックです。



いろんな技術を結んで、トータルに考える。
トーエネック エンジニアリング

先端技術で、システムする。
TOENEC
株式会社 トーエネック
本　店/名古屋市中区栄1-20-31 〒460-0008 ☎(052)221-1111
東京本店/東京都豊島区巣鴨1-3-11 〒170-0002 ☎(03)5395-7111
大阪本部/大阪市淀川区新北野3-8-2 〒532-0025 ☎(06) 305-2181

YUME 夢 TRONICS

夢×技=∞

無限大

安らぎと喜びがある。
生み出すための第一歩は
夢からもらった。
形を築くための第一歩は
技からもらった。
ふたつの可能性が出会う時
私たちのフィールドは
無限大です。



何時もあなたの街で、
お会いしている
クリハラ。

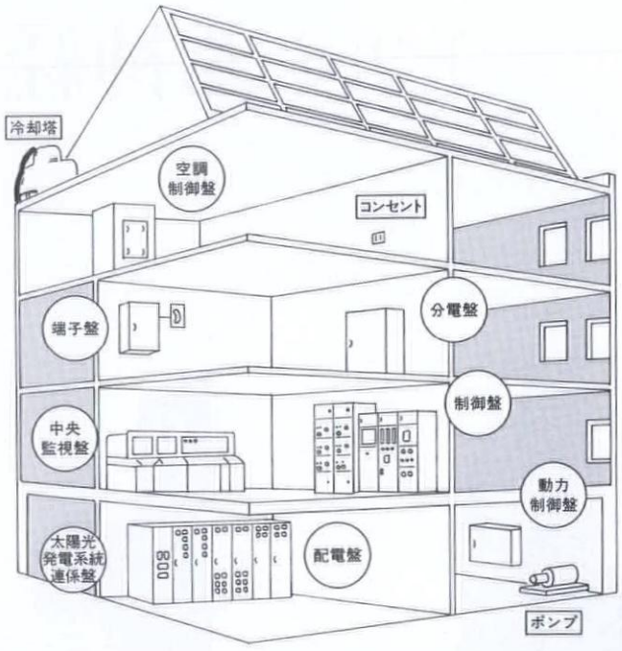
私達の生活環境に必要な
電気設備・エネルギー
情報通信・環境の分野で
企画、設計、施工、保守に
わたる一貫したシステムで
事業を展開しています。



創業1919 あなたの街でお会いしています
栗原工業株式会社
本　社／〒530-0017 大阪市北区角田町1-1(東阪急ビル) TEL.06(313)1101
東京本店／〒105-0012 東京都港区芝大門1-4-8(浜松町清和ビル) TEL.03(3432)1901

見えない電気を交通整理
それはKAWADEN



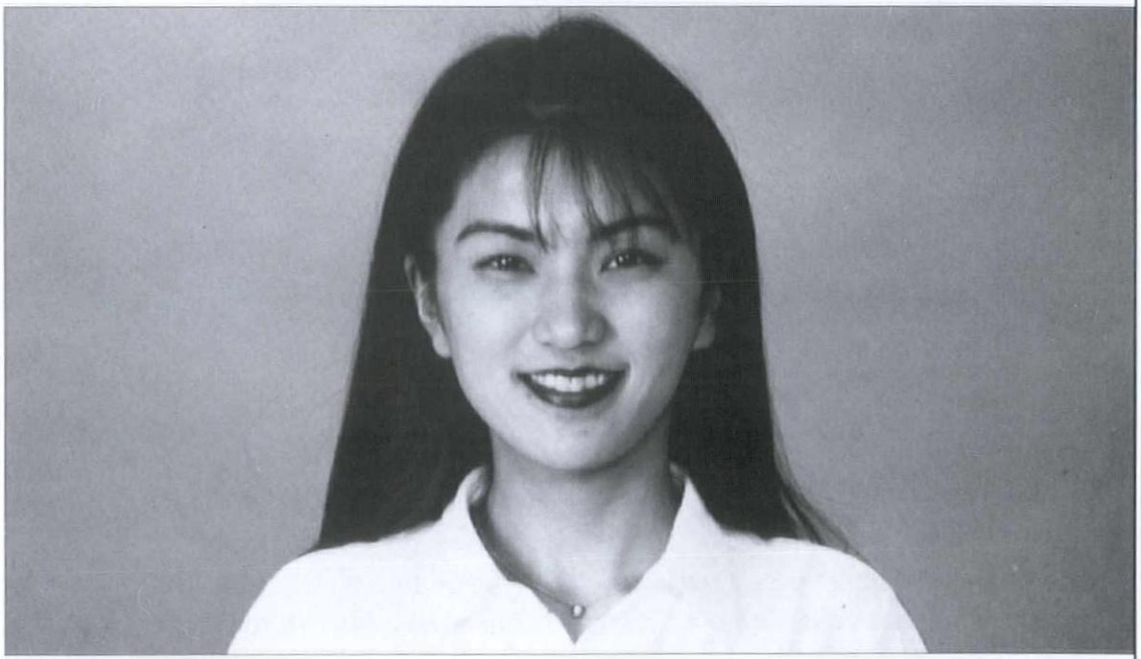


川崎電気株式会社

●本　　社／山形県南陽市小岩沢225
●東京本社／東京都港区芝浦3-7-4

CHUDENKO

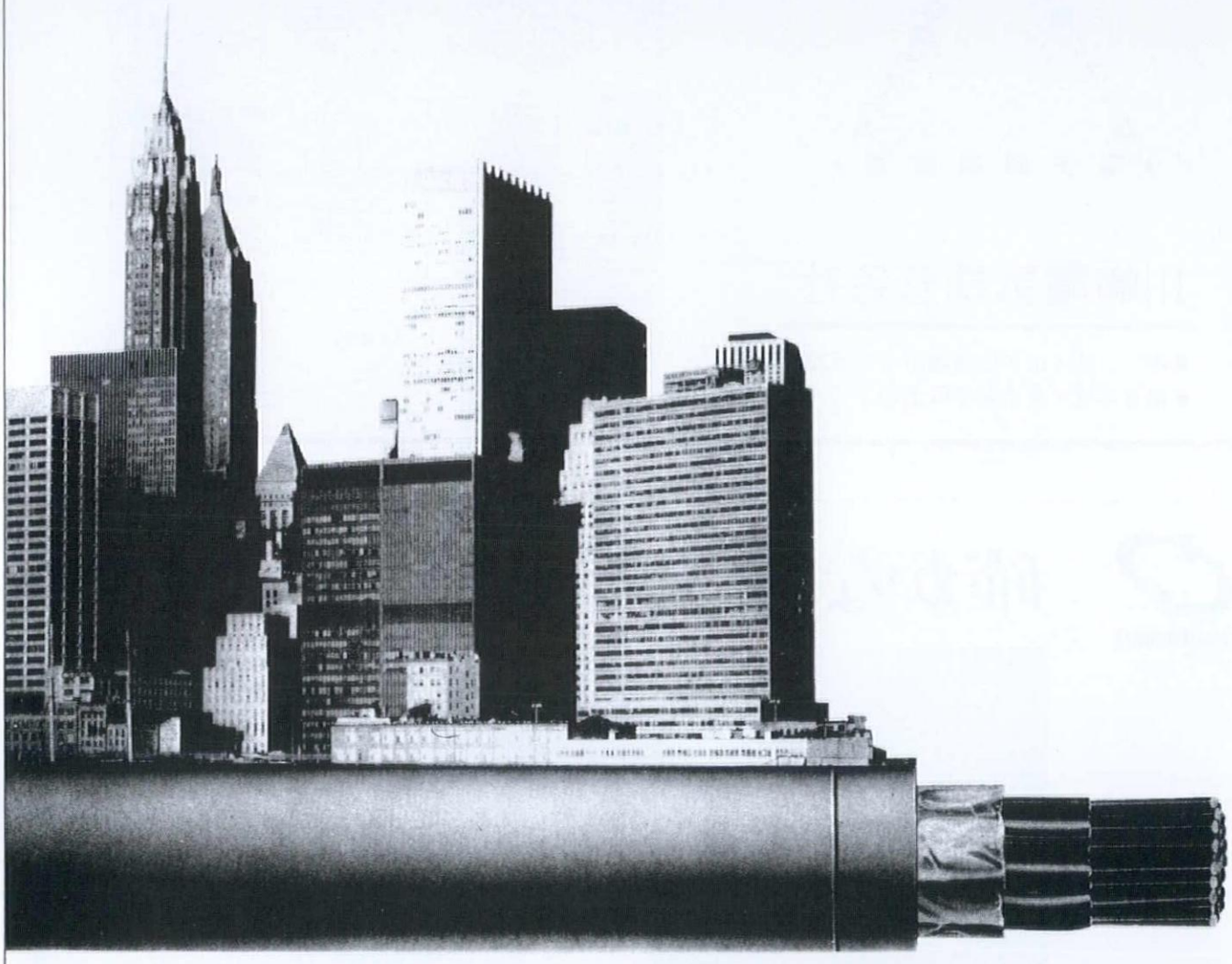
確かな歩み未来まで……



総合設備の設計施工　電気・情報通信・計装・空調・給排水・水道施設

株式会社 中電工　本店／広島市中区小網町6番12号　TEL (082)291-7411
支店／広島・岡山・山口・島根・鳥取・東京・大阪

ビルにも神経があります。



古いビルも最新のビルも確実な電気工事で支えています。

ビルにとって電気系統の働きは、人体にはりめぐらされた神経の働きに似ています。外部の情報を収集したり、整理して送るなど、まさにコントローラーの役目をもっているからです。とくにこれからの高層ビルは、複雑な建築技術が必要なだけに、ビルの中枢神経といわれる電気系統の安全性、合理性、経済性などは、ビルがより良く機能するうえで欠かすことのできない条件です。私ども弘電社は1本の配線にも、細心の注意を払って確実な設計、施工を行なっています。

電気工事のパイオニア

株式会社 弘電社

東京都中央区銀座5-11-10
TEL.03(3542)5111

SD

バックナンバー

鹿島出版会
東京都港区赤坂6-5-13
電話：03-5561-2550
振替：00160-2-180883
Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm
年間定期購読料
26,000円（特別定価号＋消費税、送料込み）

SDバックナンバー常備店
［東京］
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店（神田）
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
［大阪］
旭屋書店本店
柳々堂 06-443-0167
［札幌］
旭屋書店 011-241-3007
［横浜］
有隣堂本店 045-261-1231
［京都］
大龍堂書店 075-231-3036
［大学生協内書店］
東北工業大学　東京工業大学
法政大学工学部　早稲田大学理工学部　関東学院大学

9711　隈研吾　2800円
ポストモダン以降の建築における言説を続けてる隈研吾。今年建築学会賞、ヴェネディクタス賞を受賞した近作を紹介する。慰霊公園、他。文＝飯島洋一、グレッグ・リン、対談＝槇文彦×隈研吾

9612　SDレビュー1996　1988円
第15回SDレビュー誌上発表。ユストス・ビザール＋ペーター・ルーゲ、高橋昌巳、城戸崎和佐建築設計事務所、他［**伊丹潤の近作より：石彫の教会、木の教会、土の教会**］

9701　葉祥栄：カリステニクス　3059円
地方自治体主体のまちづくりプロジェクトを紹介。事例：くまもとアートポリス、クリエイティブTOWN岡山、長崎アーバン・ルネッサンス、白石メディア・ポリス、他

9702　木を生かした架構と空間　1988円
木の性質を生かした国内外の25例を紹介。金山の火葬場、モルジュのホール、他。文＝川口衛、今川憲英［**アジアを熱くする新世代建築家たち：IAA国際会議より**］アジアの都市・建築の現在、未来を問う。

9703　ミニマル・スペース・アーキテクチュア　1988円
ミニマルでシンプルな建築表現が特徴的な、4人の建築家を紹介。ジョン・ポーソン、小川晋一、岸和郎、石田敏明。文＝丸山洋志、他［**東京国際フォーラム**］写真＝堀内広治

9704　拡張するデジタル・デザイン　3059円
コンピュータとネットワーク技術による、建築・都市の新しい環境を造り出すプロジェクトを紹介。文＝田島則行、山口重之、桂 英史、マイケル・ベネディクト、藤幡正樹、久保田晃弘、坂村健、奥出直人、両角光男、他

9705　アフラ＋トビア・スカルパと［ベネトン］　2000円
アフラ＋トビア・スカルパによるベネトンのオフィス社屋、ショップなどを紹介。文＋インタビュー＋写真＝豊田博之［**都市ビサとカルマッシの仕事**］カーサ・ムーティ、ヴェルディ劇場修復計画など

9706　柳澤孝彦：劇場の空間構成　2000円
新国立劇場、東京オペラシティビル、三鷹市芸術文化センター、他。文＝長友宗重、本杉省三　対談＝川向正人×柳澤孝彦［**装飾を排したフォルムデザイン――スウェーデンのグッドデザイン展より**］

9707　加速都市・香港1997　2000円
「速度」をテーマに激動する香港の姿を捉える。参加作家＝アラン・チャン、タイクーングラフィックス、澤川敏、江頭慎、他　監修＝村松伸、小嶋一浩、木下光　文＝松田達則

9708　R.ヴェンチューリ＋D.スコット・ブラウン　2447円
日本での処女作（メルパルク日光霧降）を中心に90年代の作品を紹介。シアトル美術館、他。文＝香山壽夫、安山宜之、他［**岐阜県営北方住宅プロジェクト**］談＝磯崎新

9709　駅空間の新曲面　2000円
コミュニティ性を重視した駅を紹介。JR矢吹駅、JR大曲駅、他。国際コンペとして衆目を集めたJR京都駅も併せて紹介する。文＝宮林敬幸、饗庭孝男、他。対談＝横尾忠則×原広司　写真＝大野繁

9710　ガラス建築　3000円
光学的、構造的特性など、ガラスの性質を幅広く採り入れた作品を紹介し、ガラス建築の現在と今後の可能性を探る。ガラス建築23作品、他。座談会＝伊東豊雄×難波和彦×今川憲英、他



9712
SDレビュー1997
第16回SDレビュー誌上発表。建築研究室高安重一事務所＋佐久間達也＋橋爪宏直＋重富博之、川人洋志、藤本壮介、松澤穣、他。［**光と色が彩る空間――チェコのガラスアーティストたち**］写真＝鈴木豊
2000円



9801
SDレビューの15年
これまでのSDレビューを一挙に振り返る。出展作、建築界での意義などを再確認し、今後の方向性を探る。文＝槇文彦、原広司、飯島洋一、中筋修、他。座談会＝元倉眞琴＋鈴木了二＋栗生明＋小嶋一浩
2800円



9802
都市へ向かう透明性：スイス・ドイツ語圏の建築
スイス建築の背景、建築の生まれる文脈を捉えながらその魅力を探る。文＝貝島桃代、ハンス・フライ、他。往復書簡＝篠原一男×ヘルツォーク＆ド・ムロン
2200円



9803
表層革命再考：チェコ・キュビスム-ロンドキュビスム建築
現存するプラハのキュビスム建築を撮り下ろし写真により紹介する。撮影＝鈴木豊。［**香山壽夫のドローイングと空間**］文＝香山壽夫、八木幸二、鈴木悟、青木淳
2000円



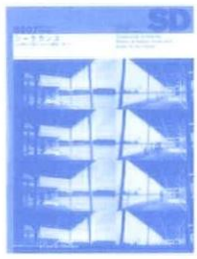
9804
次世代のマルチ・アーキテクトたち
30歳代の若手建築家たちの作品と創作活動を紹介し、時代性を浮かび上がらせる。インテンショナリーズ、みかんぐみ、他。［**デスクトップ・コミュニティ**］
2000円



9805
空間演出の最前線
建築家とデザイナー、アーティストとのコラボレーションの具体例を紹介。藤江和子、中村綿平、新宮晋、他。［**カーロとリベラの家**］
ファン・オゴルマンの建築とメキシカン・モダン
2000円



9806
風景創出の現在：ランドスケープ・アーキテクトの挑戦
「公共的な価値」によって自然の風景と区別され、積極的な社会性が意図されている事例を紹介。佐々木葉二、プレイスメディア、三谷徹、登坂誠、他。
3000円



9807
シーラカンス
彼等の12年間の建築活動の軌跡を、作品紹介を中心に振り返る。作品：吉備高原小学校、大阪市水上消防署、（仮称）外々岡交流拠点施設、他。論文：原広司、土居義岳、インタビュー：山本理顕
2600円



9808
光のデザイン・ヴォキャブラリー：LPAの仕事1990-1998
LPAのデザイン言語を40に厳選して紹介する本書は、光が生み出す空間を全般的に考察する本格的な照明バイブルである。
文＝磯崎新、面出薫
2500円



9809
ディテールが創る風景：細部に宿る美と技巧
建築作品のディテールを写真と図面で紹介する。宮崎浩／Plants Associates、渡辺明設計事務所、竹中工務店、谷口建築研究所、KAJIMA DESIGN、他。
2300円



9810
オフィス環境の近未来
最新のオフィス環境を、事例を中心に紹介する。作品＝電通インタラクティブ・ソリューション・センター、他。文＝仲隆介、他。
［**京町屋再生の手法――時を超えて生きる空間を求めて**］
2000円



9811
「白」と「透明」の詩
モダンデザインの秀作135
白い陶磁器と透明ガラスで出来た日常生活の中の小モノたち135点を紹介する。カシミール・マレービッチ、ゲートルード・ヴェースガルト、柳宗理、他。
3000円

SD

現代の建築家、ハードカバー・シリーズ

鹿島出版会がホームページを開設いたしました。

SDをはじめ、当社で出版している書籍の検索が出来ます。是非ご覧下さい。

Address: http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm



アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武藤 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

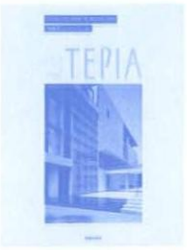
3090円



高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、磁ぎ澄まされた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。織陣Ⅰ、Ⅲ、他。

3800円



槇事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館（TEPIA）というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。槇文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



菊竹清訓

メタボリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円



早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILAGE、ラビリンス、成城交差点の家、アトリウム、他。

4300円



磯崎新❸ 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流れに分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジョルディパレス、お茶の水スクエア、他。

4800円



白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐霄館、ノアビル、聖アキラ館、吽雪軒、尻別山寮、虚白庵、他。論文＝磯崎新、針生一郎、浅野敏一郎、白井晟磨。座談＝大江宏＋藤井正一郎＋宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

3605円



ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の嵐。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円



磯崎新❹ 1985-1991 part 2

part 1 同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティームディズニービルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、パラディアム、［蝶々夫人］舞台美術、他。

4500円



象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安住町農協町民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、進修館、他。論文＝荒俣宏、宇佐美圭司、他。

4000円



続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川憲英×安村基。

3708円



カルロ・スカルパ図面集

ブリオン家墓地を始めとする主要作品のドローイング約150点を収載。ブリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

3500円



槇 文彦❷

槇文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円



ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品＝熱海の家、ボスポラス海峡に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円



安藤忠雄❸アンビルト・プロジェクト

70年代からの見逃せないアンビルト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトⅠ、Ⅱ、Iギャラリー、大淀の茶室、他。

3800円



伊東豊雄

風のように、光のように変様する建築。独自の感性で貫かれた作品群、その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム他。

3914円



ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高階秀爾、ボザールーその歴史と思想：三宅理一編、ボザールの成立とネオ・グレコの形成、折衷主義の世界、近代の憂愁、戦後のボザール、パリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



都市デザイン｜横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、槇 文彦×養原敬×小澤恵一、他。

5000円

9812 Space Design

スペースデザイン 第411号
1998年12月号
都市・建築・芸術の
総合誌

SD

5 特集
SDレビュー1998

6
審査員総評=
林 昌二
播 繁
岸 和郎
圓 紀彦

50
講評

54
印象に残った住宅計画
3点
植田 実

55
SDレビュー入選作品の
その後

8
尾沢俊一
鉾山荘

11
ジン・タイラ+三好隆之
家具のない家　House without Furniture

14
手塚貴晴+手塚由比／手塚建築研究所
LGS構造の家

17
山田幸司建築都市研究所
角谷邸新築工事——フォアタワー

20
アンドリュー・バリー+
ミヌストリー・アーキテクチュア
<p>urban

23
和田吉貴
石垣焼窯元

26
駒井貞治／駒井貞治の事務所
借家生活1、2、3...

28
遠藤政樹+池田昌弘
HP防音シェルのあるスタジオ住宅

31
岡村和典+石井米二郎+清水里司／日本設計九州支社
下関市海洋環境・自然科学体験施設（仮称）

34
廣谷純弘+石田有作／建築研究所アーキヴィジョン
（仮称）星野遺跡トレンチ見学施設

36
長倉威彦
具志川ランセンター農産物展示加工場

39
三上晴久+三上建築事務所
SH Alumnae House

42
川嶋彦一郎
O邸——sister h

44
アルヴァロ・ヴァレラ+サイード・シエド
かもめ

47
手島浩之+都市建築設計集団／UAPP
K-House

61
シャルロット・ペリアン
20世紀を生き抜くインテリア・デザイナーの
思考のプロセス

62
〈住まいの空間　パリの屋根の上〉の改修

64
インタビュー：
「シャルロット・ペリアン」展におけるデザイン・プロセス
進来 廉

69
モダニズムの広がりとペリアンの日本
シャルロット・ペリアン展の向こうに見えるもの
松隈 洋

72
インタビュー：
ペリアンが日本の伝統文化に見出したもの
柳 宗理

73
"ハプニング"展
デザイナーズ・カタログ

74
"ハプニング"レポート90年代リアリズムは
ストリートに分散する
岡田栄造

75
インテリアデザインにおけるインディーズは
いかにして可能か？
岡田栄造

85
アアルトの空間構成
有機的建築手法の考察

86
採光の仕掛けに対する考察
小野正弘

88
人間的な性格を持つ素材に対する考察
シルッカリーサ・イェッツォネン
訳=櫻井義夫

90
外部空間あるいは庭の考察
田中雅美

93
HALFTECTURE PROJECT
メタルシート・ストラクチュアによる遠藤秀平の近作

94
CYCLESTATION 米原

95
HEALTECTURE 小森

96
SKINTECTURE 揖保川

97
TRANSTATION 大関

98
HALFTECTURE 福井

100
SPRINGTECTURE 播磨

106
ビジョナリーな20世紀末モダニズム
松葉一清

58　連載：森島紘史の起こし絵図——日本のかたち紙考
12. 聖夜　森島紘史

110　書評

112　メトロポリタン・ライブラリー　港 千尋

113　新刊紹介

114　お知らせ

117　海外レポート
［ヘルシンキ］ヘルシンキ中央駅裏の開発コンペ　吉崎恵子

118　海外レポート
［ベルリン］ベルリン、実現されゆくポツダム広場開発計画から　岩永和幸

編集長：相川幸二
編集スタッフ：
寺田真理子　高木伸哉
大野由美　飯塚りえ
高森和志
制作協力：久世 健
勅使河原馨／guild
(有)シンクス

発行人：平田幹那
編集人：長谷川愛子

発行所：鹿島出版会
〒107-8345 東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番
Home Page：
http://www.kajima.co.jp/
group/publish/index.htm

印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174-0056 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・
大阪屋・太洋社・
栗田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社

定価：2,000円
[本体1,905円]

年間直接購読料：26,000円
特別定価号+送料込み

表紙：家具のない家
House without Furniture／
ジン・タイラ+三好隆之
表紙写真：
堀内広治／新写真工房
表紙デザイン：小泉均

9812 Space Design

Monthly Journal of Art and Architecture
No. 411
December 1998

SD

5 **Special Feature:**
SD Review 1998

6 Comments from the Screening Committee
Shoji Hayashi
Shigeru Ban
Waro Kishi
Norihiko Dan

50 Screening Committee Reviews

54 Three House Plans That Leave a Lasting Impression
Makoto Ueda

56 Last Year's Prize Winning Works, and Beyond

8 Shun'ichi Ozawa

11 Jin Taira+Takayuki Miyoshi

14 Takaharu Tezuka+Yui Tezuka/ Tezuka Aachitects

17 Koji Yamada Architect & Associates

20 Andrew Barrie+Ministry Architecture

23 Yoshitaka Wada

26 Sadaharu Komai/Sadaharu Komai's Office

28 Masaki Endo+Masahiro Ikeda

31 Kazunori Okamura+Yonejiro Ishii+ Satoshi Shimizu/Nihon Sekkei INC.

34 Yoshihiro Hirotani+Yusaku Ishida/ Archivision Architect and Associates

36 Takehiko Nagakura

39 Haruhisa Mikami+Mikami Architects

42 Hikoichiro Kawashima

44 Alvaro Varela+Saeed Syed

47 Hirouki Teshima+ Urban Architecture Plannig Partnership/UAPP

61 **Charlotte Perriand:**
The Thinking Prócess of an Interior Designer Who Lived Through the Twentieth Century

62 "Living Space: On a Paris Rooftop" A Remodeling

64 Interview with Ren Suzuki: The Design Process of the "Charlotte Perriand Exhibition"

69 The Evolution of Modernism and Perriand in Japan Glimpses of Work beyond the Exhibition
Hiroshi Matsukuma

72 Interview with Sori Yanagi: What Perriand Saw in Traditional Japanese Culture

73 **Designer's Catalogue of "Happening"**

74 Reports of Happening": 1990s Realism Took to the Streets
Eizo Okada

75 The Feasibility of "Indies" in Interior Design
Eizo Okada

85 **Aalto's Space Composition:**
A Study of the Techniques of Organic Architecture

86 Natural Light Illumination Techniques
Masahiro Ono

88 Materials with Human Traits
Sirkkaliisa Jetsonen

90 External Space and Gardens
Masami Tanaka

93 **Halftecture Project:**
Shuhei Endo's Recent Work in Metal Sheet Structure

94 Cyclestation Maibara

95 Healtecture Komori

96 Skintecture Ibogawa

97 Transtation Ohzeki

98 Halftecture Fukui

100 Springtecture Harima

106 Fin-de-siecle Twentieth-century Visionary Modernism
Kiyokazu Matsuba

58 The Okoshi-e of Hiroshi Morishima: Forms of Japanese Tradition in Paper 12. Holy Night — Hiroshi Morishima

110 Book Review

112 Metropolitan Library — Chihiro Minato

113 Book Information

114 Announcements

117 Topics Abroad: [Helsinki] Competition for Development Project Behind the Helsinki Central Station — Keiko Yoshizaki

118 Topics Abroad: [Berlin] Notes on the Progress of the Development Project for Berlin's Potsdam Plaza — Kazuyuki Iwanaga

Chief Editor: Koji Aikawa
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Kazushi Takamori
Production Cooperation:
Takeshi Kuze
Kaoru Teshigahara/guild
Digital Studio SINKS

Publisher: Kanna Hirata
Executive Director:
Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107-8345,
Japan
TEL:
03.5561.2551 [Management]
03.5561.2555 [Editing]
FAX:
03.5561.2561 [Management]
03.5561.2565 [Editing]
TELEX:
02422467 KAJIMA J
Home Page:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm

Printed in Japan

This Copy: ¥2,000
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page132

Cover:
Jin Taira+Takayuki Miyoshi
Cover Photo: Koji Horiuchi
Cover Design:
Hitoshi Koizumi/NID

SDレビュー1998
第17回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

SD Review 1998
The 17th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings





審査員総評

林昌二

毎年SDレビューのお知らせを受けると、さっと会場の展示に目を通して、年ごとのレベルの差や傾向の変化を楽しんできましたが、今年は審査を担当することになりました。審査するということは、審査されるということでもありますから、楽しんではいられません。

審査はまず応募全作品269点に目を通し、他の3人の審査員とともにそれらを評価する第一次審査から始まりました。

SDレビューは他のコンペの類とは著しく異なる特徴を持っています。それはいわゆるアイデアコンペではなく、実現を前提にしている案である点です。しかし、だからといってこれが完成した建築物への評価とも異なるのは、SDレビューでは、作者の胸の内で日頃温められてきた構想が、これから実現へ向かって形になろうする、まさにその瞬間を切り取ろうとしている点です。コンセプトという言葉が気安く使われている昨今ですが、SDレビューは、やっと目鼻がついてきてはいるが、まだ懐妊されたままの状態にある半人間を、あえて覗き見ようとしているのです。果たして人間として生まれ落ちたとき、美人であるか聡明であるか、それともダメな人間になるか、判らない状態で予測評価しようという、実にスリリングなレビューで、こんな試みは、他に例がありません。そこに独特の魅力があります。

欠点もあります。提出された材料からは、周辺の環境との関係を知ることができません。これは建築の評価にとっては致命的な欠陥です。この欠陥はSDレビューに限らず、雑誌上での建物の紹介にも似たところがあって、国際化・情報化の進展とともに、建築を周辺の環境から切り離した単体として捉える傾向が強まりました。この結果、建築と街並みとが切り離され、一般市民の感情から遊離したり、感情を逆撫でしたりして、建築と建築家が社会から疎外される原因をつくっているとすれば、困ったことです。

さて、第一次の審査で選ばれ、展示の対象となった15点について、展覧会場で第二次の審査が行われました。第一次当時に比べると、案の密度が上がっているものが多いのは当然でしたが、中には第一次案の方が良かったものもありました。

第二次審査では、審査員の意見はバラバラと言っていいほどに割れました。どのように割れたかは、各審査員のコメントで想像していただけるかと思います。

討議と投票の結果、最後に4点を選び、その中から尾沢俊一さんの案が鹿島賞に選ばれました。二重構造の空間構成の魅力によります。SD賞になった手塚貴晴さん、手塚由比さんの案は、問題が少なそうです。朝倉賞になったジン・タイラさん、三好隆之さんの野心的な案は、第一次案の方が魅力的でした。新人賞の山田幸司さんの案には独特の味があります。その他では、駒井貞治さんの案が印象的でした。審査のため会場に入った瞬間、これはSDレビューとは別の不動産屋の展示なのかと錯覚したほどですが、昔の物干し台のような借家をつくって住み着くという発想は、意外に日常的にも思えます。廣谷純弘さん、石田有作さんの案で、目線の位置にテントの上面がくるのは、どういうものでしょうか。長倉威彦さんの農産物展示場は力作ですが、対象に比べて力みすぎの印象を受けました。

●はやし・しょうじ／建築家

播繁

限られた時間に多くの計画案（今年は269点）を審査するのは、審査員としての経験が浅い私にとって、苦悩を伴う作業であった。

というのは、この多様化時代に何を基準にして審査をすればよいのか、という悩みである。幸いなことは私には構造という尺度があること、そしてSDレビューは実現を前提としていることである。

とはいえ、建築はリアリティの高さや構造的合理性がすべてではなく、かえってそういう尺度がアイデアの邪魔をしてしまうこともあり得る。そこが建築の難しさかも知れない。

私が日頃気にしているのは、空間構成の美しさや快適さである。そこに構造技術が貢献してアイデアが洗練されていくのを見定めることが私の役割だと考え、審査に当たったつもりである。他の審査員は何を評価の基準としているのかは定かではないが、選ばれた作品を見ると私の考えは間違っていないようにも思えた（アイデアの面白さで選んだ作品もあったが）。

時間の少ない一次審査は第一印象が大切だ。完成度が高く、実務的な作品は目に付きにくいので、一次審査で見落としたものがあるのではないかと、審査が終わった今でも心配である。そうだとすれば、応募してくれた人にお詫びしなければならないと思う。

それに比べて第二次の審査は格段に充実していたように思う。それぞれの審査員が活発に意見を述べ、それが一致したとき審査の場はさわやかな時が流れる快適な空間となった。まことに貴重な経験をさせていただいた。

このごろ、構造技術が前面に出ている作品が多くなったような気がする。SDレビューにもそういった傾向が見られるが、あまりに構造の主張が強すぎるのは、はしたないように思う。構造の技術が優先する作品も時として必要だが、構造は控え目が良い。いわば、渋い脇役的なところをしっかりこなすことだと思う。これも建築家次第である。しかし、架構そのものをアートまで昇華させるのであれば、それはまた素晴らしいことである。そこには大変な努力と感性が必要で、建築家との協働作業となる。例えば、1950年代のRC造のような素晴らしいプロポーションを持った作品が出てくるのを期待したい。

空間の良し悪しは構造がかなりウェイトを占め、部材のプロポーションと架構システムとのバランスが美しさを左右する。ドローイングや模型の時には素晴らしいが、作品が完成した時に違ったものになってしまうのは、よくあることである。ぜひ優れた構造設計者と協働し、より洗練された作品にしていただきたいと思う。

●ばん・しげる／構造家

岸 和郎

コンペの応募案にはその時代の気分、雰囲気といったものが敏感に反映されている、と感じています。特にこのSDレビューは実現することを前提としたものであるため、そうした側面はより強くあらわれているのではないでしょうか。

現在我々は確かに世紀末に暮らしています。だからという訳でもないでしょうが、時代の気分はどこか閉塞的で、未来に対する不安感も常に感じざるを得ないような、そんな時代であるような気がします。建築もそうした時代の気分を反映するのは勿論ですから、建築のあるべき姿について確信など持てず、したがって建築というものの確かにひとつの側面ではあるものの、どこか本来的な資質として問われるべきものではないようなありかたを我々は問い続けようとしているのではないか、今回審査員を引き受けている自分の仕事も含めてそんな袋小路に我々は居るのではないか、と感じています。具体的にいうと我々は現在、プロジェクトの「刺激度」や、逆に「凡庸さ」の閾値を競い合っているだけのような、そんな気がするのです。最近1960年代の日本の建築をいくつか見る機会があったのですが、そのあまりの気持の良さに、叫びたいような衝動にかられてしまいました。個人的にはもう少し古い時代の方に興味の中心があったものですから、戦後の建築はそれ程ちゃんと見ていた訳ではなかったこともあり、そこにあたり前に思考された結果としての「建築」があることに感動してしまいました。それと同時に、たった30年しかたっていないのに、我々はそこからどれ程遠い所まできてしまったのか、という絶望的な想いも抱いてしまいました。「刺激度」や「凡庸さ」を競う神経症的な建築が確かに現在なのだ、ということは十二分に理解できるつもりですが、しかしもう一度建築なるもののありかたについて考えてみてもいいのではないか、あるいは建築のありかたとまではいかなくても、少なくとも建築的悦楽についてだけでももう一度考え直してもいいのではないか、と思うのです。それは極めて保守的に聞こえる、反動的な意見かもしれません。しかし例えば、最近ヨーロッパに出現したふたつの建築、ビルバオとルツェルンのことを考えると、あながち的外れなことでもないように思うのです。

長くなりましたが、SDレビューに応募された作品群を見ていると、そんな1990年代の現在の建築のありかたが浮かび上がってくるような、そんな気分を味わいました。時代がそこに垣間見えること、ひとつの出来事としてのSDレビューの魅力はその点にもあるのだ、とあらためて感じた今回の審査でした。

●きし・わろう／建築家、京都工芸繊維大学助教授

團 紀彦

審査員を努めるのは2年目になる。昨年と今年の傾向の違いといった事は多少あるにしても、もう少し大きな流れの中で、SDレビューが見せてきた変化のことが気になった。少しずつではあるが、1980年代の初めにスタートしてから、何かが変わってきている。それぞれの年の多数の応募作品の中から、デザインのレベルの最も高いと審査員達が判断したものたちが選ばれている事には変わりはないが、明らかに1980年代にはみられなかったものが登場し、それとともに、当初みられたもののうちのいくつかが、消滅してきているように思われた。どちらかと言えば、決定的な美学や新しい建築観が登場したというよりは、確実にある種の系列のデザインが見られなくなったという印象のほうが、強く残った。例えば、ヴァナキュラーな建築。多要素混在型の建築。新古典主義的な建築等々である。オープニングの挨拶の中でも触れた事だが、「切り身」型の建築が増えてきているようにも思えた。「切り身」型とは、「一匹の魚」型の建築とは違って、ひとつの全体性を提示するのもではなく、しかも、どのような魚のどの部分から切り取ってきたかも捨象した、ある種の洗練された閉鎖系を追求する傾向である。その出自を明らかにしない切り身、別の言い方をすれば、泥くさい全体性よりも、エレガントな断片が好まれる時代と言ってもよいのかも知れない。ネオ・クラシシズムやヴァナキュラリズムといった、断片化することは出来ないものや、たとえ、そうできたとしてもその出自が明確になりすぎるものは、回避されたのではないかと考えられる。審査の状況も、異臭を放つ、魚市場の中から、珍しく貴重な魚を探すというものではなく、清潔で明るく、無味乾燥なスーパーの陳列台からきれいにパックにされたものの中から選ぶといった感じが何故かするのである。

SDレビューが始まった1980年時代の初めの頃と比べて、洗練された作品の数は全体的に増加してきたように思えるのだが、逆に、確固たるばらつきが見られなくなるとともに、作品を通じて全体性や建築観を語りかけるものや、明確な建築の素形を呈示するものは減少するに至ったように思う。全体性から断片化へと向かうベクトルと同時に、形態からプログラムへとその力点が移行して、まさに「形態の消去」の時代を迎えていることを示している。

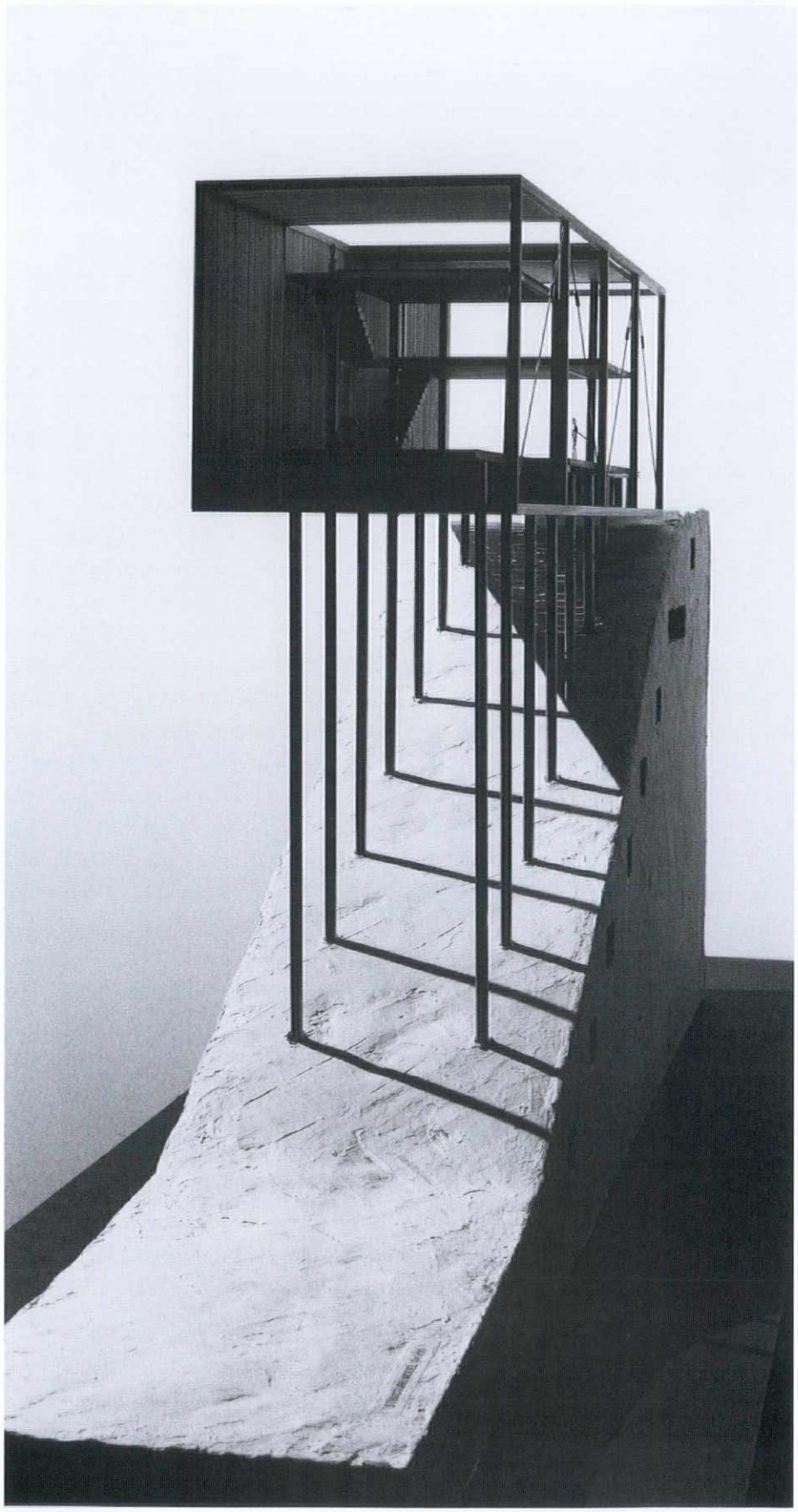
SDレビューの審査そのものも、それに伴ってますます困難なものになってきたように思う。同一傾向のものが多数みられるために、作品間の差違があまり発見出来ず、なかなか、それらに優劣をつける事が出来なくなってきたためだ。

しかし、その中で次の時代の萌芽となるような作品が、ひかえ目ながら、隠されていたようにも思う。1998年度のSDレビューは、まさに、こうした潮流が変化しようとする時の一瞬の潮止まりを思わせる、決して雄弁ではないが、静謐で、無言のエネルギーを秘めた作品群達が提出されたように思う。

●だん・のりひこ／建築家

尾沢俊一　鹿島賞

銈山荘



山が好きだった亡き父を想う家族の週末住宅。

クライアントの要望は以下の2点。
1. 眺望の良いロケーションの妙を十分に生かすこと。
2. 実直な故人の性格を建築の姿に反映させること。
敷地は伊豆中部。手前に山葵田を、遠く天城山を望む斜面に位置する。桜をはじめとする広葉樹に覆われた豊かな自然の中にあるが、却ってこの樹木が眺望の障害となっている。そこで、斜面に沿って下がってゆく林の中から、建物がひょっこり顔を出すような断面配置とした。樹木を切らずに、G.L.からは得られない眺望を獲得した。

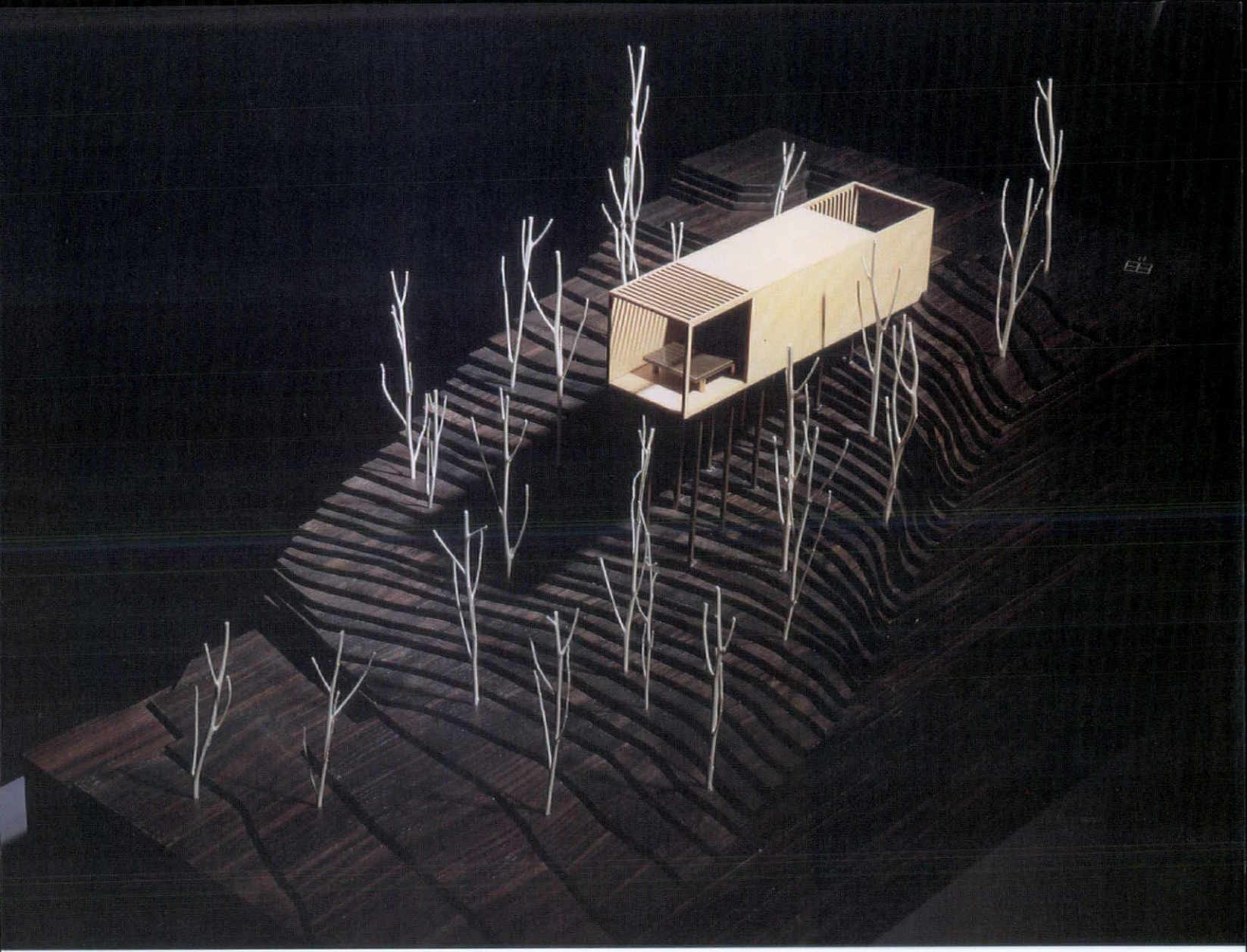
構造的には日本建築の懸造(かけづくり)のように、水平スラブを構築し、上に鉄骨フレームによる建築本体を載せた。さらに木のフレームがこれを筒状に囲むダブルスキンの構成とした。鉄骨と木の四周の狭間に、階段・水回り・収納・設備配管等を納め、鉄骨フレーム内には眺望を妨げる建築の要素を一切排除した。エントランスから一直線にのびるデッキを進むと、4m角の鉄骨フレームが、次に6m角の木フレームが、額縁のように風景を切り取ってゆく。

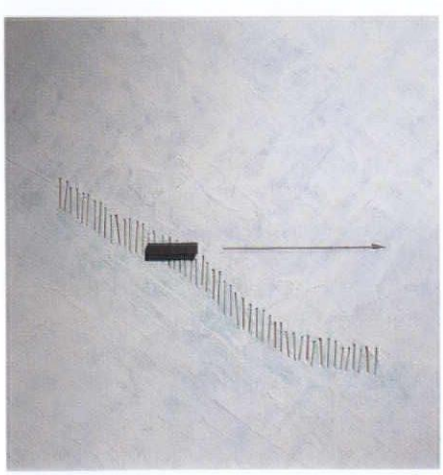
本計画におけるクライアントとの共通認識。「記憶の蘇生と創出を可能にする非日常空間を実現させること」。

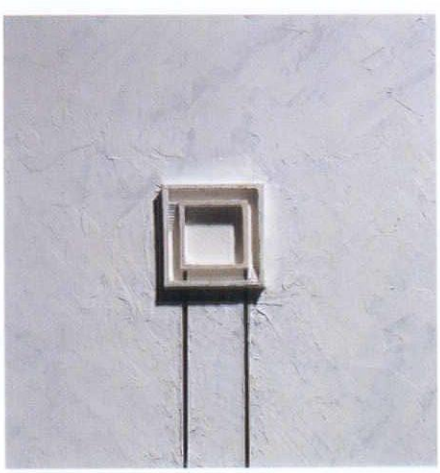
共同設計者名：尾沢敦子(意匠)、大上仁志(構造)

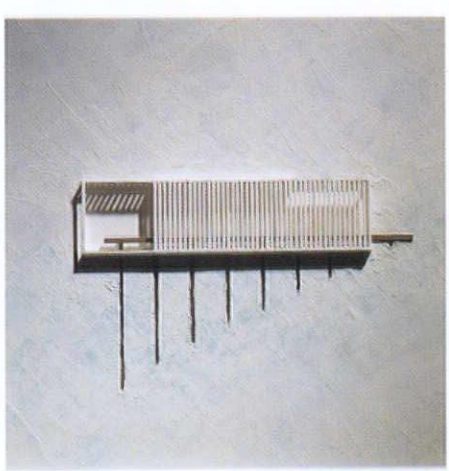
用途：週末住宅
所在地：静岡県田方郡天城湯ヶ島町
主体構造：S造+木造
主要仕上材：外部　デッキ部床：玉砂利洗い出し、米ツガスノコ　外壁：スギ挽板目透かし貼キシラデコール塗装
敷地面積：362.29m²
建築面積：96m²
延床面積：102m²
工事予定期間：1999年8月～2000年6月

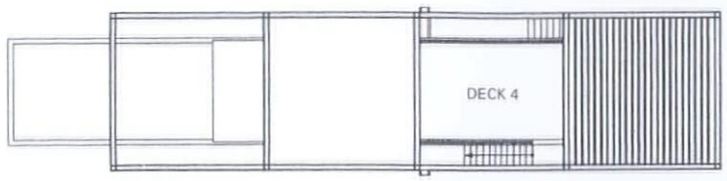
尾沢俊一　Shun'ichi Ozawa
1965年　神奈川県生まれ
1990年　早稲田大学理工学部建築学科卒業
1992年　早稲田大学大学院修士課程修了
1992年　鹿島建設勤務



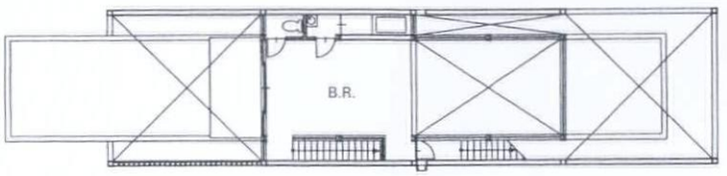




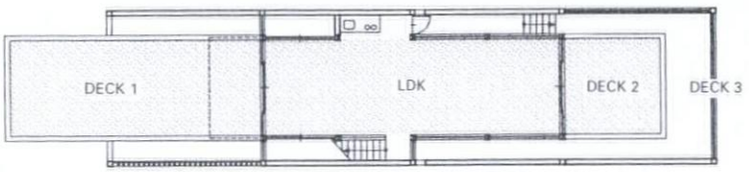




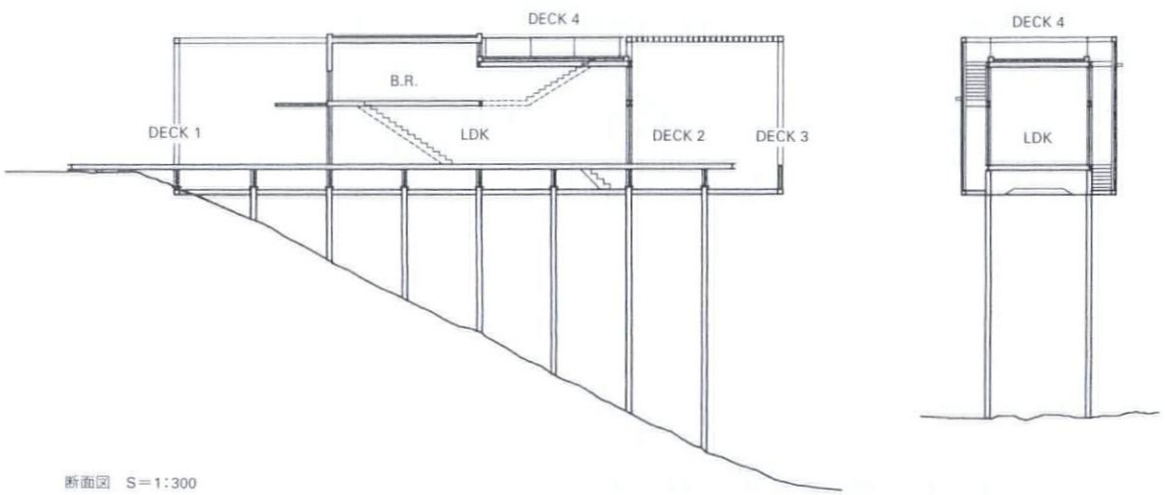
3階平面図



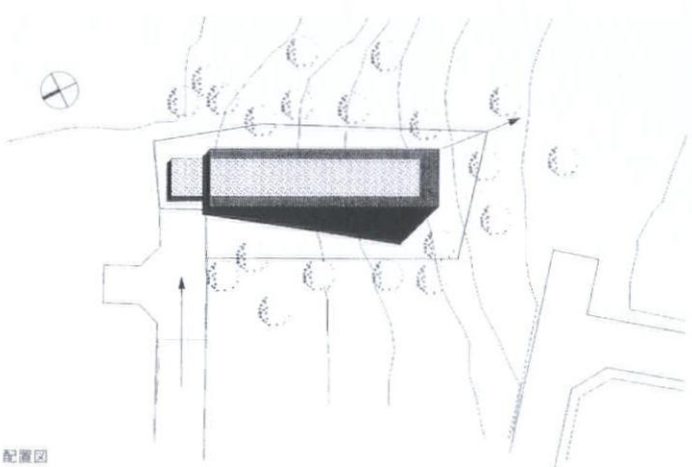
2階平面図



1階平面図　S＝1:300



断面図　S＝1:300



配置図

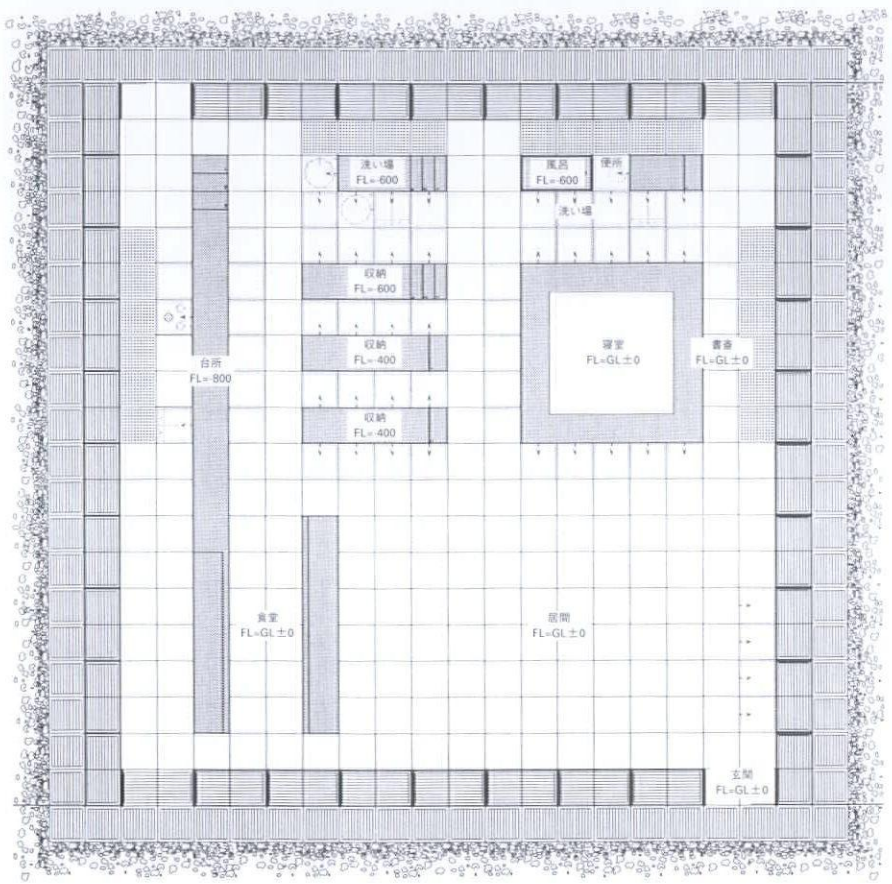


ジン・タイラ+三好隆之　朝倉賞

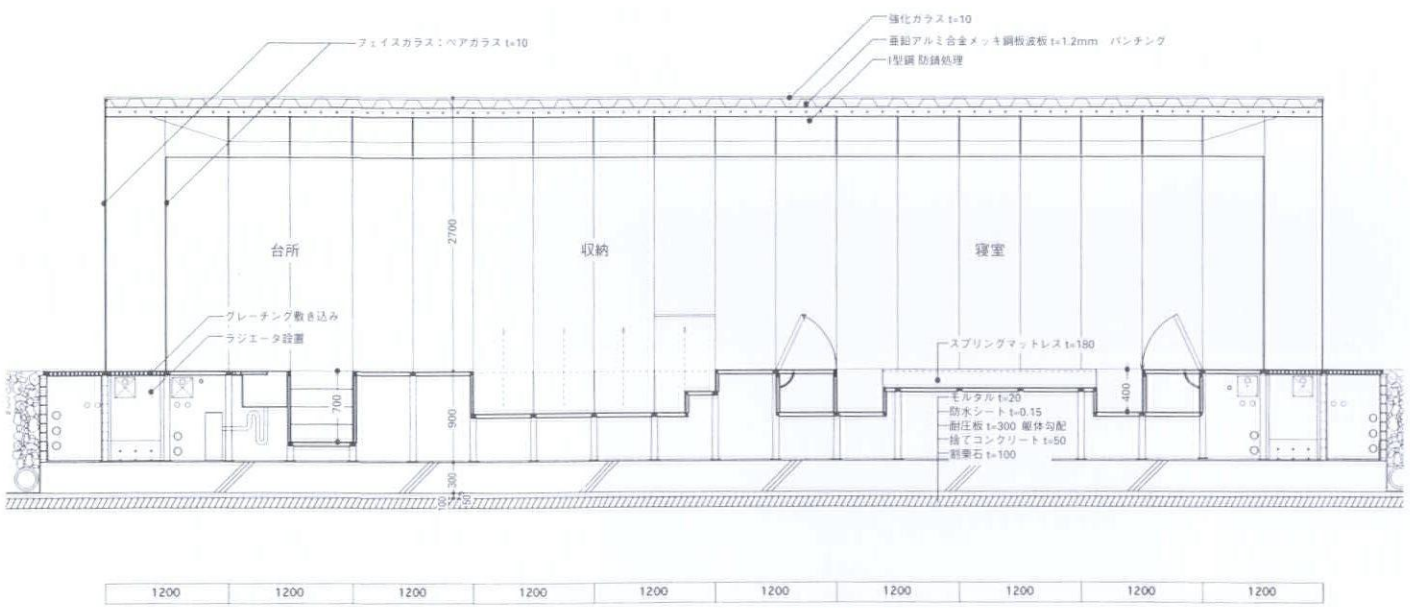
家具のない家　House without Furniture

〈家具のない家〉は、家具を建物に包含させるのではなく、両者を等価に扱うことによって設計が進められた。その結果、すべては床の下に収められ、生活機能を満たすための家具は姿を消した。

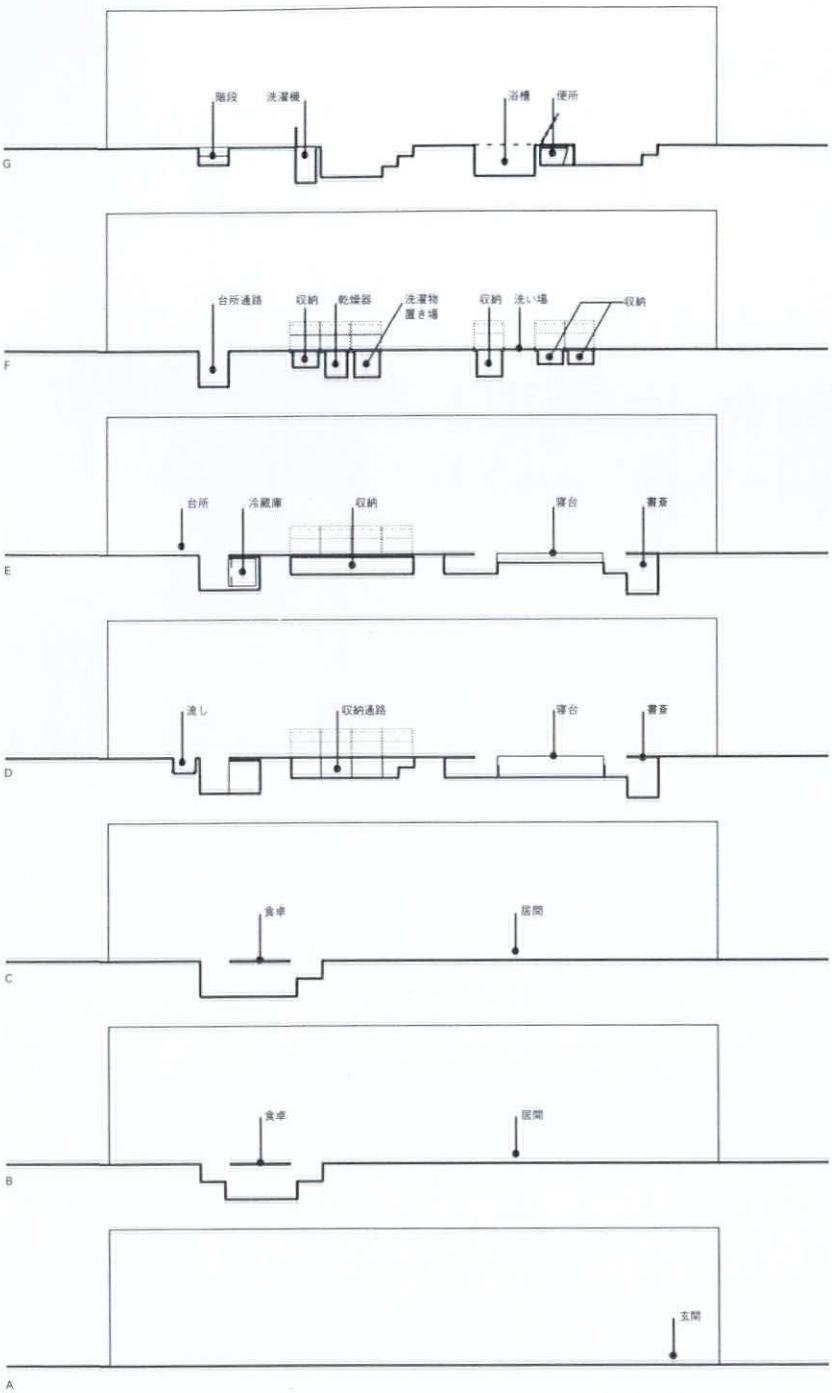
構成としては、北側に風呂、便所、洗面等の衛生設備、南側に居間とダイニング、西側にキッチン、そして東側にベッドを配置している。60cmグリッドによって構成されたワンルームのこの住宅は12m×12mの平面をもつが、機能ごとに仕切られる壁および間仕切りは一切ない。機能および空間の領域は、床に穿たれた穴によってのみ定義されている。高さによってではなく、掘り込む深さによって機能は決められるのである。それ故、生活に必要な収納・設備はすべて床に収められ、床より上部にはガラスの壁と屋根以外に突出するものは何もない。二重のガラスの壁によってこの家の境界は曖昧となり、内部から外部へと水平に連続した空間には住む人の姿だけが現れるのである。



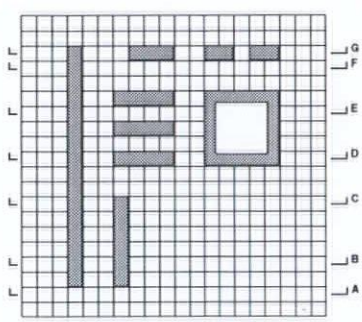
1階平面図　S＝1:125

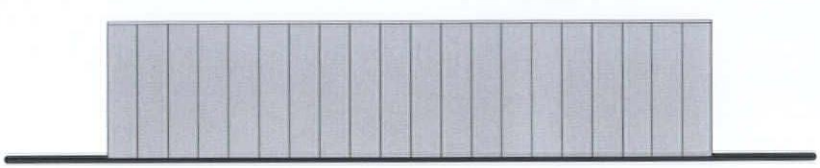


詳細断面図　S＝1:70

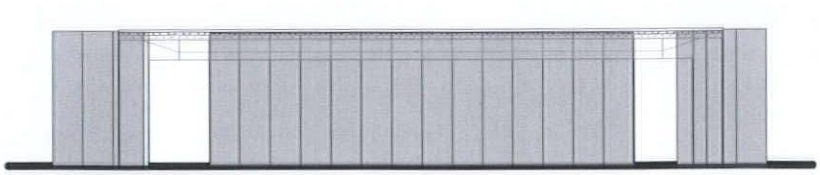


用途：専用住宅
所在地：岐阜県
主体構造：鉄骨+ガラス造
主要仕上材：外部　屋根：ガルバリウム鋼板　外壁：透明強化ガラス　開口部：ガラスカーテンウォール、アルミサッシュ
敷地面積：640m²
建築面積：144m²
延床面積：144m²
工事予定期間：1999年～





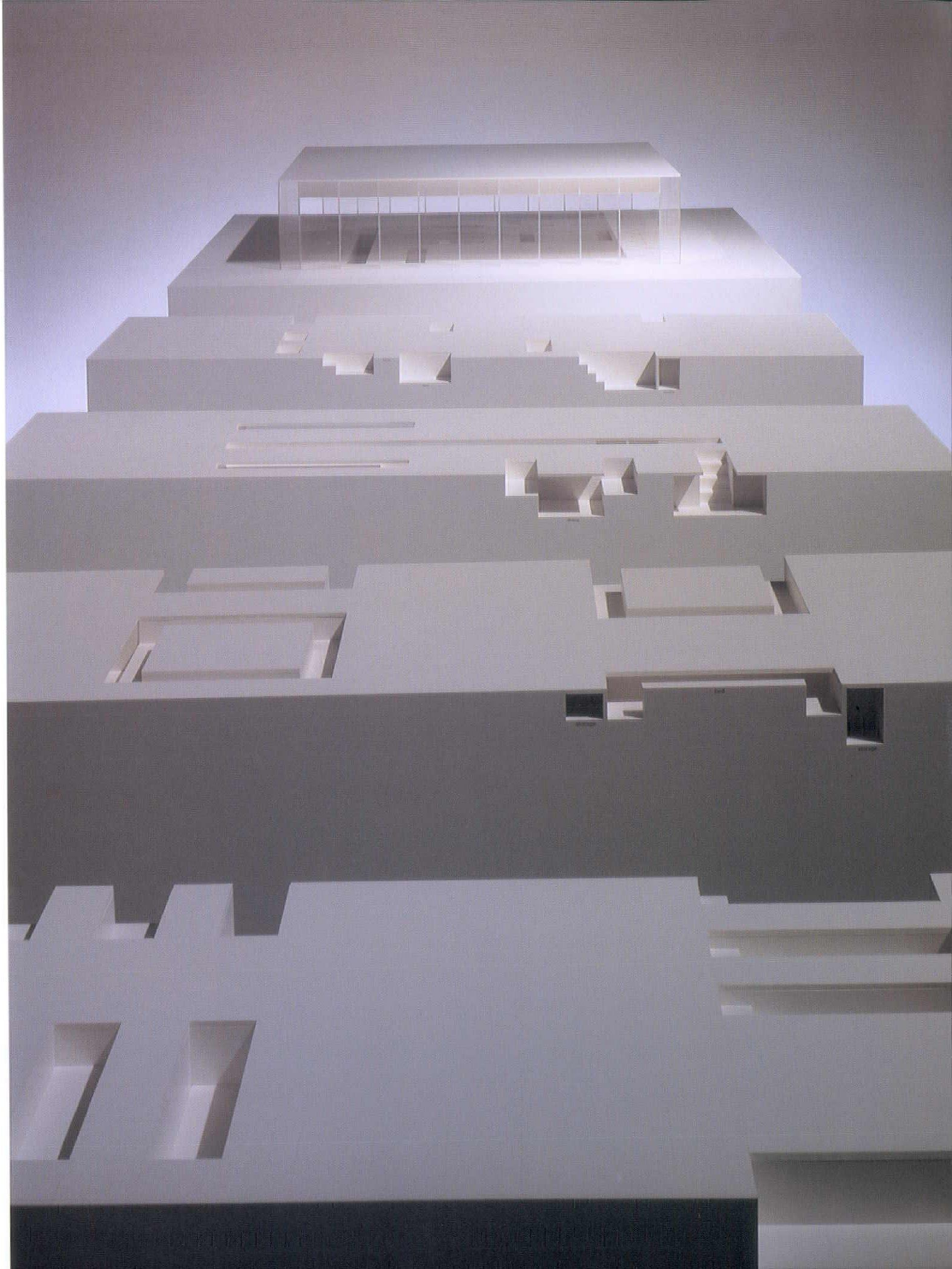
南側立面図



南側立面図（開口時）

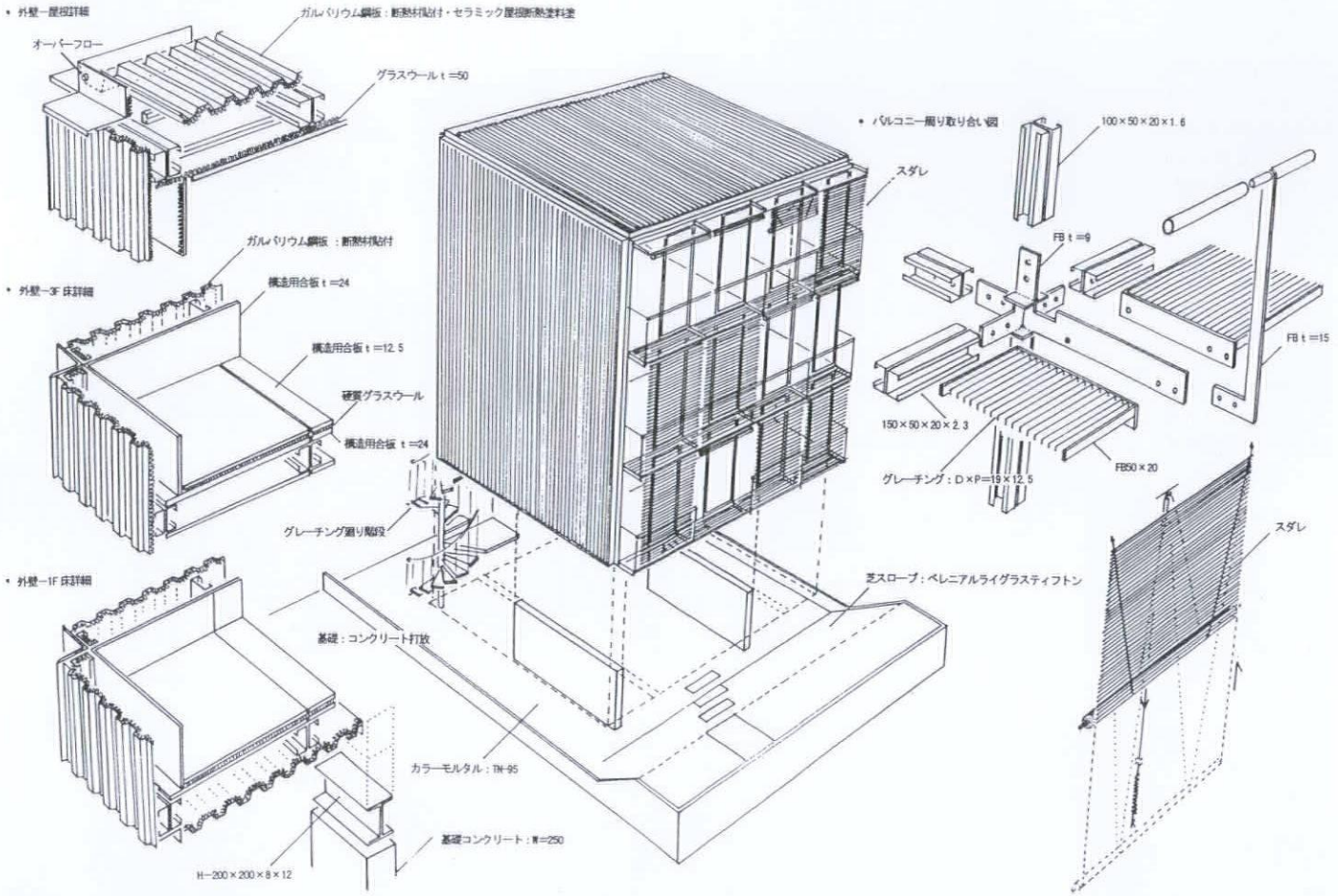
ジン・タイラ　Jin Taira
1970年　スペイン生まれ
1995年　NAVARRA大学卒業
1996年　東京大学大学院工学系研究科建築学専攻研究生
1997年-　東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程

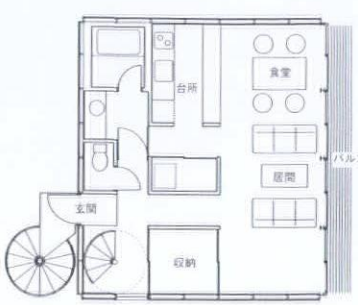
三好隆之　Takayuki Miyoshi
1972年　岐阜県生まれ
1995年　日本大学理工学部建築学科卒業
1997年　東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了
1997年-　東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程



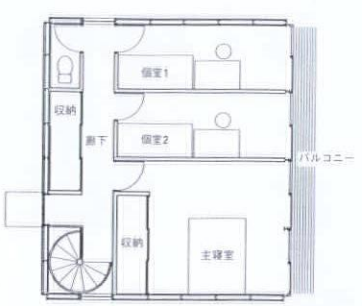
手塚貴晴+手塚由比／手塚建築研究所 SD賞

LGS構造の家

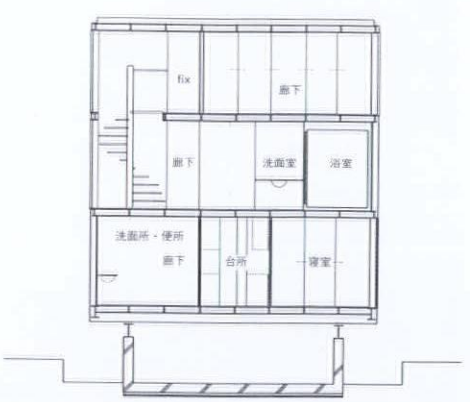




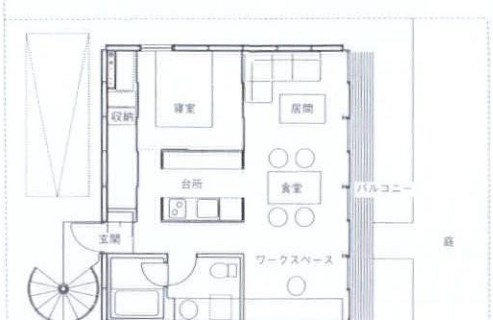
2階平面図



3階平面図



東西断面図 S＝1:200



古来より大多数の日本木造民家が踏襲しつづけた簡便な施工性を、LGSという現代の素材を使って成立させようという計画。人力ですべての材料を持ち運びできることを原則としているため、基礎部分を除いて一切重量鉄骨は使わない。構造用合板をハンドドリルで直接ビス止めできるように、LGSは厚さ2.3mm以下とする。特殊工具は一切必要とされない。南面を覆うのは量販店で簡単に手に入れられる海の家に使われているのと同じスダレである。スダレを巻き上げるシステムはロープと長さ200mmのコイルスプリングを使っただけの極力原始的な手法を使い、ノーメンテナンスを目指す。

共同設計者名：庄野健太郎（手塚建築研究所）、
池田昌弘（池田昌弘建築研究所）

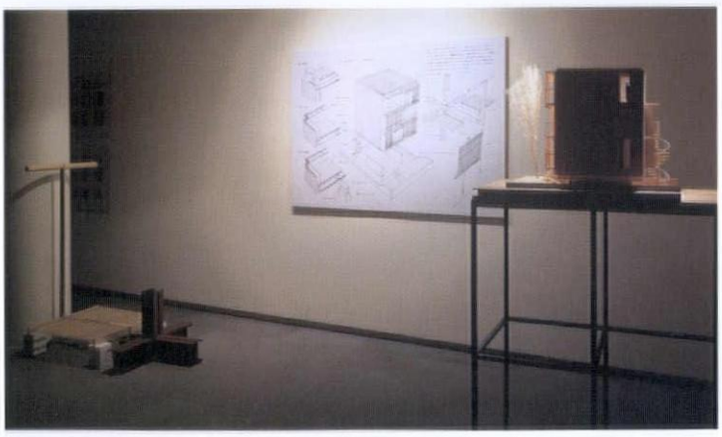
用途：二世帯住宅
所在地：神奈川県藤沢市
主体構造：LGS（S造）
主要仕上材：外部　屋根・外壁：ガルバリウム鋼板
開口部：アルミサッシュ
内部　内壁・天井：構造用合板　床：シナ合板
敷地面積：112.90m²
建築面積：46.37m²
延床面積：139.12m²
工事予定期間：1998年9月1日～99年3月31日



手塚貴晴　Takaharu Tezuka
1964年　東京都生まれ
1990年　ペンシルバニア大学大学院卒業
1990-94年　リチャード・ロジャース・パートナーシップ・ロンドン勤務
1994年　手塚建築研究所を手塚由比と共同設立
1996年　武蔵工業大学専任講師
1997、98年　副島病院でグッドデザイン金賞および日本建築学会作品選奨受賞

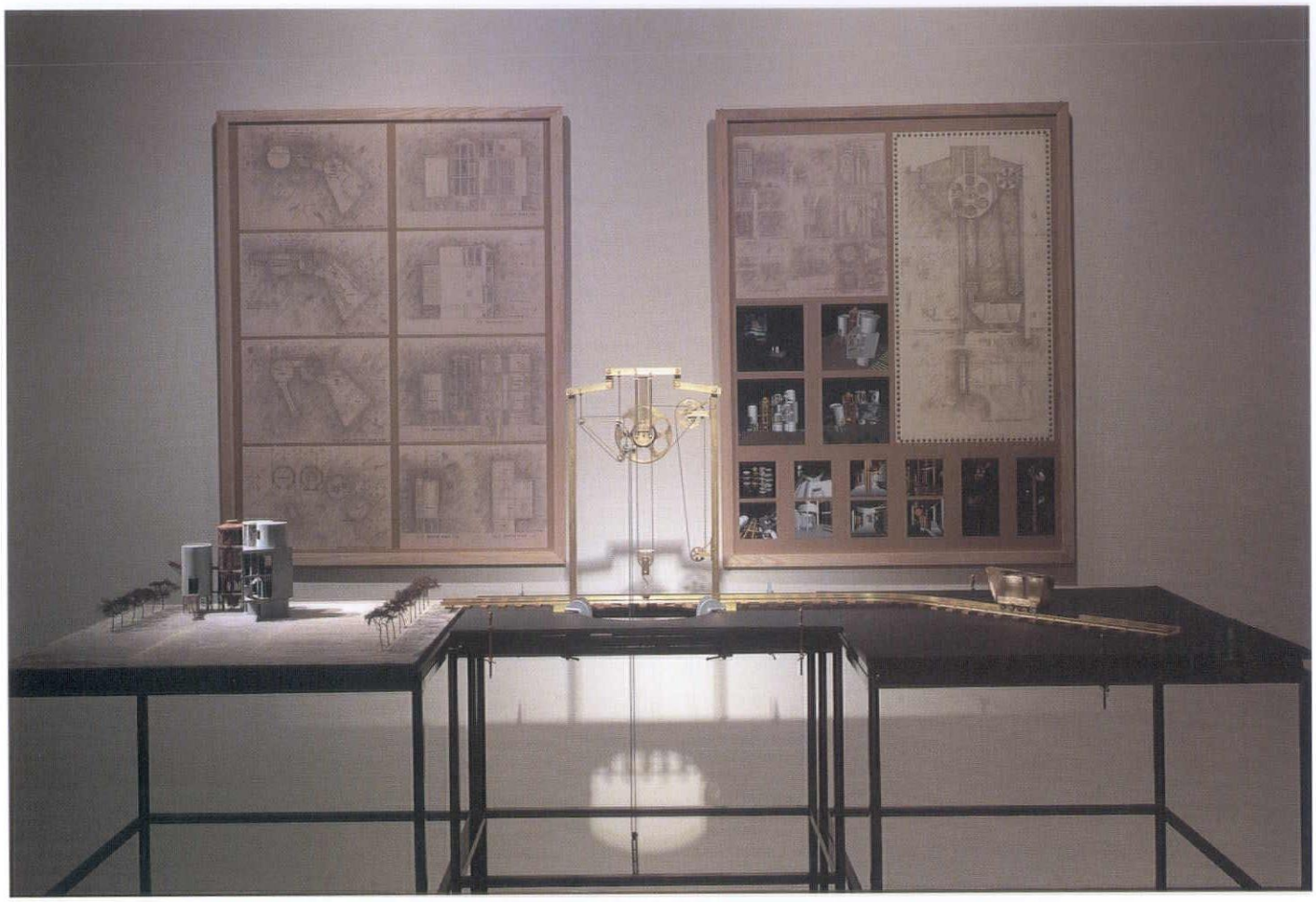
手塚由比　Yui Tezuka
1969年　神奈川県生まれ
1992年　武蔵工業大学卒業
1992-93年　ロンドン大学バートレット校留学（ロン・ヘロンに師事）
1994年　手塚建築研究所を手塚貴晴と共同設立
1997、98年　副島病院でグッドデザイン金賞および日本建築学会作品選奨受賞





山田幸司建築都市研究所　新人賞

角谷邸新築工事――フォアタワー





高い位置から施主の趣味である畑を望むためと施主が階段への憧れを持っているため（施主は現在に至るまで平屋住まいである）塔状住居とし、玄関シャフト、人・物の昇降シャフト、機械シャフト、住空間のシャフトの4本のシャフトで構成する。

恒久的原理と既存技術：

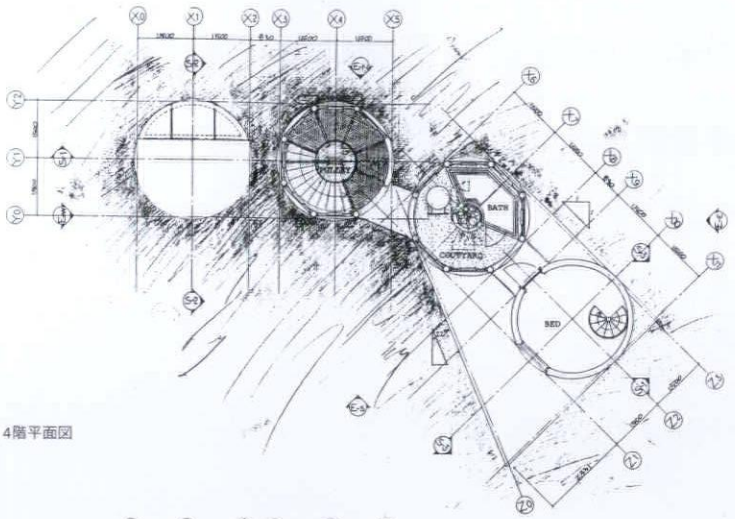
必ずしも既存技術は先端技術に置き換わらない。ブラックボックス化される先端技術の「見えない美」に対し、ミクロからマクロにいたるあらゆる空間を支配する回転どうしの相互作用等の原初的・恒久的原理を単純に利用した既存技術の「見える美」もある。我々はゼンマイと歯車による洗練されたアナログ時計の美しさを知っている。物質の昇降・移動には、複数の回転が力に置換され、人力が倍加される滑車、同一μにおける摩擦力が物体を静止から移動へ状態を変化させ、レールの付加により与えられた軌跡を描くトロッコを導入する。滑車によりリフトアップされた物質はトロッコにより各シャフトを貫き住空間へ供給される。設備においては、主設備の動線はタテとなり重力の積極利用が可能となる。空気調和は煙突効果を利用する。

自然現象の介入：

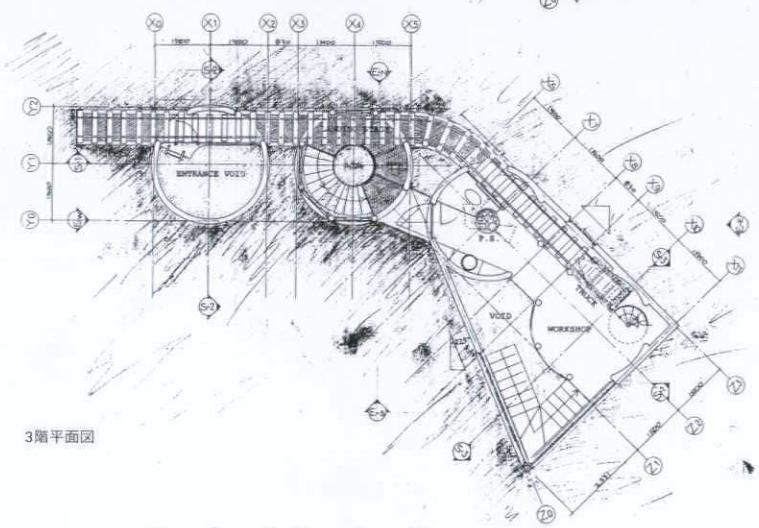
内部を造る行為と自然現象の拒絶は同義ではない。建築の内・外部は境界を曖昧にし、雨、風、小動物、雑草等の自然および自然現象の介入を許容する。コートヤードは土砂敷きとし植栽計画はせず、種子の飛来による雑草の発生・成長、昆虫等の小動物の生育の場等となる。

協力：白石越郎（伊藤陸川設計室）、松島弘幸（M2アーキテクツ）

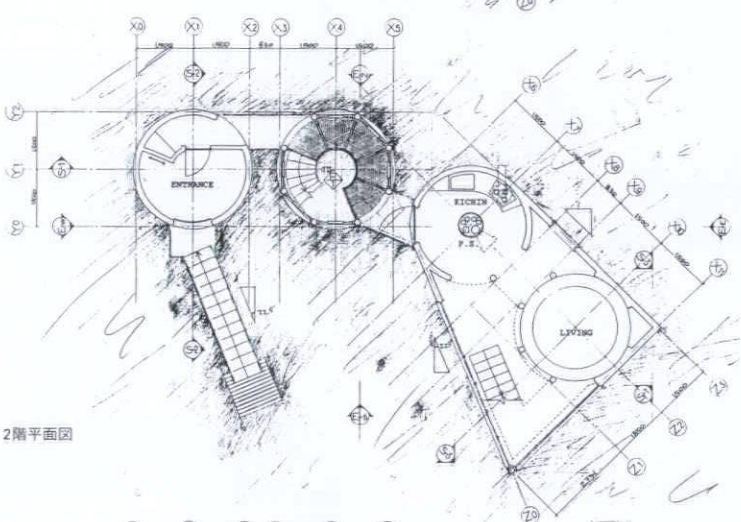
用途：個人住宅
所在地：愛知県碧南市
主体構造：S造
主要仕上材：外部　外壁：鉄板リベット風仕上
内部　床：デッキプレートコンクリート直押え、カーペットタイル張一部エキスパンドメタル
壁：プラスターボードペンキ塗一部エキスパンドメタル
天井：エキスパンドメタル一部デッキプレートむき出し
敷地面積：832.36m²
建築面積：53.83m²
延床面積：119.44m²
工事予定期間：1999年4月～99年10月



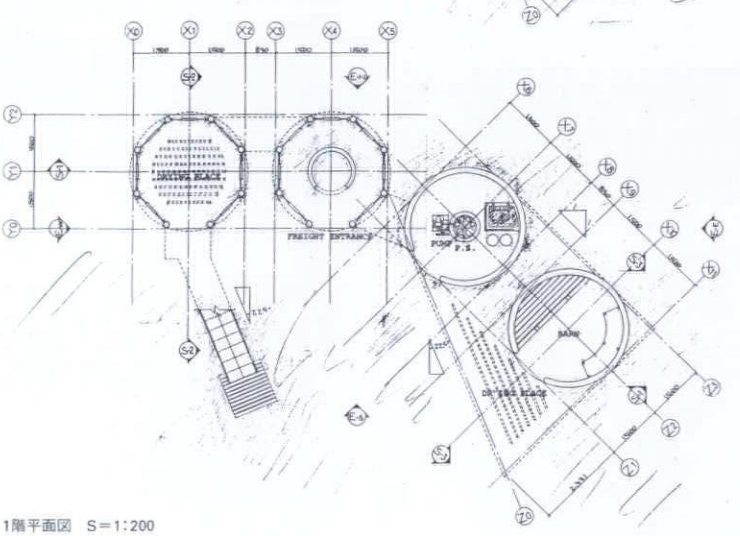
4階平面図



3階平面図

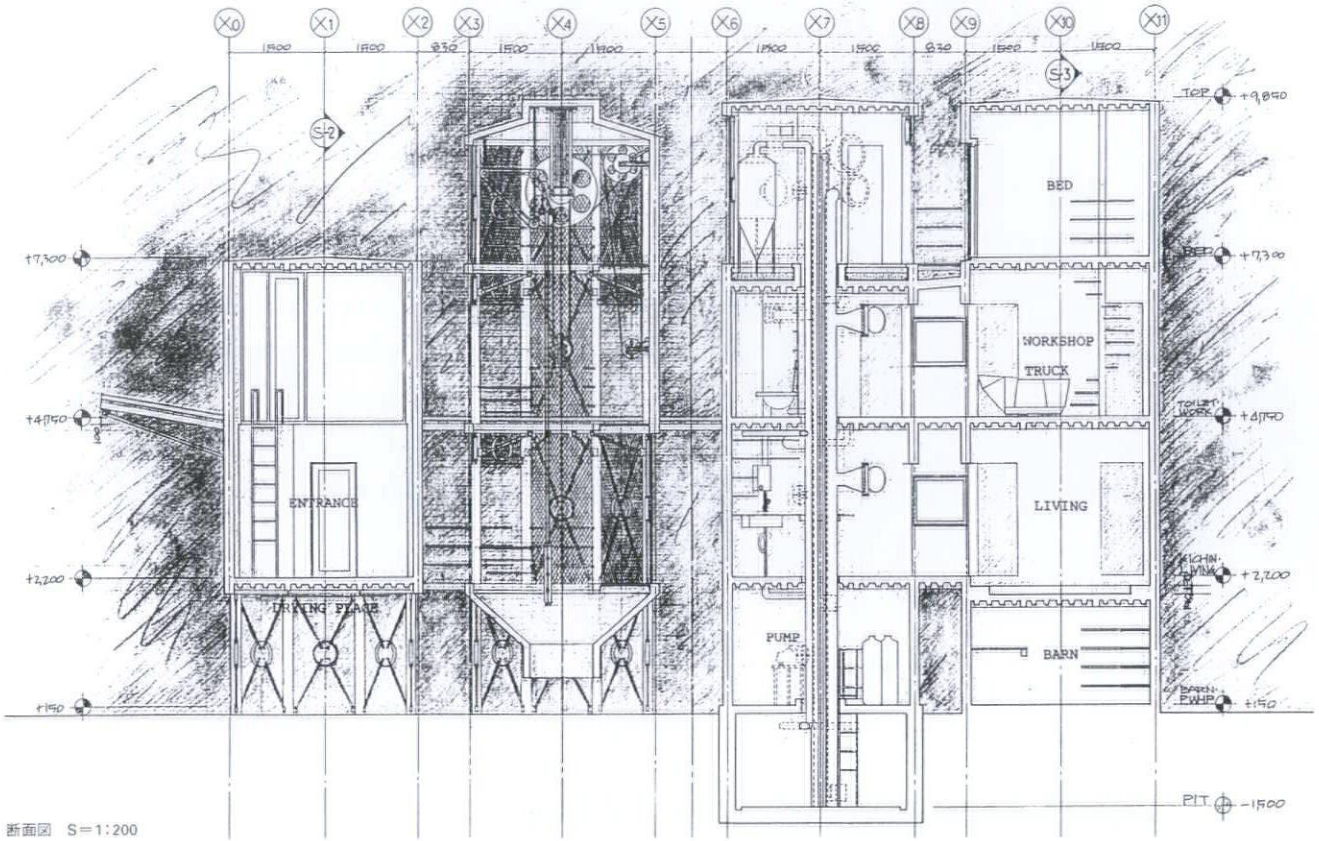


2階平面図

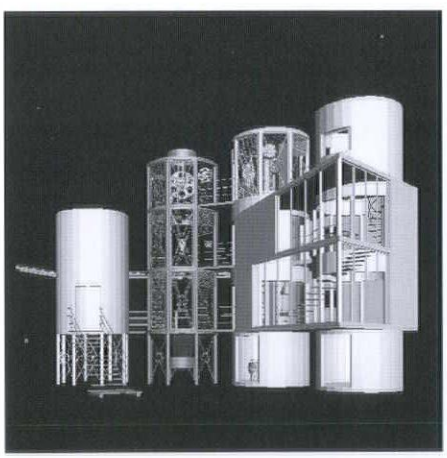


1階平面図　S＝1:200

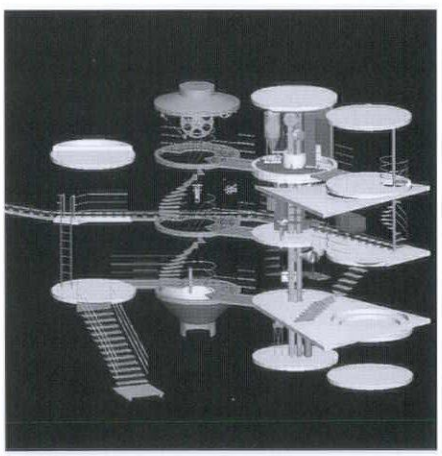
山田幸司　Koji Yamada
1969年　愛知県生まれ
1987年　愛知工業大学工学部建築工学科
1991-94年　石井和紘建築研究所
1994-97年　テイク・ナイン計画設計研究所
1998年　山田幸司建築都市研究所開設



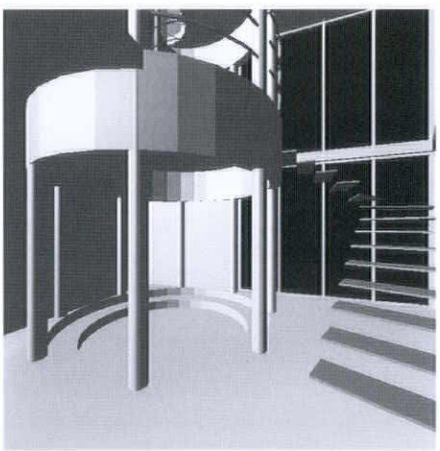
断面図　S＝1:200



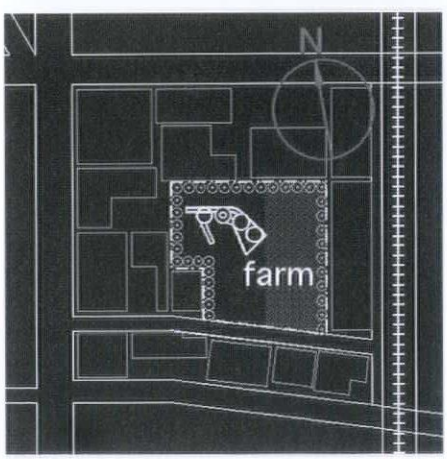
全体透視図



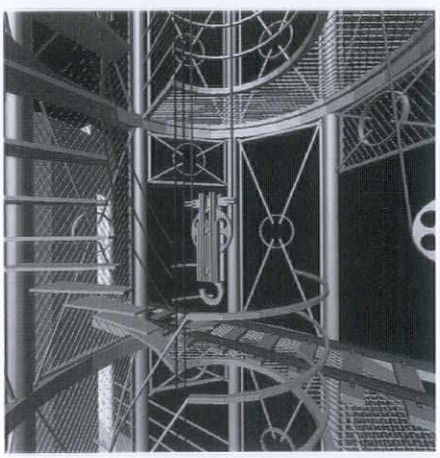
各階関係図



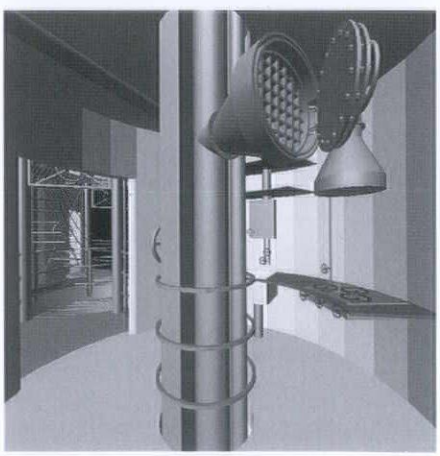
居間



配置図



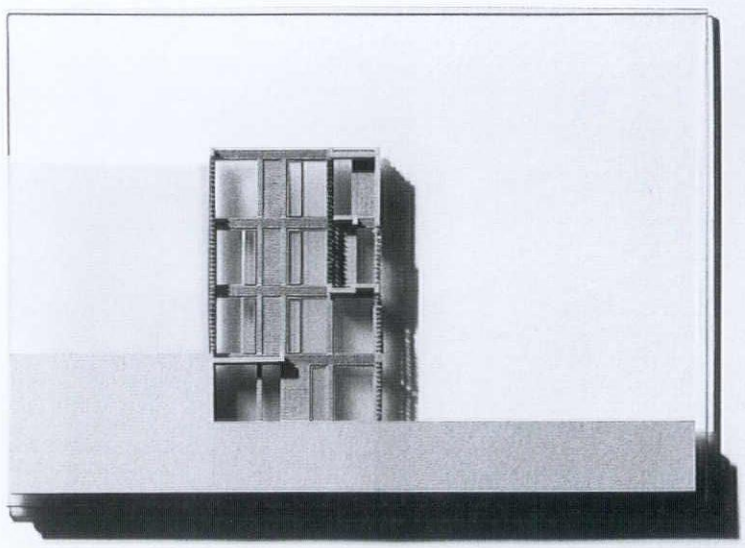
荷物引き上げ場

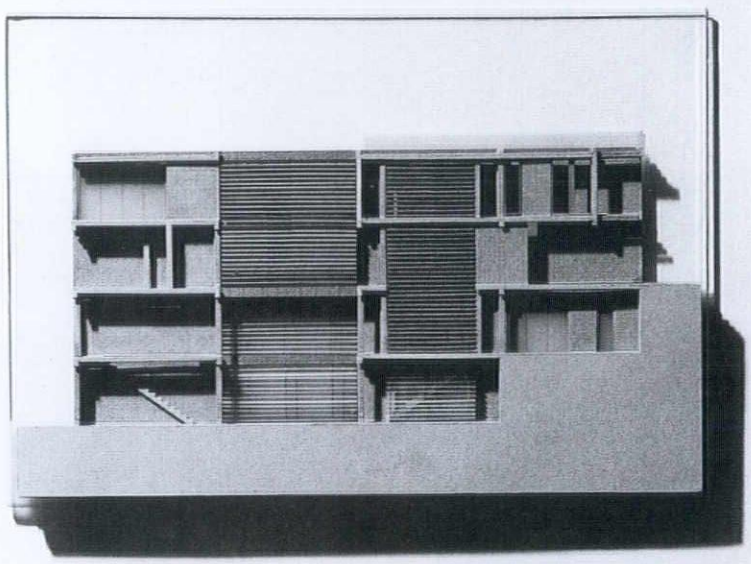


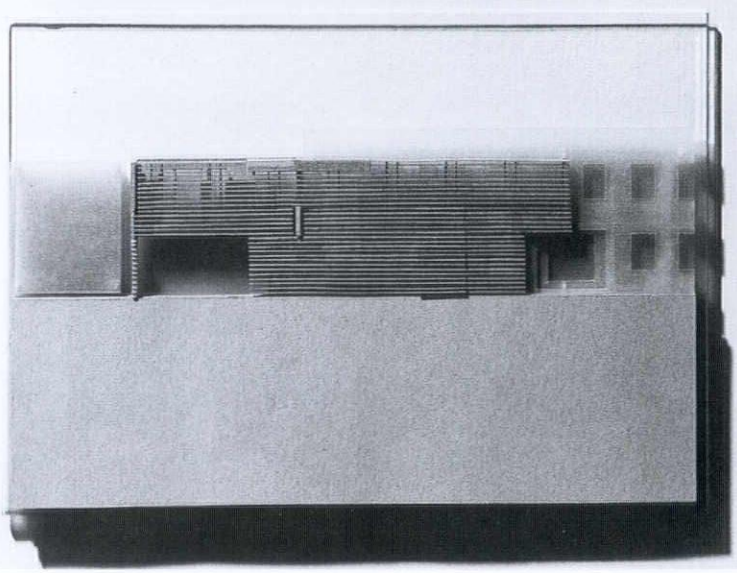
キッチン

アンドリュー・バリー+ミヌストリー・アーキテクチュア

<p>urban







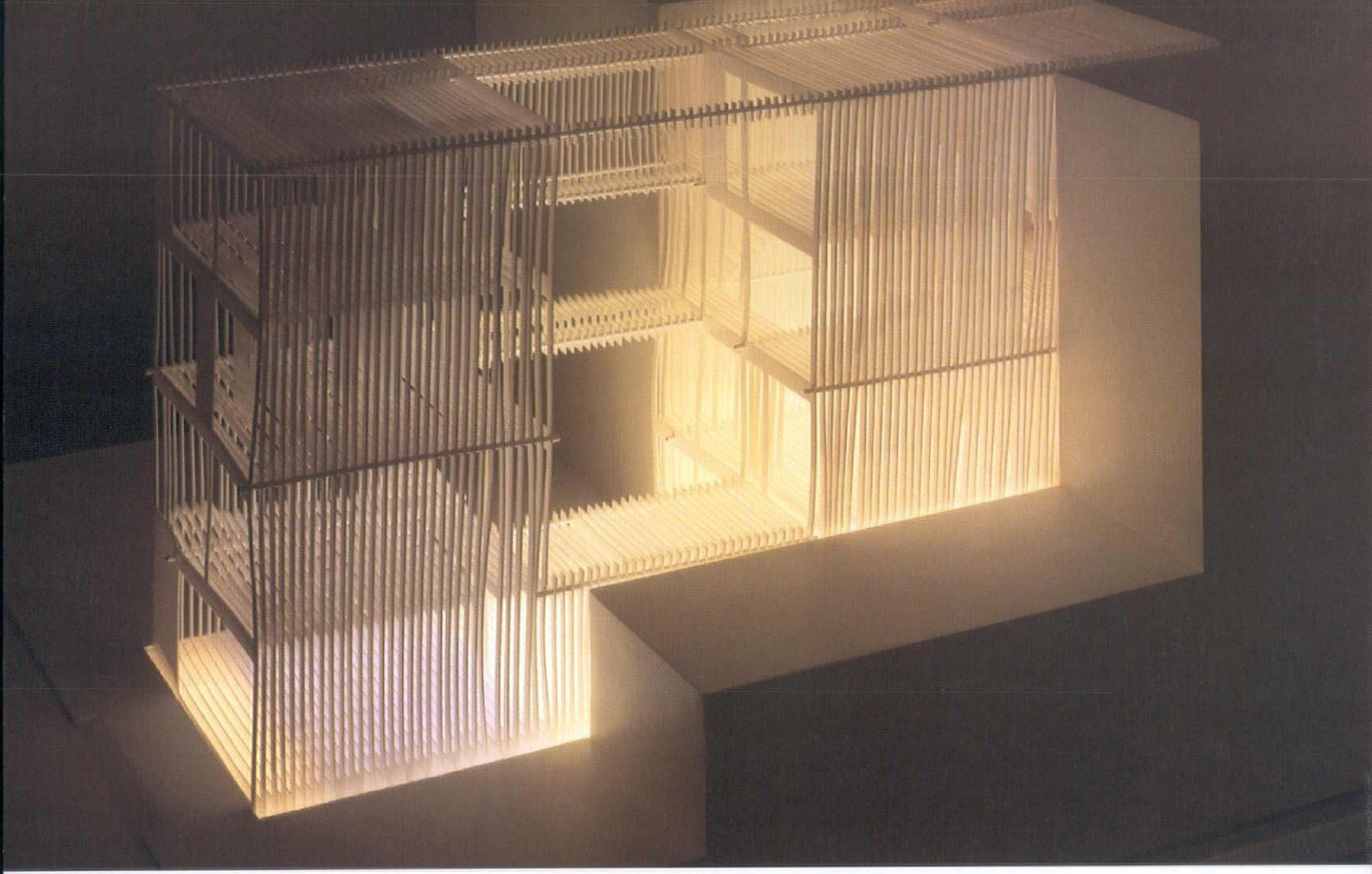
このプロジェクトは、医療用光学機器の輸入ディーラーのための、住居兼仕事場である。この建物は、クライアントとその若い息子のための住宅、ショールーム、街路に面して荷受や配送を行う倉庫兼事務所を提供する。

敷地は狭い傾斜地で、隣接する建物もクライアントが所有している。敷地の持つ都市的特性、すなわちこの傾斜のために、屋外空間はすべて建築のヴォリュームの内側に取り込まれることになった。上側の道に面して、ショールームと住宅への入口が用意されている。事務所は下側の道からアクセスするが、上からショールームを通り抜けて行くこともできるようになっている。これら機能上3つに整理された空間は、空へ開かれた光庭をとりまくように配置されており、はさみ状に組み合わされた階段がこれらを結ぶ垂直動線をなしていて、様々な機能と空間を貫いた視覚的空間的な透明性が生み出されている。

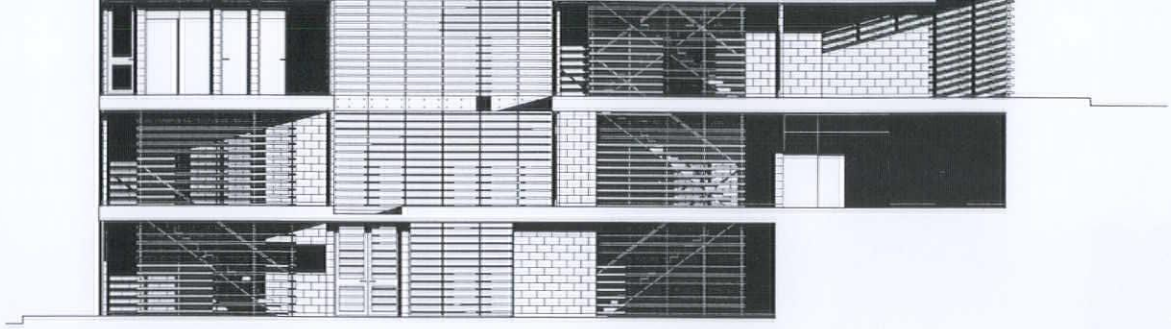
機能が多様で、要求された密度も高いために、オープンスペースが足らないことと、異なる機能が近接しあっていることとを、同時に処理するための仕掛けをつくりだす必要があった。

鍵となる仕掛けはふたつある。ひとつは内部化されたオープンスペースである。この空間は、隣接する部屋の延長であり、広々とした感じを与え、太陽や空、雨、日陰といった自然環境と住み手を結びつける。ふたつめは、建物を貫き、ファサード全体を覆うルーバーである。このルーバーは、空間の透明性に階調を与え、同時に暖衝材としても働く。特に、直に面する街路から建築を分離させることができる。(訳=本江正茂)

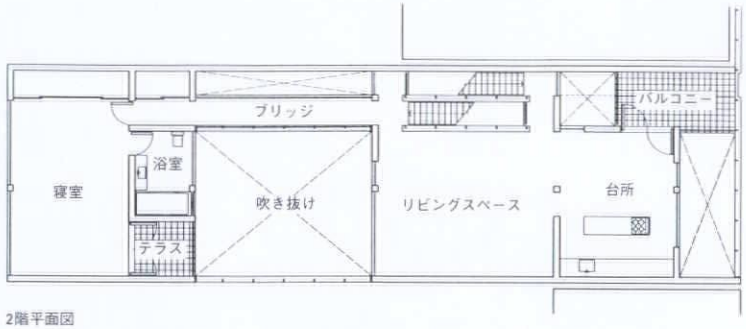
アンドリュー・バリー
1968年　ニュージーランド生まれ
1991年　オークランド大学建築学部卒業
1993-95年　Auckland Architectural Association デザイン・アワード
1995-96年　Carter Holt Harveyアーキテクチュラル・アワード
1997年　オークランド大学建築学部修士修了
現在、東京大学工学部建築学科大野研究室研究生



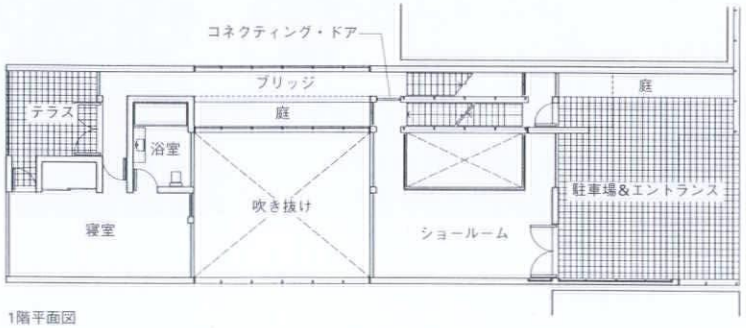




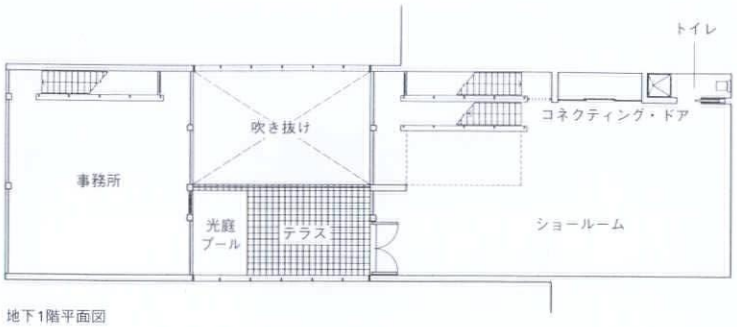
a–a 断面図



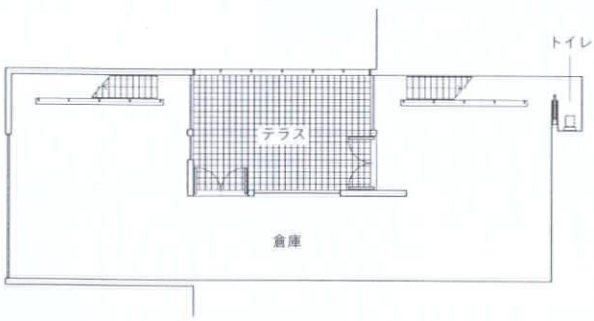
2階平面図



1階平面図



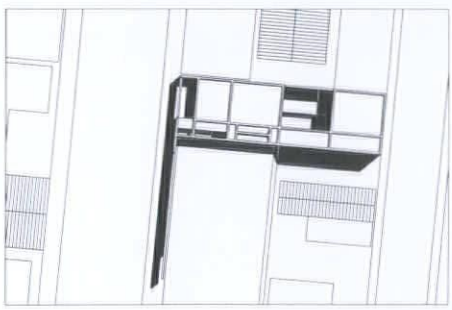
地下1階平面図



地下2階平面図　S＝1:250

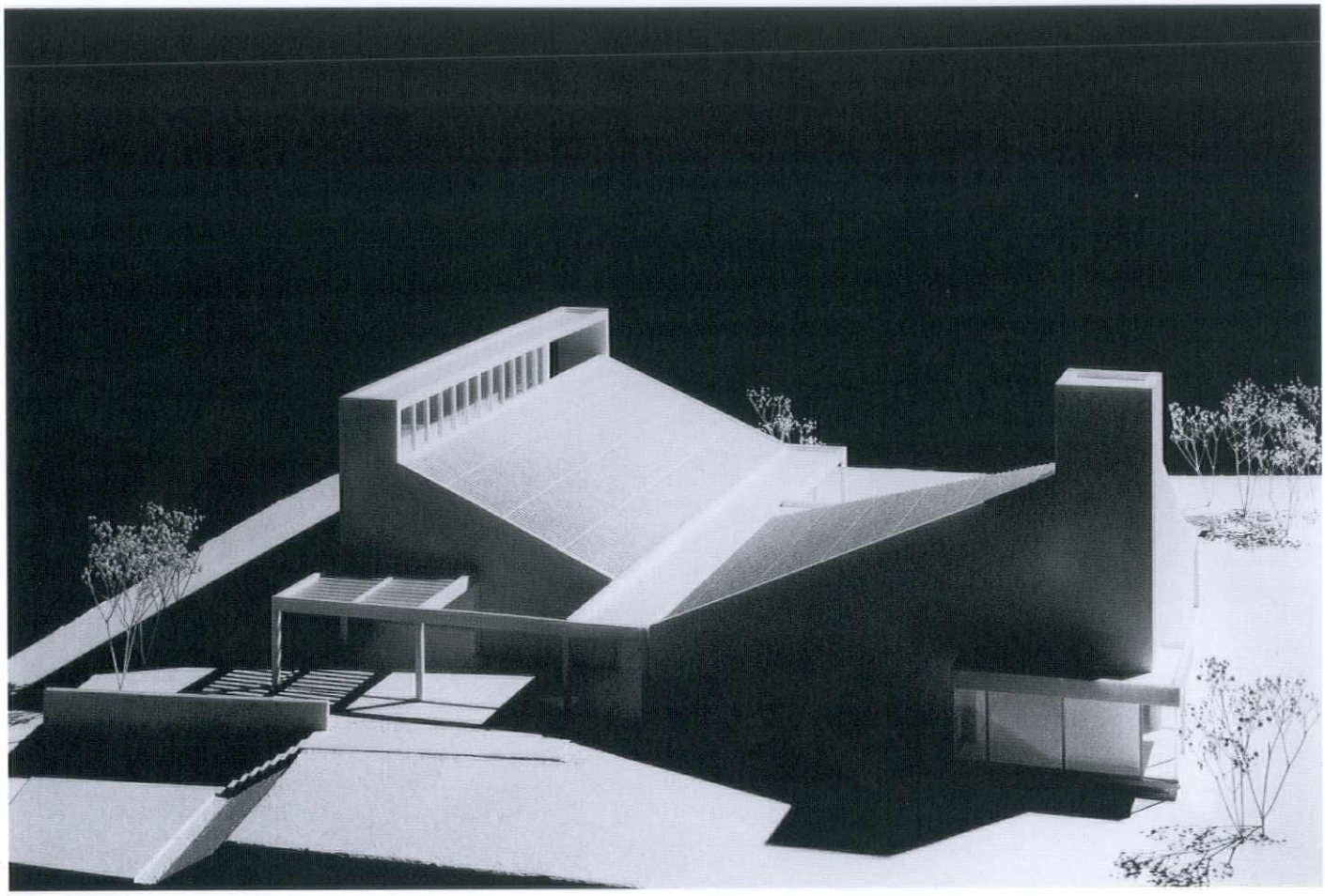
協力者名：Sean McMahon, Clare Barrie

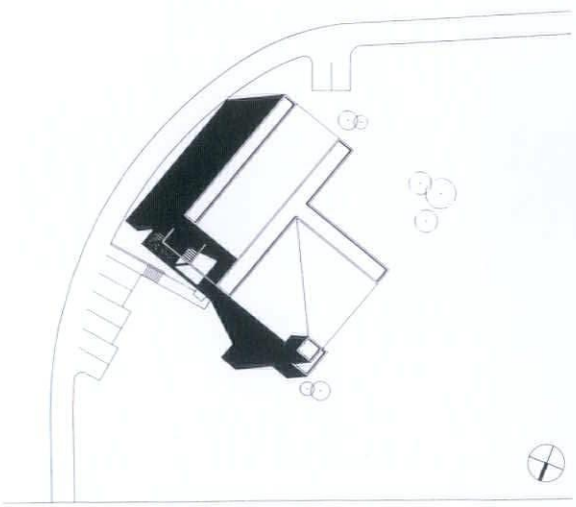
用途：個人住宅、ショールーム、事務所、倉庫
所在地：オークランド、ニュージーランド
主体構造：コンクリートブロック造
主要仕上材：コンクリートブロック、木製ルーバー、スレートタイル
敷地面積：168m²
建築面積：168m²
延床面積：498m²
工事予定期間：1995年10月～99年12月

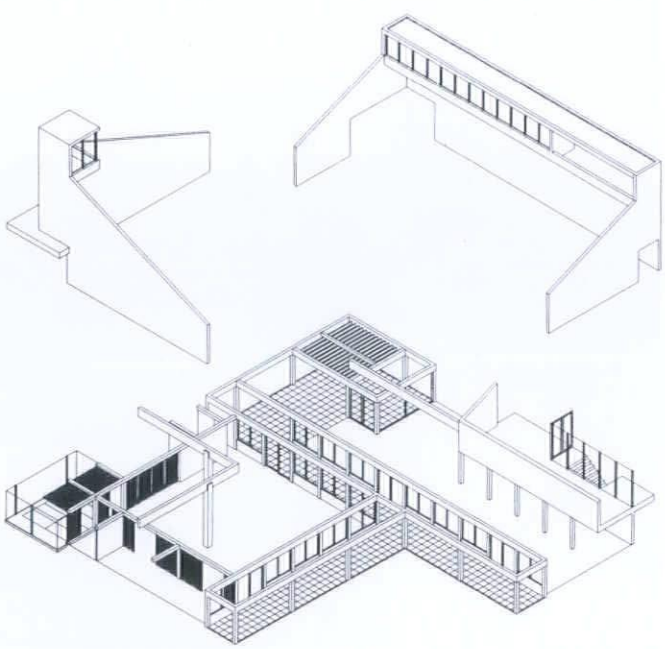


和田吉貴

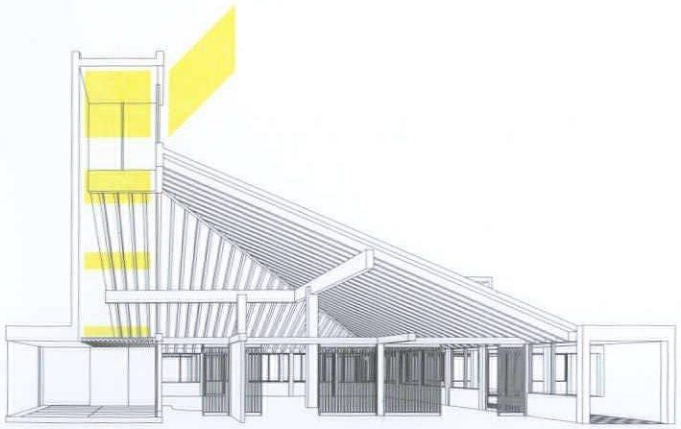
石垣焼窯元







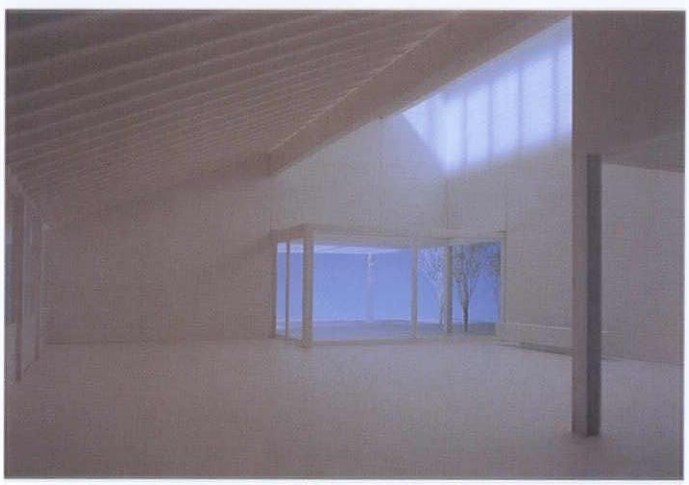
配置図　S＝1:1000

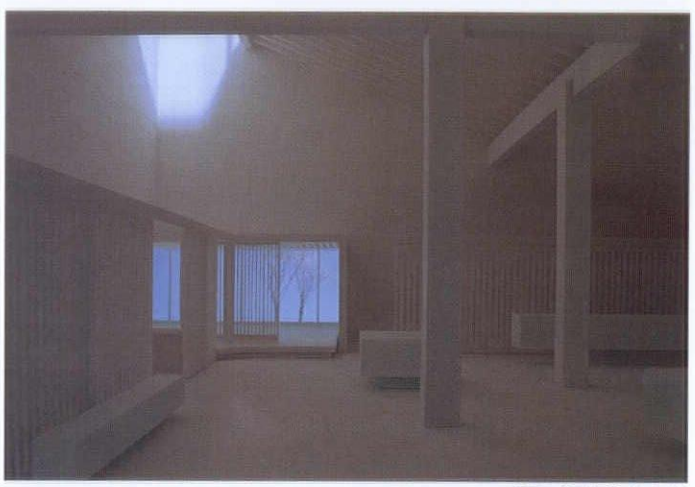


光の流れ

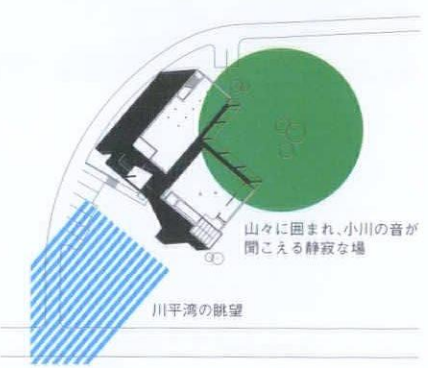


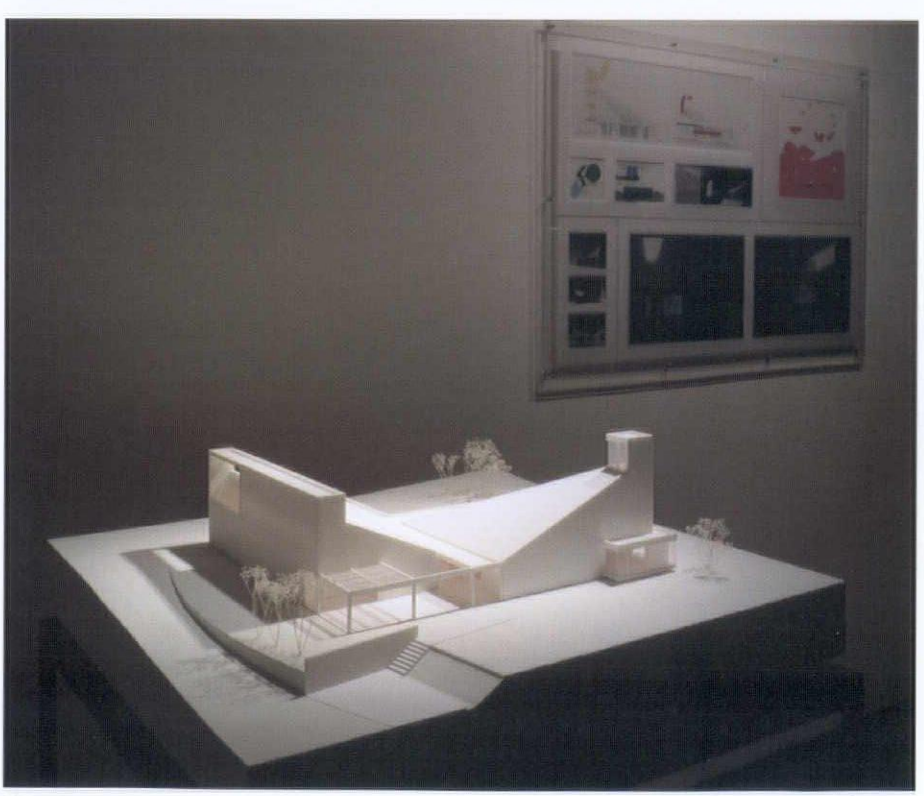
空気の流れ



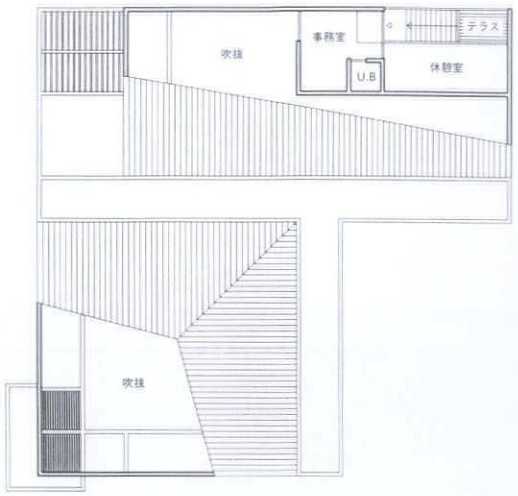


写真＝和田吉貴（左右共）

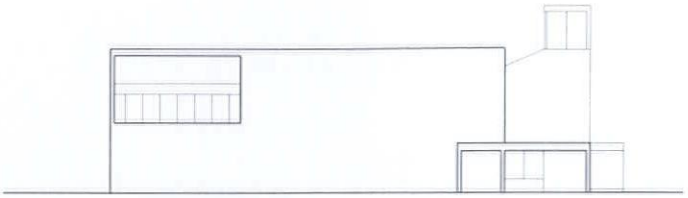




用途：アトリエ+店舗
所在地：沖縄県石垣島
主体構造：RC造、一部木造（屋根、回廊）
主要仕上材：赤瓦、ホワイトコンクリート打ち放し、ベイマツ
敷地面積：3,300m²
建築面積：442.5m²
延床面積：413.1m²
工事予定期間：1998年12月～99年5月



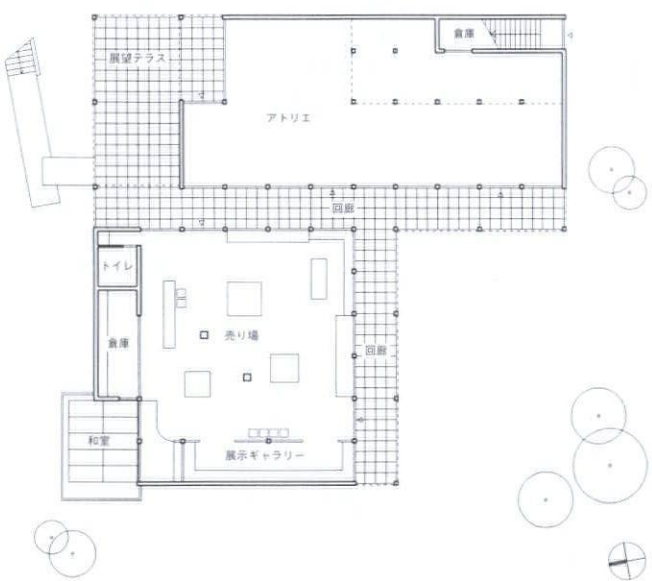
2階平面図



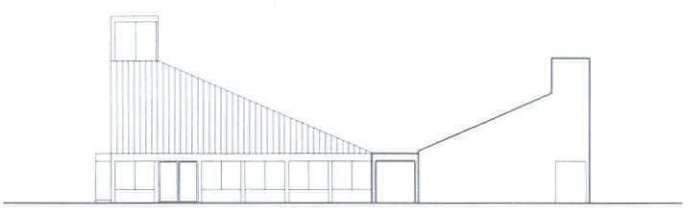
東立面図



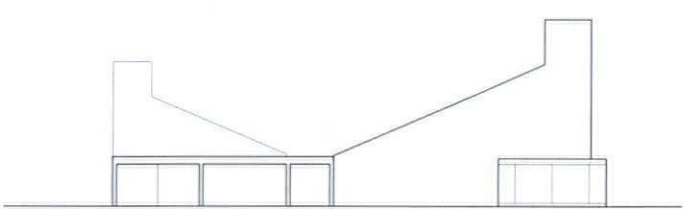
西立面図



1階平面図　S＝1:400



南立面図



北立面図　S＝1:400

喜の字を前にその陶芸家は、新たな活動の場を沖縄石垣島に求めた。

「遠景に川平湾を望む開放的な領域と、山々に囲まれ小川のせせらぎの聞こえる静的な領域の所在」、敷地についての感想を求められてそう答えた僕にひとつ頷いて、テーブルの上に落ちた影を指でなぞり、その道筋を目で追った後、唐突に「闇」の話しを始めた。影について話し、光を語っていることを理解した僕は、少しあわててその光の道が風の道にもなることを付け加えた。

アトリエと店舗を分棟として構成する。両者の空間体験は近似的、そして差異的空間の性格をより顕在化させる。また結果生まれる「地」の部分は接続詞的に両棟を強調しつつ、陰影と奥行きとさまざまな「場」を与えるだろう。

背景の山々にシルエットとして参加する2棟は少し似ていて少し違う。

老人の今は亡き弟へのオマージュでもある。

和田吉貴
1962年　鹿児島県生まれ
1988年　日本大学理工学部建築学科卒業
1988-97年　槇総合計画事務所
1998年　和田吉貴建築事務所

駒井貞治／駒井貞治の事務所

借家生活1、2、3...



学生時代から京都に下宿して10年以上が経ち、その間、家族構成、生活環境が変化し、それに合わせて引っ越しを繰り返している。借家の場合、借りる前の状態に戻してから大家に返すことが、条件になってしまっている。

しかし、できるだけ既存部分に手を加えずに増改築し、またその構成部材の単位を家財道具のように小さくし、引っ越しの際には、共に移動し、そこでの条件に合わせて活用すれば、毎回その家を積極的に住みこなすことができると考えた。

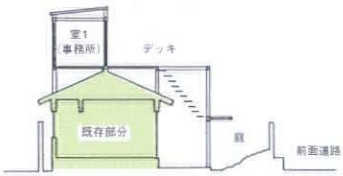
協力：荒木公樹、伊東孝俊、内田雅章、大島勝寛、太田光昭、近江利雄、中尾博子、中村芳知、畑晴美、濱口周子、伴海和彦、樋口章、HIBINO-NATSU、真柄良行、宮谷希世、六車誠二、六車華子、山田さゆり、山本晴久

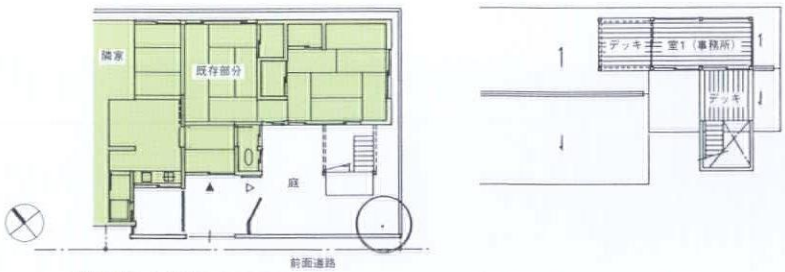
借家生活1
用途：住宅+事務所
所在地：京都市左京区高野
主体構造：木造
主要仕上材：木
建築面積：増築部分20m²
延床面積：8m²

借家生活2
用途：住宅+事務所
所在地：京都市左京区若王子
主体構造：木造
主要仕上材：木
建築面積：増築部分24m²
延床面積：8m²
工事予定期間：1998年5月～(工事中)

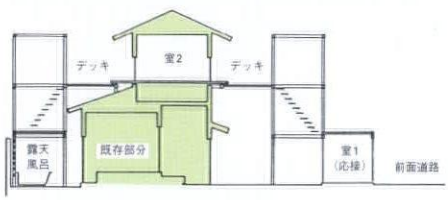
借家生活3
用途：住宅+事務所
所在地：京都市左京区松ヶ崎
主体構造：木造
主要仕上材：木
建築面積：増築部分(既存部分以外に8m²)を含めて
改装部分36m²
工事予定期間：2000年4月～

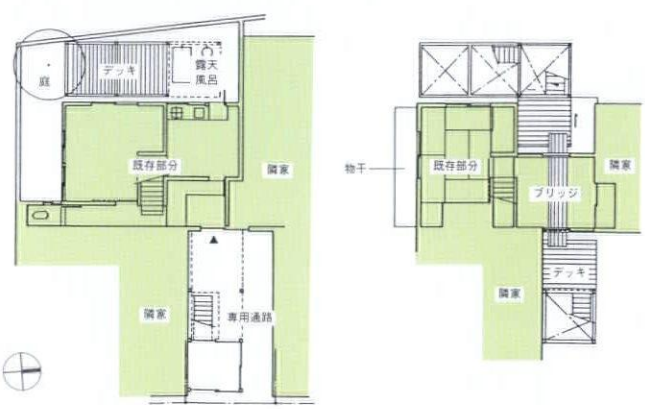
駒井貞治　Sadaharu Komai
1968年　大阪府生まれ
1990年　京都府立大学住居学科卒業
1990年　建築環境研究所
1997年　駒井貞治の事務所設立



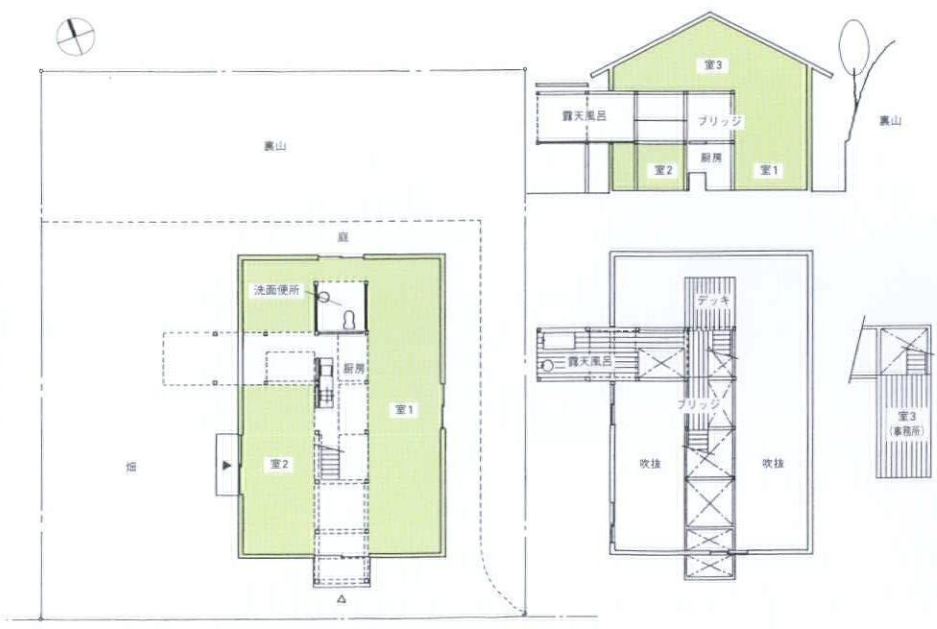


借屋生活1　平面図　S＝1:300





借屋生活2　平面図　S＝1:300

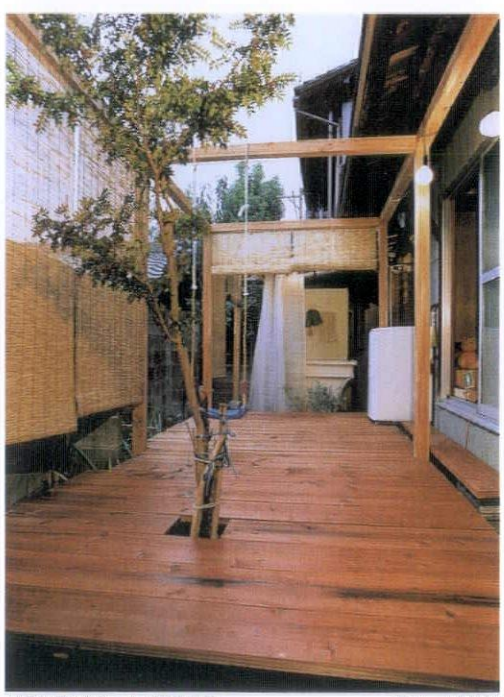


借屋生活3　平面図　S＝1:300





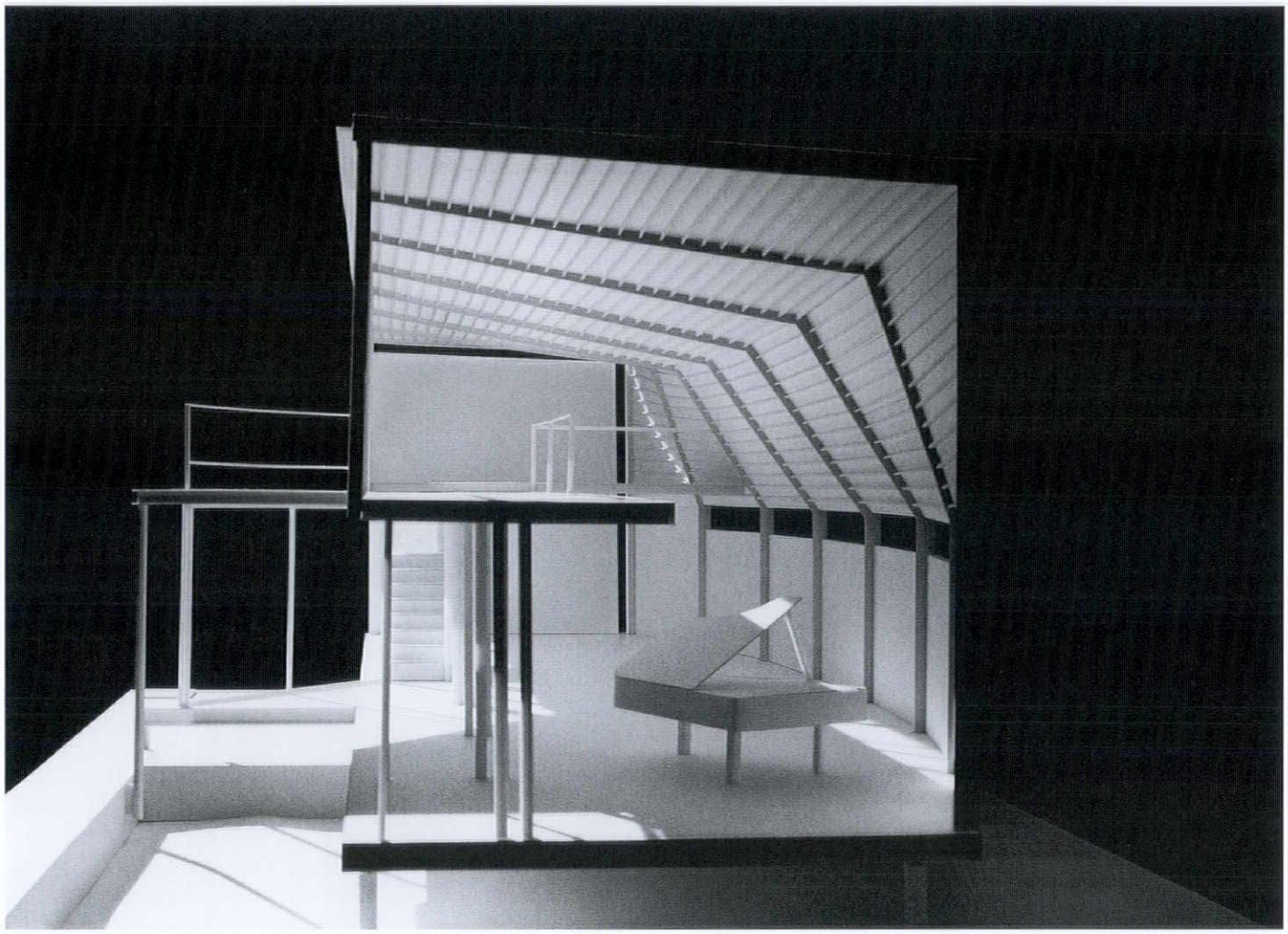




借屋生活2のデッキと露天風呂　写真＝大島勝寛

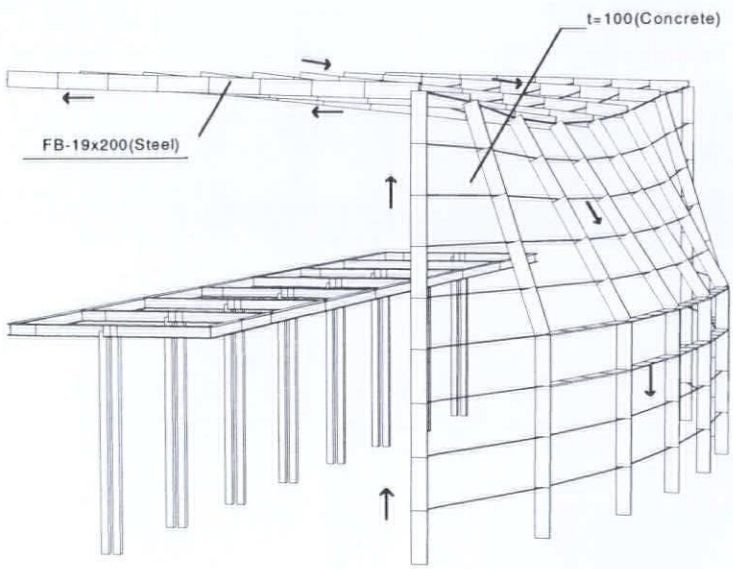
遠藤政樹+池田昌弘

HP防音シェルのあるスタジオ住宅



共同設計者名：名和研二

用途：専用住宅(音楽スタジオ付き)
所在地：神奈川県横浜市
主体構造：S造+RC造
主要仕上材：外部　屋根：コンクリートの上シート
防水　外壁：フレキシブルボード8t+アルミサッシュ
内部　天井：アイデッキあらわし一部吸音材
音響材料・工法は施主指導
敷地面積：210.00m²
建築面積：104.70m²
延床面積：155.77m²
工事予定期間：1998年6月～98年10月



条件

敷地は横浜の区画整備中の穏やかな丘陵地。夫が音響の専門家、妻がピアノの演奏家。最大の要求は、居間ともなるスタジオをできるだけ広く快適に、そしてその防音である。性能はコンクリート壁が要求されている。

問題

「このコンクリートの防音壁をいかにエレガントで快適なものにするか？」。建築家と構造家との間で検討が行われた。その中でコンクリートの性能について以下を合意点とした。

・RCの可塑性を生かした構造とする。
・快適性のため、コンクリートは閉じない。
・型枠支柱のいらない簡単な工法を考える。

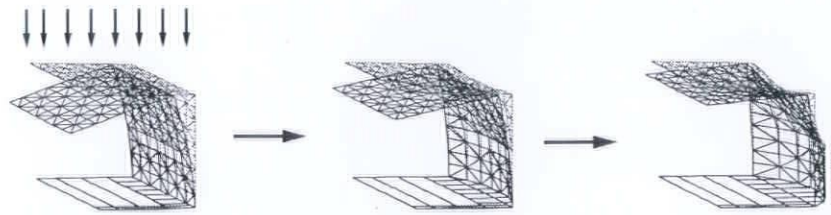
HP幾何学による解決

これから、断面が直線で構成されながら全体が3次曲面となるかたち、HP=双曲放物面、の防音壁が考えられた。これは、常時の鉛直荷重に加えて地震時の水平荷重にも3次元的に抵抗するかたちである。工法としては、直線なる鉄骨造の断面矩を2.4m間隔に配置し、これを定規としたアイデッキの化粧捨型枠にコンクリートを現場打設するものである。

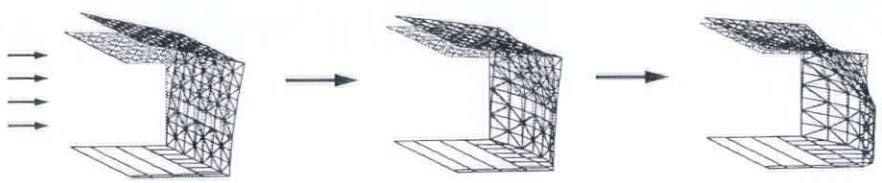
その結果、1. 10cmの防音上必要なコンクリート厚のみで建物全体を覆う構造システムが可能となり、2. そのコンクリート壁自体が自立構造のため、南面は機能的にも完全に解放したかたちが可能となっている。さらに、3. 支保工のない3次元曲面の施工方法が提案できた。と考えている。（遠藤政樹＋池田昌弘）



HP型曲面の形成



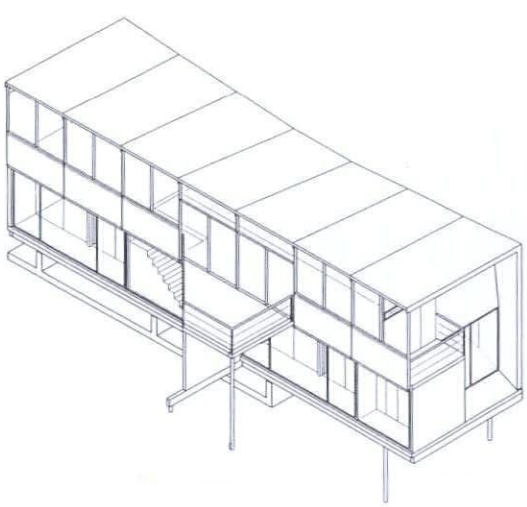
鉛直荷重に対する変形

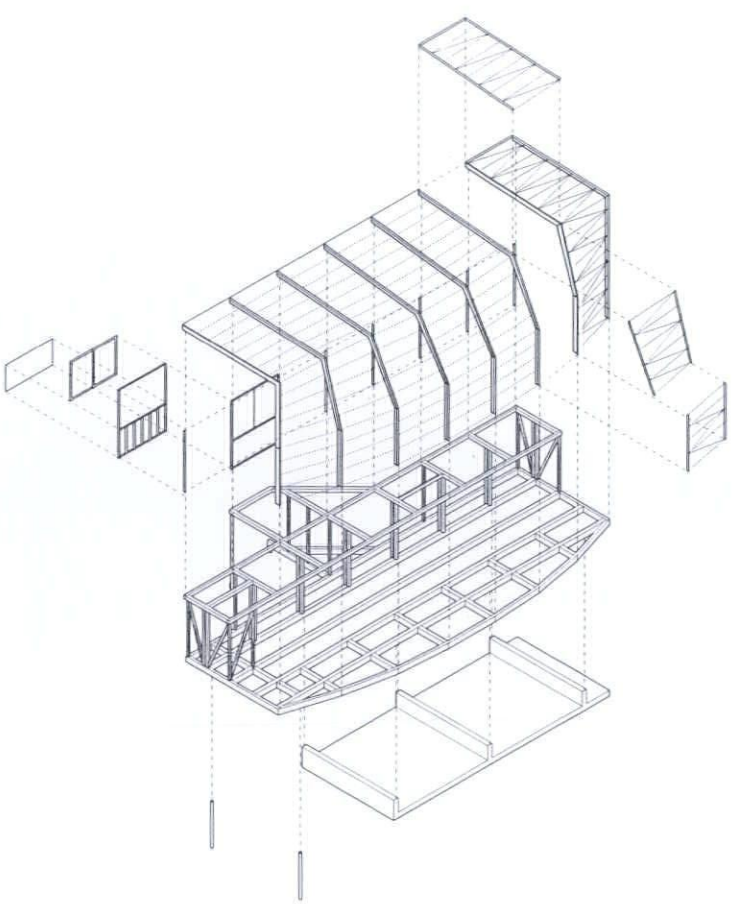


スパン方向水平荷重に対する変形

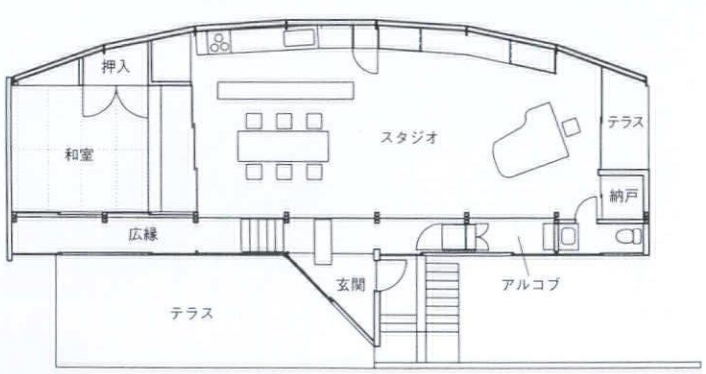


桁方向水平荷重に対する変形

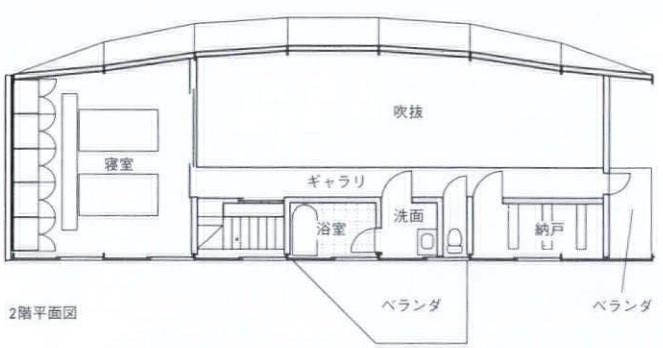




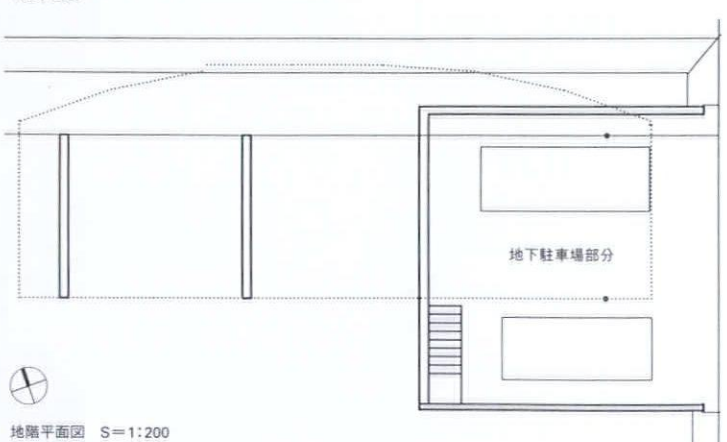




1階平面図



2階平面図



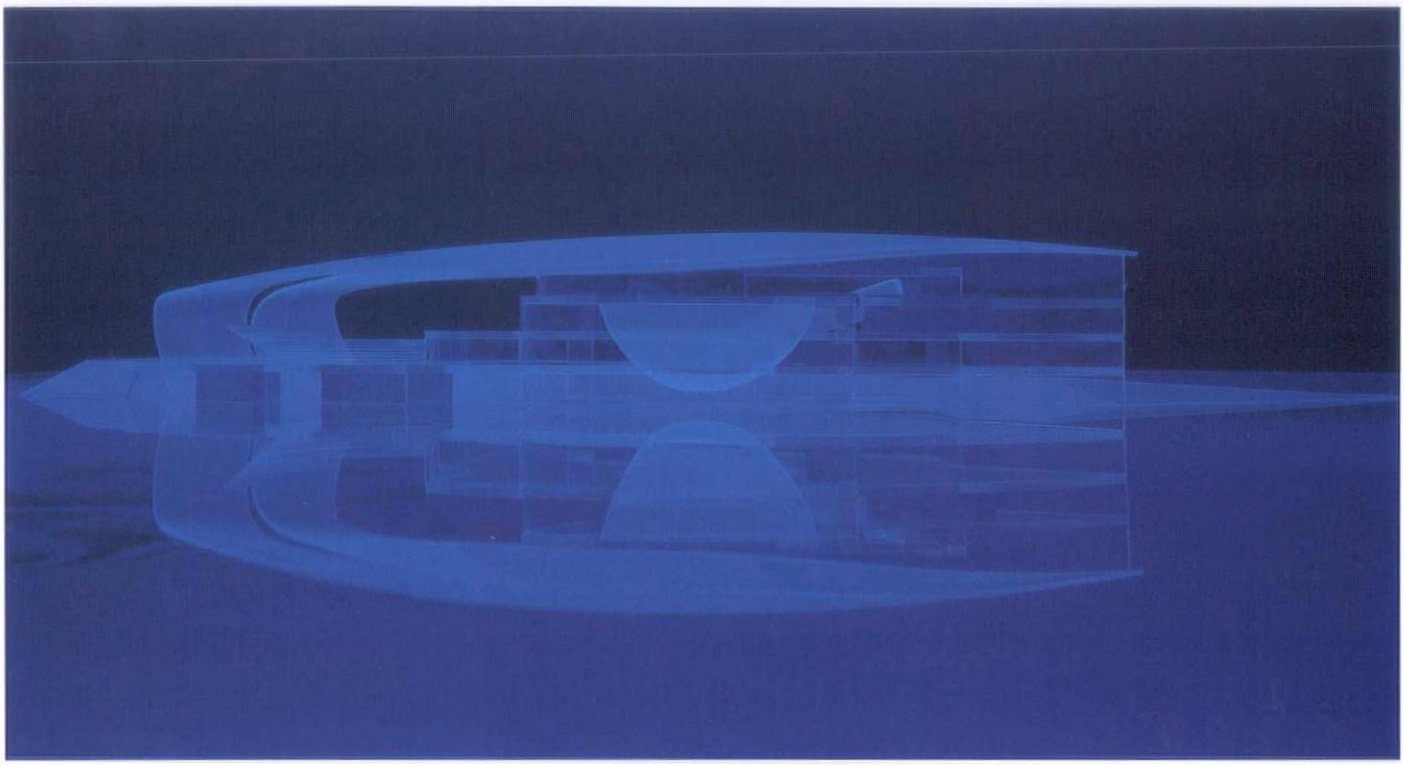
地階平面図　S＝1:200

遠藤政樹　Masaki Endo
1963年　東京都生まれ
1989年　東京理科大学建築学科大学院修了
1989-94年　難波和彦+界工作舎
1994年　EDH遠藤設計室設立
1997年　住宅建築賞、東京建築賞、東京都都市計画局長賞受賞

池田昌弘　Masahiro Ikeda
1964年　静岡県生まれ
1989年　名古屋大学建築学科大学院修了
1989-91年　木村俊彦構造設計事務所
1991-94年　佐々木睦朗構造計画研究所
1994年　池田昌弘建築研究所設立

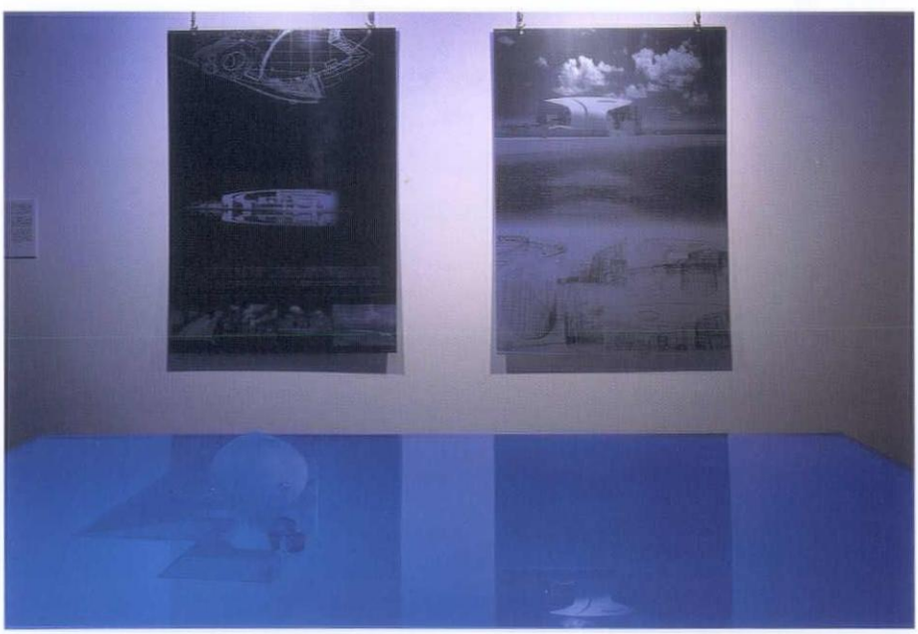
岡村和典+石井米二郎+清水里司／日本設計九州支社

下関市海洋環境・自然科学体験施設（仮称）



共同設計者名：蜷川利彦（構造担当）、大庭正俊（電気設備担当）、竹部友久（機械設備担当）
協力：種生明徳（CG）、NANOプランニング（模型）、松本和生（模型写真）、山田清、幸松新二、吉田広自、迫奈律子、圓尾直之（製図協力）

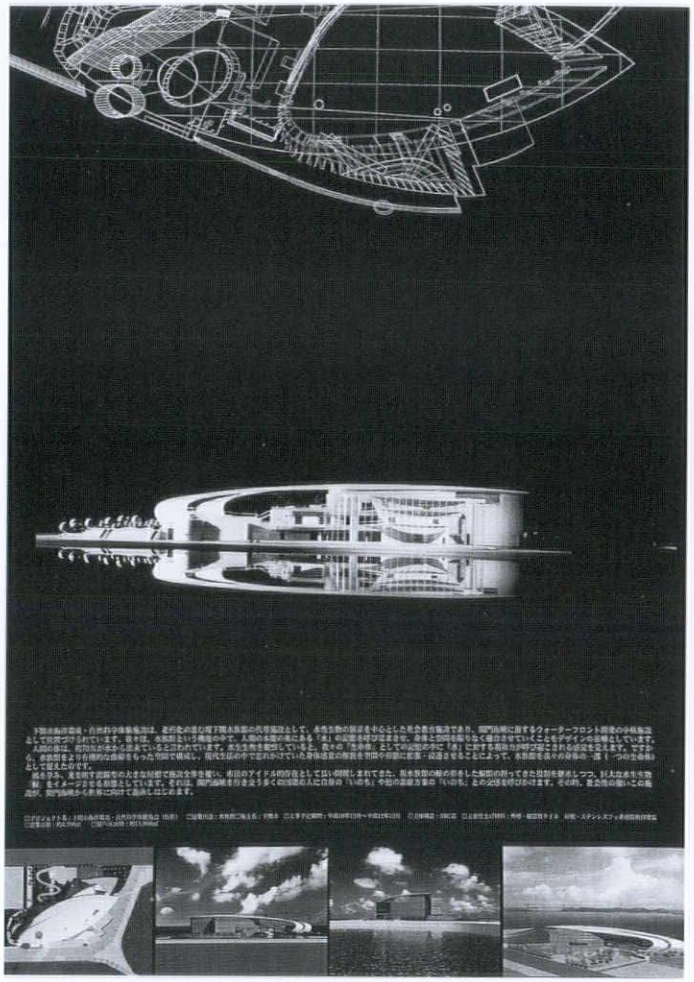
用途：水族館
所在地：山口県下関市あるかぽーと地内
主体構造：SRC造
主要仕上材：外部　外壁：磁器質タイル　屋根：ステンレスフッ素脂焼付塗装
敷地面積：14,000m²
建築面積：約4,700m²
延床面積：約11,900m²
工事予定期間：1998年12月～2000年12月

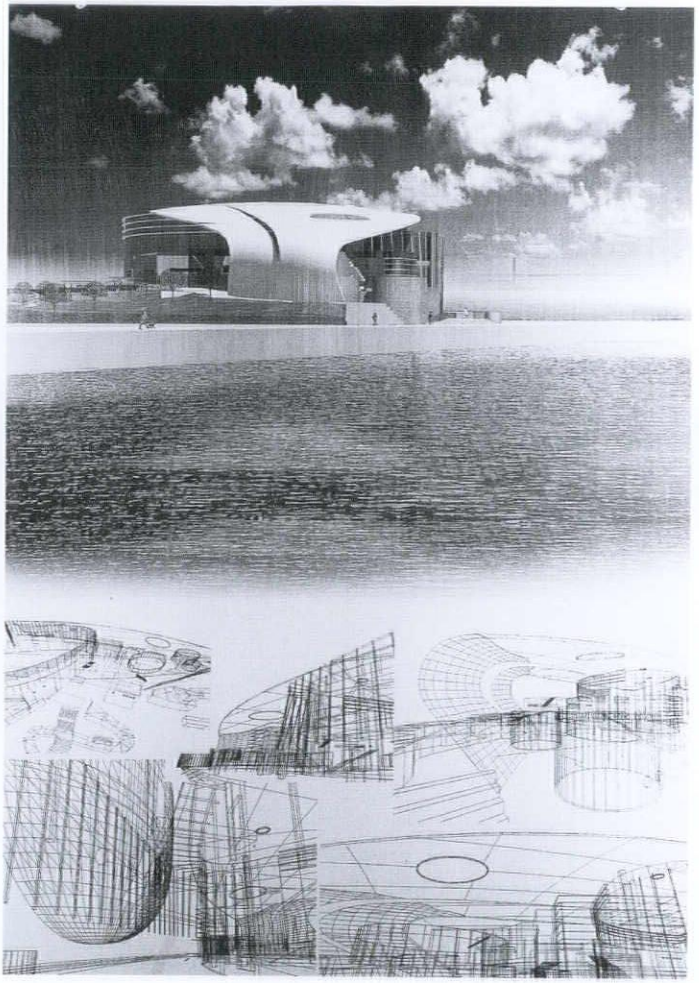


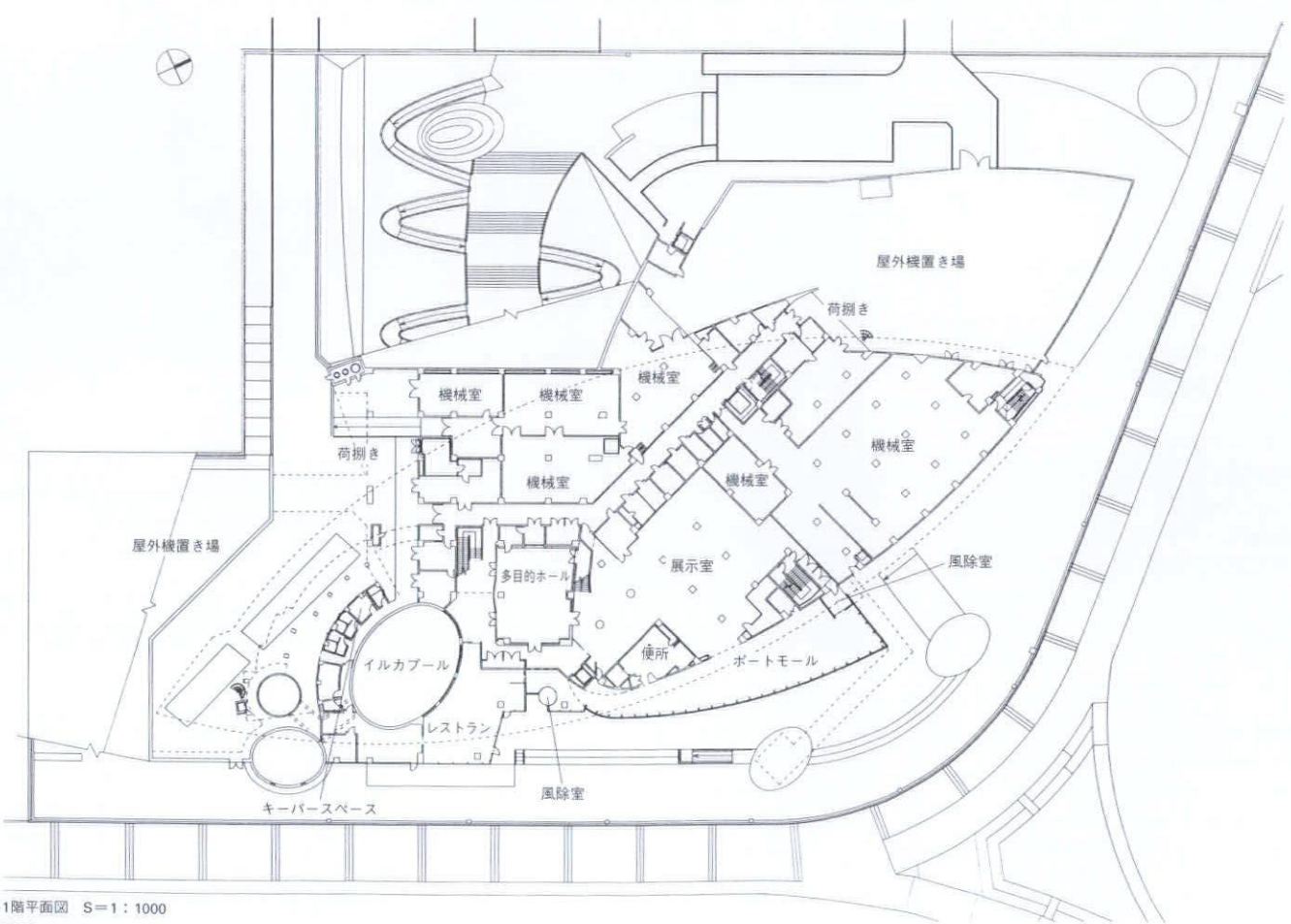
岡村和典　Kazunori Okamura
1949年　山口県生まれ
1975年　九州大学工学部建築学科卒業
1975-79年　山口県土木建築部建築課、住宅課
1979-80年　東京大学生産技術研究所原研究室
1979-82年　アトリエ・ファイ建築研究所
1982年　日本設計

石井米二郎　Yonejiro Ishii
1963年　広島県生まれ
1985年　九州産業大学大学工学部建築学科卒業
1987年　九州産業大学大学院工学研究科修士課程修了
1992年　日本設計

清水里司　Satoshi Shimizu
1964年　広島県生まれ
1987年　早稲田大学理工学部建築学科卒業
1989年　早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了
1989年　日本設計





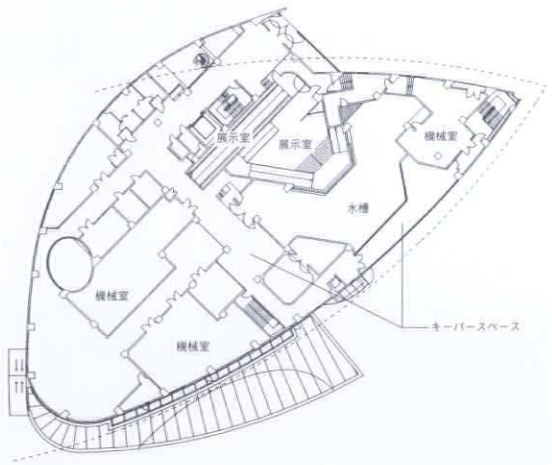


1階平面図　S＝1：1000

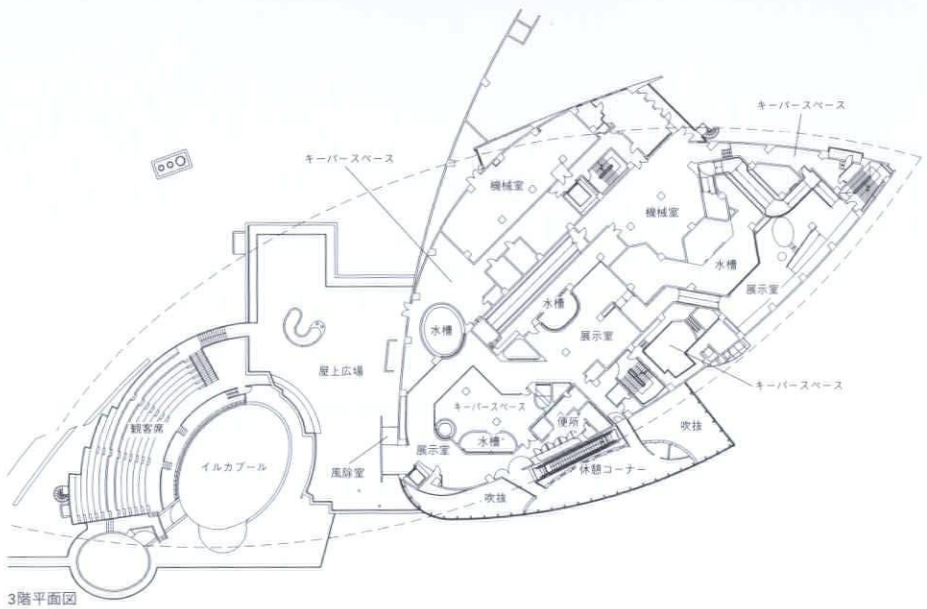
下関市海洋環境・自然科学体験学習施設は、老朽化の進む現下関水族館の代替施設として、水性生物の展示を中心とした社会教育施設であり、関門海峡に面するウォーターフロント開発の中核施設として位置づけられています。我々は、水族館という機能の中で、人間の本能の奥にある「水」の記憶を呼び覚まさせ、身体と空間を限りなく融合させてゆくことをデザインの基軸としています。

人間の体は、約70%が水から出来ていると言われています。水生生物を観察していると、我々の「生命体」としての記憶の中に「水」に対する親和力が呼び起こされる感覚を覚えます。ですから、水族館をより有機的な曲線を持った空間で構成し、現代生活の中で忘れかけていた身体感覚の解放を空間や形態に拡張・浸透させることによって、水族館を我々の身体の一部（ひとつの生命体）として捉えたのです。

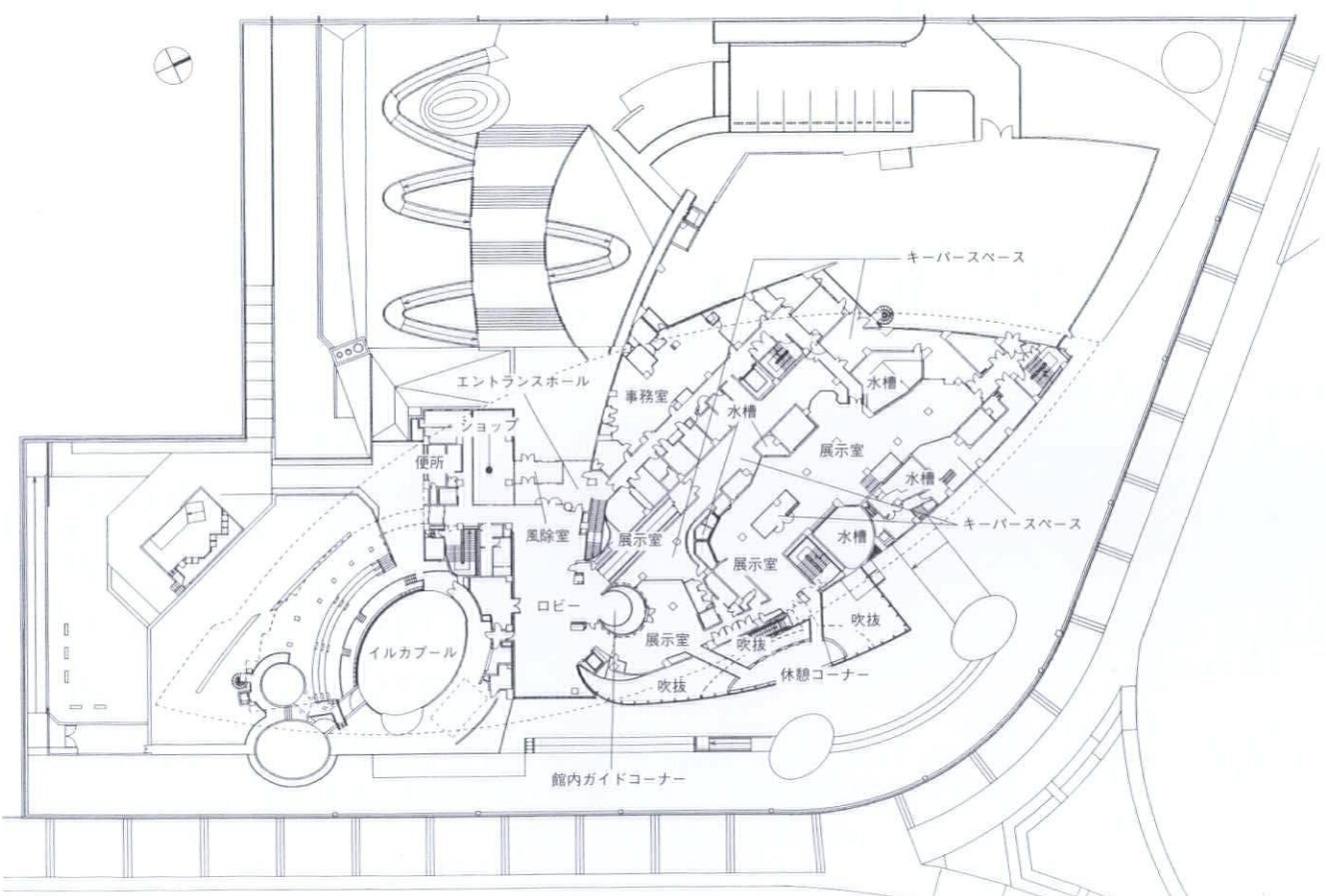
風を孕み、光を映す流線型の大きな屋根で施設全体を覆い、市民のアイドル的存在として長い間親しまれてきた、現水族館の鯨の形をした鯨館の担ってきた役割を継承しつつ、巨大な水生生物「鯨」をイメージさせる形態としています。それは、関門海峡を行き交う多くの国籍の人に自身の「いのち」や他の森羅万象の「いのち」との交感を呼びかけます。その時、社会性の強いこの施設が、関門海峡から世界に向けて遊泳し始めます。



4階平面図



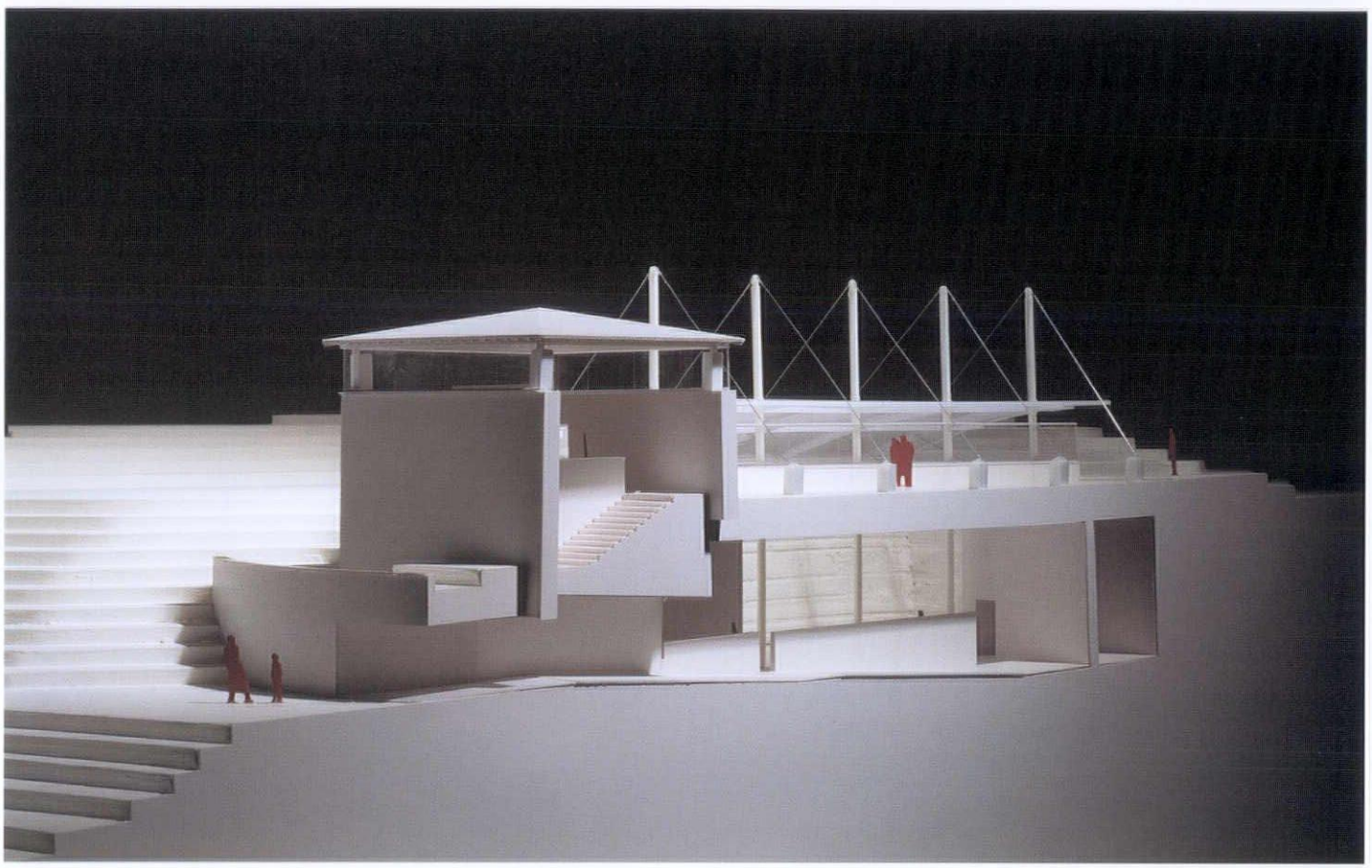
3階平面図



2階平面図　S＝1：1000

廣谷純弘+石田有作／建築研究所アーキヴィジョン

（仮称）星野遺跡トレンチ見学施設



栃木県星野町では、1960年より発掘調査が行われ、調査トレンチのひとつから最古のもので7万年以前の生活の様子を伝える11層の地層が確認された。

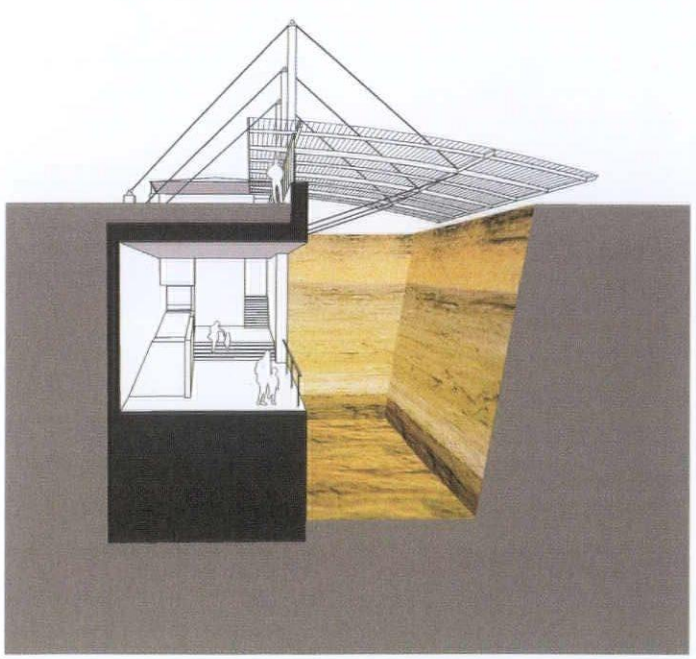
現在、このトレンチは風化が進み、断面層状の確認もできない状態である。このたび、周辺の公園整備の一環として、このトレンチを発掘当時の姿に戻し、地層を保存しながら見学できる施設を計画することになった。

敷地は緑豊かな山麓で、東西でふたつの道路に面し、西側道路と敷地には約5mのレベル差がある。周辺環境への配慮から施設の大半を地下に埋め、道路と敷地のレベル差を利用して西側からトンネル状の通路によるアプローチを計画した。これにより来館者は緩やかなスロープを通り、深さ10mの地層面を−6.5mレベルから見学することができる。

この地下空間には、トレンチの風化を防ぐために架けられた半透明のテント膜を通して柔らかな光が入るよう計画している。

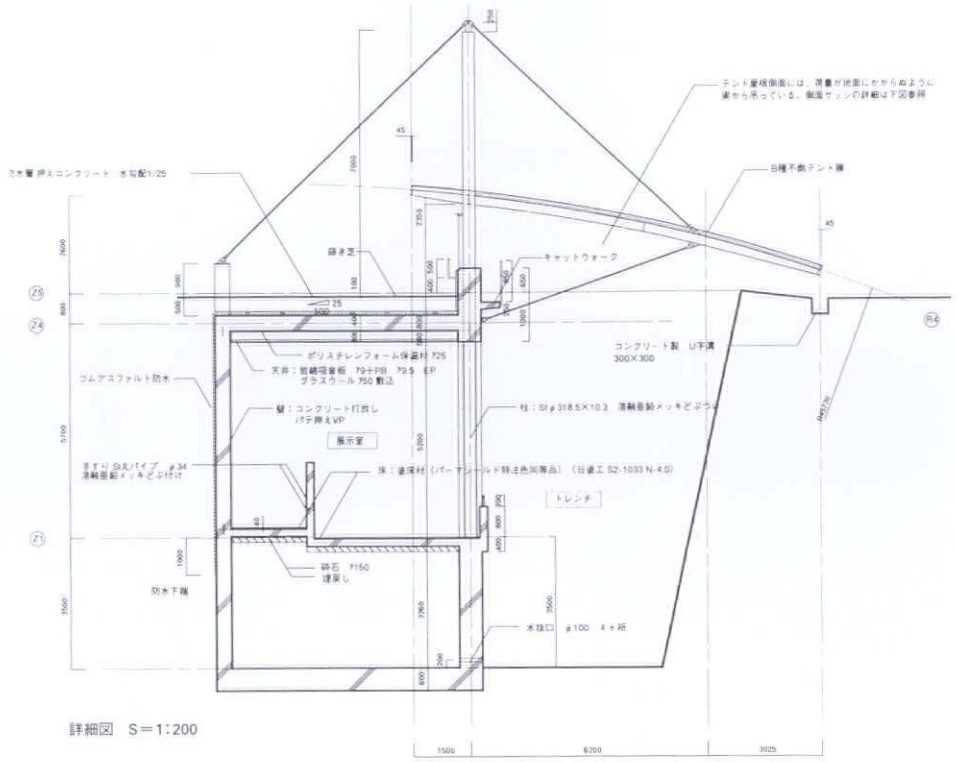
トレンチの見学を終えた来館者は、階段室上部のトップサイドライトの光に包まれ、地層のはぎ取り見本を見ながら地上に導かれる。さらに、地上において今一度、視点を変えてトレンチを見学できるよう開口部が用意されている。

また、テント屋根の構造については、トレンチ周辺の地盤面に加重が加わり、地層を傷めることのないよう、RC造の躯体からの吊り構造とした。

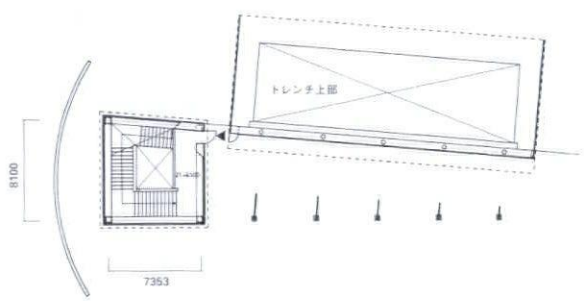


共同設計者名：西尾啓一／構造計画研究所、二瓶知之／テクノシステム　21(機械設備)、井上利明／テクノシステム　21(電気設備)、高野祐之／高野デザインプロデュース(展示)

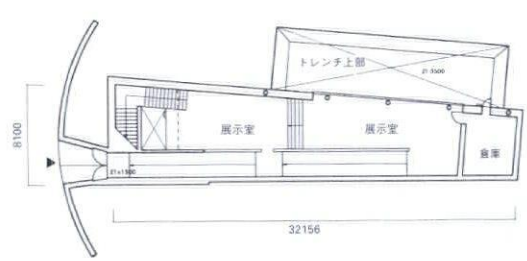
用途：見学施設
所在地：栃木県栃木市星野町
主体構造：RC造（一部S造）
主要仕上材：外部　外壁：杉縦羽目板張り、キシラデコール染色仕上げ・コンクリート打ち放し、ライムコート塗　屋根：ガルバリウム鋼板平葺き　テント：不燃テフロン膜
内部　天井：PB厚9mm、岩面吸音板厚9mmEP　壁：プレミックスモルタル、AEP　床：モルタル金ごて押え、浸透性防水染色仕上
敷地面積：1,145.83m²
建築面積：264.52m²
延床面積：255.31m²
工事予定期間：1998年7月～99年3月



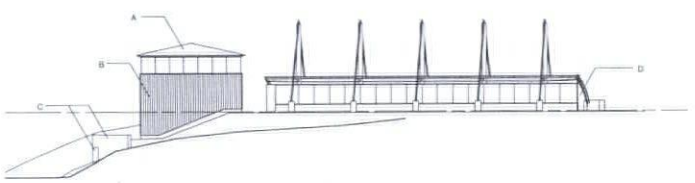
詳細図　S＝1:200

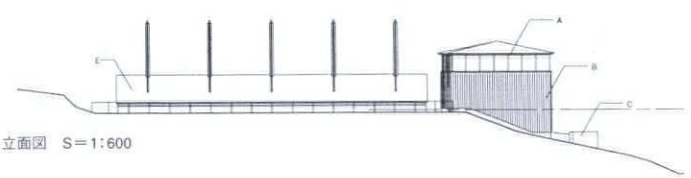


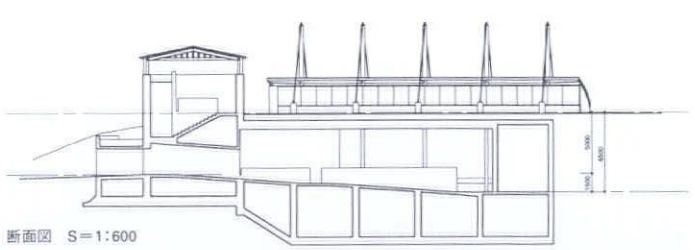
2階平面図

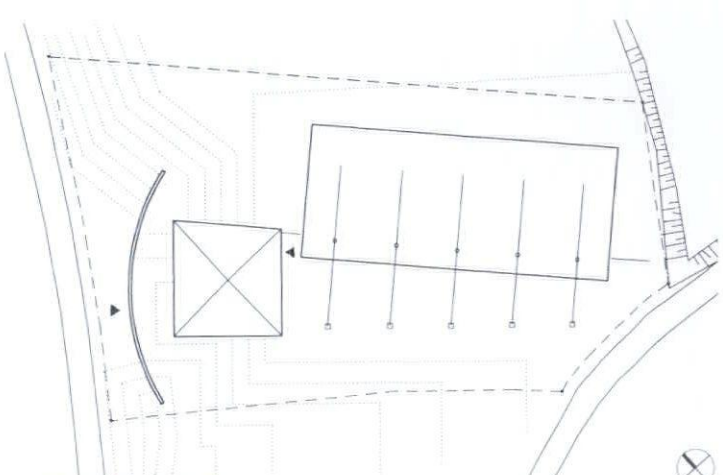


1階平面図


立面図


立面図　S＝1:600


断面図　S＝1:600

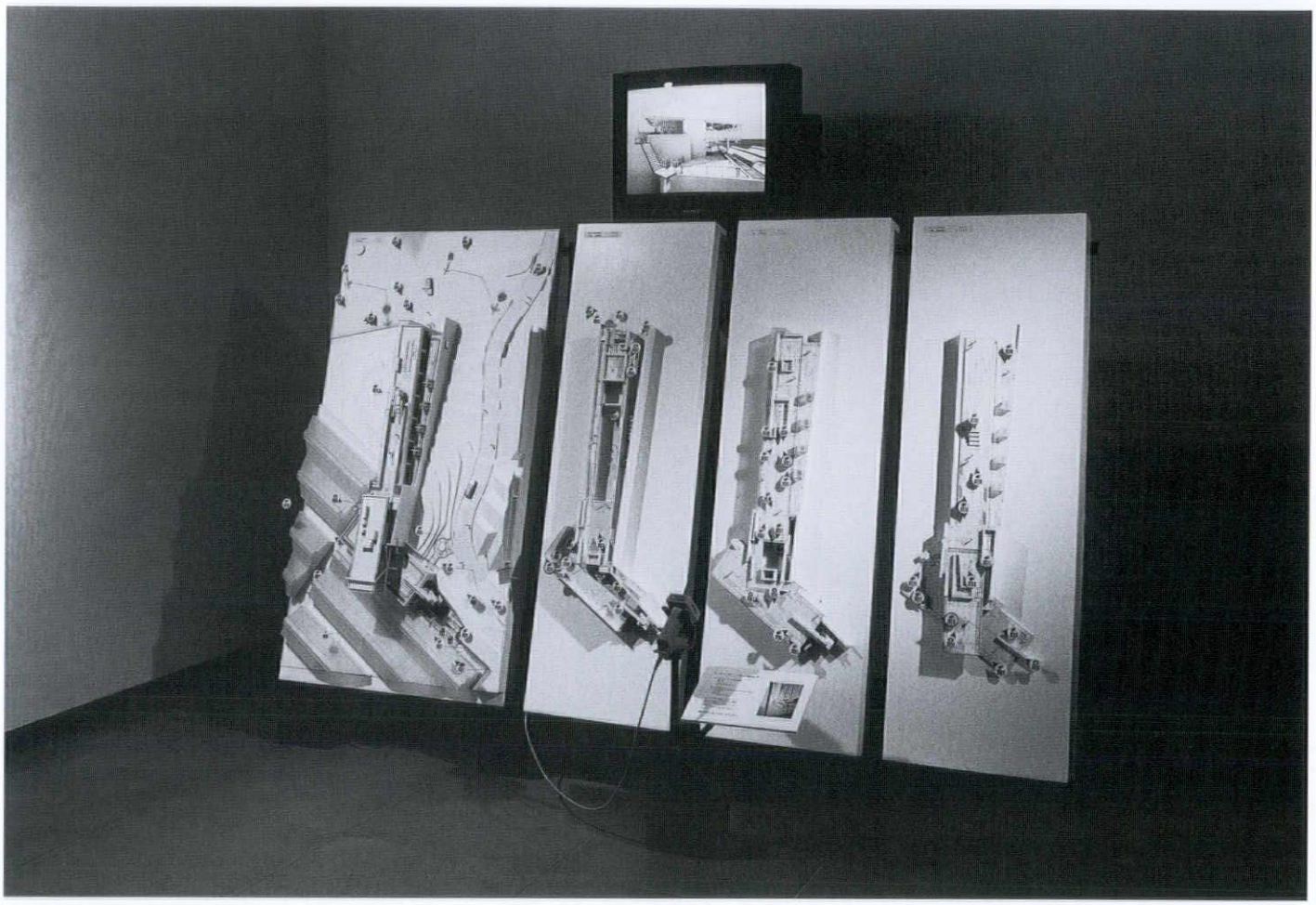

地下1階平面図　S＝1:600

廣谷純弘　Yoshihiro Hirotani
1956年　和歌山県生まれ
1980年　東京理科大学工学部建築学科卒業
　　建築研究所アーキヴィジョン入社
1995年-　同事務所副所長

石田有作　Yusaku Ishida
1969年　東京都生まれ
1994年　武蔵工業大学大学院修士課程修了
1995年　建築研究所アーキヴィジョン入社

長倉威彦

具志川ランセンター農産物展示加工場



農業地帯の中にある敷地を最初に訪れた時の第一印象は、銀色に輝くガラスハウスの屋根であった。施主は、沖縄の強い日差しの下、このガラスハウスの中で蘭の花を中心に栽培する生産者である。

この風景は施主側にとっては日常化してしまっているらしかったが、私は、この素晴しいコンテクストをもう一度再発見してもらえるような場所を作りたいと、まず考えた。その結果、鉄とガラスの軽構造の展望ラウンジを、既存のガラスハウスの海の上に浮かせたような計画が生まれることとなった。

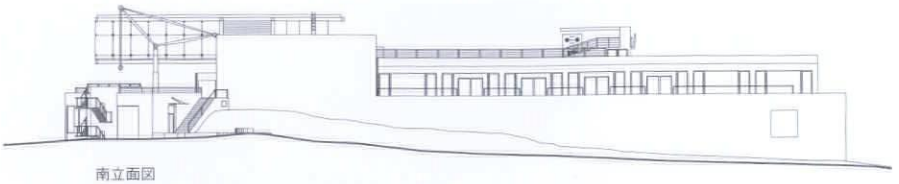
生産物を加工するバイオテクノロジーの工場という初期のプログラムは、設計進行に伴い、特に観光客に生産加工の現場をすべて見せられるようにしようという話に発展した。加工場、事務室、展示場など、スケール、採光、ディテールまで、まったく異なる諸空間の文節が要求されたが、逆にこれらを階段、ブリッジ、テラスなどの要素でなるべく開放的に結ぶことで、回遊しながらさまざまな建築空間が展開するさまを楽しんでもらえるよう心掛けた。

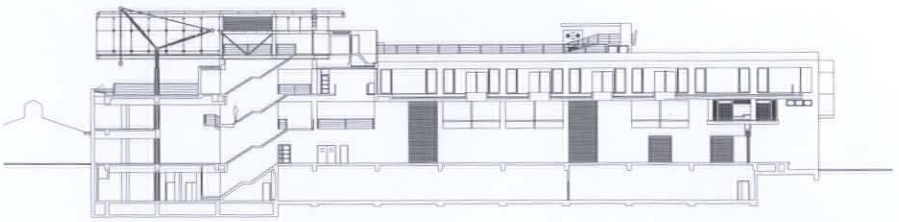
これらのイメージの忠実な実現のため、設計には最先端のコンピュータ・グラフィックス・テクノロジーを使い、ディテールと材質と採光まで含めて徹底的なシミュレーションを行った。展示したパースは、入札時に建設会社に配布した百余枚の中の一部で、現在、現場での建設作業においても、模型にまさる強力な手助けとなっている。

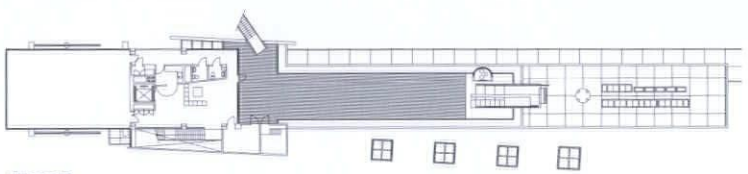
長倉威彦　Takehiko Nagakura
1985年　東京大学建築学科卒業
1987年　ハーバード大学建築学修士
1990年　長倉計算空間スタジオ設立
1993年　ハーバード大学インストラクター
1994年　マサチューセッツ工科大学助教授(現職)
1996年　ハーバード大学博士(Ph. D. in Architecture)

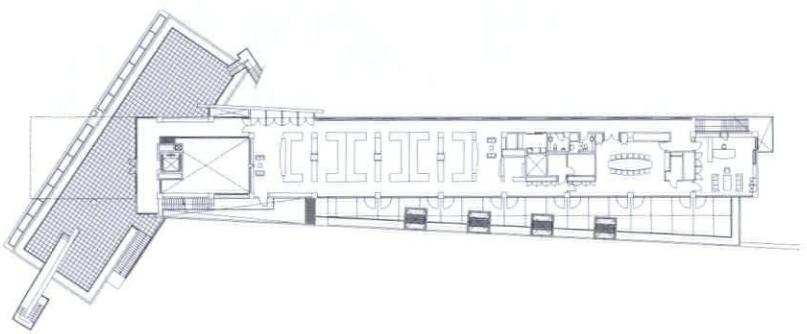
共同設計者名：渡久山剛(株式会社国建建築設計部)、東江 直司(株式会社国建構造設計部)、古川 洋(安芸構造計画事務所)、Haldane Liew(Liew Design and Graphics)
協力：馬場信介

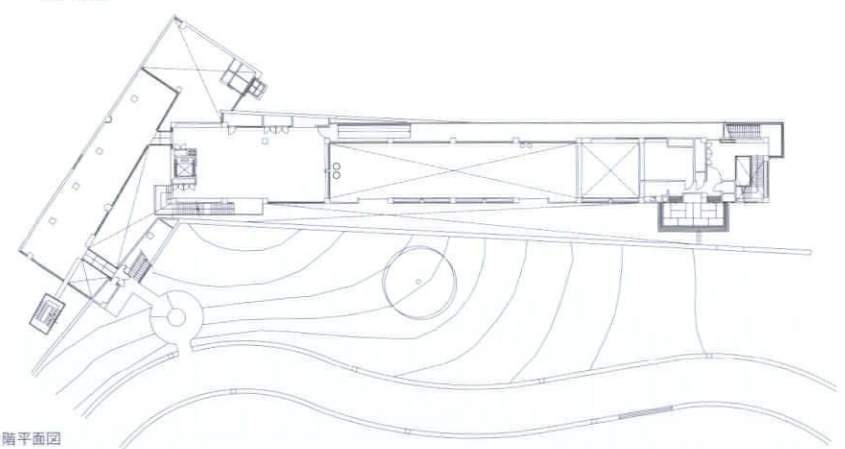
用途：加工場、展示場、事務所
所在地：沖縄県具志川市
主体構造：RC造(一部S造)
主要仕上材：RC打ち放し
敷地面積：2,531.06m²
建築面積：1,248.07m²
延床面積：3,776.50m²
工事予定期間：1998年5月～99年3月


南立面図

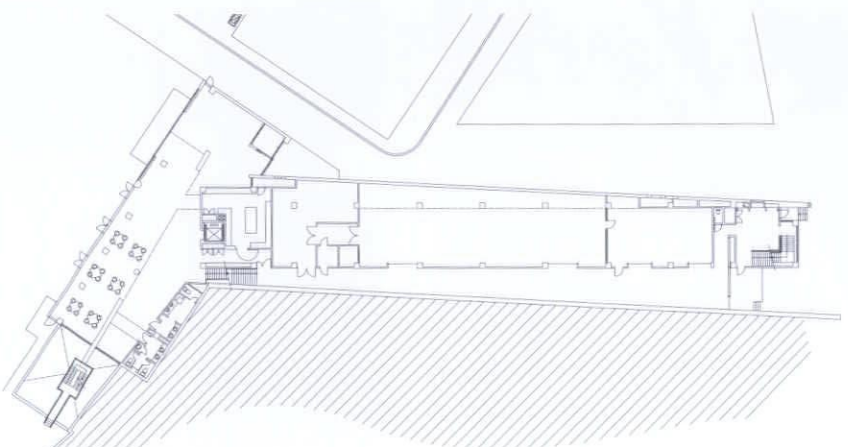

東西断面図

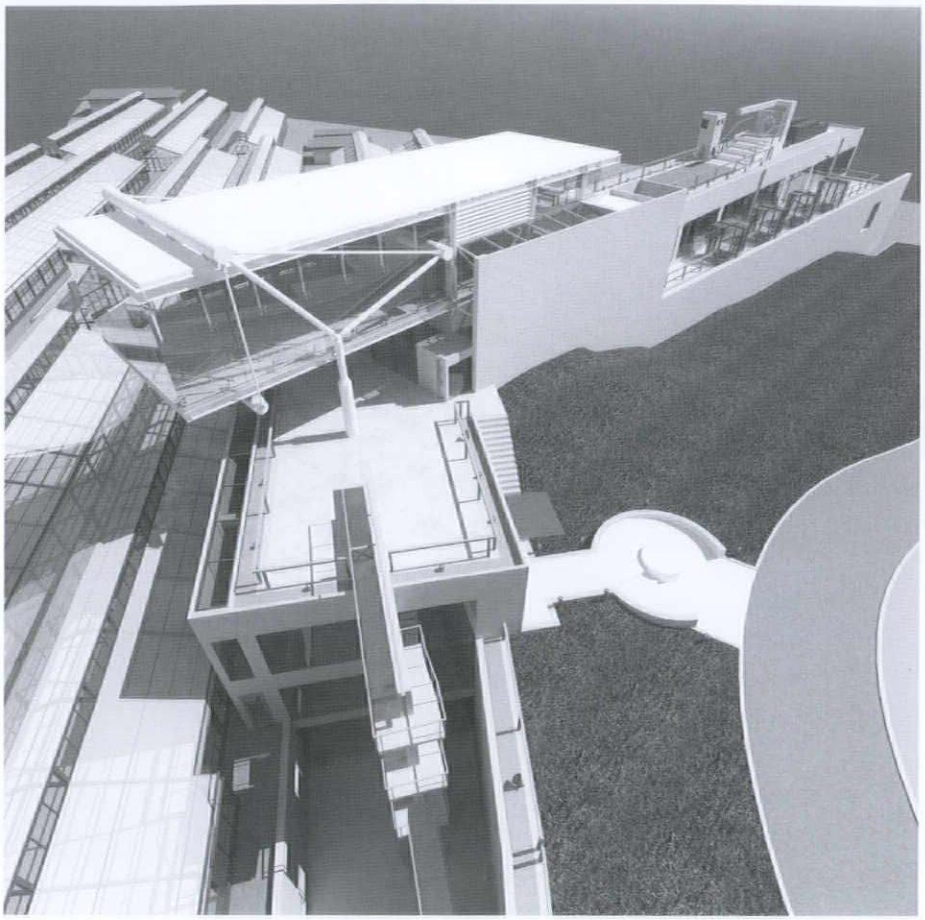

4階平面図


3階平面図

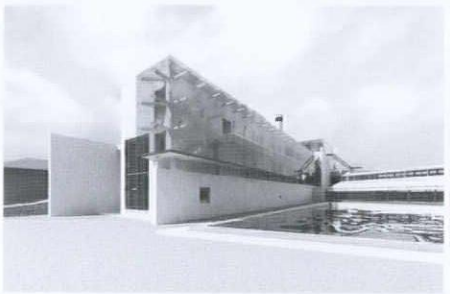

2階平面図



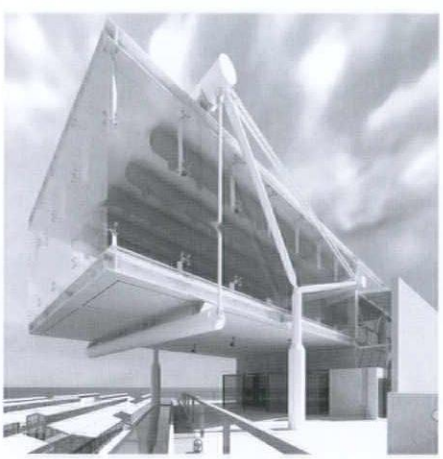

1階平面図　S＝1:1000



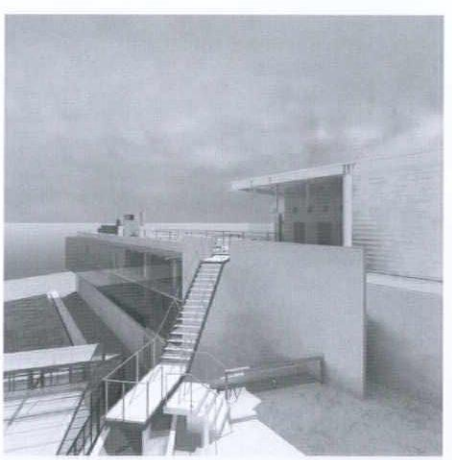


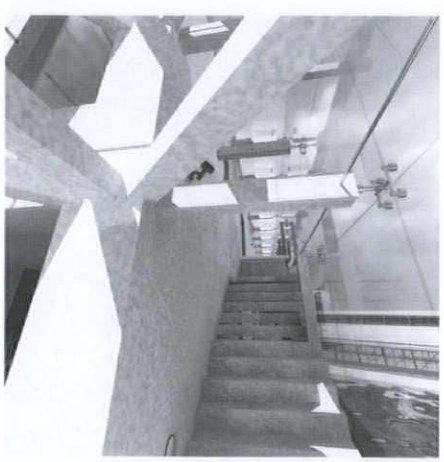




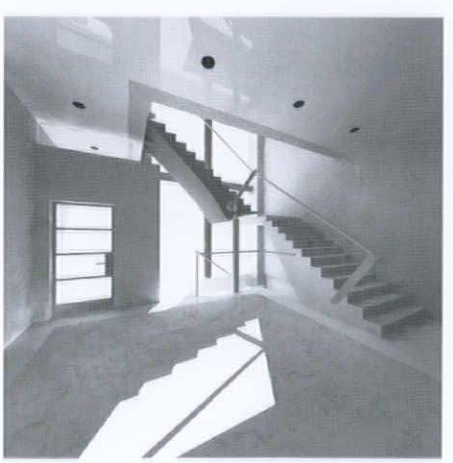






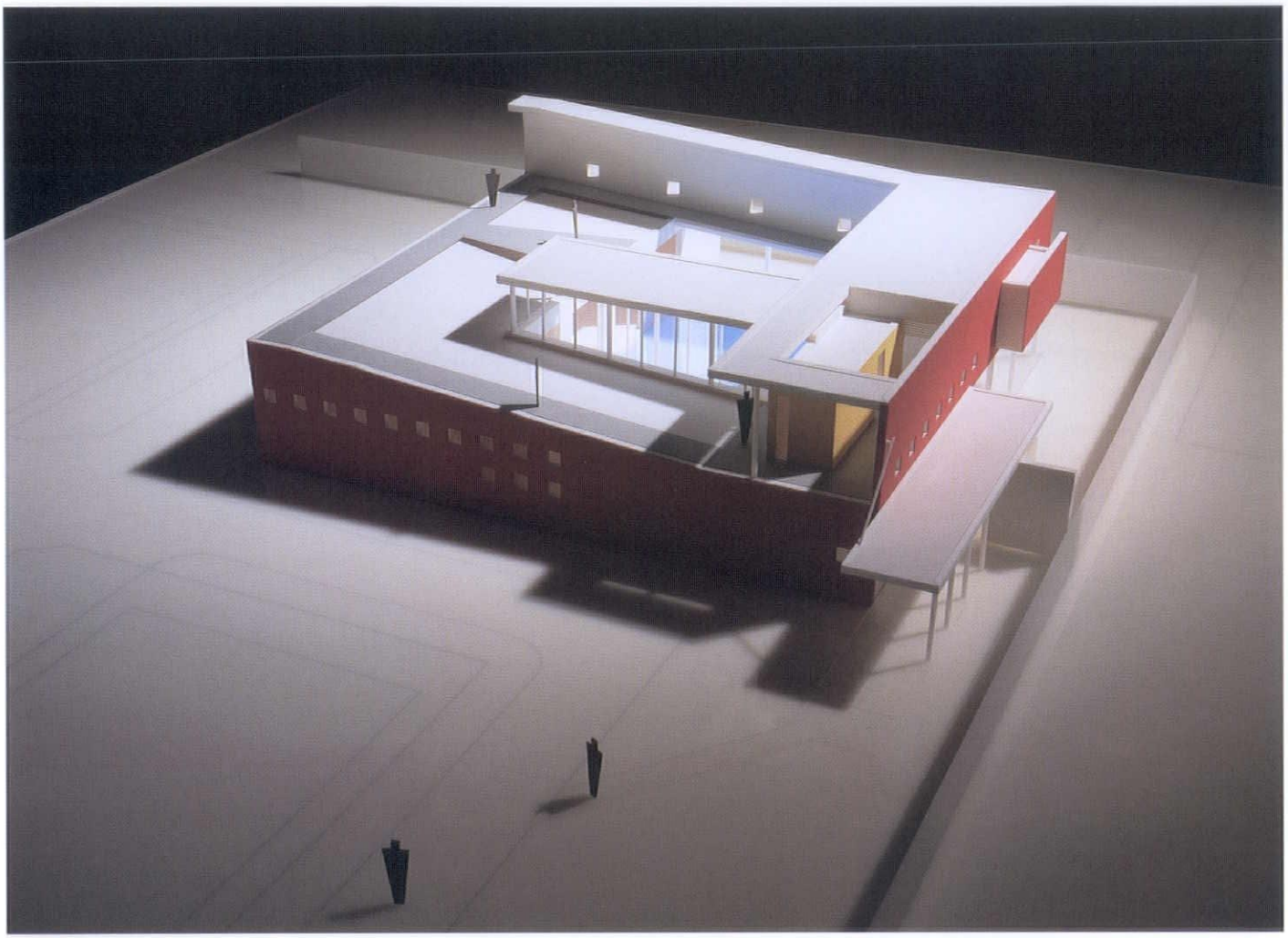


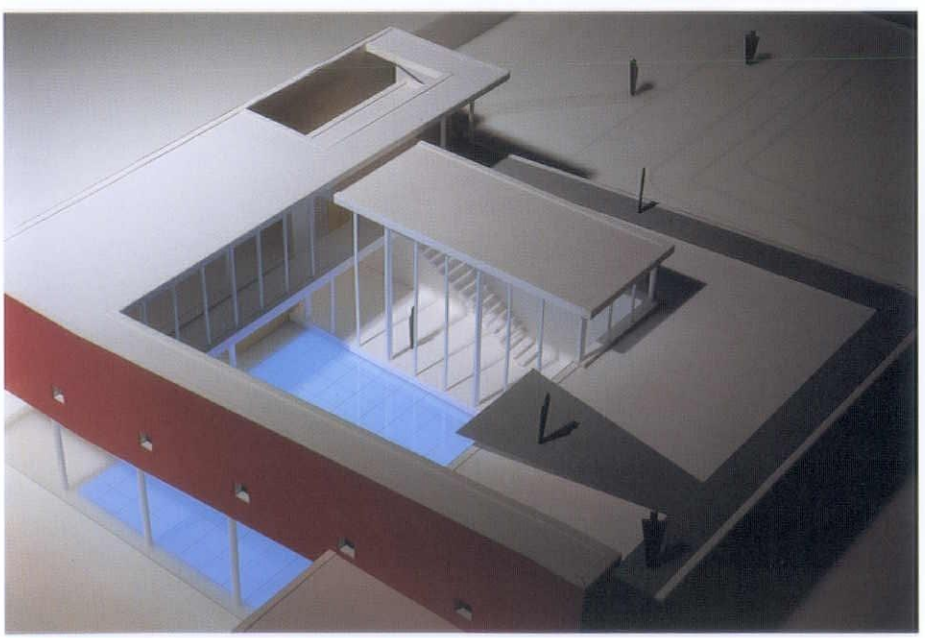


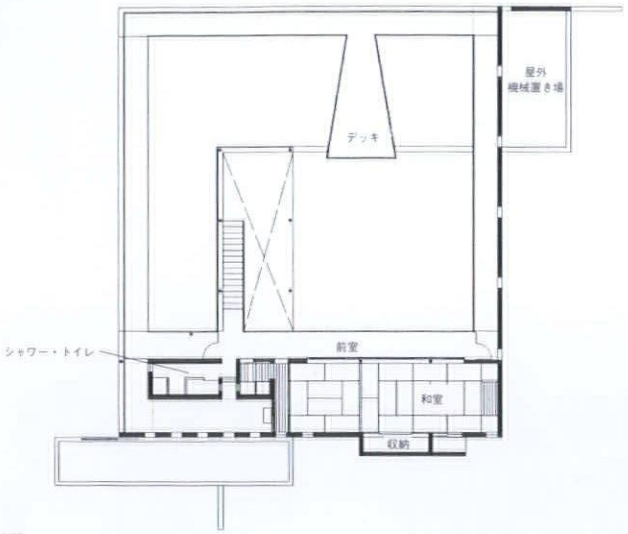


三上晴久+三上建築事務所

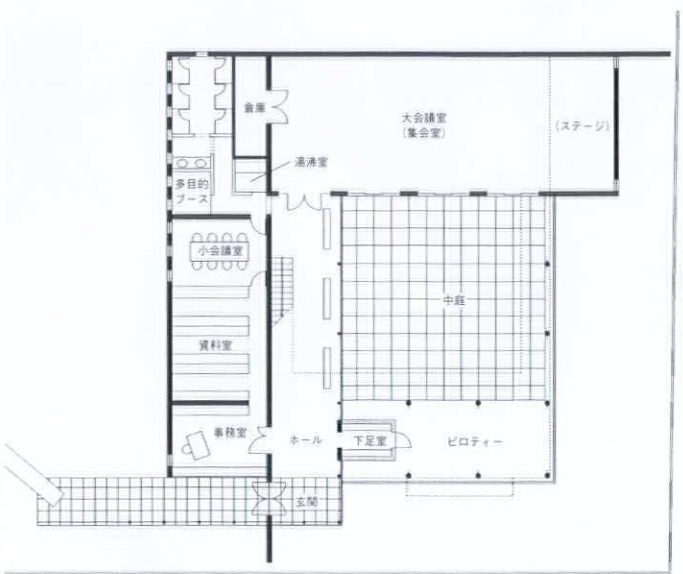
SH　Alumnae House



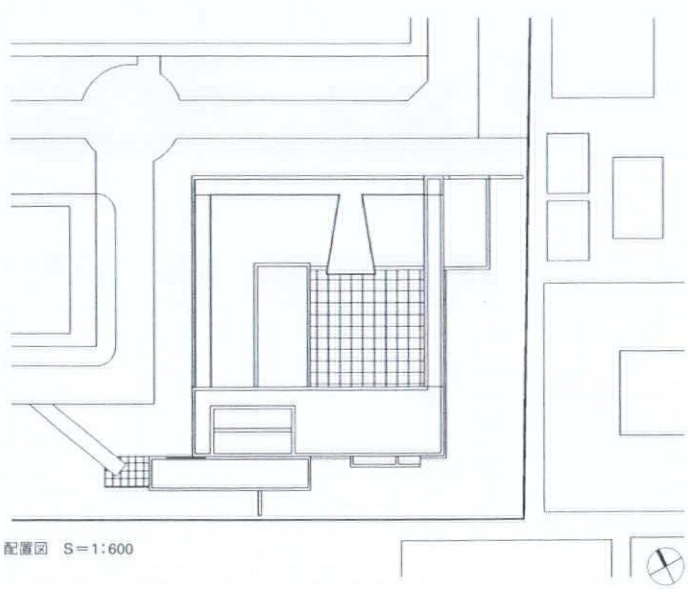




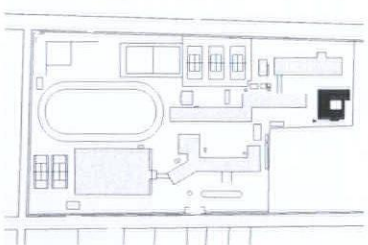
2階平面図



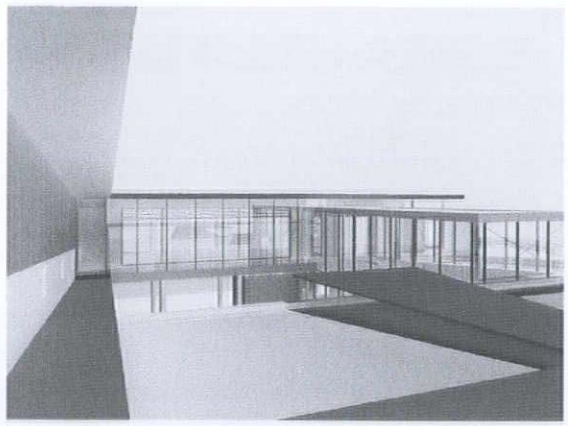
1階平面図　S＝1:400

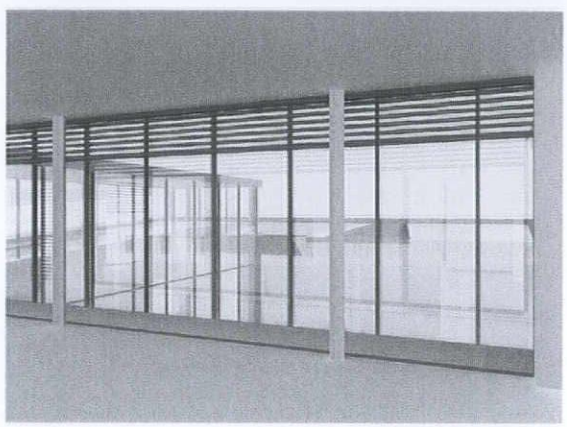


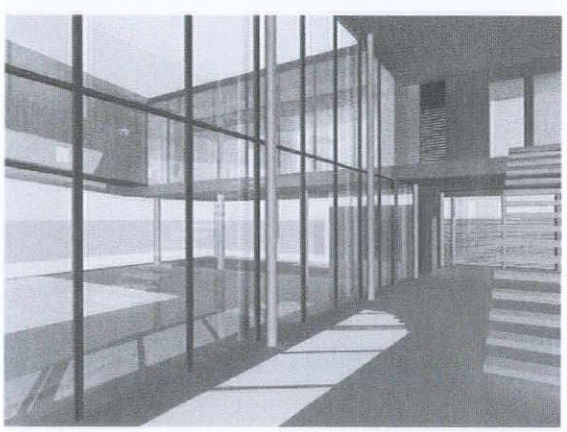
配置図　S＝1:600



学内配置図







三上晴久　Haruhisa Mikami
1954年　茨城県生まれ
1979年　東京大学卒業
1979-85年　内井昭蔵建築設計事務所
1987年　東京大学大学院修士課程修了
1987-89年　マイケル・グレイブス・アーキテクト
1989年　三上建築事務所・東京開設
1990年　神戸芸術工科大学専任講師
1993年-　神戸芸術工科大学助教授

県立女子高等学校の同窓会館の計画である。敷地として示された場所は、キャンパス内の東南の一角であり、高さ2mのコンクリートブロック塀越しの隣地の風景には、喧噪を感じた。

キャンパスと空間的な関係を持ちながら、ここに同窓生のための固有の場をつくり出すことが、この計画における設計の中心テーマである。

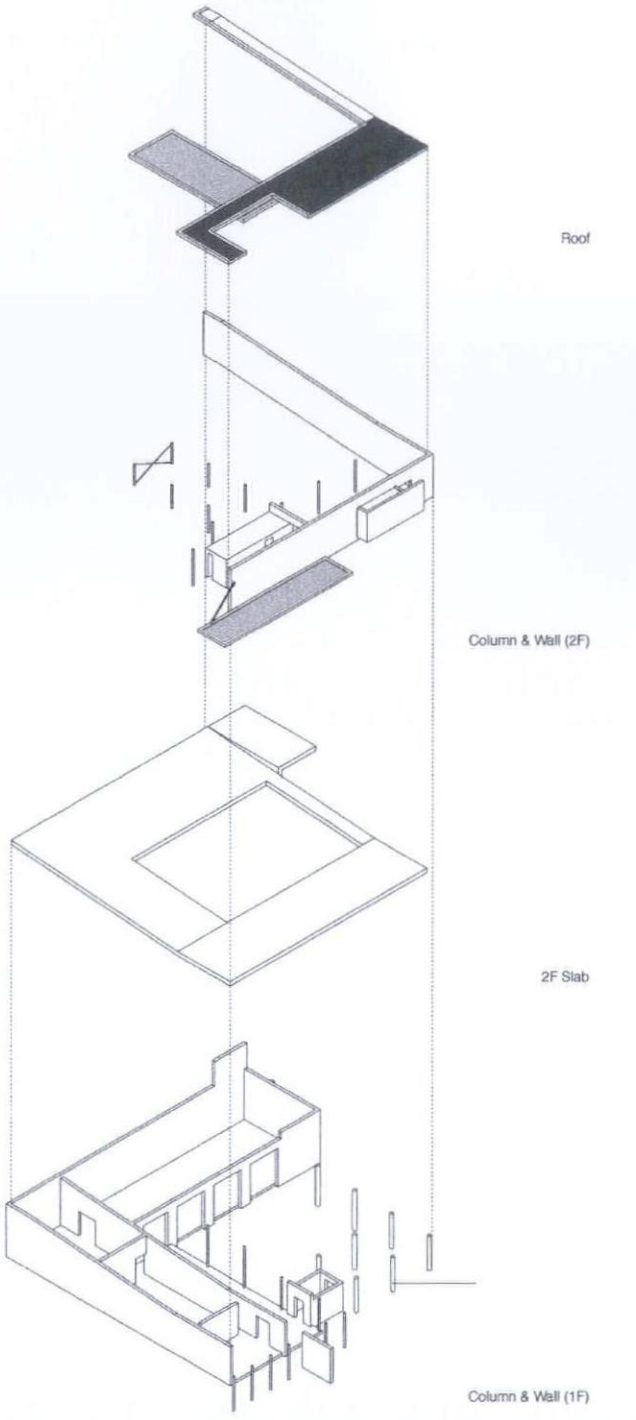
固有の場をつくるためには、隣地の気配を消したいと思ったが、そのために、たとえば、隣地に沿って植栽を並べるようなことを考えるのではなく、ここでは、隣地の気配を消そうとすることが、この建物の個性や強さに直接つながるものでありたいと考えた。

1階には、南と東（隣地側）に開いたL型空間を配し、2階には、ピロティで支持された北と西（キャンパス側）に開いたL型空間を配した。中庭を介してそれらを組み合わせることによって全体を構成したが、これによって、1階の内部空間領域は、中庭・ピロティ越しにコンクリートブロック塀まで広がるとともに、隣地に沿った2階部分のL型ヴォリュームが、隣地の喧噪を消し去ることを意図している。

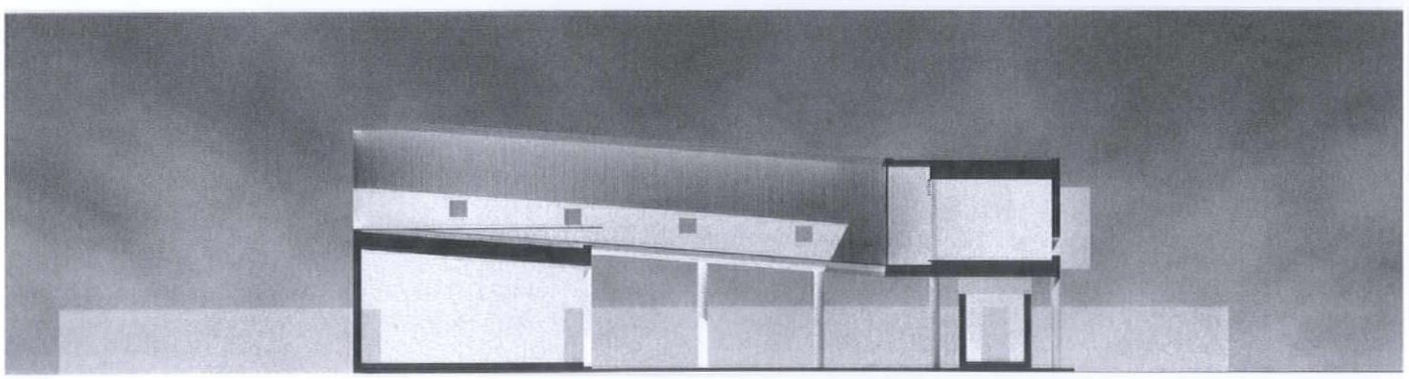
また、1階大会議室の内部空間を豊かなものにするために、2階床スラブは、南から北へ向かって1.2m持ち上げられている。

共同設計者名：石井浩光、高山秀樹（三上建築事務所）
金箱温春（金箱構造設計事務所）
協力：模型制作：茂呂大輔（東洋大学大学院）、
長島静香（東京大学）

用途：集会施設（同窓会館）
所在地：茨城県水戸市大町
主体構造：RC造およびS造
主要仕上材：外部　屋根：シート防水および塗膜防水　外壁：コンクリート下地処理の上弾性複層材
中庭：自然石張り
内部　床：木製フローリング一部畳敷き
壁・天井：プラスターボードの上ペイント塗
敷地面積：892.56m²
建築面積：387.05m²
延床面積：393.28m²
工事予定期間：1999年7月～2000年7月



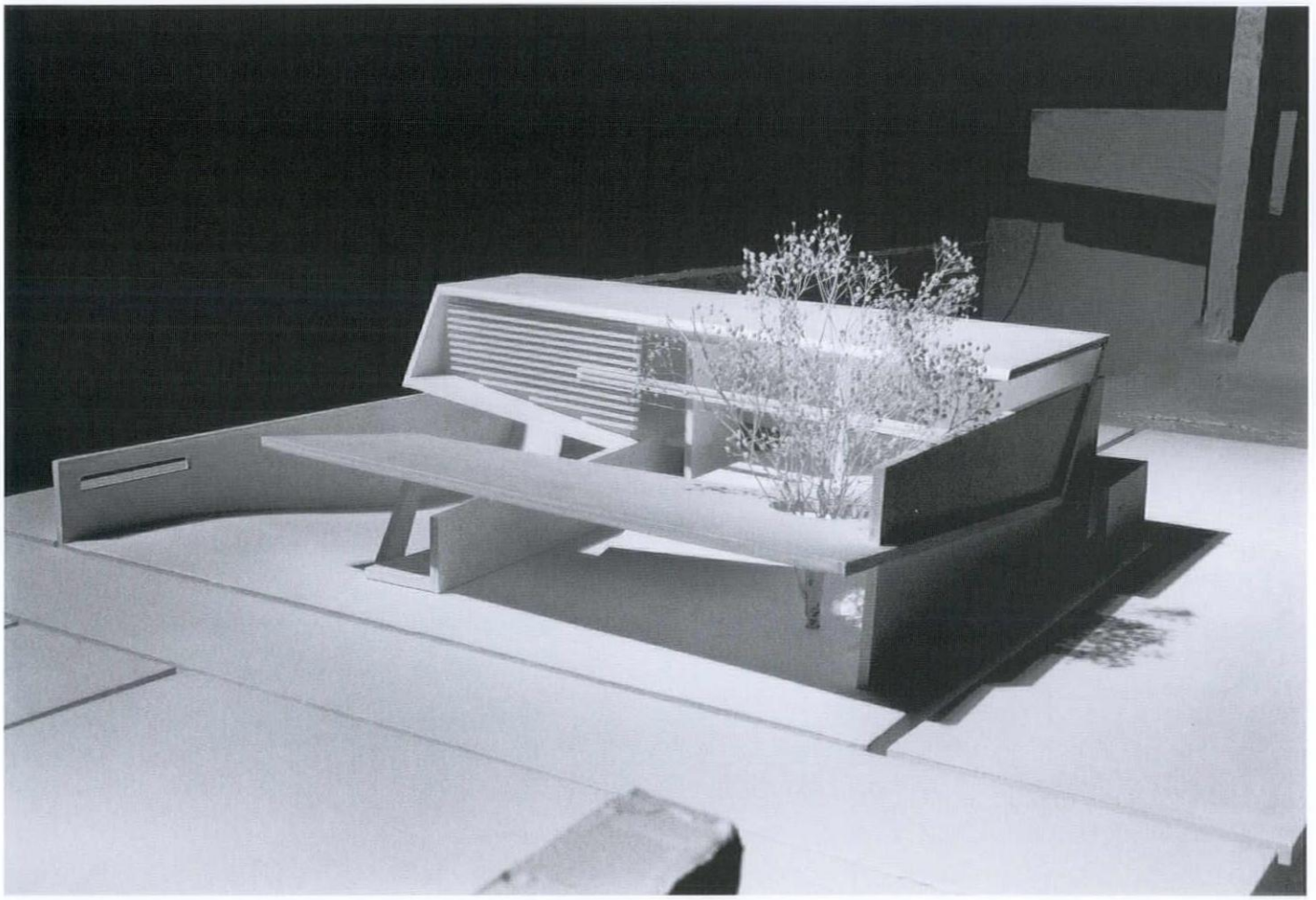
Hybrid Structure

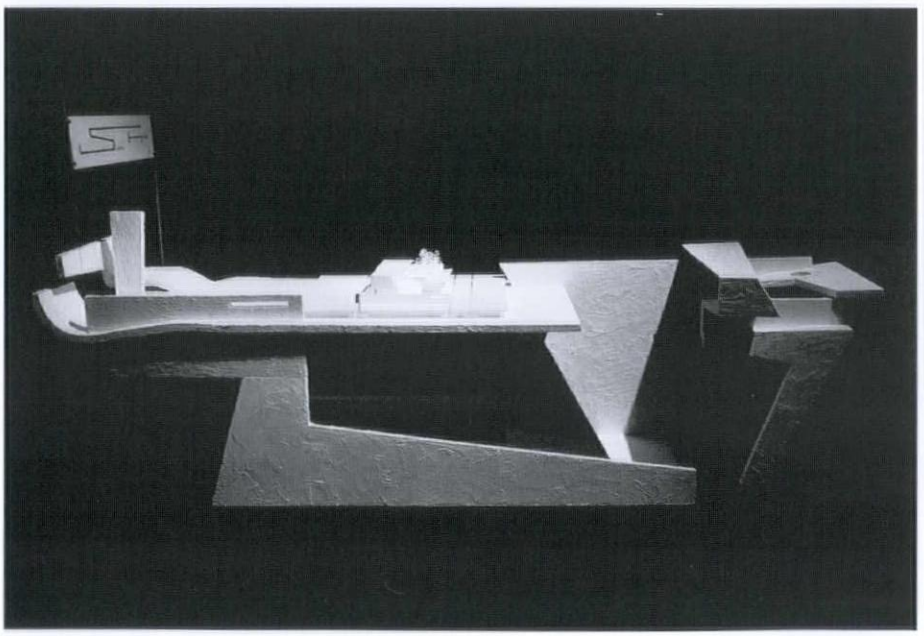


断面図

川嶋彦一郎

O邸——sister h



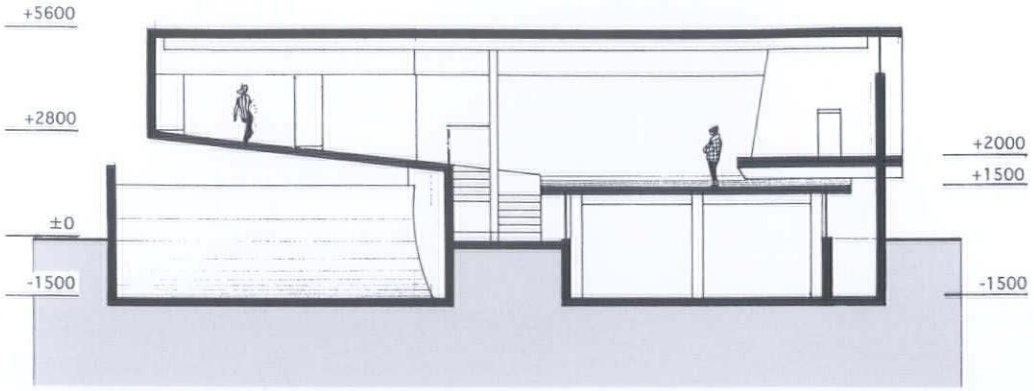


大規模開発の進む大宮駅西口、国道17号線沿いの貸し駐車場を含む、姉妹ふたりのための住宅である。

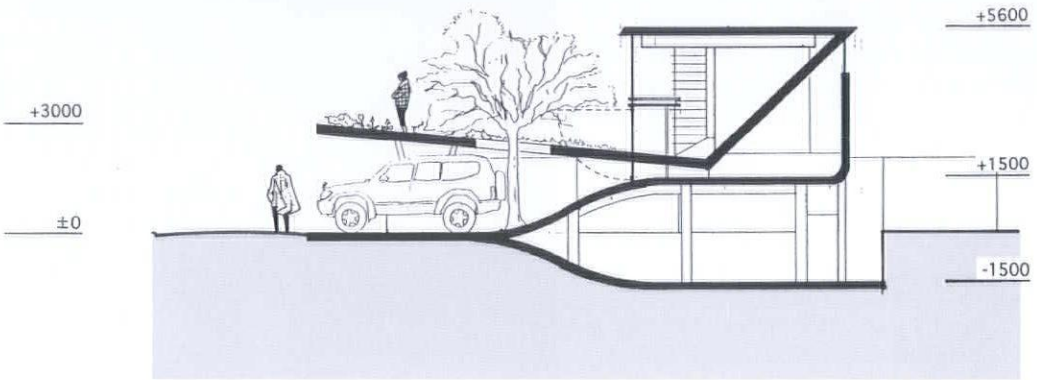
周辺は商業地に隣接しており、郊外から多くの車が大宮駅へとやってくるのに伴い、駐車場の需要がある。今回の計画では駐車台数を確保しながらも、建物全体を連続した形態に作り出すことにより、車に囲われているという感覚を少なくさせる空間づくりを心掛けた。

全体の構成としては、建物からなる図形の連続性と外構からなる地形の連続性のどちらも突出させることなく、互いを連続する偏移により融合させることにより、内・外、水平・垂直等の既成概念を狂わせ、要求された駐車場、姉妹の個室、リビング、倉庫、庭などをこの中へ配した。

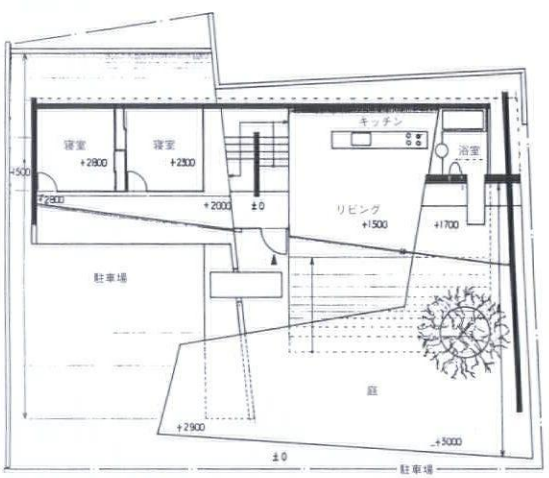
生活の中心となるリビングは、地面から1.5m緩やかに上り、そこから姉妹の個室、リビングへ貫入する少し傾いた庭をレベル差を利用し、視線の高さを変えることにより、パブリックとプライベートを分けている。



東西断面図　S＝1:200

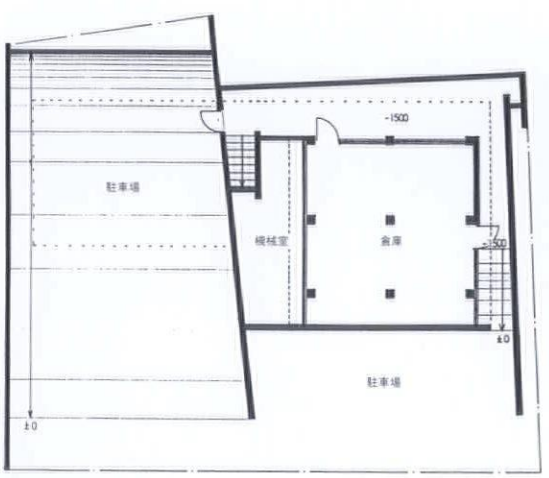


南北断面図　S＝1:200



±0～＋3000レベル平面図

用途：専用住宅
所在地：大宮市大成町
主体構造：RC造（一部S造）
主要仕上材：コンクリート打ち放しの上、モルタル補修ペイント
敷地面積：346.79m²
建築面積：94.26m²
延床面積：147.56m²
工事予定期間：1998年11月～99年8月



−1500～±0レベル平面図　S＝1:300

川嶋彦一郎　Hikoichiro Kawashima
1968年　東京都生まれ
1993年　群馬大学工学部建設工学科構造研究室卒業
1993年　團・青島建築設計事務所入所（現、團紀彦建築設計事務所）
1998年　川嶋彦一郎建築設計室設立

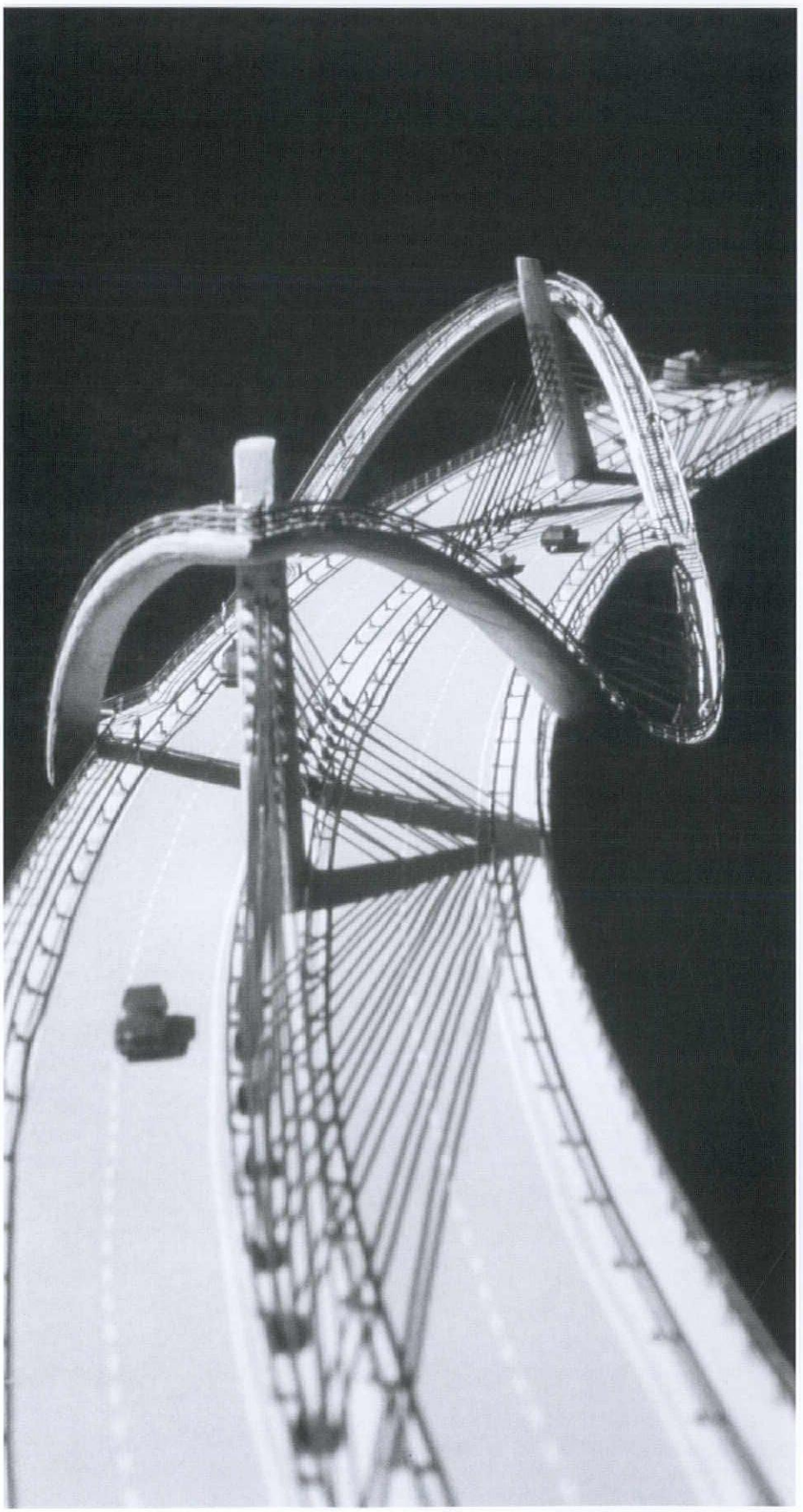
アルヴァロ・ヴァレラ+サイード・シエド

かもめ

この橋の形状は、「連結」「通過」「遺跡」「イメージ」「テクロノジー」「予算」といったキーワードから導き出された。近くに、それぞれが異なった時代に建設された4つのアーチ橋が架かっており、そのうちひとつは、古い石橋でこの町のシンボルとなっている。橋台間230m、中央スパン110m、幅23mである。

橋の構造デザインは、基本的にふたつの構造方式の組み合わせとなっている。一方は、デッキより上の部分にある塔に架けられたプレストレスト・ケーブルであり、他方はデッキの下でアーチを形成するもうひとつのプレストレスト・ケーブルである。これらの異なった抵抗部材は、橋全体の軽い構造を可能にしている。

橋のシルエットは機能的要請だけからくるものではなく、むしろその波打つような形状が、河の流域にひとつの彫刻作品のような存在となることが意図されている。橋の曲線は、歩行者や自動車それぞれの動きに合わせて上下し、歩行者は、橋の構造体を楽しみの場として利用できる。例えば、流域のパノラマを得るために頂点に登り、水辺の静かな雰囲気を楽しむために降りられるよう計画されている。



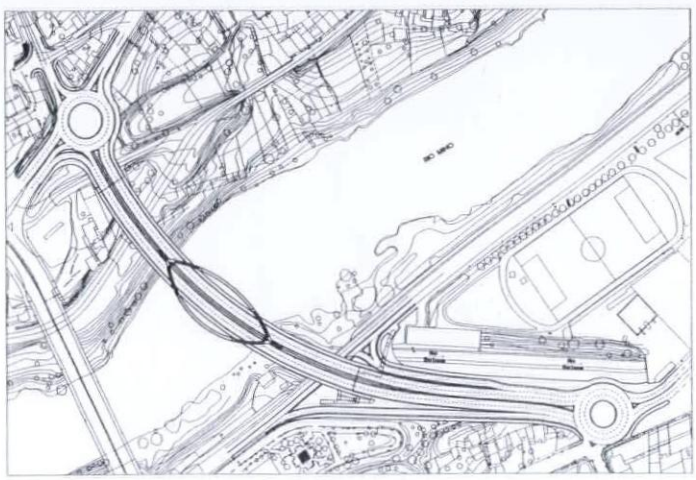
写真＝Nicolas Casla

用途：橋
所在地：オウレンセ市・スペイン
主体構造：RC造、鉄骨、鋼線
主要仕上材：コンクリート打ち放し、塗装、木
工事予定期間：1998年秋～2000年秋

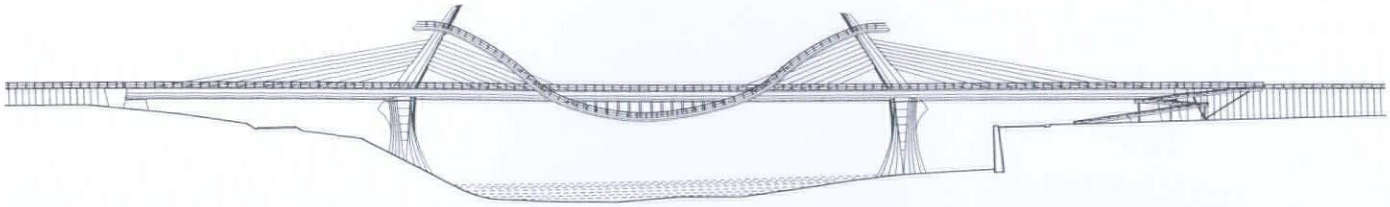
共同設計者名：
Pondio Engineers: Juan Calvo / Maracos Sanchez / Lucia Lopez-Asian / Eva Paya（主な企画設計），
Juan Carlos Lancha, Dr. Engineer
Walio Attia, Dr. Engineer,
Juan Carlos Rofso, Dr. Engineer,
Fernando Varela, Engineer,
Diego Varela, Architect, Luis Collarte, Architect,
Sandra Campos, Architect,
Uriel & Asociados SA, Geotecnia,
Tedaso SL, Draffting and Topography,
Estudios Biologios SL, Environment
協力者名：Sandra Campos, Architect（Model and panel）
Cesar Caparros, Gonzalo Garcia, Juan Palacios（Model）

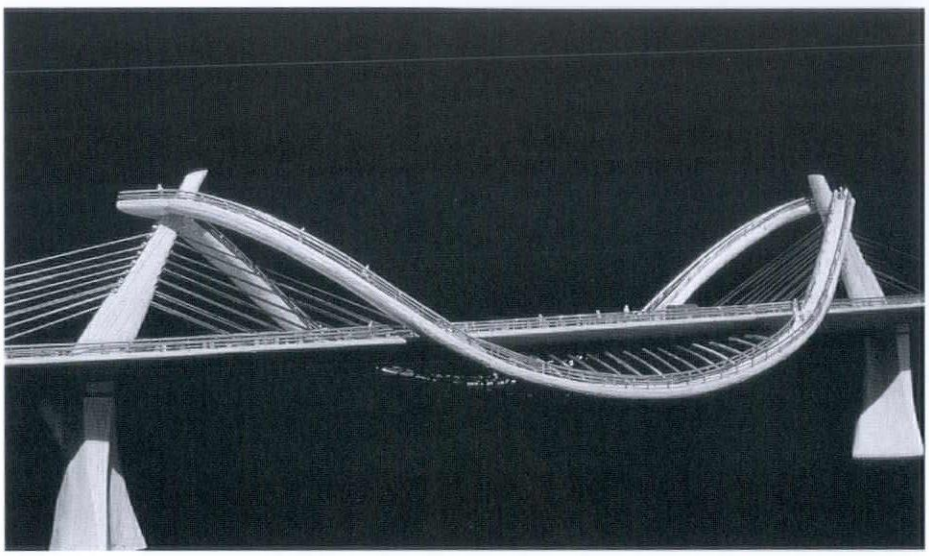
アルヴァロ・ヴァレラ　Alvaro Varela
1960年　スペイン マドリード市生まれ
1986年　マドリード大学建築学科建築学学士
1988年　イエール大学建築学科建築学修士
1997年　東京大学工学部建築学科修了　博士号取得
1997年-　マドリードにAlvaro Varela Architect開設

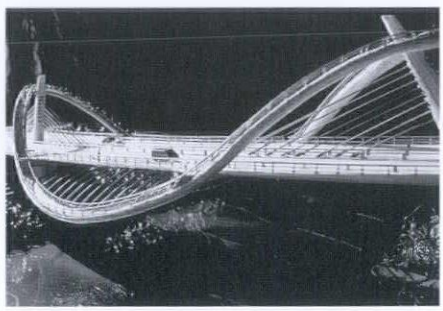
サイード・シエド　Saeed syed
1963年　パキスタン カラチ市生まれ
1987年　MEDユニバーシティオブエンジニアリングアンドテクノロジー学士
1989年　名古屋大学工学部土木学科土木学修士
1992年　名古屋大学工学部土木学科修了博士号取得
1996年　ニュージャージーにSaeed Syed Structural Art Office開設

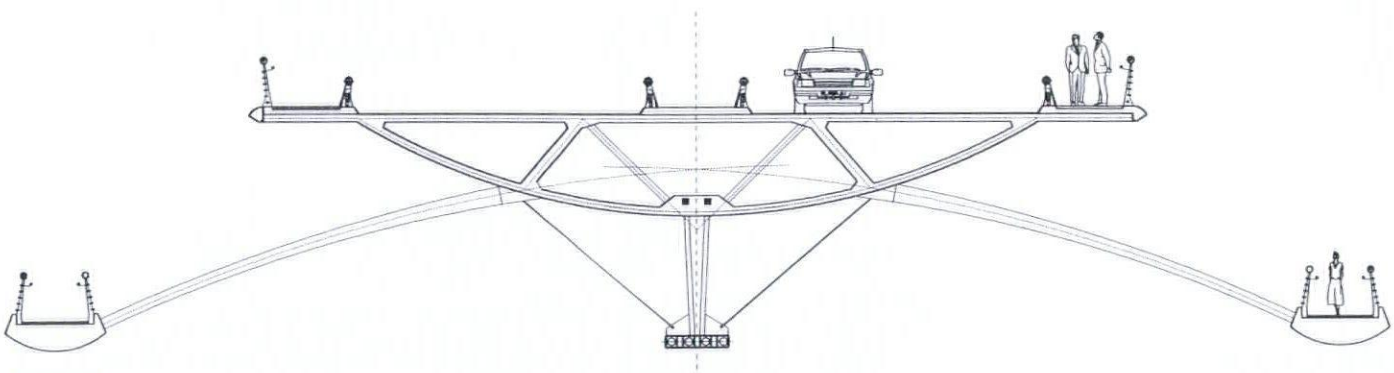


配置図

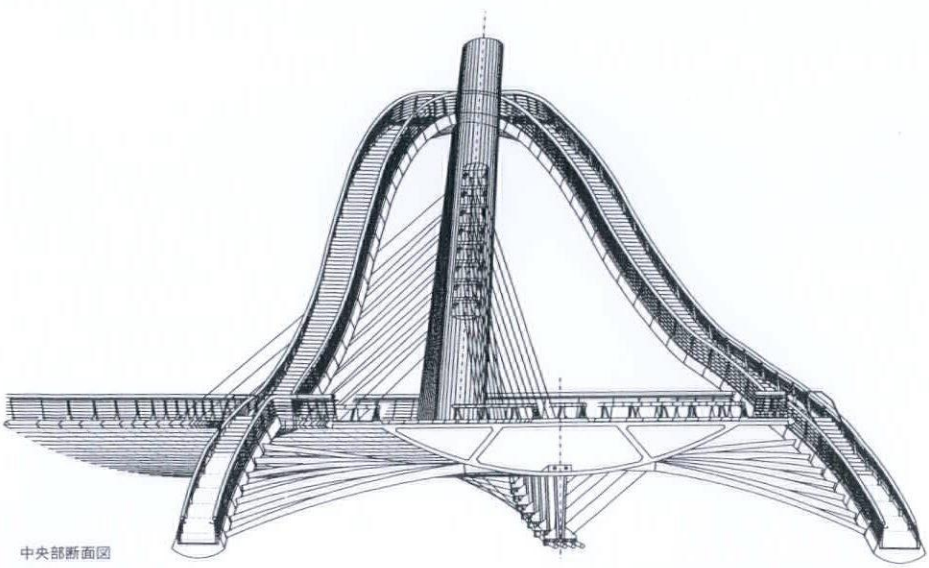








中央部断面図



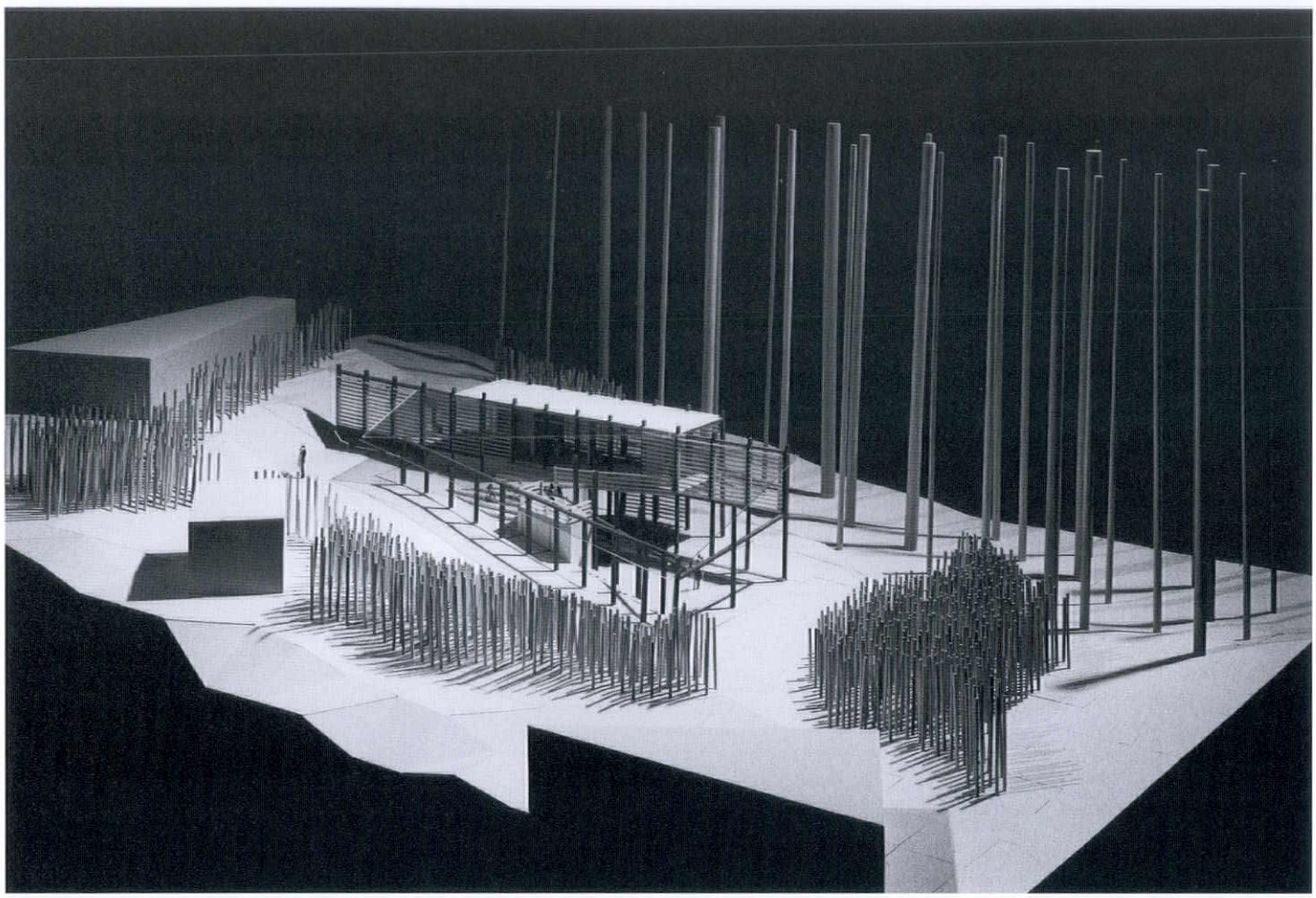
中央部断面図



写真＝Nicolas Casla（3点共）

手島浩之+都市建築設計集団／UAPP

K-HOUSE



60歳台の夫婦ふたりのための住宅である。
3人の子供達はそれぞれ独立し、それぞれの町での生活を持っている。長期休暇に子供らの家族に長逗留してもらい、また、夫婦それぞれに持つ多くの友人達を招いてもてなす住宅を建てることがこの設計の課題である。

敷地は、南西から北西にかけては古い住宅地となっているが、東側には仙台市所有の保安林が位置し、敷地の傾斜は南に向かって広がっている。敷地最大の特徴である、この斜面を活かした設計がオーナーからの唯一の要望であった。

設計にあたってまず、この敷地を3つの性格の異なる庭に分割することを考えた。

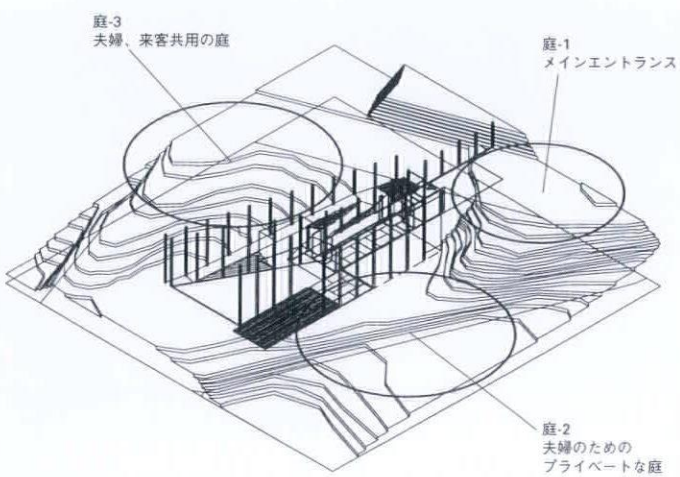
建築の挿入によって分割された3つの庭が敷地外部の要因により固有の性格を持ち、さらにその固有の庭が建築要素の性格づけをより強固なものにすることを意図したのである。

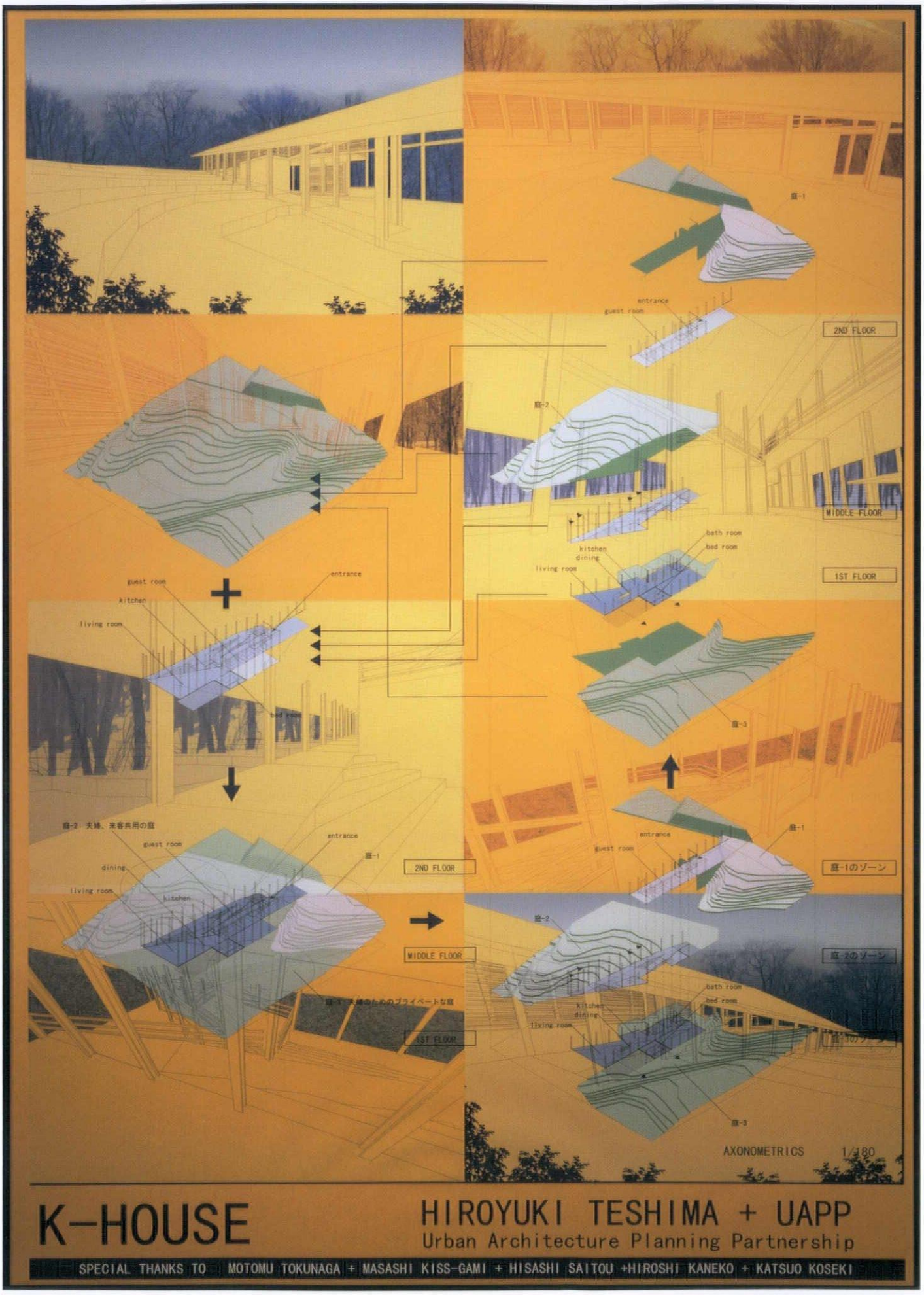
ひとつは市道から繋がるアプローチのための庭であり、孫たちが長逗留することになる客間に連続している。[庭-1]

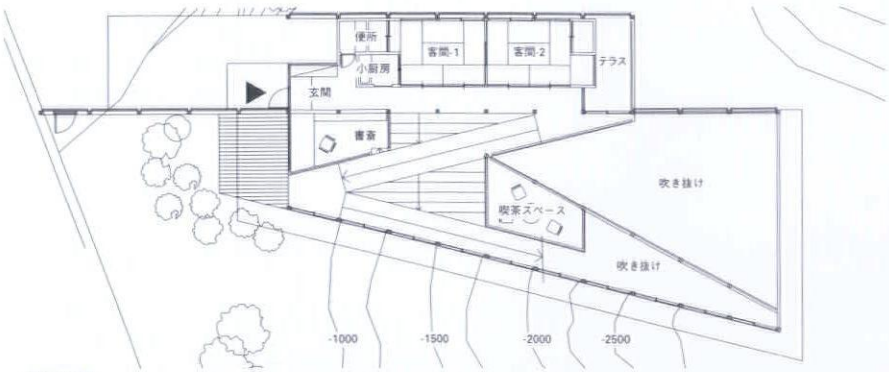
ふたつめは夫婦専用のプライベートな庭であり、彼らの生活空間からのみ進入が許されている。[庭-3]

3つ目の庭は、2階の客間と1階の夫婦の生活空間からそのまま連続した、広がりのある、共用の庭である。[庭-2]

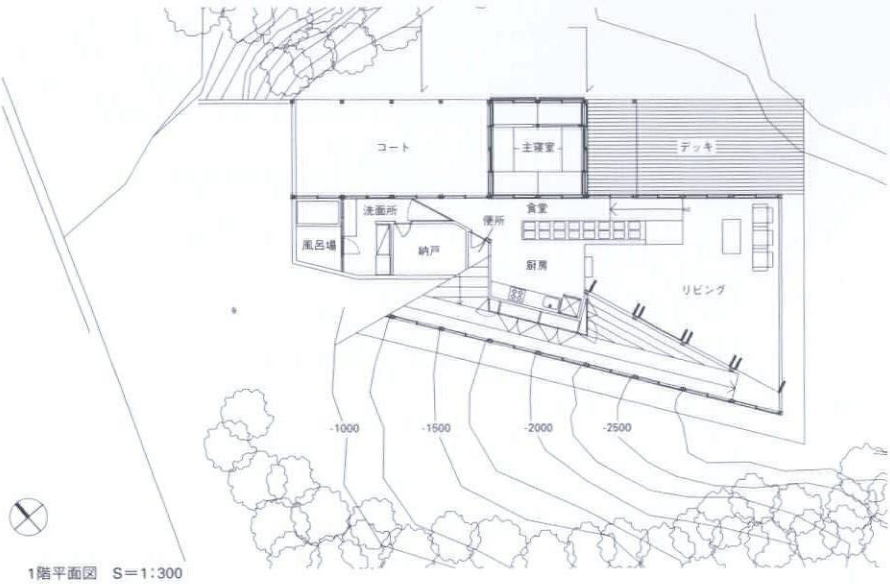
広い傾斜地に建築を挿入することによってその3つの庭は成り立っている。




庭-1
entrance
guest room
2ND FLOOR
庭-2
MIDDLE FLOOR
bath room
bed room
kitchen
dining
living room
1ST FLOOR
guest room
kitchen
living room
entrance
bed room
庭-3
庭-2 夫婦、来客共用の庭
guest room
entrance
庭-1
dining
living room
kitchen
2ND FLOOR
庭-1のゾーン
MIDDLE FLOOR
庭-2のゾーン
庭-3
AXONOMETRICS 1/180
K-HOUSE
HIROYUKI TESHIMA + UAPP
Urban Architecture Planning Partnership
SPECIAL THANKS TO MOTOMU TOKUNAGA + MASASHI KISS-GAMI + HISASHI SAITOU +HIROSHI KANEKO + KATSUO KOSEKI



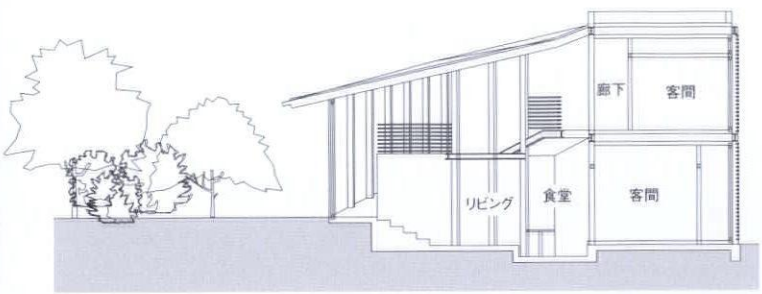
2階平面図



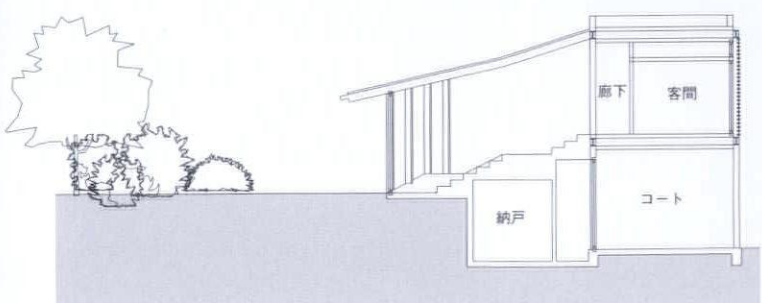
1階平面図　S＝1:300

手島浩之　Hiroyuki Teshima
1967年　岡山県生まれ
東北大学建築学科卒業
山本理顕設計工場
都市建築設計集団代表

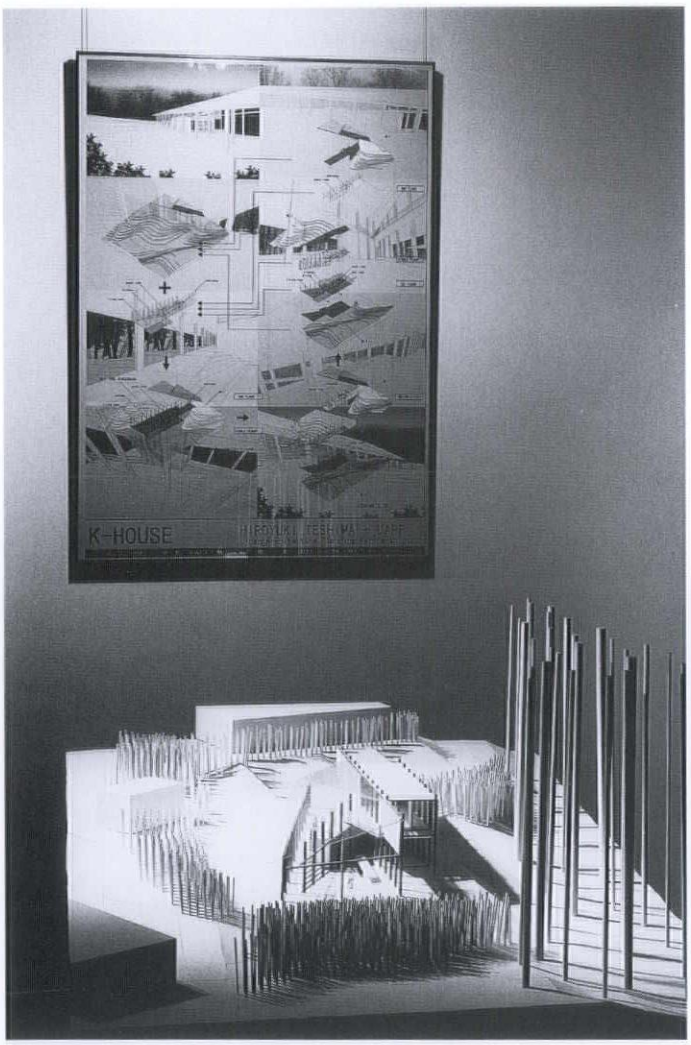
用途：専用住宅
所在地：宮城県仙台市太白区
主体構造：S造(一部RC造)
主要仕上材：外部　床：木製デッキ、玉砂利敷き
壁：フロートガラス、木製ルーバー　屋根：ガルバリウム鋼板タテハゼ葺き　軒天：耐水シナベニア
内部　床：ブナフローリング　壁：PB12.5十ペンキ
天井：シナベニア
敷地面積：1,210.3m²
建築面積：173.2m²
延床面積：217.5m²
工事予定期間：1998年12月～99年5月



断面図



断面図　S＝1:200



審査員講評

林 昌二×播 繁×岸 和郎×團 紀彦

アルヴァロ・ヴァレラ+サイード・シエド
[かもめ]

林　いかにもスペイン風という感じがしましたね。スペインにできるんですね。

播　僕は、メインの車が通る橋と、歩道だと思うんですけれど、歩道と車道を分離するアイデアは良いと思うんですが、橋そのもののシステムは、従来型の斜張橋と張弦梁の組み合わせですから、それ程斬新なものではないように思います。でも、構造体のアイデアは面白い。

林　この歩道は人が歩いて楽しめる歩道だとすると、もう少し、やりようがあるんじゃないかと思うんですね。ただ、橋っていうものは、ずいぶんお金がかかるものですから、橋をつくるなら、その構造体を利用して、何か別の機能のものをつくって楽しめるようにするというのは、とてもいいことだと。そういう基本のところで、私はこれはいいと思いました。

岸　もう、今、おふた方から、まさに話が出たとおりで、僕も同じ印象を持って、特に付け加えることはないなあという気がするんですが。

團　同じ構造形式で、いろんな最終的な造形表現の可能性があると思うんですけれども、こういった考え方で、非常にシャープな抽象彫刻のような形に持っていくことも模索できただろうし、どちらかというと、古い西洋の帆船を思わせるような、今回のような方向性もあるわけです。モダニズムの造形言語ではないところから出てきているように思えたんだけれども、それが意図的なものかそうでないのかが少し判りにくいような気がしました。例えば太く見せるんだったら、もっと太くといったようにもう少し徹底すれば曖昧な印象が弱まったのではないかと思いました。

アンドリュー・バリー+ミヌストリー・アーキテクチャー
[<p>urban]

林　意図しているところが、構造体のようなそうでないような、非常に密に組まれた木材が、現実にどのぐらい意味を持ってくるのか。模型で見ると、たとえばこの木造の架構だけがあって、まわりをガラスで覆ってもいいような感じがしたんだけれども、図面で見ると、かなりの部分が壁になっていて、この構造体の面白さというのは、相当消えてしまうわけですね。

岸　この模型が、一次の時に見たのと印象が全然違うんですよね。壁とルーバーの表現の使い分けがよくわからない。

播　今回の模型の印象が全然違うんですよね。繊細な模型の印象は、すごく好きですね。というのは、ひとつのシステムが成り立っているからでしょう。で、紙を切って並べて、パイプを通してつないでいるでしょう。合板を用いてこういうものをつくったら、すごく面白いですね。あるところは開口になっていたり、空間になっていたり……。でも、コンクリートブロック造って書いてあると、まったく印象が違いますね。

岸　多分、この模型は、おっしゃったみたいに、今、スイスの建築家たちがこういうシステムで建物をつくろうとしているじゃないですか。だから、多分、ああいう模型をつくりたいと思ったのではないでしょうか。だから、本人は、このファイナルの模型が持っている表現と、自分の案の表現の違いというのが読めていないんじゃないかな、というふうに僕は思うんですけれど。

團　このファサードのプレゼンテーションなんか、地味ではあるけれど、非常にレベルの高いプレゼンテーションだなと思って見ていたんですけれど、恐らく、この横のルーバーは実際のものではないというところで、ちょっと疑問に思ったんですよね。

岸　むしろストレートに、第一次のときのように、自分の案のいいところをきちんとプレゼンテーションしたほうが僕はよかったんじゃないかなと思うんですよね。

遠藤政樹+池田昌弘
[HP防音シェルのあるスタジオ住宅]

播　細い鉄骨のHPシェルを用いて、コンクリートシェルの仮設としているのですが、防音壁としての性能と、この細さが何か、ちょっと合わないなあという感じがして、僕は、これそのもののストラクチュアを評価し得るところまでは行かないなあ……。

岸　僕はあの現場の写真を見て思ったのは、要するに、今あるスチールのストラクチュアを打ち込んでしまって、何か、ある種のSRCみたいな構造なのかと……それは間違いないですか。

播　そのようですね。

林　ああ、そうですか。補いあって。

播　だから繊細なところにコンクリートを打ってしまうんですよ。

團　プレゼンテーションの見せ方として、HP防音シェルというところに焦点を当てたプレゼンテーションになっているわけなんだけれども、実際には、プランで見られるようにシェルがすべて単独に存在しているわけではない。もっと現実の空間の中で、HPシェルがどういうふうに位置づけられてくるのかというところを表現してほしかったですね。

岸　僕はこれを興味深いと思ったのは、ごくごく当たり前の、きわめてローテクな技術、われわれが当たり前に使える、住宅レベルで使える技術を積み重ねていくことで、日常的じゃない空間を生み出そうとしている。一時のハイテクのように、何か特殊な形状の空間を実現するために、特殊なテクノロジーがいるのだというのではなくて、当たり前な技術の組み合わせを変えるという考え方は、僕は割合好きです。

岡村和典+石井米二郎+清水里司／日本設計九州支社
[下関市海洋環境・自然科学体験施設（仮称）]

林　今回出た中では、かなり大きい規模のものですね。だから、一見、模型で見ると似たような形のものが他にあるとしても、相当、これはつくられ方で実際の印象が違ってくるものですね。

播　すごい、模型がきれいでね、あのまんまできれば素晴らしいなあと思うんですよ。造形的にも、結構面白いし。で、これ、なにで屋根をつくるのかなあ、というのがすごく興味深いんだけれど。

林　こういう屋根は、模型で見るととてもいいけれど、実際が心配だと思うんです。模型段階までのものの捉え方と、現実にできていくときの材料とか仕上げとか印象とかいうものとがね、結びついていないものが多いですね、この種のものは。

最初のコンセプトと、それからリアライズされたときの形とに距離が大きすぎると具合が悪いという気が私はしているんですよ。

播　主体構造、SRCしか書いていないですね。たとえば、屋根、立体トラスか何かでつくられちゃうと、強引にこの形に合わせてつくられたら、模型とは違ってしまいますよね。こういうところのカーブとか、それにまた仕上げを載せたら、どんどん厚くなるし、どうなっちゃうのかなあ、って心配なんですよね。このままできれば素晴らしいなあと思いますけれど。

岸　この屋根の下の内部空間というか、半屋外の空間ですよね、屋根だけかかっていて、半屋外の空間があって、それからインテリアの空間につながっていくというプランだったと思うんですけれど、そのプレゼンテーションがまったくなかったので、さながらオブジェのような形として見なければいけないというのが、少し不親切なように思いました。

團　模型写真は、なかなか新鮮なものを感じるんですけれども、一番特徴的でいいなあと思う部分が建築計画の中で、どういう位

置づけになっているのかというのは、やはり重要だろうと思うんですよ。この屋根の部分と、プランとの関係を見ると、何か最後にかぶせた包み紙みたいに見えちゃうんですね。もっと、それがストラクチュアだとか空間にもっとしっかり根ざしたもので、要するに、途中で取ることができないぐらい強い位置づけというものになっているのかどうかというのが、ちょっと疑問なんですね。

播　かなり条件をつけたいぐらいな感じがするんですね。そうやって欲しいなあという。たとえば、ダラスの空港がありますよね。あれ、すごくきれいですよね。あれ的なストラクチュアであって欲しいですね。

團　それがメインでね。

林　そうですね。

播　そうすると、この屋外とか屋内に意味がでてきて、だから、このストラクチュアが本当に力学的にきちっとされていて、支え方によっても、これは全然感覚が違ってきちゃうんですよね。どこで支えるのか……模型は何か、建築の上で支えているようですが、模型そのものの薄さでいくわけがないような気がするんですよね。

林　こういう、全体の形態に特徴がある建築が、もし、非常にうまくできると、内部のどこにいても全体を感じることができるんだと思うんですね。しかし、そう思えないのが、残念なんです。

尾沢俊一
[鮭山荘]

播　スチールと木の使い分けが、すごく構造的なシステムからいってもうまくいっているんじゃないかと思う。普通は、スチールの台があって、その上に木造を載せるんだけれど、少しかぶっているというのが面白いし、それがデッキになっているんですね。これは結構、僕は面白いなあと思って。木とスチールの混構造的なものを、うまく使っていますね。きれいだし、コンセプトがわかりやすい。ただ欲を言えば、今回の模型に入っていたブレースは入れたくないなあと。

岸　これ、実はものすごく好きなプロジェクトだったんですね。それで、木造とスチールが入れ子になっていて、それぞれがスキンを持っていて、ダブルスキンのストラクチュアになって、そのスキンの隙間に不思議な空間ができているだろうというふうに思っていたんですね。今日模型を拝見するとストラクチュアは確かにきれいなんだけれども、もう一歩進んで、スキンが2重になっていることの空間的な面白さが、シンプルな美しさに、今の段階の模型は止まってしまっていて、そこが残念だなあと思います。

團　それは同感ですね。この断面の持っている入れ子の部分というのが、いろんなディテールを生んでいくような、きっかけの力というか、そういうものになっていると思います。逆に、非常に繊細なものであるだけに、我々見る側としては力を感じたいというか、そこの力の発生源というのは、やっぱり、まさにこの断面ではなかったかと思うんです。ただ、やっぱり、洗練された美しさを持っている計画で、非常にレベルが高い計画ではないかと思うんですよ。

林　私はやはり、あとひと味、味付けが欲しかったという気がするんですね。それはどこかというと、このダブルスキンの話もあるんですが、これだけの傾斜地、かつ、谷側のほうへ行けば随分な高さまで柱を持ち上げてあるんですね。そうすると、そこで生活していたら、ちょっと下へ降りてみたいという気になるだろうと思うんですよ。だから、下へ降りていって、宙に浮いたようなデッキがあってもいいし、それから、地上へ降りて行ける必要もあるんじゃないかという気もする。この床下、ピロティの使い勝手にやや不満があるんですね。

川嶋彦一郎
[O邸――sister h]

岸　最近、いくつかある、壁と床というのではなくて、1枚の紙を折り曲げたようにして建築をつくっていくという方向の、そういう案がいくつかあった中の代表例みたいな感じですね。

播　何かカーブして、差ができて、そこを空間につなげたという……。

林　模型も、それを強調しているわけですね。

播　それを強調しているんですね。ここだよって。設計者は、そういう意図を……。

團　つながっているということをテーマにしているということなんでしょうかね。

林　1枚でつながった、いろいろ角度を持った面が構成されて、建築がつくられるというのは、それはそれで面白いと思うんですけれど、しかし、床が斜めになるという場合は、そこにかなり意味がないと、ただ不愉快なだけだろうと。私は、建築というのは平らな床が基本だと思っています。

團　言葉づかいはどうかわからないですけれど、既成概念というか、そういう基準を壊していくという考えなんでしょうね。それからもうひとつ感じたのは、最近、やはり建築の形態の消去ですとか、作家性の否定とかですね、比較的、そういう方向に建築の議論というのが行っているんだけれども、古典的な造形性だとか、建築の素形に正面から取り組んでいるというところは共感を持ちました。

播　これをどうつくるかが課題ですね。これはコンクリートだと言っているから、流動性があるし、ある程度小規模だから実現の可能性は高いと思いますね。

岸　これ、本当にこの模型みたいに梁型も何もなくできたら、すごく魅力的だと思うんですけれど、本当にできるのか……。

播　でもこれ、最大スパンは10mぐらいですからねえ。できない話じゃないと思うんですよね。面で構成できないことはないと思うんですが。

林　横浜の大桟橋もそうだし、それから荒川修作さんの〈養老天命反天地〉みたいな経験をつくる装置というのはあると思うんだけれども、これは、そういうものではないんじゃないかと思います。半分は日常の用途に使うものですからね、床を傾けると、人間は、相当強烈に反応するものですから。

駒井貞治／駒井貞治の事務所
[借家生活1、2、3…]

林　これはよくやったですね、反建築みたいな感じで、とことんやりましたね。
建物そのものとしては、従来の木造住宅の瓦屋根の上に物干しをつくるという手法がありますよね。このごろ、あまりないですけれど。昔そこで遊んだっていうことを思い出しますから、別に、特に変わったものじゃないんだけれど、それが借家になるという発想は面白いですね。現代の住宅問題に、強烈な批判を浴びせている点を買います。

團　最初、これを見たときに、何か、ほのぼのとした、ポエティックなものを感じましたが、今回のプレゼンを見るとちょっと印象が違いますね。

播　ちょっと、展示が強烈すぎる。大阪の人らしいやり方ですね。

團　それで要するに、そこまで力を振り絞って何を叫びたかったのか、というのが、ちょっと伝わってこなかったのが残念です。

岸　僕も、むしろ淡々としたプレゼンテーションをしたほうが、力があったんじゃないかなあ、という気がします。というのは、何かリーフレットがあって、写真とかを見ていると、本当に、生活の延長で、淡々と、みんなでつくってやっている。あの淡々とした写真の雰囲気のほうが、今の会場のプレゼンテーションよりは正直言って共感が持てたなあという気はしますけれどね。

ジン・タイラ+三好隆之
[家具のない家　House without Furniture]

播　ちょっと、わからなくなっちゃったんですよ。そろって並んでいるから。パズルが見えなくなっちゃって。

岸　一次のときは、構造がS造だったんですね。
播　そうですね。今、ガラスになっていますけれど。
團　鉄骨も入っているはずですよね。ガラスだけということはないですよね。
岸　あれ、入ってるんですか。ガラス構造体にするのかと思ってた。
播　模型はガラスだけになっちゃってますね。
岸　鉄骨造ではなくて。
播　ガラスの構造ですね。できないという話はないと思いますけどね。平屋ですし。ガラスを使うとき、ディテールがどうなっているかは、実際につくる時はいるだろうなと思いますけれどね。かなりガラスって粘りがないから、何かクッション的なものをはさまないと、ちょっと無理だと思います。
團　僕はレベルの非常に高い作品だとは思ういますね。一次の時のプレゼンテーションは、やはり抜きんでたものを持っていたし。ちょっと疑問だったのは、床の部分がメインテーマになっていたのは判るけれども、その上のガラスの部分のリアリティがないことで、比較的、そこはわりと避けて通っているというようなところが、気になったところです。もうひとつは、やはり、コンセプトは非常に明快でいいんだけれども、床が全部平らでなくても良かったのではないですかね。
もう少し影の部分があるとか、そういうのを、きちんとディテールの中でつくりだすことができたはずじゃないかなあというところが、ちょっと気になりました。
林　床の穴は、模型で見ると魅力的に見えるんですけれども、どうして、こんなにたくさんいろんなものが散らばらなきゃいけないのかっていう気がするんです。こういう家を建てる人は、もう1軒別の家を建てて、そこにふだんは住んでいて、お客が来るとここへ来るという生活になるんでしょうね。
播　ゲストハウス的なものだと面白いかもしれないですね。
岸　この作品は生活におけるいろんなシーンのすべてのレベルをそろえるということがやりたかったんじゃないですかねえ。
團　ああ、なるほどね。
林　そう書いてありましたね。深さがいろいろであって。ところがね、そのへんが、いろいろじゃないんですよ、あんまり。もっと、いろいろ……1階分下がるとかね。
播　半階分上がったところとかね。
林　いろいろやったほうがよかった。
播　何か、穴というイメージが強すぎるような気がする。
林　お風呂が一番心配なんですが。
岸　お風呂の断面はないですね。
播　どういうふうにできるのかなあ。
林　それから、これだけガラスで覆ってしまうと断熱の問題とか、換気にしても色々と問題があるように思いますが。何か、どこかが開くって書いてありますね。壁が動くみたいなんですけど。
岸　ただ、一次の時と、今の第二次案とは、ストラクチュアの考え方が変わっているんでしょう。一次の時はS造で構造を組んで、ガラスはカーテンウォールで貼り付けているんですけれど、二次案は、垂直面はガラスが構造体で、水平面がS造の構造体みたいになっていて。だから、一次案のときは、割合簡単にスライドでオープンできたんでしょうけれど、今度はできないんですよ。構造体だから。
播　できないですね。どうするのかなあ。全部が構造体でなくたっていいと思うんですけどね。枠がないっていうことは無理だから。
林　まあ、完成を期待しましょう。

手島浩之+都市建築設計集団／UAPP
[K-House]

林　60歳代の夫婦がふたりで住むって書いてあったので、身につまされて見たんですがね。
播　どう生活するのでしょうか（笑）。
林　この案は珍しく他と違ってロケーションがはっきりしているんですね。まわりにずいぶん木が描いてあったりして。郊外の別荘地のような感じなんですが、こういうロケーションでこういうつくり方というのも面白いのかもしれませんが、今度はどう楽しむのか。この家の場合。お客がたくさん来るのでどうこうと書いてあるんですけれど、そのわりには、特にアウトドアのスペースがあんまり生きてこない気がしたんですね。
團　個人的にはこの斜路をもっと生かして、中の生活とインテグレートしたりするということを、やって欲しかったなあというか。
岸　僕の印象では、むしろ一次のときのエントリーの資料を見たときのほうが、内部空間と外部空間の、いろんな生活のシーンのイメージが、拡がりやすかったんですね。今の模型を見ると、庭1、2、3と書いてあったんだけれども、その1、2、3と内部空間がどんなふうに関係を持ってくるのかというのが、あまりイメージが拡がっていかないという感じがしましたね。それがなぜだかわからないんですが。多分、屋根の形の問題があると思うんですけれど。

手塚貴晴+手塚由比／手塚建築研究所
[LGS構造の家]

播　一次案と、今回の展示とはちょっと違うんですね。模型が全部木でできていて、かなり大きい模型でリアリティがよく見えるんですけれど、中はスチールのフラットバーとか、軽量チャンネルですか、そういうもので構成している。それに、デッキプレート。木でできた模型って、暖かさがにじみ出ているんだけれど、本当に暖かみのある家ができるかどうか、まあ、仕上げにもよると思うんですけれど、印象が変わってきてしまうんじゃないかと。でも、こういう、よく考えられたシステムというのは、とても評価できるような気がしますね。
岸　僕はですね、先程の遠藤さんと池田さんの作品と同じ視点なんですけれど、軽量鉄骨とか、当たり前の、材料を集めていって、建築的な空間をつくっていくという、しかもH型鋼とかを使うのではなくてもっと軽快な、そしてアクセスしやすい材料をアッセンブルするという考え方は、とても共感が持てるなあと思って見ていました。蛇足ですが、あのグレーチングのまわり階段が、むしろヒロイックに見える階段だなあと思って。そこも何か、もう少し当たり前なエレメントの組み合わせでできているといいのになあ、なんて思っていたんですが。
林　なるほど。
岸　だけど全体的な考え方としては、僕は共感を持ちました。
林　このぐらいの建築だと、全部、人力で運べる材料を使い、特殊な加工をしないで組み立てられるというのは、大事な視点だと思うんですね。そのことを、このごろ、あんまり考えない人が多くて、自然の中にあっても、まわりをすっかり荒らしてしまうものをよく見ますから、そういう点では、よく考えていると思うんです。ただ、材料の選び方とかディテール次第で、非常に見すぼらしくも見えるし、きちっとするかもしれない。それが今の段階ではわからないんで、どうなるかと思うんです。

長倉威彦
[具志川ランセンター農産物展示加工場]

播　農産物展示工場と書いてあるんですが、強烈なんですよね、ストラクチュアが。あまりにハイテクだし、豪快なんだけれど、ランセンターに似合うかなあということを感じちゃったんですけれど。
團　プレゼンテーションの仕方として、このランセンターの建築計画をどう説明するかという視点と、もうひとつ、それを新しいシステムで見せるというのが、ちょっと、うまくかみ合っていないような気がしたんですね。新しいコンピュータライズされた眼で、新しい設計方法を拓くような方向性であれば、非常に新しい美学が引き出されてくると思うんだけれど、単なるプレゼンテーション・ツールになってしまうと、ちょっと、弱まるかなあ、

というふうに感じました。

林　そうですね。スペース・バーコーダーの、ハードそのものは、なかなか魅力があるように思ったんですが、見えてくるものが普通でね、ちょっと残念ですね。おっしゃるように、ああいうツールを使った建築になると面白いんだけれど。

岸　僕が第一次案から想像していたのは、確か、ガラスの温室の海の上に、船のように展示室のガラスの箱が空中に浮かんで、逆光のギラギラする中に浮遊しているというような風景が、イメージとしてあるのかなあ、と思っていたんですね。ガラスの海にただよう船のような建築という、僕が勝手に想像していた風景は見ることが出来ませんでした。

廣谷純弘+石田有作／建築研究所アーキヴィジョン［(仮称) 星野遺跡トレンチ見学施設］

播　これは上のストラクチュアを見せているわけではないんでしょう。下が重要なんですよね。

林　地層そのものは、建築がなくても見られるわけですよね。ただ、そこに光が入っていくような屋根をかけたということですかね。

播　ストラクチュアそのものは非常に単純ですがね。

林　これはよそで経験しているんですが、地下のものを見せようとして地下室をつくって、そこを展示室にしてしまうと、全容が地上から分からなくなってしまうおそれがあります。地下へ入ればわかりますというだけでは……。

ところでこの屋根は膜だと書いてありましたけれども、その膜の高さが、地上面の人の背に比べると、目の高さより少し下ぐらいのところに来るんですね。それが気持ちのいいことかどうか、という気がしましたね。すぐそばから、膜のしわと汚れを見ているっていうのは、あんまりね。

播　膜屋根をきちっと張るのはすごい大変なんですよね。ものすごく引っ張らないと入らないですし、やや、しわが寄ったりなんかすると、すごく、こういうデザインに合わなくなるきらいがあるんですね。

林　少し、離れるようにしないと。

播　またね、ストラクチュアも、もうちょっと工夫して欲しかったなあと思うんですよね。林さんのおっしゃるように、中の空間をどう感じるかみたいな。たとえば、ルーブルのガラスのピラミッドみたいな。

林　のぞきたくなるような。

播　中に何があるんだろうか、という感覚がありますよね。で、降りていきたくなりますよね。そのへんを、どういうふうに考えたのか、よく見えないところがあって。構造的にいうと、マストを挟んで2本、はね出しをつくる。そうすると、分節化したようなイメージが、出来てくるんです。ヨーロッパの人がよくやる手法で、でも、日本でも木造はそうしていますね。

團　この人は、いいテーマに巡り会ったなあという感じがするんですね。建築物がこうした地層といったものとどういう関係性をもつかが重要なわけで、その点が物足りない。もっと、いろいろできたはずだと思うんですけれどね。

岸　僕も、ほとんど同じ印象です。確かに解決案としては正確だということは十二分に判るのですが、せっかくの魅力的な条件の仕事なんだから、もっと別の可能性もあるんじゃないかと考えてしまうんです。

三上晴久+三上建築事務所［SH　Alumnae House］

岸　模型をぱっと最初に見たときの印象というのが、床、壁ということと関係なく、面をフォールディングしていく、折っていくタイプの建築というのが最近ありますが、面だけではなくて、これは空間を折りあげていく提案なんだと、外形を見て最初思ってしまったんですね。ところが、ちゃんとプランを見るとそうではなく、むしろクラシックなプランだったので、すこしとまどいました。

播　こういうのって、空間のプロポーションが大切だと思うんです。模型を見たときに、中庭から見た会議室の開口のところのプロポーションが悪いなあと思って見てしまったんですが。そして、細い柱を、ぽっぽっぽっと、真ん中に少し立てているんですが、立てないほうがいいんじゃないかと。

林　これ、一見して、何か、単独の建築に見えるんですね。単独というか、周囲から孤立した建築でもおかしくないような建てられ方なんだけれども、本当は、もっと、キャンパス全体のつくられ方に、深く関わった空間構成があるんじゃないかと。

團　恐らく、この設計者の考え方というのは、さっき、空間を折りまげてという意見も出たんですが、恐らくそうじゃなくて、包絡するボリュームを、まず、非常に単純な組み合わせをした上で、そこをどう崩しながら、基本的な骨格をキープしていくかという、そういう手法を追求しようとしたのではないかと思います。

山田幸司建築都市研究所［角谷邸新築工事――フォアタワー］

播　これは、本当に不思議な個人住宅ですね。

林　これはこれで、私は面白いと思いました。自分の庭先に貨車を1両置いて喜んでいる人もいますからね。自分の家にトロッコを走らせてみるというのも、趣味としては、なかなか面白いような気もする。やるからには、ローテクのメカニックを徹底的につくって、動かして遊んでみようというのはね、それなりに面白いんじゃないか。それから、一次案では、CGプレゼンテーションが大変巧みだ思いましたね。しかし、できたものの印象は、そういうものではないだろうと思うんですけどね。

團　そうですね。このイメージと違うんでしょうね。もっと、何か、全部が鉄錆みたいな感じで……。もっと、最初のプレゼンにあったものより、今回の模型の印象に近いんじゃないかと。

播　今回の展示を見て、何か、古い工場を思い出したんですね。たとえば古い工場とか、古い跳ね橋とかね。あるいはサイロ。リカルド・ボフィールの事務所に行ったことがあるんだけれど、サイロの中をオフィスにしているんですけれどね、そこにまた、何か、朽ち果てそうな煙突があったりね。すごく面白かった。

この計画はすごくお金がかかりそうだし、どうやってやるのかなあって。確かに、こういうハイテクっぽいCGと、できるものは、ずいぶん違うような気がしますね。

林　欠点はね、建築じゃないところだと思うんですよ。トロッコがねえ、乗れるようになっているとか、何か、この空間を使って生活の一部というか建築の一部になっているといいんだけれど。

和田吉貴［石垣焼窯元］

播　これは、すぐにできそうですね。

團　槇さんの若い頃の作品で、アーバイン小学校っていう……実際にできたのかどうか、わからないんですけれど……それとこのシルエットが非常に重複するものがあるなあと。

林　ひとつ、見せ場をつくって欲しいですねえ。これで悪いことはないんだけれど。

播　これ、鉄筋コンクリートって書いてあるんだけれど、一部鉄筋コンクリートで木造にして欲しいなあと。できないスケールじゃないですよね。

岸　こういう建築って、多分、できあがったときの軒の高さのスケール感とか、たとえば内部の床材がどこまでつながっているかとか、そういうことの総和で建築の魅力を感じさせる類の建築だと思うんですね。ですから、プロジェクトとして見たときに、じゃあ、何の文句があるんだ、って言われたら何もないんですが……。だから、「ちゃんとした解答だと思うんですが……」という気分になってしまいます。

（1998年9月16日　於：ヒルサイドフォーラム会議室）

印象に残った住宅計画3点

植田 実

建築展というのは、一般の人にとっては多分見づらいところがある。ショードローイングや模型は、同じ設計を仕事とする立場からはプレゼンテーション技術の良い参考にもなるだろうが、建築を解読することだけが目的の、たとえば私にしてみれば、そのプレゼンテーションの華麗さに、ときとして翻弄されてしまう。悪く言えば、気取りが鼻について、見ているうちに面倒くさくなる。

これはあくまで建築展一般の傾向についてなのだが、つまり、模型なら模型は設計コンセプトの理解を第一義としてつくられてあれば、一般の人には助けになる。コンセプトや空間の美化に少しでも偏った模型だと、読み取りに時間がかかる。だったら図面だけを読むほうが、その建築を頭の中で建ちあげるためにはずっといい。

随分古いが、例えば毛綱毅曠が〈反住器〉や〈鏡の間〉の、小さな、ごくストレートに図面からそのまま起こした模型を作っていたが、あれは分かりやすかった。ただ、〈反住器〉の真下に同じ建物が倒立して連続し、〈鏡の間〉の大階段の正面に立てた鏡に映された鏡像の階段までが実体としてつくられ、つまり双対の向き合う階段となっている。それだけで、彼の頭のなかにあった鏡像・入れ子概念の建築が、現実的な条件の中でどう実体化したかが、ありありと見えてくる。

ギャラリー間は建築家やデザイナー別に、新しい仕事を見せるばかりでなく、それぞれのコンセプトを徹底して展開する。コンセプトのプレゼンテーションが建築を超えて怪物化したって、構わない、みたいなところがあって、それが毎回の楽しみなのだが、今年の4月から6月にかけてのレンゾ・ピアノ展には完全に圧倒されてしまった。まるで飾り気のない展示が彼のオフィスにいるような気分にさせ、ここで僕の建築をじっくりと勉強していってくれといわんばかりで、とても新鮮だった。入場者数も多かっただろうが、滞留時間も記録的だったのではないか。

今回のSDレビューで、それに近い気分を味わったのは、手塚貴晴+手塚由比の〈LGS構造の家〉である。簡便な施工性とノーメンテナンスという基本方針がひと目で理解できるのは、原寸のディテール（バルコニーまわりの取り合い）が置かれていたからでもある。プランも標準的な、二世帯住宅で、この計画が特定の施主のためだけでなく、一般にも開かれて提案されていることが伝わってくる。

基本的なことを真面目にやっていて好感が持てるというようなことで、点を入れたくはない。住宅で言えば、どんな奇想であろうとこちらは大歓迎だが、部屋のプランニングがまるで従来通りでは、その計画に何かを感じにくい。その点、シンプルな建築を自信を持って見せている〈LGS構造の家〉には、そこからいろいろな発想を生む気配がある。

駒井貞治の〈借家生活1、2、3〉は、こんな時代にこんな行動派の若い建築家がいたのかとつい嬉しくなり、その分だけ用心してみたが、やはり70年代とは違う。一見ゲリラ風だけれど、実際は恐らく正反対で、知らなければ、外から見てそれと分からないほどの穏やかな借り暮らしのように見える。しかし、メアリー・ノートンの借り暮らしたち（ボロワーズ）のように屋根裏や地下に潜むのではなく、家と家との隙間や屋根上に露に出現する。そのアンビバレントな姿は、都市の現実の中での借り暮らしの、道理にかなった原型だ。不動産屋の店先を模したプレゼンテーションも70年代的パロディを思い出させるが、実に丁寧に作られている。特に記事の中味がちゃんと入っている雑誌が何冊も売られている（？）のには驚いた。そして、この中にこそ、「借家生活」の快適さを伝える素晴らしいカラー写真が組み込まれているのである。

最も時間をかけて見たのは、JIN TAIRA + 三好隆之の〈家具のない家〉だ。壁のない家や、家具だけでつくられていた家など、建築の構成要素のある局面を全面カットして再構成する試みは最近でも目にするが、すべてを床面下に収めて家具を消してしまうまでの還元は、他に例を知らない。

模型は白く、抽象的で、設計者のコンセプトだけが漂っているような印象である。だが、これはアイデア・コンペでも、大学の課題設計でもない。岐阜県で来年から工事が始まる、いわば契約物件である。そのリアリティを考え始めると、この、まあ気取った部類に入らなくもない模型から離れがたくなる。

サーリネンの〈ミラー邸〉も家具をなくして、有名だったが、あれは居間の一部をピットにしただけの、ちょっと気の効いたデザインに過ぎなかった。高須賀晋の〈二瓶邸〉はすべて畳敷きの一室空間にしてしまい、その一隅を沈めて、そこに床面とほぼ同じ高さの大きな甲板をつくり、家具はそれ以外はなしとする、還元的手法を用いていた。とはいえ、水回りまでは、当然ながら徹底できていない。しかし、この家に招かれたときの記憶が、〈家具のない家〉によって甦った。設計者の言う「住む人の姿だけが現れる」シーンが〈二瓶邸〉にも感じられたのである。

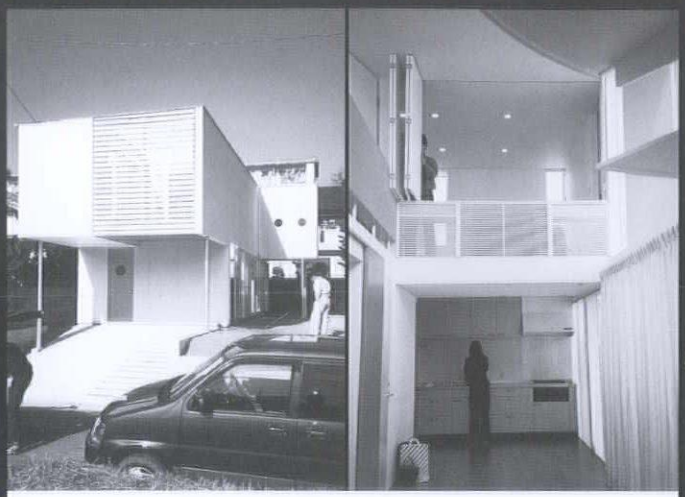
駅でも工場でもオフィスでも住宅でも、現代建築でもっとも曖昧にされているのは、そこにいる「人の姿」である。人が美しくみえない。吹き抜け上のブリッジに佇んでいたり、居間のソファーにくつろいでいる姿は、ごく断片的演出的なシーンでしかない。この〈家具のない家〉で、人の姿がどう見えるか、いかに住みやすいかは予想のつかない部分がある。一見ユニヴァーサル・スペースのようで、実はこれほど各領域が固定された住宅はないわけだし、場合によっては破綻も招きかねないだろう。だが、このような試みの中でこそ建築の新しい骨格が次第に見えてくるはずだし、建築の骨格そのものを問い直す機会は他にない。

今回のSDレビュー入選者15組のうち、9組が住宅（別荘、併用住宅も含めて）を出品している。他の興味深い作品に触れる余裕がなくて申し訳ないのだが、とりあえず紹介した3つの住宅を見ると、この半世紀、日本の住宅への問題意識が変わっていないことを確認しているような気になってくる。日本人の住生活の決定的なプロトティピカルな形が見つからなければ、環境も発生しない、みたいな状況だ。そうなると住宅以外の建築の評価の基準点も定まっているわけではない。そして、SDレビューそのものに立ち返れば、一般の人にも開かれた展示であるべきなのか、建築界の内に、さらには特定世代の内に閉じていく方向を探るべきなのか、すべてはひとつの問題意識に結びつくような気がする。

●うえだ・まこと／編集者

SDレビュー1997入選作品のその後

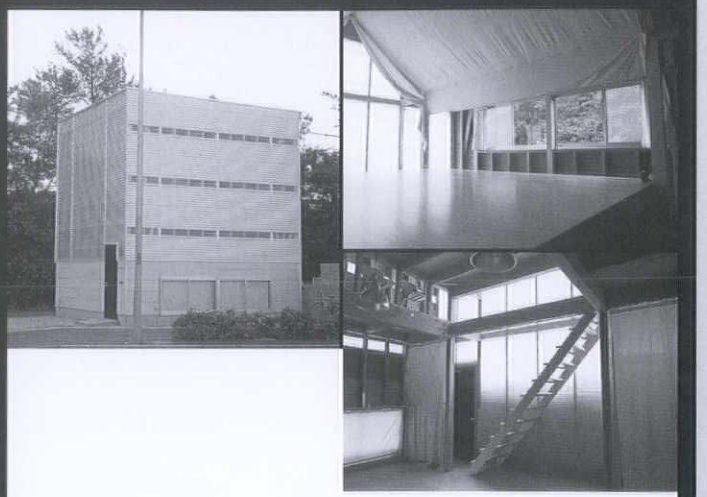
1997年の入選作の中で展覧会以後に竣工した作品を紹介します



今村雅樹+佐久間菜穂子／今村雅樹アーキテクツ
T-H（奈良の家）

1998年3月竣工

予算やプログラムの変更、構造の変更など、住宅としてはいつものアモルファスなプロセスを経てこの空間に落ち着いた。計画時から重要なコンセプトであった「男の部屋（パソコンのための）」と「女の部屋（バイオリンのための）」はフォルムを変えながらも実在し、ふたりの共通の空間も吹き抜けのリビング兼オーディオスペースとして成立している。将来の親との生活、子供の誕生など、より具体的に試行錯誤されて建築化された。この作品は今年のINAXデザインコンテストで銀賞を受賞した。



タカマスヨシコ　考えごとの家

1998年5月竣工

この自宅の計画は、ほんの軽い気持ちから始まったものでしたが、SDレビューへの参加で加速がつき、あれよあれよという間に建設されて、もう棲み始めて半年が経とうとしています。不利な条件もあって、それなりの苦労もありましたが、それよりも計画が少しずつ現実化していく過程が楽しくて楽しくてしょうがないという毎日でした。現在、計画とほぼ同じ形で建ち上がり、計画通り、2階の机で考えごとをし、机の上で寝ています。

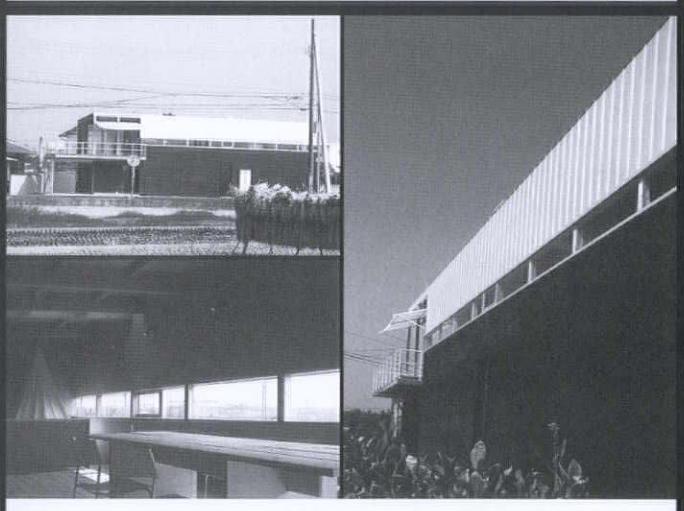
ホームページ＝http://www.yonago-k.ac.jp/Archi/Homepage/takamasu/index.html



西沢立衛
ウィークエンドハウス

1998年8月竣工

SDレビューに参加して建物の創作過程に何か影響があったかどうか聞かれると、なかったような気もするし、あったような気もします。よくわかりません。僕は展覧会に際して大きな模型をつくったのですが、一度そういう詳しい模型を作ると、建物の全体像が再把握できるので、そういう意味では良かったような気がしています。実際の建物の方は、工期が延びてしまいましたが、無事完成することが出来ました。



松本 明　I·HOUSE

1997年10月竣工

建物が竣工したのは昨年の秋も深まる頃、周辺に広がる水田は、すでに収穫が終わり、水平の窓から見渡せる風景は、豊かな緑から、薄いベージュ色に変わっていた。

SDレビューの出展は工事最中の事であり、建主には、展覧会から建物での新しい生活を始めるに至るまで、我々と共通の体験をしてもらえることとなり、建築への関心をより深めてもらえたと思う。そして我々自身も、建築を設計していく礎ともなる貴重な体験であった。

その他の入選作品のその後

浅野 静／エトスアソシエイツ+新井清一／アライアーキテクツ　H邸	竣工未定
大野 勝+境静也+鉾岩崇／佐藤総合計画　佐賀県宇宙科学館（仮称）	1999年2月予定
金井謙介+西田勇人　法事の家	竣工未定
金子泰洋　M邸	計画変更のため中止
川人洋志　Triplet	1999年12月竣工予定
建築研究室高安重一事務所+佐久間達也+橋爪宏直+重富博之　海上ばなな	別の計画に移行
佐藤孝秋+横矢吉弘+山川 尚／フォレストシップ　台北市迪化街・歴史地区のまちづくりデザイン	1999年10月竣工予定
鈴木エドワード建築設計事務所+東日本旅客鉄道株式会社+（株）JR東日本建築設計事務所	
（仮称）さいたま新都心駅	2000年4月竣工予定
藤本壮介　D-HOSPITAL	竣工未定
松澤 穣　衛の家	竣工未定
三浦明彦+安田幸一+神成 健+北川啓一／日建設計　P社箱根美術館	2000年12月竣工予定

経過報告

1998.05　公募開始
SD9805号にて応募要項を発表し、作品募集開始。
ポスター製作は工藤強勝氏／デザイン実験室
応募要項は以下の通り
応募者の資格：特に必要なし。
プレゼンテーション：
1.　設計意図を説明するために必要と思われる図面、写真等特に制約はなく、各自選択すること。
表現方法は自由であるが、プレゼンテーションそれ自体の技術や密度は、審査に当たっての主要な評価の対象とはされない。
2.　プロジェクト名、建築用途、施主名（事業主体名）、工事予定期間、主体構造、主要仕上げ材料、建築面積、延床面積。
3.　400字以内の設計趣旨文（省略してもよい）
以上をA3判用紙（420×297mm）4枚以内にまとめたもの、パネル化は不可（クリアファイル等に入っている場合は審査時に取り外します）。設計者氏名、設計組織名は一切記入しないこと。2、3は添付書類に含めず1と共にA3判用紙に記述することに注意。
添付書類：
プロジェクト名、応募者（＝設計者）名・フリガナ、応募者の年齢、職業、勤務先名とその住所（以上、組織の場合は、その担当者について明記）、応募者への連絡先（自宅か勤務先か明記のうえ、郵便番号、住所、電話、FAX番号）、共同設計者名、設計者略歴（入選の際、展覧会パンフレットに掲載いたします）。以上の事項をA4判用紙に記載したもの。

1998.06.23　作品受付開始
1998.07.01　作品受付締切
応募総数269点（昨年207点）

1998.07.09　審査
例年通り、鹿島出版会会議室にて行われた。
4人の審査員による審査の結果、入選15点が選ばれる。

1998.07.10　展覧会出展依頼
15組の入選者に入選通知と展覧会の出展依頼をする。
出展依頼は以下の通り。
・模型
1つでも、分割されていてもよいが、全体で以下の制限以内とする。
大きさ：幅+奥行+高さ=5m以内
重さ：20kg以内
素材：自由
素材：自由
・ドローイング
枚数：自由。但し、合計の面積が2m²以内。
素材：自由（こわれにくく、なるべく軽量なもの）
・図面
作品の内容を具体的に説明するために必要な、平面図、立面図、断面図、詳細図等。
大きさ：B4判　枚数：6枚以内

1998.09.14、15　東京展搬入
例年同様に代官山のヒルサイドフォーラムの3フロアを使用して展示。
東京都立大学の学生のアルバイトと共に搬入および展示作品設置。
会場構成はスタジオ建築計画。照明計画は角舘政英氏／L.F.A.（ライト・フィールド・アーキテクツ）。

1998.09.16　東京展開催　（～09.27）
会場：ヒルサイドテラスF棟ヒルサイドフォーラム
東京都渋谷区猿楽町18-8
ポスター製作は工藤強勝氏／デザイン実験室

1998.09.16　審査員座談会
展覧会場での作品展覧後、審査員の座談会を行う。
座談会では各出展作品の講評と共に鹿島賞、朝倉賞、SD賞、そして、今年より新設された新人賞の4賞が選定された。4賞の入選者は以下の通り。
鹿島賞：「蛙山荘」　尾沢俊一
朝倉賞：「家具のない家　House without Furniture」ジン・タイラ+三好隆之
SD賞：「LGS構造の家」
手塚貴晴+手塚由比／手塚建築研究所
新人賞：「角谷邸新築工事――フォアタワー」
山田幸司建築都市研究所

1998.09.16　展覧会レセプション・パーティー
午後6時30分より審査員、出展者を交えてのパーティが行われた。審査員による総評もあり、盛況の内に終了。

1998.09.27　東京展終了
来場者数1914人を記録（一日平均159.5人）。

1998.09.28　東京展搬出

1998.09.29、30　大阪展搬入
大阪芸術大学の学生により搬入および展示作品設置。

1998.10.01　大阪展開催（～10.11）
大阪芸術大学主催により、大阪展が開催される。
会場：大阪芸術大学芸術情報センター展示ホール
大阪府南河南郡河南町東山

1998.10.03　大阪展レセプションパーティ
毎年展覧会開始の週の土曜日に行われる大阪展のレセプションパーティには、今年も元審査員・高橋靱一氏や入選者、在阪建築家、学生など、多くの方々の出席のもと、なごやかなパーティとなり、新人賞の賞品（大阪芸大教授の持田総章氏の作品）も披露された。
　大阪展主催関係者からは、審査員、入選者のより多くの参加が熱望されている。この場を借りて編集部からも改めて大阪展パーティへの参加を呼びかけたい。

1998.10.11　大阪展終了

1998.11　4賞入賞者に入賞を通知

SDレビュー1998
第17回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

SD Review 1998
The 17th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings

[主催]
鹿島出版会SD編集部

[大阪展共催]
大阪芸術大学

[後援]
朝倉不動産株式会社

[協賛]（SD賞）
ノールインターナショナルジャパン

[審査員]
林 昌二（建築家）
播 繁（構造家）
岸 和郎（建築家、京都工芸繊維大学助教授）
團 紀彦（建築家）

[東京展会場構成]
元倉眞琴+スタジオ建築計画（担当：奥野公章）

[東京展会場照明計画]
角舘政英／L.F.A.（ライト・フィールド・アーキテクツ）

[大阪展会場構成]
大阪芸術大学建築学科

[作品写真撮影]
堀内広治
泉 弘子
金子昌弘
（新写真工房）
＊本特集内で、クレジットのない写真は全て堀内広治氏撮影

[東京展]
会期：1998年9月16日（水）－9月27日（日）
　　12:00-19:00
　　土・日・祝日も開催
会場：東京都渋谷区猿楽町18-8
　　ヒルサイドテラスF棟 ヒルサイドフォーラム

[大阪展]
会期：1998年10月1日（木）－10月11日（日）
　　10:00-17:30
　　土・日・祝日も開催
会場：大阪府南河内郡河南町東山
大阪芸術大学芸術情報センター展示ホール

YAZAKI

ビル空調機リニューアル
合理化委員会の評決です。





YAZAKIの吸収冷温水機スーパーアロエースは、コンパクトなユニット設置タイプです。場所を取らず、ロッカーのように整然と並べて設置できます。エレベーターや階段から容易に搬入でき、工期の大幅な短縮が可能。ビル空調機のリニューアルに最適です。

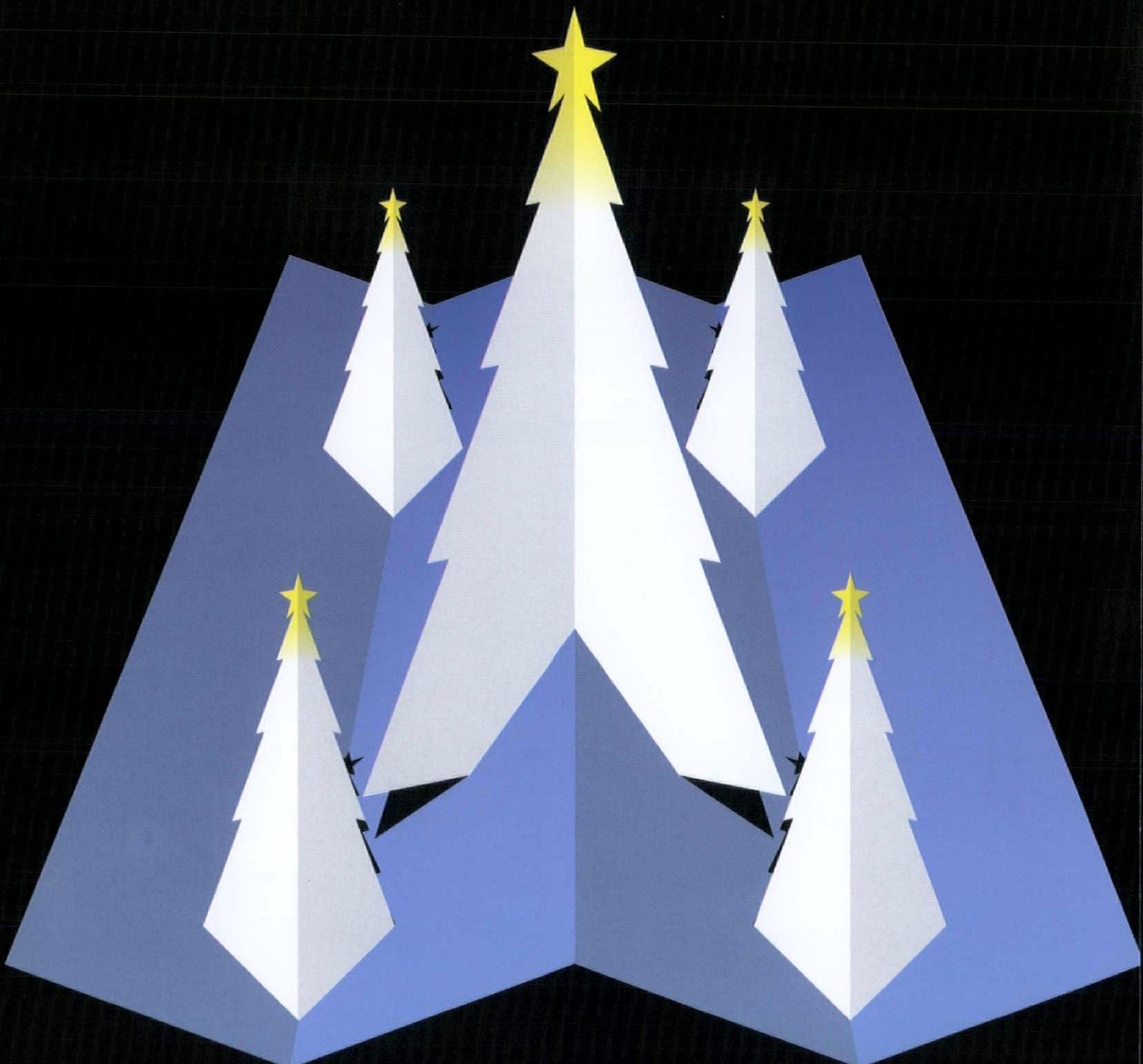
ユニット形冷温水機のパイオニア

ロッカー設置に最適な スーパーアロエース

矢崎総業株式会社

Y-CITYワールドヘッドクォーターズ：〒410-1194 静岡県裾野市御宿1500 TEL0559(65)3002
空調機器事業部：〒435-8575 静岡県浜松市子安町1370 TEL053(461)5112

札幌支社 011 (852) 2914　仙台支社 022 (284) 9115　東京支社 03 (3298) 3140
名古屋支社 052 (833) 8415　北陸支社 0764 (41) 6516　大阪支社 06 (458) 4825
中国支社 082 (923) 2115　四国支社 087 (833) 3336　九州支社 092 (411) 4835



連載⑫森島紘史の起こし繪図

日本のかたち紙考

聖夜

最終回

クリスマスを象徴する色は赤・白・緑。赤は十字架に架けられたキリストの血の色、白はキリストの潔白を表わし、緑は厳しい冬を耐え抜く樅の木の色で永遠の生命を意味している。クリスマスに飾る樅の木の始まりには諸説がある。

楽園を追われたアダムがもってきた1粒の実から樅の木が育ち、その木で十字架が作られたからという説。また、古代ゲルマン民族には、樫の木の前で人間をいけにえとして神に捧げる習慣があった。使徒ボニファティウスがキリストの愛を説きその過ちを諭し、樫の

SD9812
58



シャルロット・ペリアン

20世紀を生き抜くインテリア・デザイナーの思考のプロセス

©Archives Charlotte Perriand 1998　Photo：Pernette Perriand

創造性の源　La source de votre créativité?
生まれたこと。私が生まれてから出会った人、ル・コルビュジエもそうだし、
出会った日本人、前川國男、坂倉準三とか……。
私にとって世界が広がった。そのおかげで日本にも行けたし……。
日本へは工業技術の指導のために行きましたが、そこで私は与えることと同じぐらい
いろんなことを日本から学びました。それは交流なんです。
なぜ交流が出来たかというと、私は日本に行った際、
文化と思想に対して植民知的態度はとらなかったからです。

日本に来て感じたこと　Qu'avez vous ressenti en venant au Japon?
ひとつ大切なことがありました。
日本の建築はとても民主的で、日本全土にわたって同じ建築物が建てられていました。
特に私が行った時はそうでした。伝統的な家をつくっている要素は、
天皇の家であっても、農民の家であっても同じだった。
違いは木の質、布の質、紙の質であって、
そういうものをどれだけ頻繁に取り替えるかだけで、基本的な構造は同じだった。
これは世界唯一の例です、日本しかありません。

日本人へのアドバイス　Votre message aux Japonais?
日本には都市計画が必要です。自然を侵さない計画です。
建築物が無秩序に建つのを防ぐ計画です。
まずリサーチをして土地の使い方を決めなければいけません。
保護する土地もあるでしょう。自然も都市に取り入れなければいけません。
逆に私は日本人の人に質問したい、「どんな風に生きたいですか」って。
その答えから何か引き出せるかも知れません。

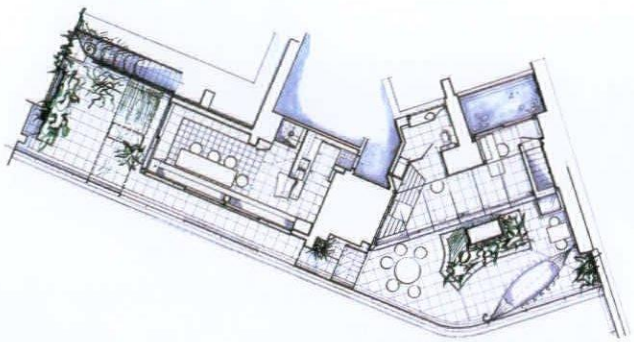
●シャルロット・ペリアン　Charlotte Perriand

（「シャルロット・ペリアン」展会場（OZONE）での上映ビデオより）

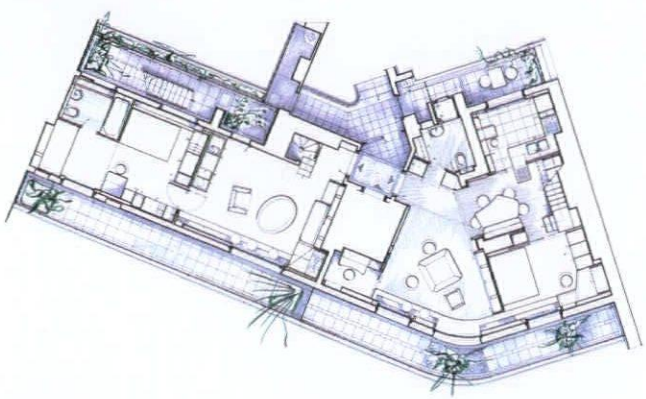
●Project

「住まいの空間　パリの屋根の上」の改修

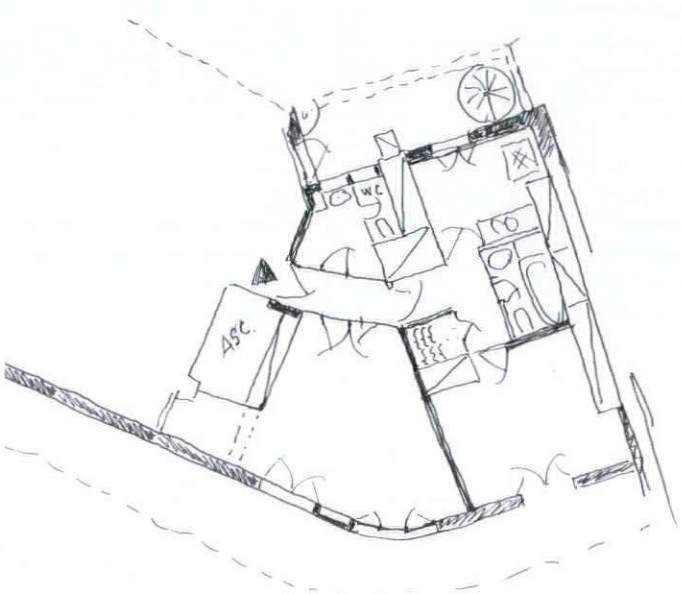
設計＝シャルロット・ペリアン、1994年



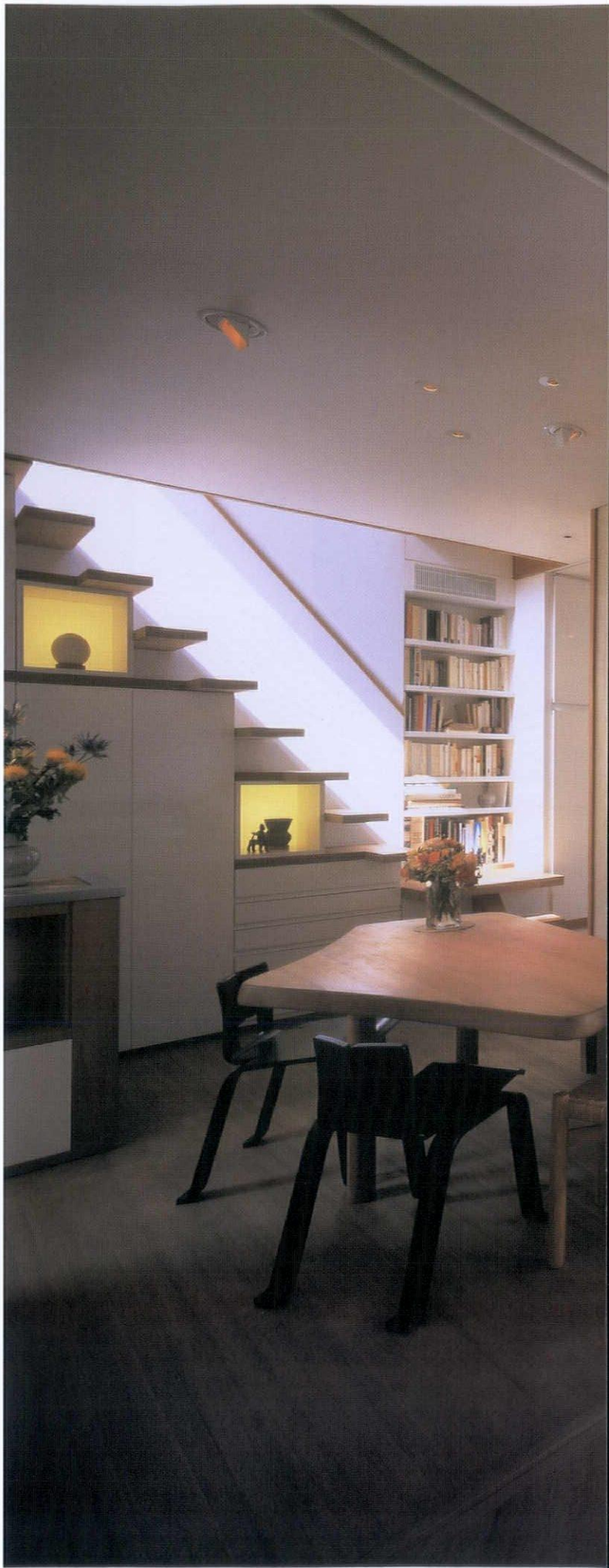
改修後の10階平面図



改修後の〈住まいの空間　パリの屋根の上〉、9階平面図



ペリアンによる改修前の〈住まいの空間　パリの屋根の上〉のスケッチ（9階右側部分、1998年11月）
改修前は扉で空間が細かく仕切られていたが、改修によって無用な壁をすべて取り払い、全体を広いひとつの空間として利用するために、日本で学んだ開け閉てできる引き戸を多く利用している。



© Charlotte Perriand 1998



撮影＝二川幸夫

●Interview

「シャルロット・ペリアン」展におけるデザイン・プロセス

パリの装飾美術館、ロンドンのデザイン・ミュージアムを経て東京へ

「20世紀のインテリア・デザインのパイオニア　シャルロット・ペリアン」展
会期：1998年10月3日（土）～11月3日（火）
会場：パークタワーホール
東京都新宿区西新宿3-7-1　新宿パークタワー3F

進来 廉
インタビュアー：松隈 洋

資料提供＝リビング・デザインセンター



展覧会場入口（ホワイエ）


1927-37年の作品


1950-55年頃の作品


1963年以降の作品

日本のペリアン展までの経緯

――まず、ペリアン展を日本で開催することになったきっかけをお伺いしたいと思います。

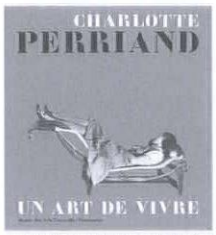
実は10年以上前から柳宗理さんと、機会あるごとに一度日本で彼女の展覧会をやる必要があると話していたんです。ペリアンは戦前から、そして戦後も何回も来ているし、日本とのつながりが大きい。また彼女は「住」に最も関心が深く、戦前と戦後の日本の住居について、つねづね明確な意見を持っているからです。日本のプレハブは、技術は進んでいるけれども、日本の住居に合ったものをつくっていないと……。

――生産の論理と効率化ということだけでつくっている。

生産の論理と効率など目先のことだけで、環境を含めて総合的視野を忘れ去っている。だから、植民地住宅みたいなものになってしまっている。日本でも一番大事なのが「住」なのに。そういう意味で、日本に「活」を与える必要があると思ったんです。

――日本展については、進来さんは1985年にパリの装飾美術館での「生活の芸術」展を柳さんと見に行かれて、さらに1997年に進来さんがロンドンのデザイン・ミュージアムでのペリアンの展覧会に行かれたことで、ペリアンも含めて日本でこんな感じでやりたいなという考えをすでにお持ちだったわけですね。ところで、進来さんご自身が会場構成を含めてのパイプ役として全体を統括していく責任者になっていく過程というのは、ペリアンとのやり取りの中から出てきたんですか。

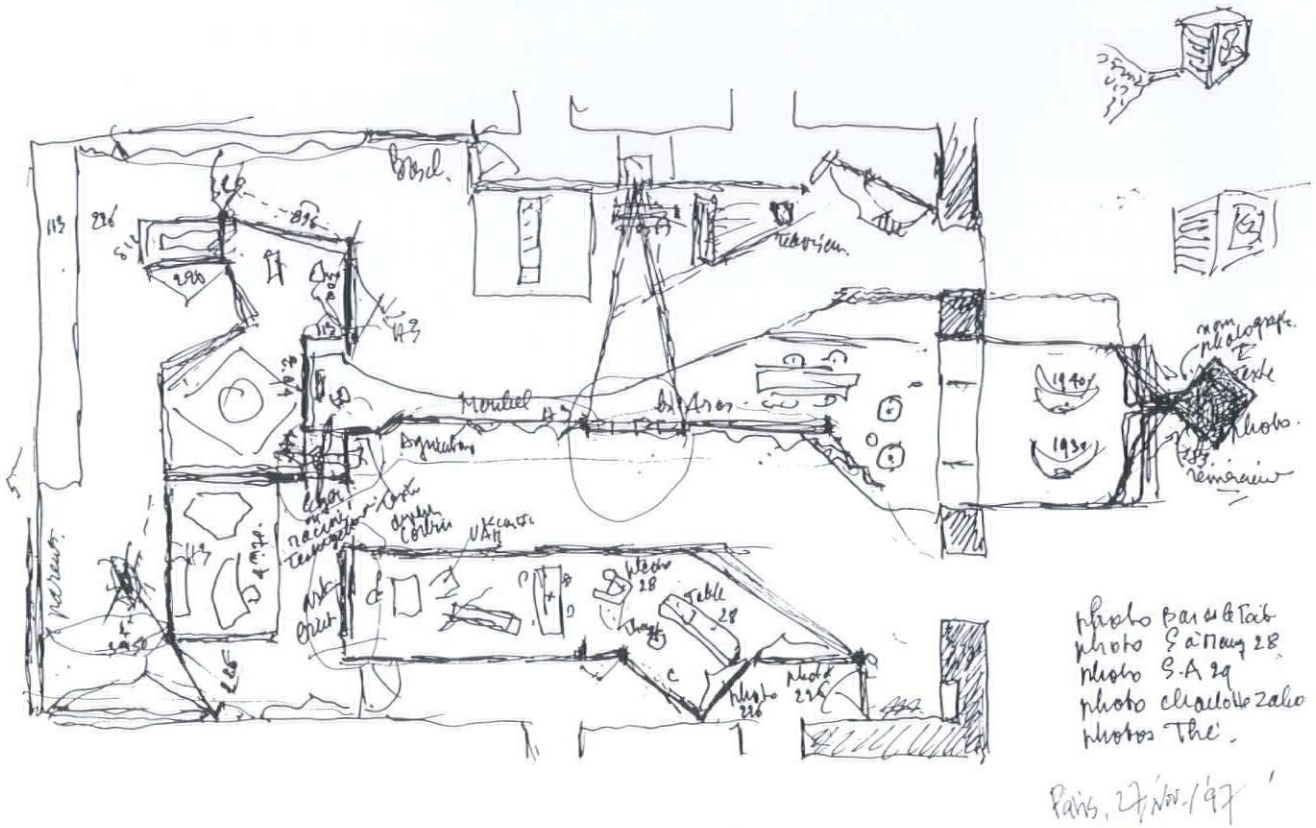
だって、恐らく僕しかいない。言葉の問題もあるし。40年間一緒にずっとやっていたから気心が知れているんですカッカ怒っても、また、



パリの装飾美術館での展覧会カタログ（1985年）


ロンドンでの展示作品（1996〜97年）／独立後の最初の作品である変形食卓〈Table en Forme〉（右）と変形事務机と棚（Bureau de J.R.Bloch）（左）、1938年


進来氏とペリアンの一人娘ペルネット・ペリアン・バルザック氏（ロンドンの展覧会場、1997年）



「シャルロット・ペリアン」展（東京）のためのペリアンによるエスキース1（S＝1：100で描いたもの。1997年11月27日）。ロンドンのデザイン・ミュージアムでの展示内容を東京展の展示スペースに合わせて配置を決めている。

始まったと思って、それに乗せられないしさ（笑）。

——パリの装飾美術館での展示は、やはりペリアン自身によるデザイン・コンセプトでまとめられた会場構成なんですか。

もちろん。これには僕は全くタッチしていない。娘のペルネットがコーディネートをやったんです。美術館まで近いからね。ペリアンは自分でやらないと気が済まない（笑）。

——今回のOZONEでの会場構成でも見られた、コルビュジエのブースがまずあって、そこから次第に自分のものを展開していくというコンセプトは3会場とも共通なのですか。

そうです。今回のOZONEの場合も、コルビュジエのアトリエにいた時代から独立後の時代に移り変わる場所に、レジェの彫刻を置くつもりだったのですが、いろいろな理由でできなくなった。だから、その替わりにギャラリー・タイセイにあるコルビュジエの彫刻をここに置けばちょうどいいんじゃないかと提案したわけ。スペースとしても、大きさとしてもちょうど良いと思って。そうしたら、彼女は「ノー」って言うわけさ。それはなぜかと言うと、この場所からの私はコルビュジエを去って独立したからだと！

——その仕切りが重大な意味を持っているんですね。ずっとコルビュジエに引きずられているみたいなことになってしまいますから。

そう。これからは私の世界だと。それで結局、何もない水を張っただけの空間、いわば「床の間」にしようと提案すると、ペリアンはOK！。

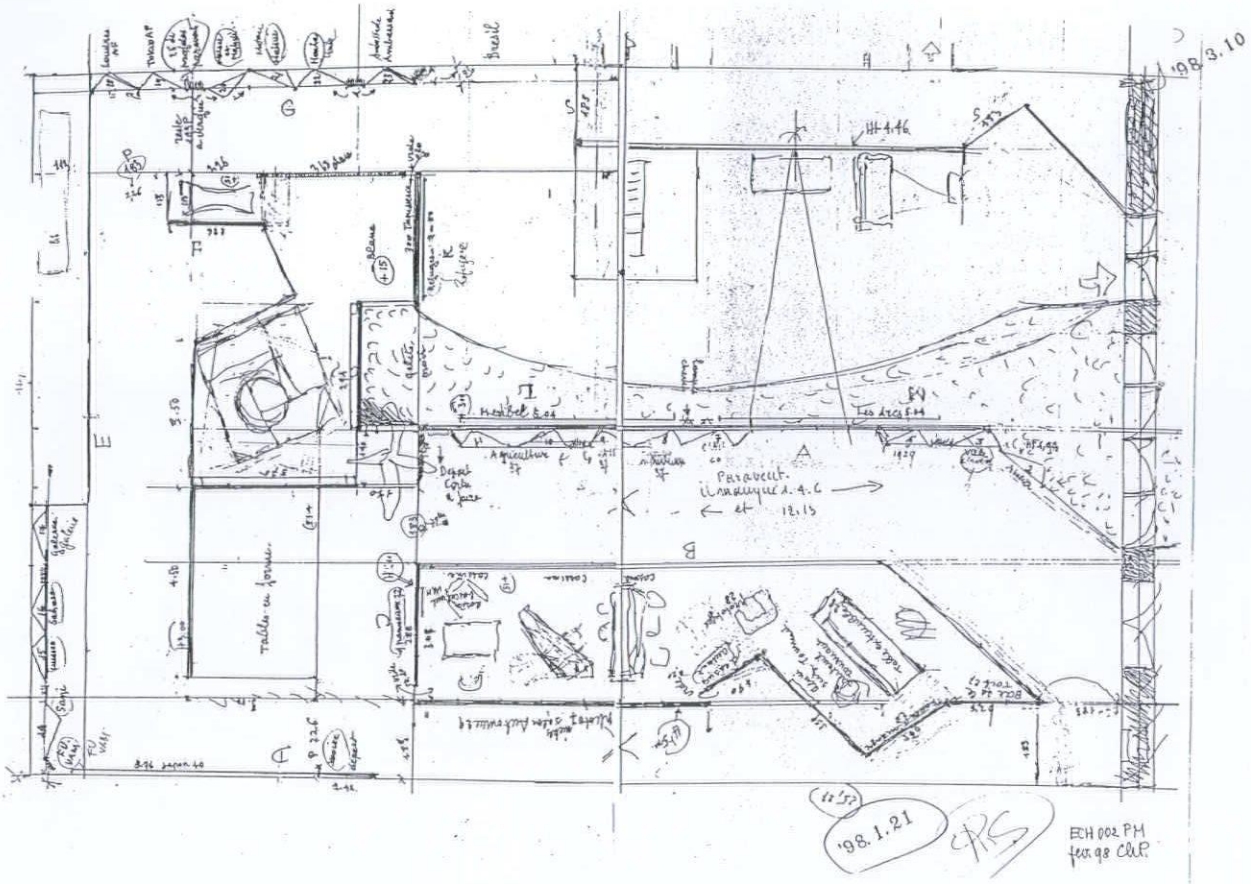
——図面を見るとロンドンの時は、このコルビュジエの時代から続く空間にはずっと壁があって、全然空間的に透けていないですね。今回はかなり空間的な透けがありますね。これはペリアンのアイデアですか、進来さんのアイデアですか？

それは両方でしょう。

——展示の部分のコルビュジエ時代のパネルですが、これは屏風仕立ての感じを出したかったのでしょうか。

というよりも、OZONEでは長さが足りないので、そういうふうに折らざるを得なかった。

——でも、屏風の説明パネルと作品とを対称的に並べるやり方は、どの会場でもほぼ同じですね。オリジナル作品と、それを説明するものというか、それの背景にあることを並べて見せていく方法ですが……。



「シャルロット・ペリアン」展のためのペリアンによるエスキース2（S＝1:50で描いたもの。1998年1月21日）。屏風のパネルと家具の配置を書き入れている。

そう。だから全体が時代的に4つに分かれています。

――パネルのカラーリングについても、装飾美術館から継承されているのですか？

ロンドンでやったものをだいたい継承しているんです。さらに施工現場で新しい色を加えましたけれど。

――パリのペリアンのところへは何度も打ち合わせに行かれたんですか。

全部で4回行ったんですが、そのうち2回は模型を持って打ち合わせしました。

――一番最初に行かれた時は、どういう打ち合わせをされたんですか？　例えば、ロンドンのものをどうアレンジしていこうかという話から始められたんでしょうか。今度の会場はこういう大きさだよとか……。

面積が400m²で天井高が4m50cmあれば日本でもできるということです。最初の打ち合わせの昨年11月に、OZONEの会場の100分の1模型とスケッチを持っていった。その後、50分の1で。というのは、必ず彼女は模型と一緒にレイアウトをしながら進めるからです。

ペリアンのモデュロール

――そうすると、当然それをお見せになって、進来さんが描かれた100分の1の図面にペリアン本人がトレペを重ねて、自分でなぞって、ああしたい、こうしたいと……。

そう。面白いなと思ったのは、ペリアンはやはりコルビュジエのアトリエに10年間いたから、基本的にいわゆるモデュロールで空間を考えているわけですよ、プロポーションを決めるのにね。それは今でも変わらない。ここで使っている36cmとかその倍の72cmという寸法は、パリの装飾美術館での屏風パネルによる展示から来ています。それを知らないと、一見複雑な構成に見えるけれど、理解してしまえば単純な分かり易い組み合わせです。

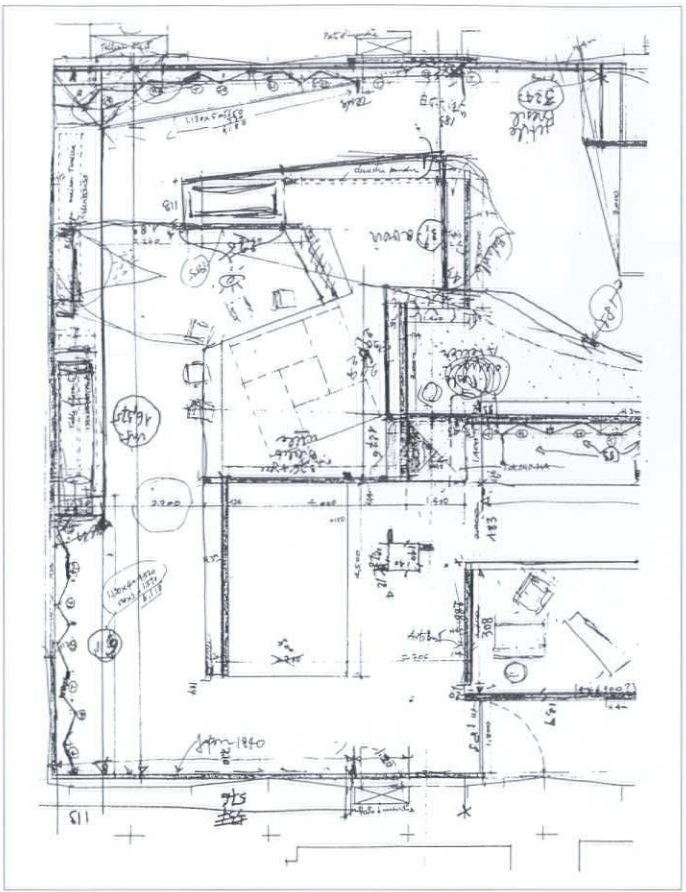
チームの大切さ

――会場の入口ホワイエ部分のデザインについては、進来さんがオリジナルに考えられたそうですが、ペリアンとのやり取りはあったのですか？

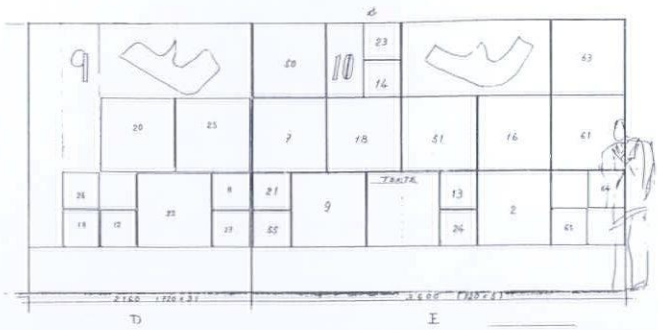
というより、何回かやりとりがあって、最初のあんどん照明は床に着いていたわけ。しかし、そうすると電球の交換ができず、プロポーションもおかしいので、浮かせるように提案したら、ペリアンはこれをすぐ認めてくれた。強烈な彼女の個性でも、自分のアイデアに固執はしないし、理解が早く柔軟です。

――要するにやり取りの中で、「交流」と言いましたか。何か独特なものの言い方をしていますよね。コラボレーションのことをチームと言ったのかな、やり取りをする人たちのことをとても大切にするんですよね。

フランス語では「エキップ」と言うんです。チームを大事にする。だから、それは建築家に限らず、例えば木工、金工の名人やガラスの専門家、照明、設備などのエンジニアとかともね。ジャン・プルーベもペリアンと同じような性格の人で、自分ひとりで全部できるというようなことを押し通すことはしなかった。



「シャルロット・ペリアン」展のためのペリアンによる最終チェックの一部（1998年4月29日）。寸法にこだわりながら、細かく配置を決めていく。



ペリアン自身のモデュールによる展覧会用のパネル割り図面。大きなパネルのモデュール寸法は72cm×72cm。



展覧会場（OZONE）での展示パネル　　撮影＝進来廣

ペリアンの思考の根源

――進来さんは、ペリアンとの長いお付き合いのなかで、彼女のものの考え方の根っこにあるのはどういうものだと思いますか。

それは彼女の「好奇心」でしょう。僕はペリアンは基本的にすごく好奇心が強いと思う。それは今も変わらない。

――ペリアンは常に新しくあるというか、新鮮であるものをつくり続けることの大切さみたいなことを繰り返し言っていますよね。

私にとって拒否するものは何もないと。何でも受け入れると。ただ、クリエーション、つまり創造と慣例とは一致しないよと。

――ペリアンは、大量生産のような工業化における単体と一品生産としての単体のものとどちらを彼女の中でより大事にしようとしているのでしょうか。

それは両方だと思う。コルビュジエもそうでしょう。あれだけ「工業化」と言いながら実際にやっているのは、まさに手づくりのものでしょ。ペリアンもその点は全く同じで、彼女の工業化のものというのはすごくまねしやすい。例えばペリアンの木を使ったユニークなテーブル（1938年作）があるでしょう。僕は彼女に「日本は木の国だから、これを日本で製作したらどう？」って何回も言ったんだけれど……。結局、「ノー」。

――その「ノー」の意味するところには、深い意味があるのでしょうか。

要するに、似て非なるものがたくさん出回ってしまうから！

――そうすると、やはり大量生産なり量産化することによって、自分が持っている最も純粋な、最も根っこにあるものが変質してしまったり、全然違うものになっていってしまうことに対する拒絶というか、守らなければいけないという意識があるのでしょうか。

例えば、コルビュジエの〈マルセイユ・ユニテ・ダビタシオン〉では、彼女が50年ほど前に日本に来て影響を受けたと思われる「オープン・キッチン」のプロトタイプを創造しましたが、今では、どこの国でも見られるし……。日本は逆輸入している。

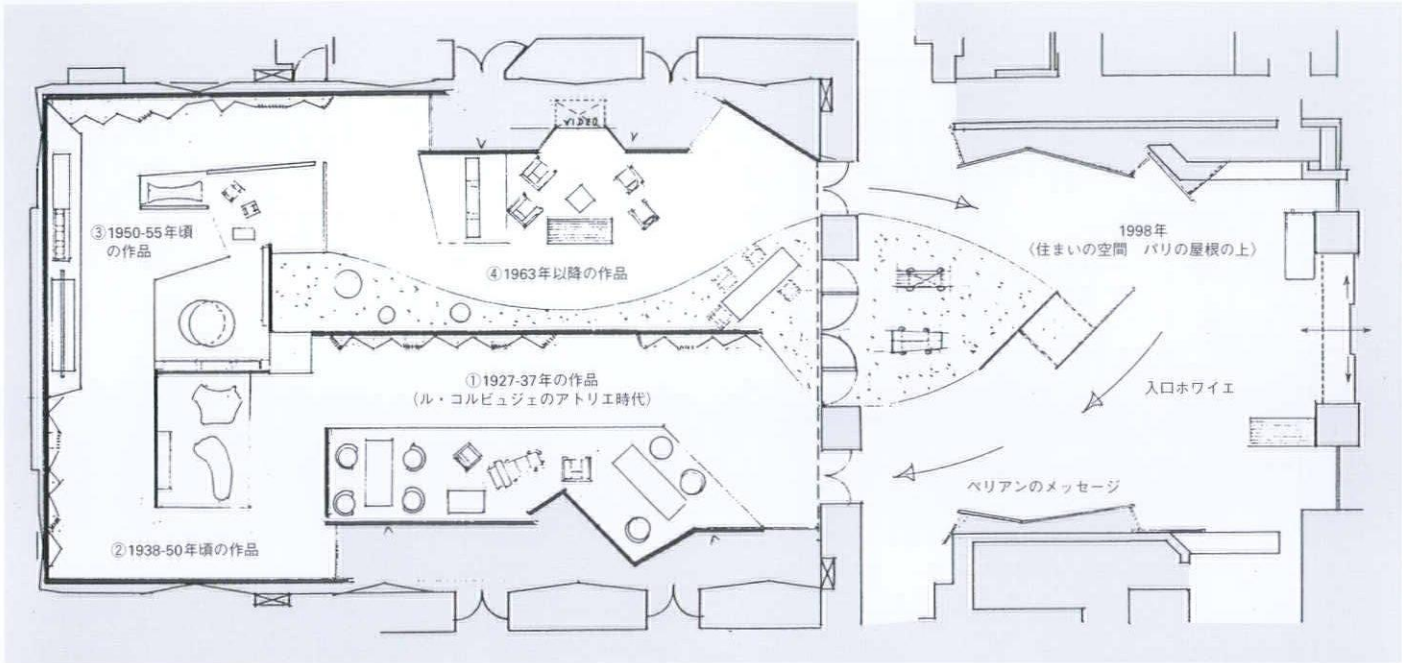
――世俗化してしまうものに対する抵抗感みたいなものでしょうか。そうすると、ペリアンの思想は生活の中に入り込むということではあるんだけれども、それは必ずしも量産化して誰もが手に入れられるということではなくて、もうちょっと純粋なメッセージとして発しているところが大切なんでしょうね。

いわゆるアノニマスの極限みたいなものじゃないですかね。

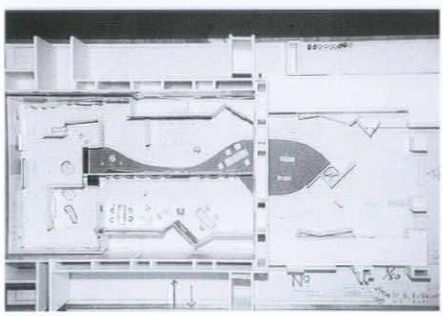
日本への期待

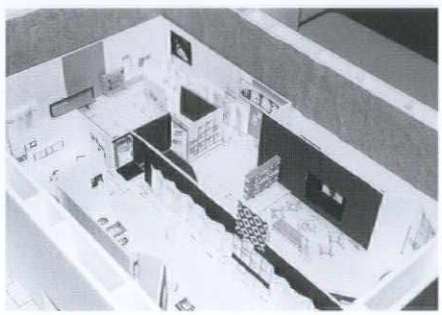
――ペリアンは、今の日本のことはどんなふうに見ているのでしょうか。

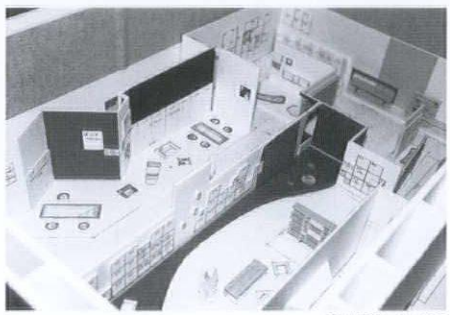
僕からすると彼女はすごく日本に期待していると思う、特に若い人に。例えば技術や材料。彼女はできるだけ軽くて薄くて効率の良いものをつくりたい。それは技術として可能であると考えている。ただし、耐候性について非常に大きな比重を置いている。もうひとつはやはり「個性」ですね。今は単一化や統一化する傾向がますます大きくなってきている中で、個人というか「個性」がつぶれてしまうことを大きな問題であると思っている。



展覧会場（OZONE）平面図　S＝1:300







模型写真

資料提供＝進来廉

――新しい素材や技術に対する好奇心というのは、相変わらず強い人なんですか？

ええ。今言った通りです。コルビュジエのところにいた時はまさに最前線でしょう。でも、コルビュジエのところを出てからは、フェルナン・レジェの影響をすごく受けている。それからピエール・ジャン・ヌレとジャン・プルーベ。フェルナン・レジェは、コルビュジエと違ってずっと骨太。コルビュジエはすごく神経質、基本的にはそういう性格。レジェは、それよりいわゆる土着性というか、庶民的でわかり易い。ペリアン自身がもともとそういった性格があると思うけれど。

住空間への意識

――進来さんご自身の、この展覧会を通じて日本にペリアンの思想を伝えることのエッセンス、一番大事なところは何でしょうか。

環境を含めた住空間への意識。それと日本は「植民地！」ではないんだということ。

――欧米の後追いしてまねしちゃうことって、いいことだけじゃないよ、ということですね。

日本には良いところも悪いところもある。欧米だって同じこと。その悪いところばかりまねているように見える。そこを一番問題として伝えたい。

――戦前に全く同じことをペリアンも言っています。夏目漱石が言っていることにも近いのですが……。皆が近代化でヨーロッパのまねをしているけれども、良いことばかりをまねすることに必ずしもならないから気を付けなければいけないと。

現在の日本人は純粋培養化されて育ってきているから付け焼き刃が多く、益々ひ弱になっていくと思う。日本人は団体だと気が強いけれど、ひとりになると青菜に塩のようにだめじゃないですか。それは国際舞台で特にひどい！

――それは文化の脆弱さみたいなことで言えば、みんな同じ方向を向いて走っているというのはあまり良い状態ではないですね。

そうですね。でも僕は若い人たちがこの展覧会を見てびっくりすると思ってます。絶対に影響を受ける。それは当たり前です。しかし、その影響の受け方が問題で、それを自分のものとして消化してしまわないうちに何かの設計なりデザインにそのまま出してはだめなんです。本当は影響を受けながら、ちょっと俺は違うぞとか、一拍置けるかどうかの間を持てるか、心の余裕を持てるかがとても重要なんです。ペリアンは日本の真髄の影響を受けましたが、彼女は完全に自分のものとして創造しています。あまりキョロキョロせず、他人のことも気にせず、自分でモノを考えて堂々と生きることですね。

●すずき・れん／建築家
●まつくま・ひろし／前川建築設計事務所

（1998年10月16日、於：レン建築設計事務所）

●Text

モダニズムの広がりとペリアンの日本

シャルロット・ペリアン展の向こうに見えるもの

松隈 洋

「私は一度も破壊はしていません。破壊など必要ないのです。今までの蓄積があってこそ私たちは前に進むことができるのです。記憶を大切にして、確固とした基礎の上に新たなものをつけ加えることによって、多様性を培っていくことが重要なのです」。

「私はデザイナーであったことはありません。家具のために家具をつくったこともありません。建築をしてきたのです。建築の中に生活を入れ込むことが大切なのです」。

去る10月2日、展覧会のオープニング・セレモニーの一環として、衛星回線を通じて行われた記者会見の席上、映し出されたテレビ画面の中に、パリの自宅から元気な姿を見せたシャルロット・ペリアンは、質問に答えて強い口調でこう述べた。印象的な光景だった。図らずも、この言葉の中に今回の展覧会のもつ意味を読み取ることの難しさが象徴的に現れている。同時にそれは、私たちを、モダニズムがその始まりの時点でもっていた広がりへグイッと引き戻す力も持っていると思う。というのも、モダニズムの意味を私たちがどこかで誤解し、いまだに捉えそこねていることを、ペリアンのこの一言が鋭く突いてくるからだ。たしかに、彼女の師コルビュジエも次のような言葉を残している。

「人は私を革命家と決めつけます。ここで告白いたしますが、私は今までに唯一の師しか持ったことがないのです。過去という師です。そして唯一の教育しか受けたことがありません。過去から学び取るということです」。*1

やはり、モダニズムの丁寧な読み取りが求められているのだと思う。そこで、ここでは、ペリアンの歩み、彼女の言う「交流」に沿って、そうした点について考えてみたい。

コルビュジエ、日本、民芸との出会い

ペリアンの在籍した当時、コルビュジエのアトリエでは何が共通のテーマとされていたのだろうか。1929年のサロン・ドートンヌ展が行われているちょうどその時、アルゼンチンに招かれ、講演していたコルビュジエの演題に「家具の改革」という項目がある。*1 それによれば、コルビュジエは、まず、従来の重々しい装飾家具を、「社会的地位を示すための手段」であり、「場所ふさぎ」に過ぎなかったと批判し、改めて、家具＝道具とシンプルに再定義する。そして、それらを用途によって収納棚、椅子、テーブルの3つに整理する。さらに、収納棚は規格化し、間仕切り壁と一体にすることによってそれぞれに自由な配置と広い空間が確保できること。椅子は、それを使う人の姿勢（仕事、食事、休息）による座り方の違いに注目し、足と座と背のさまざまなフォルムの組み合せによって適した椅子を生み出せること（興味深いのは、ペリアンの代表作〈シェーズ・ロング〉は、長時間の走行でも疲れないスポーツ車の座席にヒントを得たというコルビュジエの説明だ）。また、テーブルは、規格化されたスチール・パイプの足と天板との組み合せによって使い方のバリエーションが自由にできることを説明していく。こうして、「家具」という概念は消失し、「内部の設備（エキップメント）」という言葉が生まれたのである。

一方で、コルビュジエは、同じ頃に、新しい技術によって壁を構造から解放し、自由な平面と自由なファサードを実現する空間概念、「ドミノ」の提案も行っている。そして、それは、戸建て住宅にとどまらず、集合住宅や事務所、都市計画へもそのまま適用できる方法＝システムとして考えられていた。

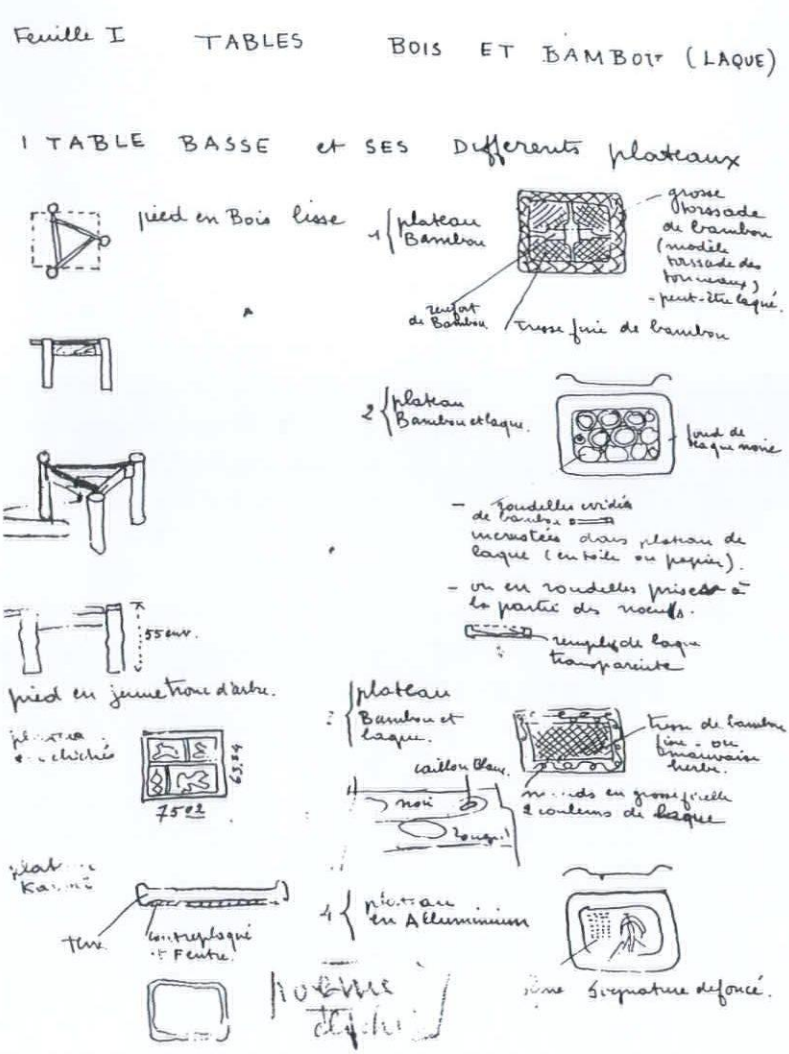
このような思想にペリアンは出会ったのである。もちろん、そこには、戦災や都市化による住宅難、貧困やスラムの増大といった当時の切迫した社会的問題を解決するためには、新しい技術に信頼を置き、「人間的な尺度」による空間の機能的な組み直しと、建設コストの削減や有効空間の拡大を図り、ゴミゴミとした都市に緑と太陽を取り戻すこと、が何よりも必要なのだ、という使命感が共有されていたに違いない。こうして、ペリアンは、分析と総合、要素への還元と再構成という方法によって、すべてを統一した考えの下にまとめあげていくことの大切さを自らのものにしていったのだろう。それは、単なるデザインの手法ではなく、モダニズムの視線というまったく新しい道具だったのだと思う。

けれども、やがてペリアンは、コルビュジエの志向する工業化の即物的な追求だけでは、現実の人々の生活は改善できないことにも気づいていく。そして、いまだ高価だった鉄、ガラスといった最新の材料や機械生産に頼らなくても、普通の人々が生活の中で使っている身近な素材や道具を新しい視点から再構成することによって、十分に機能的で豊かなものが生み出せるという道筋を発見するのである。コルビュジエの元を離れた直後の1938年、廃材を利用して生み出されたフリーフォーム・テーブルが、そうしたペリアンの転換点を示している。そこには、コルビュジエのいくぶん理念追求型のエリート志向とは異なり、職人との具体的なやりとりの中で原理を見つけ、そこから新しいものを作り出していこうとするプロセス・デザインとでも呼べるペリアン独自の方法の萌芽が伺えると思う。



シャルロット・ペリアンと前川國男。ル・コルビュジエのアトリエで。

資料提供＝前川建築設計事務所



「選択・伝統・創造」展（東京、高島屋）のためのシャルロット・ペリアンのスケッチ、1941年　資料提供＝坂倉ユリ

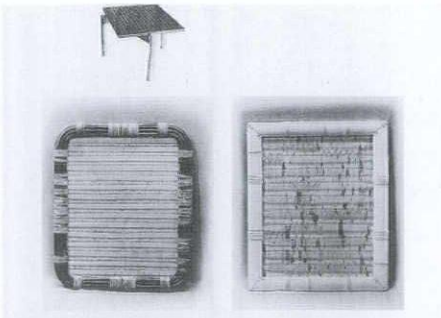
それは、身の回りの何げないものも工夫して使おうという発想において、より自由さが獲得されている。おそらく、こうした視点を持ち得たからこそ、1940〜42年の日本滞在の際の次なる出会いが生まれたのだろう。

さて、それでは、ペリアンは、初めて訪れた戦前の日本に何を見たのだろうか。

彼女は、日本の住居の中に、コルビュジエの言う「人間的な尺度」で規格統一された簡素な空間を見出す。そして、木造の均等な骨組みの中に、あらかじめ押入れや床の間、違い棚といった「内部の設備」が設けられていること、開け閉て自由な建具によって内部と外部が有機的に結びつきながら自由な平面と自由なファサードが生み出されていること、そこに置かれた食器やお盆、調度品までが、それを取り囲む空間と見事に調和して存在していること、などに驚かされる。さらに、それらが、貧富の差とは関係なく、まったく同じシステムに従っていることにも気づいていく。まさしく、自分たちの追い求めていた空間が、日本の普通の生活の中に、さりげない形で実現されていることを発見するのである。さぞかし衝撃的な出会いだったことだろう。

一方で、ペリアンは、品定めに見せられた輸出用の「美術工芸品」には全く興味を示さず、随行助手の柳宗理の案内で訪れた民芸館で、宗理の父、柳宗悦の収集した民衆的工芸＝「民芸」に触れて、それに深く魅せられていく。そして、その後、宗悦の紹介で各地の民芸の製作現場を見て歩くことになるのである。それは、もちろん、ペリアン自身の持っていたヴァナキュラーなものへの眼差しが、そうさせたと言えるのだろう。けれども、そうした出会いは、実は、民芸運動の中にも、ペリアンが目指していたものと共振する同時代的な思想があったからこそ、生まれたのではないだろうか。

すなわち、民芸運動は、民衆の生活の中で普通に使われてきた何げない道具や調度品に、これからの工芸の在り方、ひいては造形文化のよって立つ手がかりを見出そうとしていたのであり、そうした考え方は、そのまま、身近なものを用いて豊かなものを生み出していこうとするペリアンの方法論と重なる部分を確実に持っていたと思えるのである。奇しくも、柳宗悦が、1941年のペリアンの展覧会『選択・伝統・創造』と同じ年に書き留めた



低いテーブル（「選択・伝統・創造」展カタログより転載）

著作『工芸文化』の序文には、次のような言葉が記されている。

「美術文化から工芸文化への進展、そこに私は造形文化の方向を感じる。何も美術を拒否するという意味においてではない。美の方向は生活との結合にあると思える。すでにその必要はさし迫って来たのである。（中略）生活に即しない美を正しい美と呼ぶことは出来ない。生活に交わって美がますます美となる道がなければならない」。*2

例えば、ペリアンが日本滞在中に製作した竹製のシェーズ・ロングや座卓も、その地域で普通に手に入る素材の特性を活かしながら、要素に還元し、用途に見合うように再構成を施したものだったことからもわかるように、ここにある「生活との結合」という宗悦の考え方こそ、ペリアンに共感を呼び起こしたものなのではないだろうか。当時の新聞には、ペリアンの日本に対する印象が次のように書き記されている。

「日本の材料、技術は豊かであるが、これを生かしてゆく大きな意味の「デッサン」が欠けているので、このままでは錯綜したものができるだけで製品に生命がない。（中略）『精神』を『形』に表現する方法をよく研究し、固有の材料を生かすことを考究しなくてはならない」。*3

この言葉に見られる「精神を形に表現する方法」こそ、逆に、宗悦の描いた民芸運動の方向に連なるものだったのだと思う。

展覧会の直後、日米の開戦という急速に暗転していく当時の厳しい時代状況の中で、立ち消えになってしまったものの、民芸との出会いはペリアンのその後に大きな影響をもたらしたに違いない。

ペリアンのもたらしたもの

ところで、今回で3度目になる展覧会を軸に長く続いたペリアンとの交流が、逆に日本にもたらしたものとは何なのだろうか。

最もペリアンからの影響を受けたのは、自ら何度となく証言しているように、戦後のインダストリアル・デザイナーとして独自の世

界を切り開いた柳宗理である。おそらく、柳は、ペリアンに同行し、目の前でデザインが立ち上がるプロセスを目撃することを通して、現場主義、職人との共同作業、手の中から作り上げていくことの大切さを学び、同時に、反発していた父宗悦の民芸運動が、実はモダニズムに通ずる思想性をもっていることにも次第に目を開かれていったに違いない。そして、やがて、柳は、自らも、産業化の中で商品の差別化のために流行化したデザインを批判し、むしろ、ジーパン、野球のボール、亀の子たわしといった何の変哲もない日用品をアノニマス・デザインと名付けて、生活の中に溶け込むデザインを目指すことを提唱していくのである。あたかも、戦前のペリアンが望んでも果たせなかった民芸運動の現代的な展開をするかのように……。

また、ペリアンを招聘し、戦前戦後の2度の展覧会の開催などに積極的に協力した坂倉準三も、やはり、ペリアンとの対話を通じて、民芸の世界を知り、日本の伝統を現代的に解釈して取り入れる方法を学んだのではないだろうか。ペリアンに触発されて大谷石を用い、ペリアンを案内した桂離宮の空間にヒントを得た彼の戦後の代表作、神奈川県立鎌倉近代美術館は、そうした交流の結実した作品と言ってよいのだと思う。

そして、さらに、ペリアンと同時期にコルビュジエのアトリエで過ごした前川國男も、また、そうした柳や坂倉と同じく、少なからずペリアンの影響を受けていたのではないだろうか。前川は、何よりも、コルビュジエのドミノ・プランの自分なりの展開を、その生涯のテーマとしていたとのだと私には思える。けれども、その一方で、前川が、戦後の木造の紀伊国屋書店に大谷石を用いていること、あるいは、日本の伝統である焼き物に注目し、やがて、「打ち込みタイル」として自らの建築の基本モチーフにしていったプロセスの中には、ペリアンに触発された側面があったのだと思う。前川の、日本における独自のモダニズムを目指そうとしていた姿勢も、同様に、ペリアンに連なる、自前のものを育むことを大切にしようとする問題意識があったからこそ生まれたのではないだろうか。

こうして見てくると、コルビュジエをその源流とし、ペリアンとの交流によってもたらされた日本のモダニズムの潮流は、かなり幅の広い世界を内包していたことがわかってくる。私たちは、その理解のほんの入口に立ち始めたところに過ぎないのではないだろうか。

そして、最初のペリアンの言葉に戻れば、記憶を失い、破壊を繰り返し、混乱を深めている現在の私たちが、どこかでそうした幅の広い世界を見えないものにしてしまっているのだと思う。やはり、今から57年も前、日本滞在中のペリアンの発言の中に、次のような問いかけの言葉が残されている。

「あなた方は我々にない恵まれた地位においでになる。我々欧州人は長い間いろいろな時代の様式、例えばルネサンス時代の様式、ルイ14世時代の様式というようなものに非常に悩まされてきた。我々はそれらを下手に模倣し俗悪化し、そのために非常に混乱して今まできたのであります。所謂「モダン型」にでさえ満足なものはない。漸く我々の時代になって、そのゴタゴタを整理して、新しき時代を建て直さなければならないというので、骨を折って漸くまさに新しく出発せんとするところまで来たのであります。然るに日本の皆さん方は、そういう時代の悪いものは殆ど持っておられない。新しい生活を築き、ご自身の芸術を表現されるに当たって殆ど汚れていない純粋な状態から出発なされることができる。それこそ何の障害もなく、新しい20世紀の時代のものを、あなた方の純粋なる伝統の精神の上にお作りになることができる。そういうことができるのに、何を苦しんで我々欧州人が大きな重荷に苦しんだものをお真似なさる愚を敢えてするのでありますか」。*4

この言葉と現在のペリアンの言葉の変わらないこと、そして、その間に流れた時間が失わせてしまったものへの洞察を通して、改めてモダニズムの奥行きを再発見していくことが求められているのだと思う。

●まつくま・ひろし

参考文献
*1：「プレシジョン」ル・コルビュジエ=著、井田安弘＋芝優子=共訳（鹿島出版会SD選書）
*2：「工芸文化」柳宗悦=著、（岩波文庫）
*3：「大阪毎日新聞」京都版、昭和15年10月1日
*4：「日本工芸について」シャルロット・ペリアン=著（「民芸」昭和16年4月号）

追記
執筆にあたっては以下の方々から貴重な資料をお借り致しました。感謝申し上げます。
リビング・デザインセンター（OZONE）、柳工業デザイン研究会、坂倉ユリ、畑由起子



シャルロット・ペリアン、坂倉準三、前川國男、柳宗理、他。クラブ関東にて、1954年　資料提供＝坂倉ユリ

●Interview

ペリアンが日本の伝統文化に見出したもの

柳 宗理

僕は、1940年に来日したペリアンに付いて日本国内をほぼ回りましたけども、何しろ短い期間だったし、どんどん戦争も間近くなって来てね。戦争の前に、日本に来てから7ヶ月でやっと展覧会を開催したんです。よくそんな短い時間で展覧会できたと思って……。それほどファイトがすごいんですよ、ペリアンは。ものすごいファイトの人ですね。

僕は彼女の仕事に非常に魅力を感じたけれど、それ以上に人間に非常に感心した。フランス人というのは冗談が好きで、ふざけたりするのが好きなんですよ。普通はこうやって話している時にはやはり知的なレディですから、非常に思いやりがあって親切でやさしい女性なんだけども、仕事を始めたりするとものすごいんですよ。例えば僕が図面書いたり、前川國男さん、坂倉準三さんが図面書いているでしょう。そうするとヒョッと見て自分が気にくわないとバーンとその上に×をつけるんですよ。ものすごいんですよ。だから坂倉さんも前川さんもびっくりしちゃってね。そういう態度をとるんですね。

来日7ヶ月での高島屋の展覧会準備では、彼女は2日2晩寝ないんですよ。やっぱり体力的にもすごいんですから。目を真っ赤にしちゃって。ところが働いている職人たちが、ストライキを起こしかけてね。しかし、彼等は彼女の熱意に動かされて最後までついていってね。ちょっと珍しい人ですね。それで前川さんなんかは、こんな女性がこの世の中にいるというのは奇跡だと言っていましたよ。それほどすごいんですよ。僕は仕事も大したものだと思うけども、しかしそれよりも人間性。普通の人間より非常に野生的な反面、非常に知性のある、品のあるところに感心した。

また彼女は運動は何でもするんですよ。器械体操もうまいですよ。それからスキーがうまくて、ヨーロッパから新しい型を日本に紹介したほどなんですよ。僕はスキーなんかしたことないんだけども、彼女に仕方なしに連れ行かれてね。蔵王かどこかに行って尻ひっぱたかれて……。それから泳ぎが非常にうまいですね。コルビュジエも泳ぎが好きだったけれど。富士山が見たいというので、一番最初に富士五湖に泳ぎに行った。富士山に上ってもしょうがないから富士五湖に連れて行ったらね、あれは9月半ば頃になっていたかな。冷たくても平気で泳ぐんですよ。それも素っ裸になっちゃうんですよ。パンツまで脱いじゃう。こっちはびっくりしちゃってね、初めは。だけども「柳、向こう向いてろ」って言ってね。向こう向いているとパンツまで脱いで入っていってね。出るときにはまた向こう向いてろって。素っ裸になるんですよ。それであまり癪にさわったから、パンツ隠しちゃったことがあった。僕も若かったからね。

富士五湖の本栖湖には、茅葺きの民家があるんですが、なかなかいい民家の集落。今は何もないけども。そういう集落を初めて見たから興奮してね。日本人の住まい方と住む空間とか使っている用具とか、蚊帳なんて面白がっちゃってね。日本の畳とか襖とか障子とかのモデュールにやっぱり非常に関心しちゃうんだな。人間の生活に要する空間。それで一生懸命スケールで測ったりしていましたよ。伝統的な人間的な生活と、生活が必要とする生活空間というものに対してものすごく興味を持っていた。だけども「伝統はいくら素晴らしくても、それをそのまま真似てはいけない」としょっちゅう言ってましたよ。つまり時代はどんどん変わっているし、そして素材も変わっているし生活の態度も変わっているから、やはりそういう伝統のあり方というものの中に、基本的なものはしっかり土台に持っていて、そしてそれから新しいものへ進んでいかなくてはいけないと。

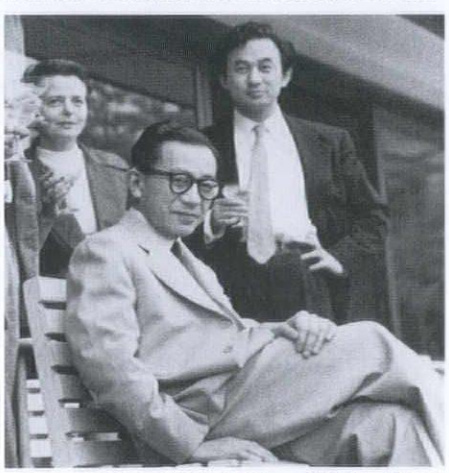
雪害試験所へ行った時の話ですが、そこは雪の降るときに、百姓がみんな藁や竹でいろいろな日用品をこしらえたりするところなんですよ。新しい材料は何もないですが……。しかし彼女はそれを見て、これは素材的に素晴らしいと思ったんです。それで自分で新しい作品を作っちゃったんだね。ペリアンの有名な寝椅子〈シェーズ・ロング〉があるでしょう。寝椅子を竹で作っちゃうんですよ。竹の弾力さが気に入って、竹を編んでテーブルにしたりして、非常にモダンなものを作るわけですね。だけどもそういう素材が古くても、古い素材から日本の伝統的な生活が出てきたということをよく知っていて、やはりこれからの時代は、伝統をそのまま持ってくることに対して注意しなくてはいけないと言っていました。あくまでも歩く。歩くということは前方に、未来に向けて歩くんだから、そっちの方へ進まなくてはいけないということをしょっちゅう言っていたんですね。

民芸館には度々見えまして、やはり民芸そのものには非常に興味があるらしいですよ。とくに京都の河井寛次郎さんという陶器をつくる方がいるんですよ。その方と仲良くなっちゃったりしてね。河井さんも非常に詩的な方。熱情家ですからね。京都には孟宗竹、竹の林があって、そこへ河井さんとピクニックに行ったんですよ。河井さんの奥さんが弁当を作ってくれて、僕と河井さんとペリアンと3人で竹藪の中に入っていった。それで弁当を食べて、竹の皮で包んだおむすびでね。食べ終わったから、僕は皮を竹藪の中にポイッと捨てたんですよ。そしたらペリアンはカンカンで怒っちゃってね。環境を汚すということにカンカンに怒って……。僕はその頃学生だったから、それぐらい捨てたっていいや、なんて何ともなく考えていたら怒られちゃってね。でも、やっぱり僕はそういうところに人間的に感心しちゃうんですよ。(談)

(於：1998年8月24日、柳工業デザイン研究会にて)

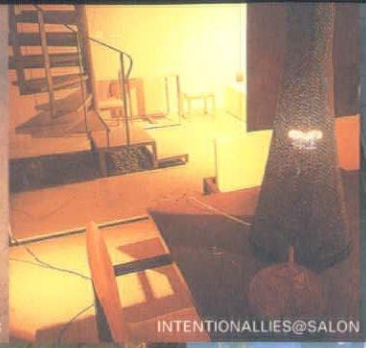


〈CHAISE LONGUE BAMBOU〉, Création: Charlotte Perriand
©Archives Charlotte Perriand 1998
©Charlotte Perriand / ADAGP, PARIS & SPDA, TOKYO 1998

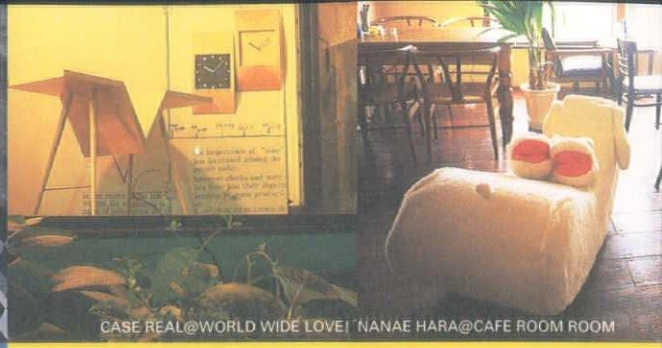


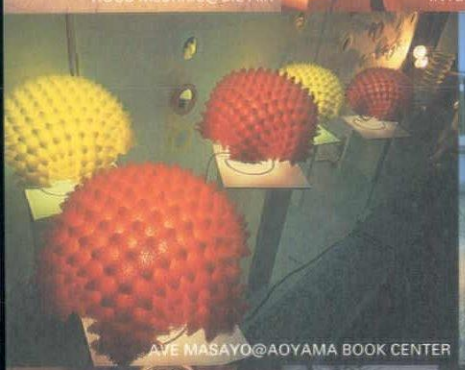
ペリアン、坂倉準三、柳宗理、1954年　　資料提供＝坂倉ユリ


ROSS McBRIDE@BIL AIR


INTENTIONALLIES@SALON


YUICHI TAKEUCHI@X-LARGE

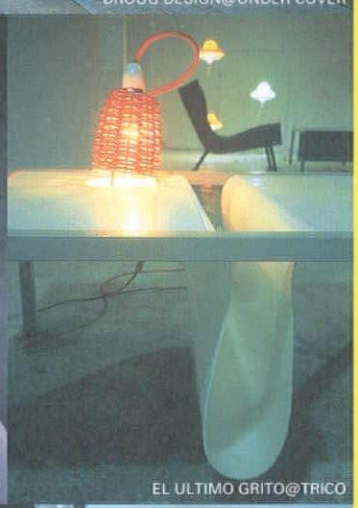

CASE REAL@WORLD WIDE LOVE! NANAE HARA@CAFE ROOM ROOM

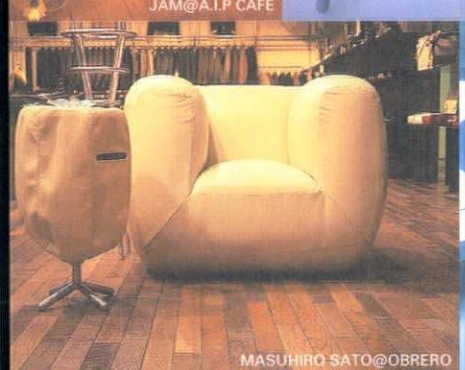

AYE MASAYO@AOYAMA BOOK CENTER

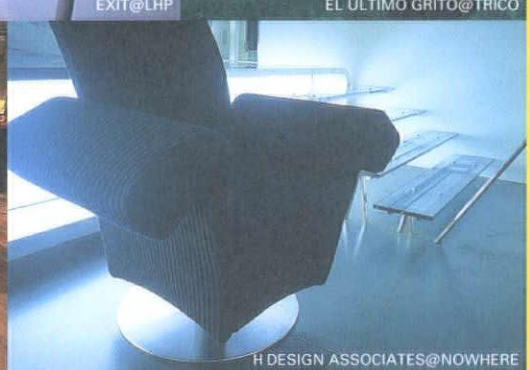

DROOG DESIGN@UNDER COVER


JAM@A.I.P CAFE

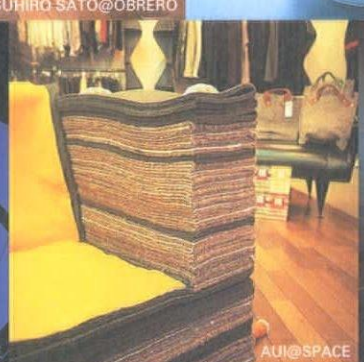

EXIT@LHP

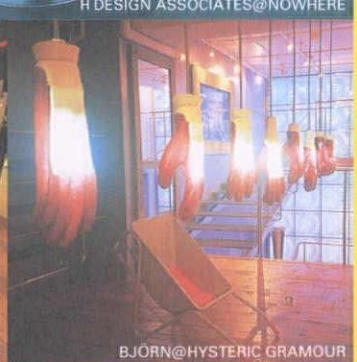

EL ULTIMO GRITO@TRICO

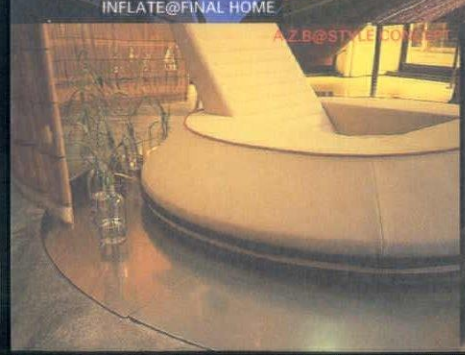

MASUHIRO SATO@OBRERO


H DESIGN ASSOCIATES@NOWHERE


INFLATE@FINAL HOME


AUI@SPACE


BJÖRN@HYSTERIC GRAMOUR


A.Z.B@STYLE


FREIRAUM@TSUMORI CHISATO

“ハプニング”展 デザイナーズ・カタログ

インテリア・家具の インディーズ・デザイン展in東京

Designer's Catalogue of "HAPPENING":

independent designers exhibition of interior and furniture in Tokyo



イギリス、ドイツ、オランダ、日本の
インディーズ17ユニットが、
原宿・青山エリアの17ショップで作品を発表。
一般参加者には、



歩いて、ポラ撮って、カタログに貼る

ことが義務づけられた。(こうしないとカタログは手に入りません)
当然出展者も、自分で揃らなければカタログはもらえません。
ここで、
デザイナー自身が持ち帰った
自作のカタログを一挙公開

“ハプニング”レポート

「90年代リアリズムはストリートに分散する」

“HAPPENNING”（ハプニング）と名づけられたデザイナー主体のインテリアイベントが、10月9日からの一週間、東京の青山・原宿一帯を会場に行われた。

参加したデザイナーはイギリス、オランダ、ドイツ、日本からの17組。それぞれの作品は表参道周辺のブティックやカフェに分散して展示された。来場者は各スペースを歩いて巡りながら作品を鑑賞するという趣向である。



鑑賞するだけでなく「参加」することも、このイベントの来場者には期待されていて、そのために書店にはあえて未完成のままにされたカタログが置かれている。カタログには各展示スペースの位置を示す地図のブループリントと、カタログを完成させるために必要な17枚のチケットが付いている。各展示スペースにはポラロイドカメラが設置されていて、来場者はチケットと交換にそれを借りて作品の写真を撮る。地図を見ながら各展示スペースを見てまわり、写真を撮り、集まった17枚の写真をカタログに貼り付けて自分だけの作品集を完成させる。そうしてはじめてこのイベントは完結する。

順路はないので、来場者は自分なりのルートを考えながら表参道付近を徘徊する。効率よくルートを一日でまわる者もいるし、あるいは乗り遅しながら四日かけても一つも終わらない者もいる。展示スペースであるショップ自体も、必ずしも見つけやすい場所にあるものばかりというわけではない。つまりお目当てのデザイナーの作品に出会うまでのプロセスもこのイベントの一部、というわけである。来場者はこのイベントがなければ一生行かなかったようなブティックや、狭い路地に入り込む。そしてその体験はよく知っているはずの青山・原宿の風景を別のものに変える。個人が持つ街のイメージがこのイベントによって壊され、再生される。結果としてハプニングが展示したのは、ストリートから隔離されたインテリアではなく、ストリートとインテリアが連続し、互いに侵食しあっている姿である。そしてよく考えてみれば当たりまえのことにすぎないそれが90年代デザインが志向してきたものだ。今回展示された家具の多くに共通しているのも、そうした街、つまりインテリアをストリートにつなげてゆく姿勢である。ほろ布を縫い合わせて椅子に仕立てた**テヨ・レミ（DROOG DESIGN）**（ドローグデザイン）にしても、洗濯機の回転ドラムをキャビネットに再生した**JAM**（ジャム）にしても、その原点はエコロジカルな思想ではなく、身近に転がっている素材を転用して別の機能と新しい表現を作りだす知恵にある。そうした転用の手は今回トリコで作品を発表した**EL ULTIMO GRITO**（エル・ウルティモ・グリート）の作品にも見られる。コルクでできた椅子、〈ミス・ラミレス〉は、彼らがよくあるサンダルのソールにインスパイアされてつくったものだ。おもちゃの3Dビューワーを媒体として作品を発表した**ROSS McBRIDE**（ロス・マックブライド）の展示にもそのような日常的な力の抜けた視点を感じることができた。

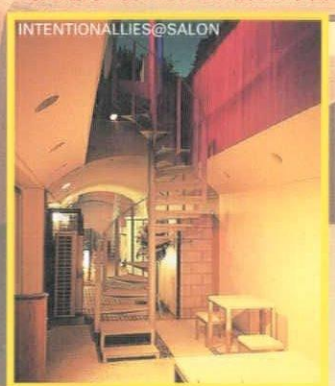




BJÖRN（ビョーン）というデザイナーもまた、手押し車を転用した椅子と、電手をシェードに使った照明を発表した。「史上最低の生活」をテーマに床生の生活様式をデザインし、スナック菓子を素材に転用して見せた**A.Z.B**（アーツ・ゼロ・ビー）の展示には、身の回りにあるライフスタイルの現実を拾い上げてデザインする姿勢が見られる。身近な素材をデザインの素材とするこうした姿勢は**IGGDJIT**（イグジット）のデザインにも現れている。彼らが発表したアルミフレームの家具は、文字通りストリートの延長のような彼らのワークショップで、クリエーターどうしの日常的な対話を通して生み出されてきたものである。

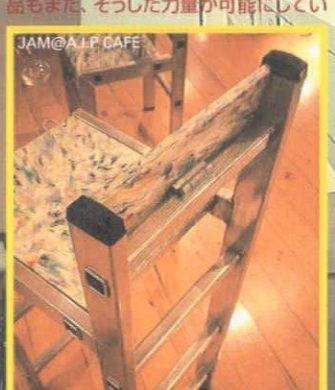
ファッションやアートを学んだ若いクリエーターが自然なスタンスで家具をデザインするようになったことも、最近の傾向である。文化服装学院出身の二人組**A.L.P.**（アート・ライフ・プロダクツ）は、ビニールシートを二重の皮膜にしたソファなどを発表した。壁にかけて使うシンプルなものだが、**YUICHI TAKEUCHI**（ユウイチ・タケウチ）もまた、ファッションと工業デザインの両方を学んだデザイナーである。ぬいぐるみを作るように家具をデザインする**黒ななえ**は美大の絵画科出身。少女趣味を現代家具のスタイルにしてみせたその発想は、これまでの家具デザインの文脈には収まりきらない。彼女が作品発表時に着ていたウサギのコスチュームも、彼女がデザインしたものである。

ストリートな感覚はまた、ノーデザインとも通じるところがあり、NOTHINGというコンセプトにもつながっている。若い世代のデザイナー達は、何よりもまず新しい表現を嫌う。彼らの多くの作品のデザインを公然と批判するものもいる。彼らの表現のほとんどは素材の表情に託されて、それにできるだけ何も付け加えないようなやり方で行われる。ユーモアを作品に込めるときにも、それがさりげないものであるように、機能から離れることがないように細心の注意が払われる。そうした姿勢はたとえば**H DESIGN ASSOCIATES**（エイチデザインアソシエイツ）の仕事に最も端的に表れている。彼らは今回



アルミニウムの表情を生かした家具と照明を発表した。鏡面仕上げを無駄のない形態に仕上げたその緊張感はもちろんのこと、ランプシェードの素材として使われたハーフミラーは光までを金属質に変えて見せており、イメージをモノ本来の機能にまで行き渡らせることができる彼らの力量をよくあらわしている。アイデアにかたちの表現力が追い付いていないケースがいくつか見られる中で、彼らの作品は「ノーデザイン」にこそデザインの力が必要なのだということを確認させてくれる。

MASAYO AVE（アベマ・サヨ）の作品もまた、そうした力量が可能にしている





ものだ。最新の技術に対する深い知識と、それを明確なコンセプトで的確な表現にまで高める造形力。彼女はあくまでも玄人らしく、工業デザインの可能性を追及している。たとえば照明〈ジェネシ・ステラ〉には、石油のフィルターに使われる工業用のスポンジの素材が使われている。波打つように力ットされたスポンジのシェードは光源を柔らかく包み込み、微妙な光の陰影を作り出す。光の効果は複雑だが、加工はいたってシンプルなものであり、製品としての完成度をきわだたせている。

これらキャリアも国籍も異なる17組のデザイナーたちが共有しているもの、それは作品にあくまでもリアリティを求める姿勢以外にはないだろう。結果として現れるあまりにも多様な作風は、当の現実が分裂し、錯綜している現代の反映であるのかもしれない。彼らの多くはそのことを意識しているので、プロジェクトごとの空間に最も適した表現に焦点をあてるせる。彼らはそのこだわりのなさを彼ら自身のスタイルにしようとしているかのようだ。そうした意味で彼らは**WORLD WIDE LIVING**（ワールドワイドリビング）**インテリアリーズ**という名前で表現しようとする彼らの今回の



空間そのものを、インテリアと呼ぶにふさわしい家具や照明器具

象的なこの空間はしかし、彼らの他の作品のほとんどとスタイルを共有しない。彼らは従来の作家性とは無縁のもの、特定のプロジェクトに適当な人材、施工法、スタイルを組織することのできる編集能力をインテンショナリーズという名前に代表させようとしている。

現実の複数の層を拡大して見せ、矛盾を強調し、現実を錯綜させ、あるいは手品のようなユーモアと器用さで矛盾を和解させる。それがこの時代のリアリズムである。問題は現実の作品がそうしたスタンスを正当化する力を持ちえているかであろう。そこが厳しく問われる場、ハプニングをそのような場にするにはあるいはもう少し時間がかかるかもしれない。しかし少なくとも、若いデザイナーの活躍するインドユーザーにこたえる場があまりにも不足している日本のデザインシーンの中で、このイベントがその最初の可能性を切りえたということは評価されるべきだろう。

（岡田栄造）

©渡辺謙子

インテリアデザインにおけるインディーズはいかにして可能か？

岡田栄造



DROOG DESIGN@UNDER COVER

デザインから製造販売までを自らがこなす「デザイナー・メーカー」と呼ばれる一連の活動が、ここ数年、家具デザインの領域でクローズアップされてきている。学校を出たての若いデザイナーたちにとって、彼らがデザイナーであることをアピールする最も現実的な方法は、カッペリーニやカッシーナといったメジャーな家具ブランドとの契約を求めて右往左往することではなく、自分で資金を用意して道具を買い、あるいは工場を見つけて、まずはアイデアをかたちにしてしまうことである。こうした姿勢は音楽産業におけるインディーズレーベルの活動に似ているので、「インディーズデザイン」と呼ばれることもある。そのような活動のあり方は決して最近のことではなく、たとえば80年代におけるトム・ディクソンとロン・アラッドの活動を今日のインディーズデザインの発端と見ることも可能である。家具の自主製作をコンクリートや鉄といった工業素材で行なった彼らのメディアにおける活躍、そしてビジネス面での成功は、90年代に入ってインフレイト（INFLATE）やジャム（JAM）といった若い世代に勇気を与え、その活躍がさらに若いデザイナーの参入を促している。その結果として起こっている作品の質によるデザイナーの淘汰が、現在のイギリスのデザインシーンの盛り上がりを支えているといってよい。

こうした活動がイギリスで盛り上がってきた背景には、魅力あるデザイン学校の存在やデザイナーを雇用する製造業の不在など、いくつかの事情があるが、やはり最も大きいのは若いデザイナーを支援する組織の存在である。90年代のイギリスではニューデザイナーズ・イン・ビジネス（NDB）という非営利組織がデザイナーのビジネス展開を助け、「100%デザイン」という見本市が若いデザイナーに作品発表と販売の機会を与えている。100%デザインにはまたブループリント賞という若いデザイナーを対象とした賞が設けられており、若いデザイナー達のひとつの目標となっている。ちなみに今回のハプニングに出展したインフレイト（INFLATE）は第1回の受賞者であり、エル・ウルティモ・グリート（EL ULTIMO GRITO）は第2、3回の受賞者である。

90年代の家具デザインにおけるもうひとつのインパクトはオランダから出てきたドローグデザイン（DROOG DESIGN）である。ドローグデザインはデザイナーであるハル・バッカーとデザイン評論家であるレニー・ラーマーカース、このふたりによって選定されるデザインコレクションである。財団として活動しており、オランダ政府と、それからDMDという企業からの支援を受けている。オランダの現代デザインを世界にアピールすべく93年にミラノで展示会を行なって以降、ユーモアと機能のシンプルな共存という、すべての作品に共通する特徴がヨーロッパのデザインメディアに絶賛された。現在のオランダの若いデザイナーにとって、自らの作品がドローグデザインのコレクションに加えられることはそのまま世界から注目されることに直結しており、ドローグデザインは結果的にイギリスとは異なるやり方でインディーズデザイナーを支援する役割を果たしている。たとえば10月にE&Yで新作の発表を行ったリチャード・ハッテンは、ドローグデザインを介して世界にその作品が知られるようになったデザイナーのひとりである。

日本の家具デザインシーンもまた、イギリスやオランダほど急激ではないものの、90年代半ばに入って変化を見せはじめている。日本の動きの中で最も注目すべきはインテリアブティックという業態の確立である。無名の若いデザイナーを積極的にプロデュースして製造販売までを行うインテリアショップがここ数年のあいだに目立つようになってきたことが、家具のデザインを行う若いデザイナーには追い風となっている。80年代にイデーがマーク・ニューソンやフィリップ・スタルクをプロデュースして成功したことがこうした流れのひとつのきっかけとなって、以後E&YやトリコTRICO）など、イギリスやオランダのインディーズ系の家具を扱いながら、その延長としてデザイナーのプロデュースを積極的に行おうとするインテリアブティックが増えてきた。いっぽうで、デザイナーとしてデビューするに当たって必ずしも企業や設計事務所での下積みを必要でないと考える若い世代が出てきつつあることも、小さいが重要な変化だろう。しかしながら、今のところ若いデザイナーに対する公的な支援がない日本では、彼らの作品を目にする機会が圧倒的に不足しており、まだまだ若い才能が発掘されにくい状況にある。作りたいと思えば誰でも作れるし、それを消費者の近くまで持っていって、評価されれば売ることができる。そういう状況を早く作ることが日本の家具デザインの当面の課題である。今回のハプニングは現代の日本においてインディーズデザインがどのように可能であるかを示す最初の試みであったと言えるだろう。インディーズという呼び名は作品の傾向に対して与えられたものではない。若いデザイナーにとっては作品のオリジナリティこそが重要であり、それゆえに90年代のデザインは一見何の脈絡も持たないように見える。しかしそうした多様な作品を眺め、さらにはデザイナーの言葉を聞いていると、そこにひとつの問題意識が浮かび上がってくる。それは80年代のデザインがクローズアップした象徴性やユーモア、アイロニーといったモノの精神的な機能を、便利さや快適さを実現する物理的な機能とどう和解させてひとつの現実的な製品とすることが出来るか、という問題意識である。わざとらしくないやり方、スマートなやり方で和解を実現した作品。あるいはその和解自体がユーモアであるような作品。90年代のインディーズデザイナーが志向しているのはそういうデザインである。それは硬直した家具の体系を壊して再生するための現実的な一歩であり、それゆえにデザイナーの試みをエンドユーザーの共感へとつなげるエディターとしての100%デザインやドローグデザイン、ハプニング展のような存在は、今日ますます重要なものとなっている。

●おかだ・えいぞう／デザイン評論家

AUI



PORTRAIT

PROFILE

星野 琢志：1975年4月生まれ．桑沢デザイン研究所中退後，文化服装学院卒業．
多賀 小百合：1975年7月生まれ．文化服装学院服装科，及びファッション工芸科卒業．
「人の心を動かす物づくり」をテーマに在学中から活動を始める．今，自分達にある若さと，常識にとらわれない2人だからこそ創り出せる世界を表現し，多くの人にそれを見てもらうことが，今の一番の目標．今回，素材に選んだフェルトは，学生時代に訪れたフェルト工場で，「実際に工業用資材として多くの可能性を持つ頼もしい素材なのでは…」といった印象を受けたことがきっかけとなった．

AUI is a unit name formed by Takushi Hoshino and Sayuri Tuga. 23 years old Tokyo based designers. They have found thier interest in Felt when they have visited a industirlal manufacture and have been producing fashion and home products with this material since then. Graduated from BUNKA-FUKUSOU Gakuin school, where becoming a mecca of Tokyo young creative talents.

❶

AT SPACE



A U I

DATE (9) 10 11 12 13 14 15 OCTOBER 1998
TIME 11 · · 12 · · 13 · · 14 · · 15 · · 16 · · 17 · · (18) · · 19 · · 20 · · 21 · · 22 · · 23 · · 24

A.Z.B

PORTRAIT

PROFILE

大橋エット（1960生），アヤノ工事タカマロ（1962生）によるデザインチーム．
そのクレイジーともいえる作風は，未来的な中にもどこか人間くささを感じさせる．
1983年 A.Z.B結成．1986年 STAR BANK（RESTAURANT BAR, TOKYO）のTOTAL DESIGN．
1987年 ENA in TULIA（RESTAURANT, TOKYO）のFURNITURE DESIGN．SALON ALLGEMEINE（A.Z.Bアトリエ）完成．1989年 "30 UNDER 30" in NEW YORK（INTERIORS誌主催）に招待出展．
全米各都市巡回．KLUB WARSZAWA（BAR, TOKYO）のFURNITURE DESIGN．
1990年 夜光虫（BAR, TOKYO）のFURNITURE DESIGN．1992年 "A.Z.B 展" 開催（LOFT, TOKYO）
1996年 VAL（BAR, TOKYO）のTOTAL DESIGN．STYLE CONCEPT（BOUTIQUE, TOKYO）のTOTAL DESIGN．1997年 S. CURVE STUDIO（BOUTIQUE, KANAZAWA）のART DIRECTION．

This design team is made up of Etto Ohashi (born 1960) and Takamaro Ayanokouji (born 1962). Their bizarre sensibility is futuristic, but always has a humanistic feel to it. 1983 The A.Z.B partnership is formed. 1986 Total design for the restaurant bar Star Bank, Tokyo. 1987 Furniture design for the restaurant Ena in Tulia, Tokyo. 1989 Invited to participate in the "30 Under 30" exhibition (sponsored by Interiors Magazine) in New York, which then toured the United States. 1989 Furniture design for the bar Klub Warszaw, Tokyo. 1990 Furniture design for the bar Yakouchu , Tokyo. 1992 Held the "A.Z.B show" at the Loft, Tokyo. 1996 Total design for bar Val, Tokyo / Total design for the boutique Style Concept, Tokyo. 1997 Art direction for the boutique S. Curve Studio, Kanazawa.

❷

AT STYLE CONCEPT



azb アーツェットベー の super-low life ! 最低の 快適 生活

「マイティ ジェット ガルーン 1200 スーパー超重 デラックス」

DATE 9 10 (11) 12 13 14 15 OCTOBER 1998
TIME 11 · · 12 · · 13 · · 14 · · 15 · · 16 · · 17 · · 18 · · 19 · · (20) · · 21 · · 22 · · 23 · · 24

BJÖRN



PORTRAIT

PROFILE

新たなゴミ（DESIGN）を生産する事を拒否し既存の物に新たな可能性を見い出す

BJÖRN reject to produce new rubbish (design), and find new possibility in existing products.

❸

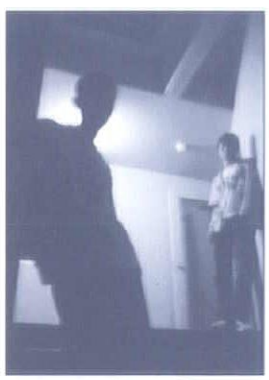
AT HYSTERIC GLAMOUR



DATE 9 10 11 12 13 14 15 OCTOBER 1998

TIME 11 · · 12 · · 13 · · 14 · · 15 · · 16 · · 17 · · 18 · · 19 · · 20 · · 21 · · 22 · · 23 · · 24

CASE REAL



PORTRAIT

PROFILE

浜本 一樹：1976年 大分生まれ、1998年3月 九州産業大学工学部建築学科卒業

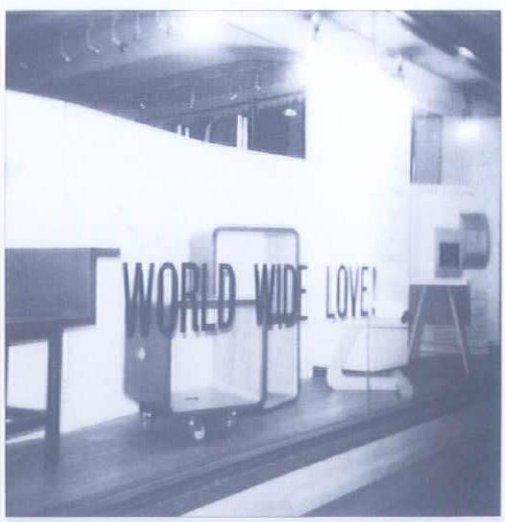
二俣 公一：1975年 鹿児島生まれ、1998年3月 九州産業大学工学部建築学科卒業

1997年10月 人とモノのカンケイについて改めて問い直す事を目的に2人でCASE REALを結成。

Kazuki Hamamoto：1976 Born in Oita. March 1998 Graduated architecture course of the engineering department at Kyushu Industrial University. Koichi Futatsumata：1975 Born in Kagoshima. March 1998 Graduated architecture course of the engineering department at Kyushu Industrial University. In October 1997, CASE REAL was founded by Hamamoto and Futatsumata with the intention to rethink the relationship between people and objects.

❹

AT WORLD WIDE LOVE!



DATE 9 10 11 12 13 14 15 OCTOBER 1998

TIME 11 · · 12 · · 13 · · 14 · · 15 · · 16 · · 17 · · 18 · · 19 · · 20 · · 21 · · 22 · · 23 · · 24

EL ULTIMO GRITO



PORTRAIT

PROFILE

EL ULTIMO GRITOはROBERTO FEO, FRANCISCO SANTOS, ROSARIO HURTADO
によるデザインチーム．中心人物のロベルト・フェオは去年RCAを卒業したばかり．
1997年の100%DESIGNで最優秀賞を獲得し一躍注目を浴びている．エル・ウルティモ・グリートとは
直訳すると「絶叫」を表すスペイン語．そこには未知のものと遭遇した時の驚嘆の意味が込められている．
現在，彼らの関心は専ら素材へと向けられている．プロダクトを構成する素材を見つめ直し，
素材の新たな可能性を発見することに夢中のようである．

Roberto Feo, Francisco Santos, and Rosario Hurtado make up the design team of EL ULTIMO GRITO. Principal Roberto Feo Graduated from the Royal College of Art in 1997. He took top prize at the 100% Design Show the same year thrusting him immediately into the spotlight. EL ULTIMO GRITO translated directly from Spanish means to scream, as in when you encounter something unknown for the first time. Their current interest is in experimenting with materials and form, to discover new juxtapositions, and potential.

6

AT TRICO



DATE 9 10 11 12 13 14 15 OCTOBER 1998
TIME 11 · · 12 · · 13 · · 14 · · 15 · · 16 · · 17 · · 18 · · 19 · · 20 · · 21 · · 22 · · 23 · · 24

EXIT



PORTRAIT PHOTOGRAPH BY KOZO TAKAYAMA (Nakaoka & Partners inc.)

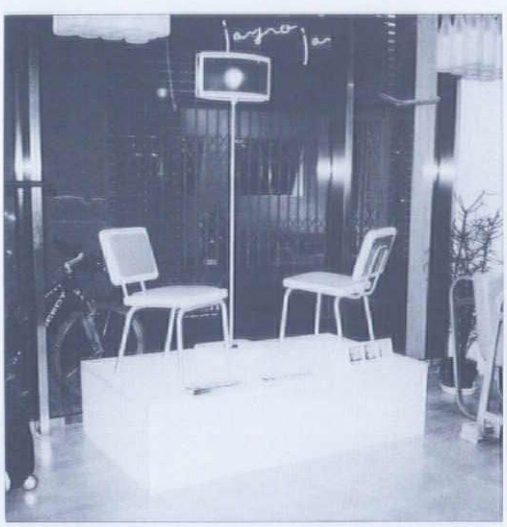
PROFILE

1996年6月エグジットメタルワークサプライとして活動を開始
現在メンバーは，清水 薫，末松 貴久，勝田 隆夫，高橋 紀人，吉高神 卓弥，藤治 匠吾の6人．
内装デザイン設計，制作，家具デザインの他，種々のメタルワークを行う．

EXIT METAL WORK SUPPLY start from June,1996.
Now members are Kaoru Shimizu, Takahisa Suematsu, Takao Katsuta, Norito Takahashi, Takuya Kikkoujin and Shogo Fujiike. Interior design, planing, execution, furniture design, metalwork and so on.

6

AT LHP



DATE 9 10 11 12 13 14 15 OCTOBER 1998
TIME 11 · · 12 · · 13 · · 14 · · 15 · · 16 · · 17 · · 18 · · 19 · · 20 · · 21 · · 22 · · 23 · · 24

DROOG DESIGN



PORTRAIT

PROFILE

ドローグデザインはオランダのデザインを世界へ発信することを目的にGIJS BAKKERと
RENNY RAMAKERSによって1993年アムステルダムに設立された．ドローグデザインが提案するのは
"フォルムのデザイン"ではなく"考え方"である．その作品に特徴的なのは，"無駄な装飾が施されて
いない事""コンセプトが明瞭である事""シンプルな中にも多くのアイデアが注がれている事"である．
これらの特徴を持つ彼らのデザインは"NON-DESIGN"と呼ばれる新たなデザインの
方向性を示した．その作品はMOMAを初め，多くの美術館にコレクションされている．

With the intension of showing Dutch design to the world, Gijs Bakker, and Renny Ramakers formed DROOG DESIGN in Amsterdam in 1993. Their design is not that of form, but of concept. "No decoration without meaning","There must be a definite concept", "Simplicity holds many ideas" are theorems consistently incorporated in their work, which is already part of many collections such as that of MoMA. They represent a new, clear direction in the design world which is becoming known as "non-design".

❼

AT UNDER COVER



DATE (9) 10 11 12 13 14 15 OCTOBER 1998
TIME 11 · · 12 · · 13 · · 14 · · 15 · · 16 · · (17) · · 18 · · 19 · · 20 · · 21 · · 22 · · 23 · · 24

FREIRAUM



PORTRAIT

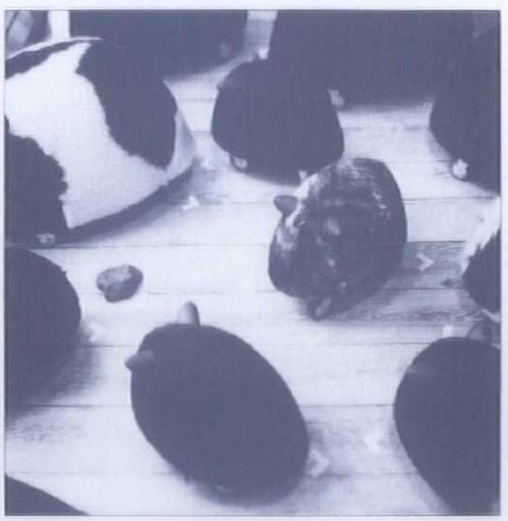
PROFILE

FREIRAUMは無名の若手デザイナーにチャンスを与える事を目的に1994年ミュンヘンに
設立されました．発表の場を与えられない多くの優れたデザインは，引き出しの中で消滅してゆく．
このような状況を変化させる為，FREIRAUMは若手デザイナーを積極的に起用し，
ユニークで革新的なDESIGNを提案します．

FREIRAUM was established in Munich in 1994 with the purpose of giving young, unknown designers a chance. At the time, there was no venue to show quality design, and much good work went unnoticed. To change this state of things, FREIRAUM continues to aggressively promote unique and innovative design by young designers.

❽

AT TSUMORI CHISATO



DATE (9) 10 11 12 13 14 15 OCTOBER 1998
TIME 11 · · 12 · · 13 · · 14 · · 15 · · 16 · · (17) · · 18 · · 19 · · 20 · · 21 · · 22 · · 23 · · 24

H DESIGN ASSOCIATES



↑PORTRAIT



↑PORTRAIT

黒川 勉：1962年愛知生まれ、1986年～有限会社イクス、1987年～1992年株式会社スーパーポテト、片山 正通：1966年岡山生まれ、1988年～有限会社岡本好司設計室、1990年～有限会社デザインバリュー、1991年～フリーランス、→1992年 株式会社エイチ・デザインアソシエイツを設立、→PAS DE CALAIS, SHIBUYA TOKYO (1998) →I.S, SHIBUYA TOKYO (1998) →NOWHERE, SHIBUYA TOKYO (1998) →INDVI CAFE, AOYAMA TOKYO (1997) →NO CONCEPT BUT GOOD SENSE, SHIBUYA TOKYO (1997) →岩出山町立岩出山中学校, MIYAGI (1996) →1996 INTERIEUR 96-DESIGN FOR EUROPE 特別賞受賞 (BELGIUM) →1997 "H.DESIGN-FURNITURES BALANCE"展 — LIVING DESIGN GALLERY (TOKYO) →1997 オリジナル家具ブランド"FAVORITE-H"発表 — TIME & STYLE

Tsutomu Kurokawa：1962 Born in Aichi. 1986 Employed by I.C.S inc. 1987 Employed by Super Potato Co., Ltd. 1992 Established H DESIGN ASSOCIATES. Masatsune Katayama：1966 Born in Okayama. 1988 Employed by Kouji Okamoto Design Office. 1990 Employed by Design Value inc. 1991 Went freelance. → 1992 Established H DESIGN ASSOCIATES. → 1996 Furniture design for Iwadeyamacho Tateiwadeyama Junior High School, Miyagi. → 1997 Interior design for Indvi Cafe, Aoyama, Tokyo. Interior design for No Concept But Good Sence, Shibuya, Tokyo. → 1998 Interior design for Pas de calais, Shibuya, Tokyo. Interior design for the boutique I.S, Shibuya, Tokyo.Interior design for the boutique Nowhere, Shibuya, Tokyo. → 1996 Received special prize in the "Interieur 96-Design for Europe" competition. → 1997 Held "H.Design-Furnitures Balance" exhibition at the Ozone Living Design Gallery, Tokyo. → 1997 Introduce the original furniture brand, "Favorite-H" through Time & Style.

⑨

AT NOWHERE



DATE (9) 10 11 12 13 14 15 OCTOBER 1998
TIME 11 · · 12 · · 13 · · 14 · · 15 · · 16 · · 17 · · (18) · · 19 · · 20 · · 21 · · 22 · · 23 · · 24

INFLATE



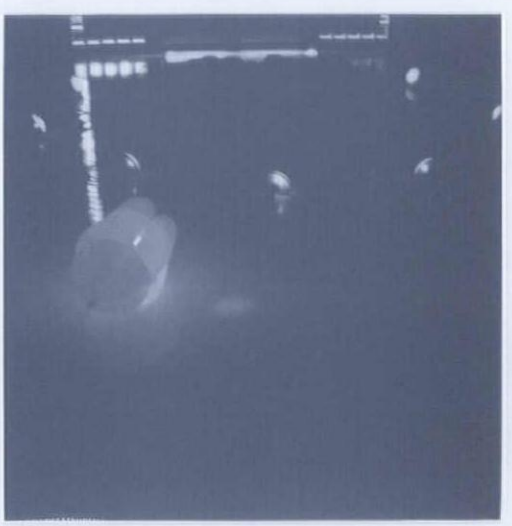
↑PORTRAIT

1992年メンバーのひとり、ニック・クロスビー、エアーインフレーション原理を利用した作品をデザイン、制作。1995年ニック・クロスビー、「THE INDUSTRIAL DESIGN ROYAL COLLEGE OF ART」卒業、マイケル・サデュー、マーク・サデュー兄弟がメンバーに加わる。ロンドンの100%DESIGNで初めてのエキシビジョンを開催。エアーインフレイション作品7点を出品。ニッツアン・ヤニウがメンバーに加わる。1996年PAUL SMITH, DIESEL, W&LT, ROSENTHAL, POLIGRAM, PEPE JEANS, EURO TUNNEL等とコラボレーションを行う。ロンドンの100% DESIGNに再び出展。100% DESIGN 96 最優秀賞に選ばれる。1997年ケルン、ミラノ、東京でTOM DIXONとのコラボレートショウを開催。マイケル・サデュー脱退。新シリーズDIP RANGE発表。デザイナーにMICHAEL YOUNG, MICHAEL MARRIOTT等外部デザイナーを起用。1998年フィオナ・ジェンキンがメンバーに加わる。

1992 INFLATE member Nick Crosbie first uses the air inflation theory in his work.1995 Nick Crosbie graduates the Industrial Design Department at the Royal College of Art. Brothers Michael Sodeau, and Mark Sodeau join INFLATE. Their first exhibition is held at 100% Design, in which seven air inflation pieces are shown. Nitzan Yaniv joins INFLATE. 1996 Collaborate with Paul Smith, Diesel, W&LT Rosenthal, Poligram, Pepe Jeans, and Euro Tunnel. Again they show their work at 100% Design, and are chosen for top prize. 1997 Exhibit their work in Koln, Milano, and in Tokyo with Tom Dixon. Michael Sodeau leaves INFLATE. Designers Michael Young, and Michael Marriott are asked to work on the Dip Range, a new series of products for INFLATE. 1998 Fiona Jenkin joins INFLATE.

⑩

AT FINAL HOME



DATE (9) 10 11 12 13 14 15 OCTOBER 1998
TIME 11 · · 12 · · 13 · · 14 · · 15 · · 16 · · 17 · · (18) · · 19 · · 20 · · 21 · · 22 · · 23 · · 24

INTENTIONALLIES



PORTRAIT

PROFILE

Intentionallies（しばしばITL）
1　見たことのないモノを形容する語
2　時に「スムースな前衛」「現在的空気」「変わり続ける年齢」などと訳されてもいる
3　特にスラングで「確信してモノを創る」という意味
我々が主宰しているインテンショナリーズは、建築を通したモノづくりを確信して実践する為の「レーベル」であると捉えています。そしてプロジェクトごとにどの様にして取り組むべきなのか、という基本的な問いかけを常に持ち続け、その瞬間ごとに最良な方法を探っていこうとも考えています。それ故、ジャンルを横断したり、常に形態を変え続けたりする事を特別な事のようには感じていません。むしろ、見たことのないものを見続け、領域を踊らし、そして断面を試行し、それを実らせて行く為の、自らを変貌させるソフトウェアであると冷静に捉えています。

Intentionallies (abb. ITL)
1 (adj) unknown, unseen, untouched etc.
2 (adj) (sometimes) smooth but edgy / contemporary / everchanging
3 (v) (used as a slang) to create something intentionally
1996-this architectural label was established to persue creative thinking / production through architecture. We are adaptable software which travels across unexplored borders, scans through unknown objects / phenomena, and transfers these data into realization.
What? Why? Who? Where? When? How? Each moment we go back to these keywords to seek for the best possible solution / method. Anything from furniture to high-rise buildings.
We work without any framework.

⓫

AT SALON



DATE 9 10 11 12 13 14 (15) OCTOBER 1998
TIME 11 · · 12 · · (13) · · 14 · · 15 · · 16 · · 17 · · 18 · · 19 · · 20 · · 21 · · 22 · · 23 · · 24

JAM



PORTRAIT
PHOTOGRAPH BY FORTY-FOUR

PROFILE

1993年、JAMIE ANLEY（ジェイミー・アンレー）、ASTRID ZALA（アストリッド・ザラ）、MATTHIEU PALLIARD（マチュー・ペイラード）の3人が集まりデザインユニット"jam"を結成。ユニット名は3人のイニシャルからつけられた。（現在のメンバーはジェイミーとアストリッドとグラフィックデザイナーのRICARDO ALVAREZ（リカルド・アルバレス）の3人である。）彼らの作品の特徴は、既存の家具デザインの枠にとらわれない斬新で意外な発想にある。既に日本でも紹介されている"ロボスタッカー"（洗濯機の回転ドラムを利用したシェルフ）などは、その代表的な作品といえよう。昨年秋、"ゾートフォームス・シリーズ"を発表、その素材やシンプルなデザインが好評を博している。今年初め、インフレートやトム・ディクソンらの協力を得て、インテリアデザインのプロジェクトを完成させる。本国のインテリア雑誌"BLUE PRINT"誌は、「彼らの手がけたプロジェクトは、コンテンポラリー・デザインの確かな方向性を示してくれた」と高い評価を与えている。

In 1993, Jamie Anley, Astrid Zala, and Matthieu Palliard, formed the partnership, JAM. The name comes from the members' first initials. (The present members of JAM are Jamie, Astrid and Ricardo Alvarez, who is a graphic designer.) They represent a new way of thinking in furniture design, in which they do not limit themselves by what is commonly believed furniture design should be. One of their most distinctive pieces, "Robostacker"(shelves made from stacked washingmachine drums), is already well known in Japan. Last Autumn, they introduced the "Zotefoams Series", which has been noted for its simplicity, and unique use of materials. At the beginning of this year, they collaborated on the first interior design project with Inflate, Tom Dixon and the other designers. Blueprint Magazine gave them high praise reviewing this work, saying that JAM's new bar and restaurant is certainly a step in the right direction.

⓬

AT A.I.P CAFE



DATE (9) 10 11 12 13 14 15 OCTOBER 1998
TIME 11 · · 12 · · 13 · · 14 · · 15 · · 16 · · 17 · · 18 · · 19 · · (20) · · 21 · · 22 · · 23 · · 24

MASAYO AVE



PORTRAIT

PROFILE

1962年東京生まれ．法政大学建築学部卒業．海老原建築設計事務所に入所．
1989年ミラノに渡伊．1990年ドムスアカデミーにて工業デザイン修士課終了修士取得．
1992年デザインスタジオAVE DESIGNを東京とミラノに設立．
1996年ドイツAKADEMIA SCHLOSS SOLITUDEに1年間滞在．

Born in Tokyo in 1962.She graduated from the Department of Architecture at the Collage of Engineering of Hosei University in Tokyo. After working as an architect with Arch. I.Ebihara, in 1989, she moved to Milan and, in 1990, completed a master's degree in industrial design at the Domus Academy. In 1992, she established her own design studio, Ave Design Corporation in Tokyo and Milan. In 1996, she won a grant of Artist in residence, Akademie Schloss Solitude in Germany.

⑬

AT AOYAMA BOOK CENTER



DATE (9) 10 11 12 13 14 15 OCTOBER 1998
TIME 11 · · 12 · · 13 · · 14 · · 15 · · 16 · · 17 · · 18 · · (19) · · 20 · · 21 · · 22 · · 23 · · 24

DESIGNER'S CATALOGUE

MASUHIRO SATO



PORTRAIT

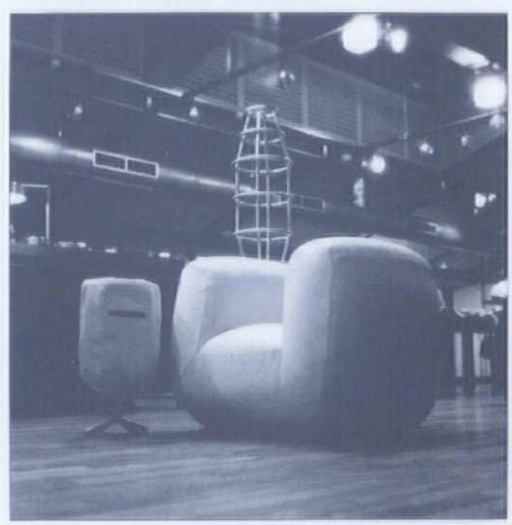
PROFILE

1972年埼玉生まれ．1994年日本大学芸術学部ビジュアルコミュニケーションデザインコース卒業．
(株)博報堂入社．1996年家具のデザインを始める．

1972 Born in Saitama. 1994 Graduated the Visual Communication Course at Nihon University Department of Art. Began work at Hakuhodo Co., Ltd. 1996 Began Working on furniture design.

⑭

AT OBRERO



DATE (9) 10 11 12 13 14 15 OCTOBER 1998
TIME 11 · · 12 · · 13 · · 14 · · 15 · · 16 · · (17) · · 18 · · 19 · · 20 · · 21 · · 22 · · 23 · · 24

NANAE HARA



- PORTRAIT

PROFILE

東京生まれ．武蔵野美術大学油絵学科抽象絵画コースに学び，立体作品の制作を続ける．卒業後，北海道旭川市の家具メーカー工場勤務．家具製作の技術を学び，1993年には2級木工技能士取得．1995年12月あぐら家具企画（北海道旭川）設立．オリジナル家具のデザイン，制作，販売．最近は，舞台家具なども手がける．1997年4月 R-BOX（札幌）で企画展．1997年9月 スペイン「バレンシア国際家具見本市」出展．1997年11月あぐら家具企画なかよしバンド「ラブファニチャーラウンジベアーズ」デビュー家具ライブ（渋谷・アップリンクファクトリー）．1997年2月リビングデザインギャラリー（新宿）で，企画展「ハイライトあぐら家具」．1998年2月ポポクラシコレーベル（フランス）主宰のコンサート「TOY TONE COLLECTION」の舞台家具担当（吉祥寺・スターパインスカフェ）．1998年7月 T.Y.K-TWO GALLERY（六本木）で，企画展「原ななえとあぐら家具」．1998年8月パルコ（札幌）でも同企画展．

Born in Tokyo. Attended Musashino Art University to study abstract oil painting, but worked a lot in three dimensions. Upon graduation, became a factory worker at a Hokkaido Asahikawa furniture maker. There she studied furniture making techniques, and in 1993 acquired a level two vocational woodworking accreditation. In 1995, founded Agra Furniture Planning in Hokkaido Asahikawa, where she is involved with designing, producing, and marketing original furniture. Recently, she has also been working in theatrical stage design. April 1997 Exhibited at R-Box, in Sapporo. August 1997 Exhibited at the "Valencia International Furniture Exhibition", Spain. November 1997 Public debut of the in-house Agra Furniture Planning band "Love Furniture Lounge Bears" at Uplink Factory, Shibuya. January 1998 Held the show, "Highlight Agra Furniture", at the Ozone Living Design Gallery, Shinjuku. Stage design for "Toy Tone Collection" a concert sponsored the Popoclasico Label (france), at the Star Pines Cafe, Kichijyouji. July 1998 Held exhibition titled"Nanae Hara and Agra Furniture"at the T.Y.K.-Two Gallery in Roppongi.August 1998 Held same show at Parco, Sapporo.

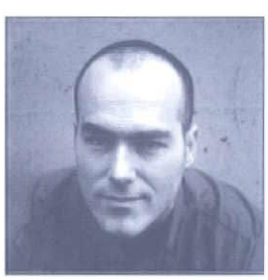
⑬

AT CAFE ROOM ROOM



DATE 9 10 (11) 12 13 14 15 OCTOBER 1998
TIME 11 · · 12 · · 13 · · 14 · · 15 · · 16 · · 17 · · 18 · · 19 · · (20) · · 21 · · 22 · · 23 · · 24

ROSS McBRIDE



- PORTRAIT

PROFILE

1962年アメリカ・ペンシルバニア州ピッツバーグ生まれ．カルフォルニア・インステイテユート・アーツでグラフィックを学ぶ．1985年卒業と同時に来日．日本大学芸術学部にて，さらに研究を行う．後，五十嵐威暢を始め，日本国内のデザイン事務所で経験を積む．1991年よりフリーランスとなり，青山にデザインオフィス「デザイナトリウム」を設立．1997年4月には，新宿OZONE内リビングデザインセンターにて，「ロス・ミクブライドの12の時計」展を開催．これは，彼のデザインを始める時の軸となるコンセプトを基に，12種類の時計を各コンセプトごとに，デザイン化した非常にユニークで独創性のある展覧会となり反響を呼んだ．彼の最初のプロダクトデザインとなる．1998年8月，12の時計の内グリットクロックの製造販売元となり，商品化を実現する．コンセプトが最大の鍵になる彼のデザインは，グラフィックの分野だけにとどまらず，今後はプロダクトの世界，またアートの分野へもクロスオーバーを展開する活動に意気込んでいる．今後最も広い範囲での活動が期待される若手デザイナーの一人である．

Born in 1962, in Pittsburgh, Pennsylvania, U.S.A. Studied graphic design at the California Institute of the Arts. Graduated in 1985, and the same year entered Nihon University's Art Department as a research student in graphic design. Later, worked under Takenobu Igarashi for several years. In 1991, founded his own design office, Designatorium, in Aoyamma, Tokyo. One day, Ross came to realize that he was a product designer trapped in a graphic designer's body, and in 1997 held his first exhibition, "Designatorium Timepieces" at the Ozone Living Design Gallery, Shinjuku. The well received show consisted of twelve prototype clocks, and their unique presentation. In August 1998, one piece from the show, the Grid Clock, went on sale as the first in a future line of Designatorium products.

⑭

AT BIL AIR



DATE (9) 10 11 12 13 14 15 OCTOBER 1998
TIME 11 · · 12 · · 13 · · 14 · · 15 · · 16 (17) · · 18 · · 19 · · 20 · · 21 · · 22 · · 23 · · 24

YUICHI TAKEUCHI



PORTRAIT

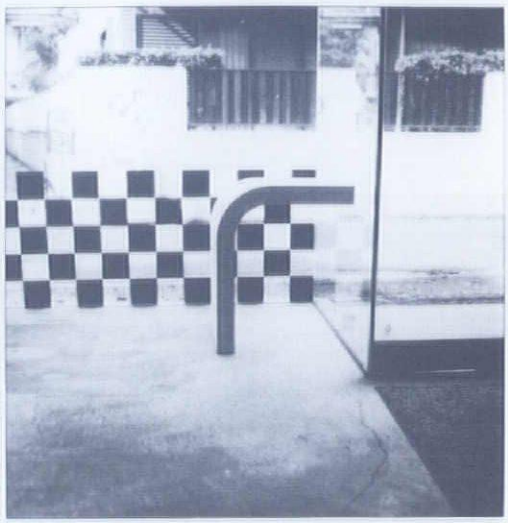
PROFILE

1974年12月19日生まれ．1992年～94年東京ファッションモードカレッジ（東京）ファッションデザイン専攻．1994年～95年セントラルセントマーチンスカレッジアートアンドデザイン（ロンドン）ファッションデザイン専攻．1994年～95年ジリットリートベルトアカデミー（アムステルダム）インダストリアルデザイン専攻．

Born on December 19, 1974. 1992～94 Majored in Fashion Design at the Tokyo Mode College of Fashion, Tokyo. 1994～95 Majored in Fashion Design at the Central Saint Martin's College of Art and Design, London. 1997～98 Majored in Industrial Design at the Gerrit Rietveld Academie, Amsterdam.

⑰

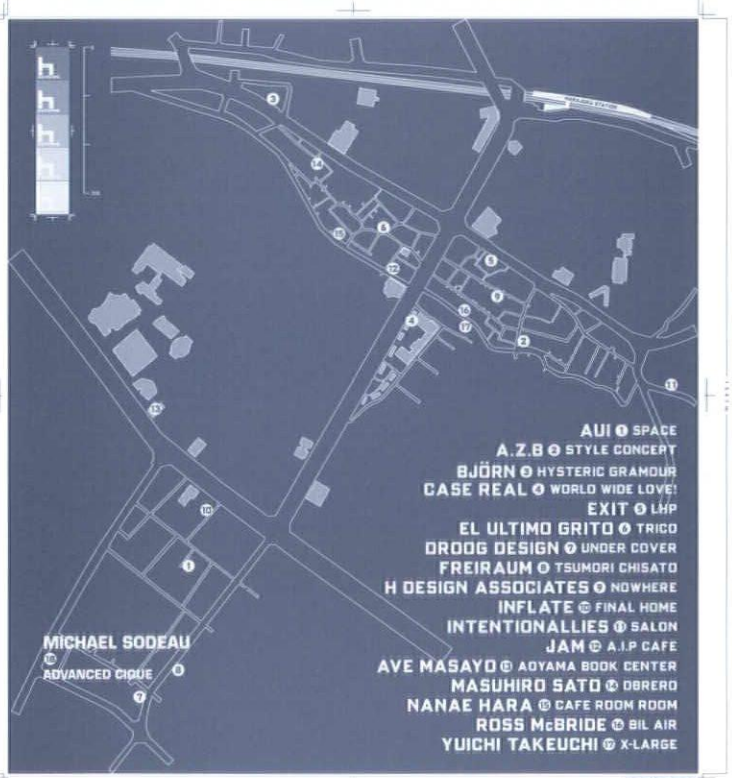
AT X-LARGE



DATE 9 10 11 12 13 14 (15) OCTOBER 1998
TIME 11 · · 12 · · 13 · · 14 · · (15) · · 16 · · 17 · · 18 · · 19 · · 20 · · 21 · · 22 · · 23 · · 24

HAPPENING date and place

place▼

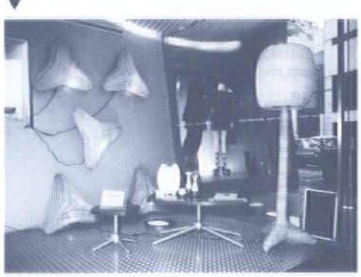


date▶9-15, October, 1998
organization▶AIRCONDITIONED (Hitoshi Saeki, Myeong-hee Lee, Hiroshi Kaneco, Suki Sakurai)
art direction▶Masuhiro Sato

Another HAPPENING!?

骨董通りに隠れキャラがいた！







designer: Michael Sodeau
（マイケル・ソデュウ）
place: advanced cique
（アドヴァンスト・チキュウ）

レイアウトデザイン（p73-75）：久世 健
カタログデザイン（p76-84）：Masuhiro Sato
協力：AIRCONDITIONED, TRICO INTERNATIONAL
問合せ：TRICO INTERNATIONAL tel.: 03.3486.1790

アアルトの空間構成

有機的建築手法の考察



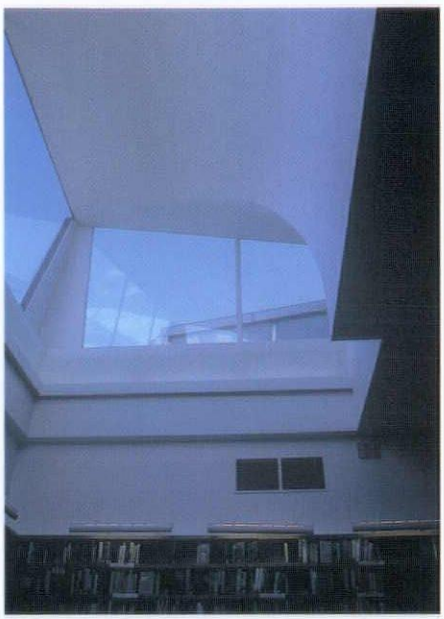
ムーラッツァロ実験住宅。リビングから中庭を通して南方湖を見る

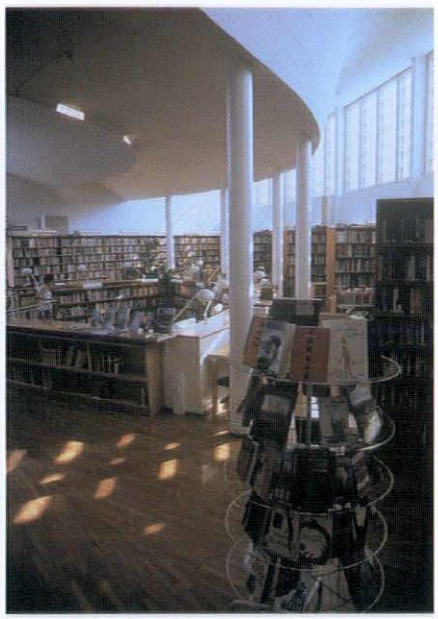
photo：Jari Jetsonen

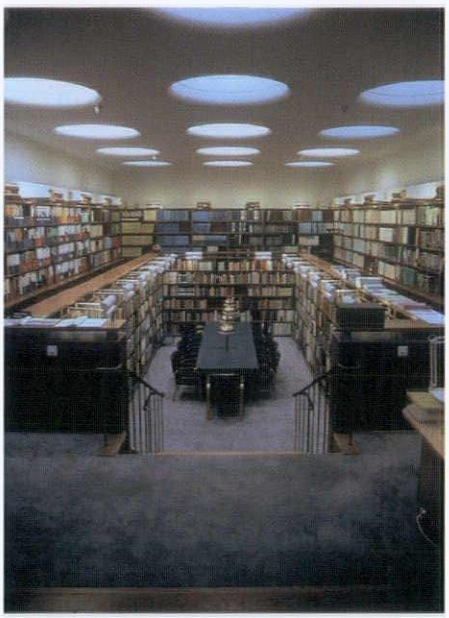
採光の仕掛けに対する考察

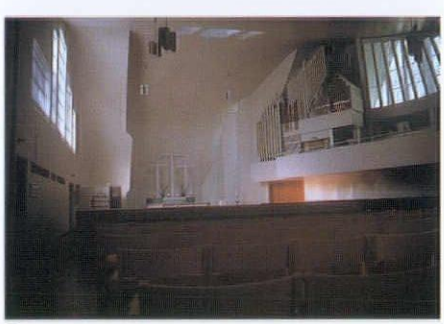
小野正弘

①：ロヴァニエミの図書センター閲覧コーナーの（H・L）。壁面全体に造り付けた書棚の上部に設けられている。北向きの（H・L）から入って来る光は、湾曲した白い壁にリフレクトして扇形に展開するスペースに均一な照度をもたらす。
②：同じような構成によるセイナヨキの図書センターの(H・L)。南面しているため外部に光を制御する水平ルーバーが取付けられている。
③：カンサネラ・ケライトスの図書室の天井に規則的に配置された円形の（T・L）。原型は36年前ヴィープリの図書館で最初に試みられた。均一な照度に保たれ光が読書のための空間に静かな雰囲気を与えている。


①


②


③


④


⑤


⑥

私達が住む地球の上に建つ建築は、すべてその場の地誌的特性に従って実体化されている。地誌的特性とは、歴史の集積から生れた風俗・慣習などの人文的要素と、自然がもたらす気象・局地環境による物理的要素の総合を言うが、ふたつの要素のうち前者が時間の経過と共にその内容を変化させてきたのに対し、後者はほぼ不変的な条件として建築生成の枠組に影響を与えてきた。そうした意味からアアルトの建築を考察する場合にも、彼の作品の大方が建つフィンランドの地域的な特性を理解しておく必要があろうかと思う。

フィンランドの地理上の場所を見ると、フィンランド湾に面する首都ヘルシンキが在る南端からArctic Circleのラングレン湾に近い北端の国境までは、丁度北緯60°から70°の域内に位置しているのがわかる。因にヘルシンキの北緯60°は、北海道から更に10°30′北のカムチャッカ半島の付け根部分にあたる。この場所は地理学上は亜寒帯と呼ばれる地域に属するが、その気象的特徴は夏至を挟んだ5月から7月の昼の長い白夜の季節と10月から1月にかけてのPolar Nightと呼ばれる太陽がほとんど姿を見せない冬の季節という対照的な気候が、晴天が訪れる二か月程の緩衝の時を狭間に繰り返されていく過程に見られる。それは一部の地域を除き、各季節の気候がそれ程極端ではなく、また四季の移り変わりも緩やかな私達が住む温帯地域とは大分異なる環境である。

ところで、こうした自然環境が建築に対してどれだけの影響を与えるかについては、以前から関心を持っていたが、フィンランドを旅して実際にアアルトの建築を体験した時その具体化された空間を実感することが出来た。特に印象的だったのは、内部空間に導入される光の巧みな操作だった。それは前述した自然環境、特に薄暮に閉ざされた冬の季節における人々の陽光への渇望に対するアアルトの配慮であると同時に、建築空間の質をより高めるために、生涯を通じて執拗なまでに光の効果を追い求めたアアルトの姿勢を伝えるものでもあった。

建築の内部空間に光を導く装置としては、壁面に人間の視線の高さを基準にして設ける「窓」が一般的だが、他に特殊なものとして「地窓」・「高窓」・「天窓」がある。これらのうち「窓」が採光の他、視覚・換気等の複合機能を持つのに対し、「高窓」Hight side Light（H・L)、「天窓」Top Light（T・L）は、光の制御を目的とする単一機能の装置である

④：イマトラのヴォクセンニスカにある教会の（H・L）。光は外壁の内側にある内殻に組込まれた格子によって拡散され、内部空間を柔らかく包み込む。
⑤：ラハティの教会の祭壇に向かってパースペクティブに絞り込まれた側壁にパイプオルガンと一体化して設けられている（H・L）。外部の緑に反射した光が上部から内部空間に向かって導かれる。
⑥：アラヤルヴィにある教区センター内のチャペルの（H・L）と（T・L）。簡素な仕上による白を基調とした空間は微妙な光の操作によって、豊かな場に設えられている。

⑦：ヘルシンキ工科大学の大講義室にある（H・L）。聴講席の形状に合わせた屋根架構の間に組込まれ、光は微妙な曲線を持つL型断面の大梁に反射して空間全体に拡散光となって降り注ぐ。
⑧⑨：カンサネラ・ケライトスのかつての打合せホールを現在は集会所に転用しているスペースの天井を構成する（T・L）。梁間方向に走る逆V字型のガラス部分が二重になっていて、内には照明が仕組まれている。大きなガラス面が直接視線に入らないように、鋭角に立ち上げた納まりとそれを支える梁との視覚的なバランスが良いために、空間にリズミカルな動きを与えながらも落着いた雰囲気を醸し出している。

⑩⑪：アカデミア書店の上階に行くに従って回廊がセットバックしている三層吹抜けの天井に設けられた模型の（T・L）。—P. esplanadi通りからの入口を入ってこの空間に接した時の衝撃は、今でも忘れることが出来ない体験だった—（T・L）というよりは、天井に切込まれたクリスタルな集光体とでも呼びたいこの装置は、そのディティールをよく見ると、三重に構成されたガラスの皮膜、目立たないように組込まれた照明とACグリルなどの機能上の処理と共に、天井の切込みと集光体をアーティキュレイトさせた納まり、外から内部空間に挿入されたかのように、やや傾いた集光体の形態などの視覚的操作とが一体となって作られているのがわかる。


⑦


⑧


⑨


⑩


⑪

photos：M.Ono

ことから、光と内部空間との関わりを考える場合には、後者の有様がより重要なファクターとなる。

アアルトの作品を見ると、そのほとんどに（H・L）もしくは（T・L）が設けられているのに気づく。形状・ディティールは様々だが、何れもその建築の用途・機能に対する作用を考慮した上で、更に内部空間の場としての次元を高める仕掛けとして用いられている。しかしそうした関係を知るためには、やはり実際にその場を訪れてみないと十分には会得出来ない。旅の僅かな時間ではあったが、直接アアルトの空間に身を置いた時感じたAtomosphereとそれを現実化させている装置の仕組・ディティールに対するこの考察がアアルトの建築を理解する上で、多少の手掛かりになればと思う。

アアルトの作品では様々な形式の（H・L）・（T・L）が試みられているが、それらが設けられている建築を用途別に見ると、教会・図書施設・聴講施設がその機能からいって多い。

またその設えについては、写真①～⑦のようなやや控え目のものから装置自体が内部空間の構成を決定づけるエレメントとして用いられているカンサネラ・ケライトスの（T・L）やアカデミア書店の（T・L）の例まで様々な展開が見られる。

そして写真で示したこれら複雑な装置以外の一見無造作に見える部位の納まりにもアアルトのディティールに対する細かな配慮を見ることが出来る。エッジをR面で納めた円形の（T・L）。短辺を円弧にした矩形の（T・L）あるいは形態を軽やかに見せるために、フレームをT型鋼で構成した（T・L）などがその例である。

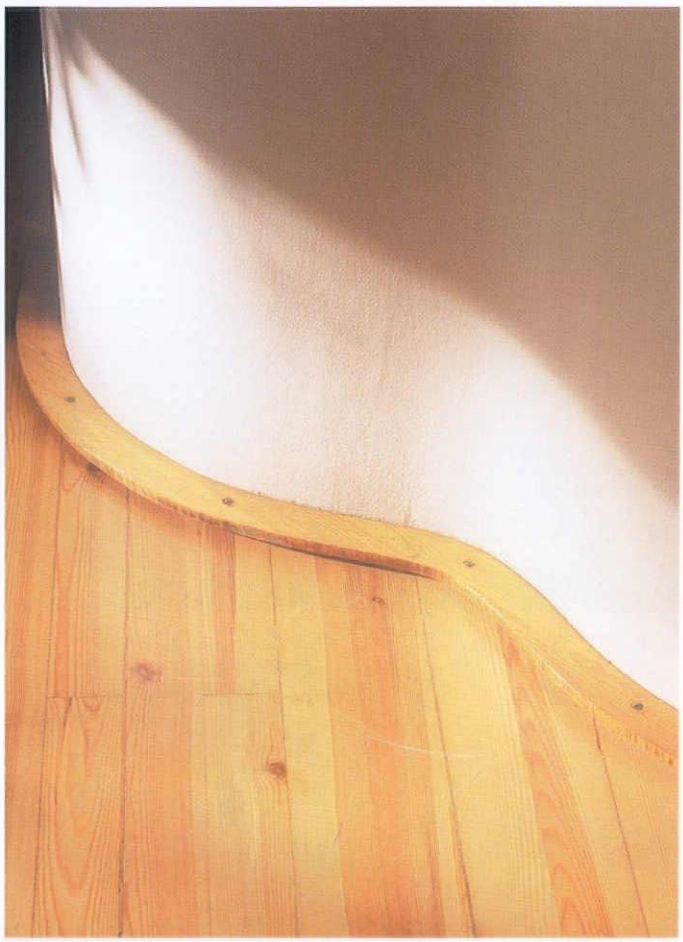
ところで、アアルトの生涯を通じてのこうした作業は、常に建築の内部に向けての試みであり、従って彼の思考した空間は、最近みかける外部空間を内在化させたアトリウムのようなものとは対極的な場にあったことが窺われる。

●おの・まさひろ／建築家、宇都宮大学非常勤講師

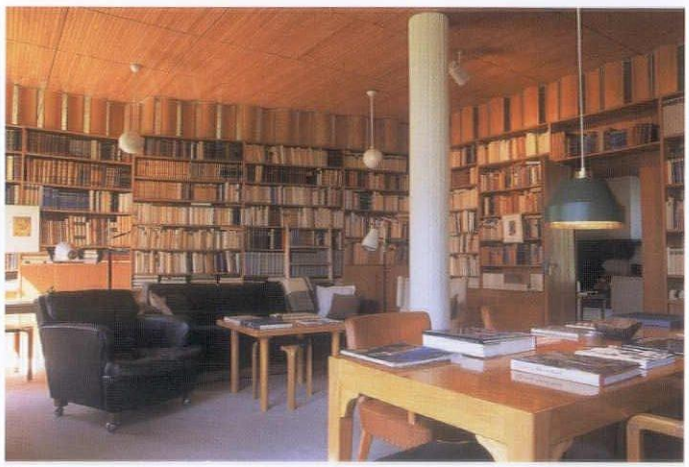
注：通常使われているトップライト、ハイサイドライトという単語は、英字典には見当らないが、用語として定着しているため使用することにした。天窓：skylight rooflight　高窓：clerestory 側窓：sidelight flankinglight　最新建築英和辞典Gより

人間的な性格をもつ素材に対する考察

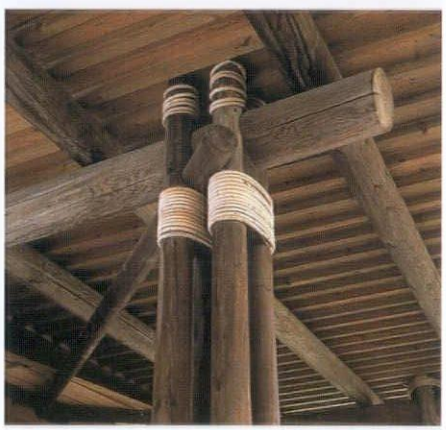
シルッカリーサ・イエッツォネン



①



②



③

アルヴァ・アアルトは建築材料の選択に先入観の無いことを表明している。明快であることはこの仕事に本来ある性質であり、人々がどのように材料に関わるべきかを決定する仕事なのである。「私は何か特定の材料を好むということはありませんが、私の留意しているのは、材料が建物の機能を豊かにするということです。」材料が親近感を持たれるようになるには千年もの使用実績を必要とする。アアルトの長い経歴は1920年に始まり1970年の半ばに終わる。この期間にはフィンランド建築の伝統も変化し、あるいは崩壊したといってもよい。若いころにはフィンランドの主用建材である木を使い、晩年には工場建築や大きなスケールのプレファブの強さに惹かれ、これをすべての高層住宅に表現した。木はアアルトにとって最初に触れた材料であり、したがって「永遠の愛情」を持っていた。彼にとって木は自然の素材（今日ではエコロジー素材であるが）という評価であるが、その質が建築に生きるということに重点をおいていた。

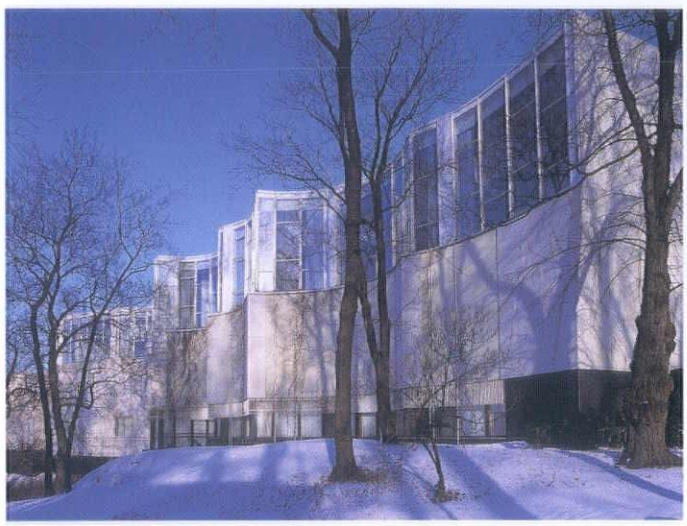
アアルト初期作品にみる木の使用は比較的常識的なものであって、彼が木に開眼したのは1930年代にデザインを始めた、曲面材の家具からであろう。このアイデアは、スキー板製造に使われる伝統的な技術にその起源がある。アアルトの建築に使われる木の性格や質はその必要性によって決定されているが、フィンランドでは伝統的な濃い色に着色された木ではなく、明るい色の木を主に使用している。後年の大きな公共建築をデザインする際にも、彼は木を忘れたことはない。それが彼の建築に寄与しているのは、天井や壁の温かい材質感であり、レンガやコンクリートの形をとってもその痕跡が残っていることである。特筆すべき木のインテリアは、スポーツスタジアムや工場などで、その構造が空間の建築的な力を創造しているのである。

アアルトにとって木は「根源的に人間に合う素材」である。生活にとって普遍的な素材であり、人間のように様々な差異性に富んでいる。アアルトの作品で使われている木に触れると、そこには常に喜びと温かみを呼び起こされる。そこには人間的なスケールの感覚があるからであり、大きなスケールの作品はもちろん、小さな詳細にも木を使用する部分に繊細な様々な手法が見られるのである。彼の作品では木造建築の長い伝統と新しい革新的技術が合体しているのである。

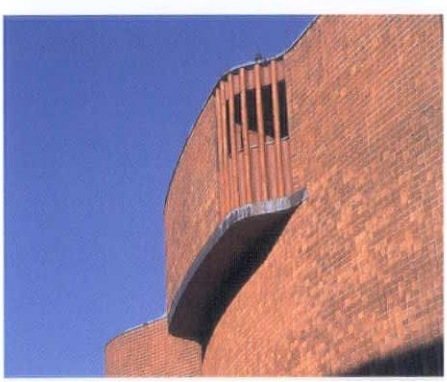
アアルトにとってのもう一つの重要な基本素材は赤レンガだが、彼がはじめて使ったのは、伝統的に使われていた工場建築であり、1940年以降は公共建築にも使い始めた。ボストンのMIT学生宿舎では、初めてレンガを建物の内外に使用している。レンガの仕上がりにとって重要なのは、均質過ぎないことであり、同時に生き生きとした粗さを持っていることである。実際にアアルトの作品にみるレンガのインテリアは、ほとんど中世的な面

①：ヴィラ・コッコネンの木製床、巾木、しっくい壁のディティール。
②：ヴィラ・マイレア書斎。明るい色の木が使用されたインテリアと家具。
③：ヴィラ・マイレアの主屋とサウナの連結キャノピー。分節された木製柱とその感性的な接合部。アアルト建築によく見るヴォキャブラリーである。

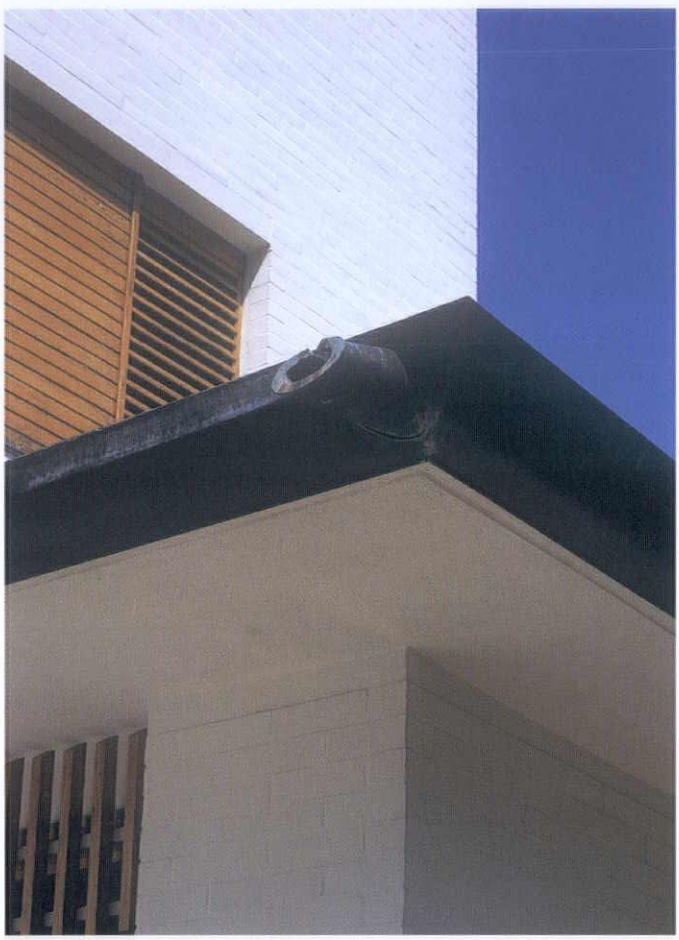
④：堅固な大理石がシャープな形態と反響しあうフィンランディア・ホール。
⑤：ヘルシンキ文化会館のレンガと銅緑青のディティール。
⑥：メゾン・カレの銅板葺屋根と軒樋端部のディティール。



④



⑤



⑥

photos：Jari Jetsonen

を持っている。アアルトは更に他の素材とレンガを組み合わせることによって、新たな雰囲気を創出させることに成功した。木と組み合わせれば家庭的な感覚が生まれ、大理石と組み合わされればそこには威厳が表現されるのだ。外部でのレンガとの組み合わせで典型的なのは銅板であり、緑青によって長い月日の中で色彩の変化が楽しめる。ここにも人生と建物の象徴的な比較ができるのである。

レンガは本来的に角柱体であることによって四角い建物を想定するが、ヘルシンキの文化会館でアアルトは、特注で角を調整したレンガによって自由な有機的曲線による壁を創り出した。このレンガによって凹型も凸型も表現することができるようになったのである。この文化会館も二つの異なる素材を組み合わせてその差異性を表現している。赤レンガによる自由形態のホールと銅による四角い事務所棟である。

アアルトの作品におけるレンガは、社会や人々のための建築という意味の繋がりを持っていて、それは市役所であり事務所建築などである。アアルトは建築の社会的な機能は、ある面で素材の選択決定に関与するとも言うのである。

大理石の硬さと明るさは、特に何かを代表する建築の威厳を高めるように使われるが、それは例えばフィンランディア・ホールであり、またオタニエミ工科大学キャンパスのように赤レンガで強調している場合もある。白大理石はアアルトの晩年に使われ、彼のイタリア好みを象徴している。彼の人生を通じての主題は地中海文化、ルネッサンス、都市文化から得られるアイデアなのである。

特別な素材は施主の要望に合わせて使われている。ラウタタロ鉄の家のファサードには銅版が使われているが、フィンランド鋼製食器販売協会が施主であるという商業的な背景が反映しているのである。そのインテリアは、やはり地中海的な情景が感じられるものであり、主階段の壁は様々な色の陶器タイル貼り、床はトラバーチンで仕上げられている。アアルトの多くの建築で柱や外壁に色とりどりの陶器タイルを使っているが、それは特別な空間や詳細に目を惹きつけ強調する役割を果たしているのである。

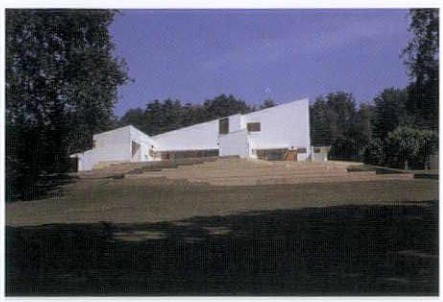
どんな素材を使うにしても、アアルトにとって重要なのは、それが使う人のためにあるということであり、人間にとって敵対するものであってはならないということである。彼はプラスチックのような「新しい」素材には非常に懐疑的であり批判的であったが、結局それを実験的に使うことすらしなかった。かれの材料観は、あまり手を掛けずとも年月とともに古びた美しさが増すところにあるのである。

（訳＝櫻井義夫）

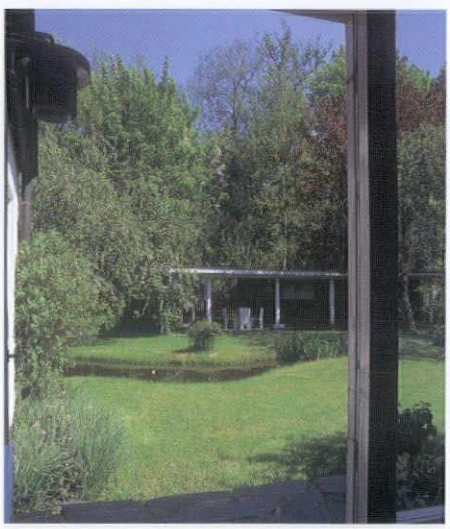
●Sirkkaliisa Jetsonen／建築家、ヘルシンキ工科大学講師

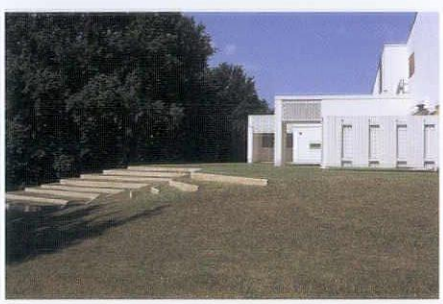
外部空間あるいは庭の考察

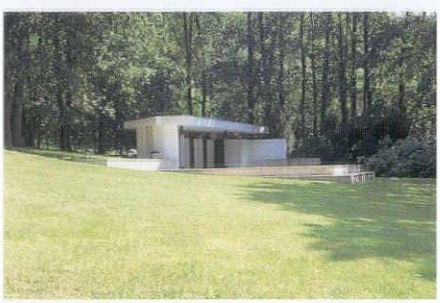
田中雅美

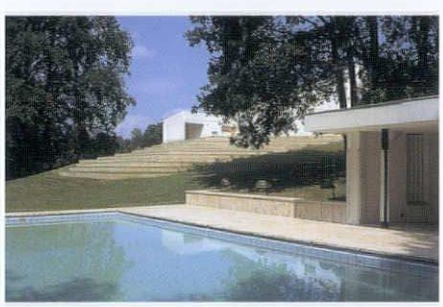

①


④


⑦


②


⑤


③


⑥

photo①–⑥：M.Tanaka

白く輝く建築—メゾン・カレ

私がアアルトの外部空間について強い印象を受けたのは、昨年初夏にパリ郊外に建つメゾン・カレを訪れた時である。丘陵の頂部付近に造られた建物から美しく刈られた芝生の緩やかな斜面を東側に下り、更衣室や手洗のための小さな建物の付いたプールサイドからメゾン・カレを見返した瞬間、鳥肌の立つような感動を覚えたのを今でも記憶している。

青々と水をたたえたプールの水平面と、大理石のプール・サイド、そしてプール付室の庇と樹木越しに白く輝くメゾン・カレ主屋が見えた。白い建物は硬い殻を持ちながらも彫塑的な一塊として存在するのではなく、大小複数の個が何かの求心力をもって一群を成している様であった。そのたたずまいは光り輝きとても魅力的で、何か神聖なものの様に感じた。しかし人を圧倒する様な威圧感はなく、自然な有り様で風景に融合していた。

「建築でこたえるよ」

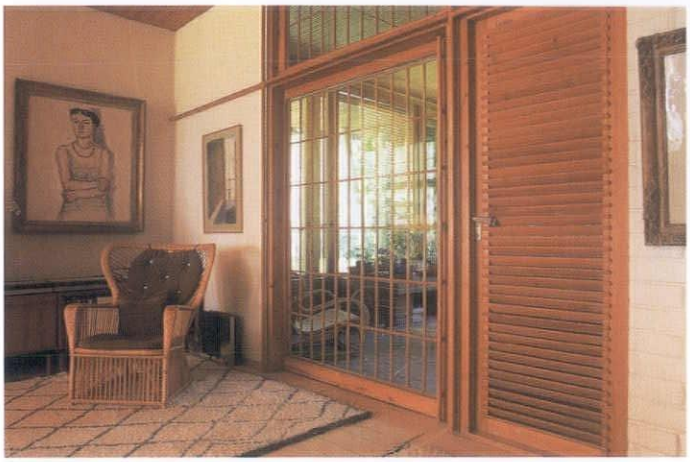
アアルトは生前、自らの建物の建築理論についてたずねられると、決まり文句のように「建築でこたえるよ」と答えたという。これは何も彼が口下手であったり、理論をもたない建築家であったという事を意味しない。確かに理論を押し立ててデザインを進めるというタイプではなかったが、スピーチは彼の得意とする分野である。アアルトは正直返答に窮したのだと思う。ヨーロッパ中央に高まる近代建築の潮流のなかで、CIAMの理論家たちやコルビュジエの考える建築とは相入れない別な方向を目指したからだ。コルビュジエが相互に作用しあう幾何学を巧みに扱いながら論理的に自然とつなげ、その結果自然と対比する明確に組織だった人工の形を目指したのに対し、アアルトは誰よりも合理的であろうとした結果、近代建築の精神には共感しながらも別の方法論を模索していく。それは時に有機的建築と呼ばれたものである。

生物学的建築

アアルトのめざした建築を考えるとき、CIAMを通じて親交を深めたモホリ・ナギの言葉の中に見事に表現されている。「調和は美の定式に隠されているのではなく、途絶えることなく続く有機的な作用の中にある。その場合自然の法則への適合はひとりでに作品に表れる。なぜなら人間の生物学上の構造がすべての有機的表現の真の原点だからである。」(*1)

アアルトは人間社会を地球上の複雑な生物学上の事象としてとらえ、建築はその活動を抱合するものだと考えていた。彼が、機能主義建築—限定され、合理的に規定されるニーズを満たすためにつくられる建築に背を向けたのは、人間の精神と身体の活動は相互に関係しあい、複雑に作用しあうもので、一定のニーズを分析しても全体の解決には至らないと考えたからである。一方、自然界や生物界

①：メゾン・カレ東側ファサード。
②：メゾン・カレ主屋から突き出たウイングと東側斜面の段。
③：プール端よりメゾン・カレを見返す。
④：メゾン・カレ東側斜面に刻まれた段。
⑤：プールを芝生の庭ごしに見る。
⑥：更衣室側からプールの水平面を見る。
⑦：ヴィラ・シェペット。主屋から小さな池を配した中庭を通して客室棟を見る。
⑧：ヴィラ・マイレア。リビングルームから「冬の庭」と呼ばれるサンルーム入口を見る。
⑨：セイナッツァロの役場。廊下から中庭を望む。



⑧



⑨

photo⑦－⑨：Jari Jetsonen

を観察すれば、一定の合理性や法則から、無数の活動から形態が生み出され、相互に作用しながら全体として調和ある事象として存在している。人間もこれら自然や生物の一員であり、その結果生まれる建築もその一部として調和するべきである。理想の建築とは「自然の創造物」に近づく事である。というのがアアルトの建築の根底にある概念であった。

二つの自然

今日の現代社会では、エコロジカルな視点が建築のみならずあらゆる分野において注目されるが、科学技術が人間社会の将来に光明をもたらすとした1930年代頃からすでにアアルトが、この様な建築を目指したことは、ある種驚きである。

彼は、1898年に中部フィンランドのユヴァスキュラに森林測量技師の息子として生まれ、幼少時代から森林散策や釣りに出かけ、その中から体得した湖畔風景への親しみや、自然への畏敬の念があった事は想像にかたくない。またアアルトは無数の人間が時の流れを経て創りあげたアノニマスな建築は、つねに彼の創作の源泉であった。生涯愛してやまなかった地中海の村落やイタリア山岳都市から人間の相互作用によって創られた形態の中に無定形の調和の美を見出し、また、フィンランド東方のカレリア地方の木造の村落からは、人の生活に従って成長し変化してゆく建築のあり方を学んだ。

このようにアアルトは、フィンランドの自然と、アノニマスな村落や都市という人工ではあるが時として環境の中で風景と化した自然、この全く異なった二つの自然から建築で理想とする心象風景をつくりあげたのである。

（＊1）：「白い机」第2巻モダンタイムスより

「白い机」全3巻に見るアルヴァ・アアルトの人物像

――見どころ読みどころひろい読み――

「白い机」全3巻を訳して今更のように思うことは、大型本300ページ3巻という嵩の大きさもさる事ながら、その内容の緻密なぎっしり感である。これは著者ヨーラン・シルツがアルヴァ・アアルトという建築家の業績を、建築のみならず、家具デザイン、講演、記述まで網羅し、あらゆる角度からその人物像や思想に肉薄しようとした結果である。しかし、いくらアアルトファンの読者であっても、この3巻すべて読破するには時間と根気が必要であろう。そこで、ここではこの3巻の中から「見どころ読みどころ」を訳者の立場でピックアップし紹介（以下の①～⑧）しようと思う。

「白い机」は、アアルトの伝記的記述と建築思想の解説によって大きく構成（3巻は少し異なる）されているが、ここでは特にアアルトの伝記部分から選ぶことにした。読者方々には、まずアアルトの人物像に興味を持ってもらいたいからである。

そこで、特にアアルトの人となりが生き生きと伝わってくる部分、特に私に興味を持たせたのは、生前のアアルトに直接関わり合った往年のスタッフや教えを受けた学生、家族づき合いをした人々の記憶の底から甦ったアアルトの記述である。ここには、アアルトという人間から放射される創造性や、人生を生きるエネルギーが精気を帯びて伝わってくる。少なからず三面記事的な所もあるが、私自身も設計者の端くれとして、いずれも感動を覚え、ため息がでたり、励まされたりした所ばかりである。

「白い机」―若い時―「アルヴァ・アアルトの青年時代と芸術思想」第1巻

①：第5章ユヴァスキュラの事務所（P.125～P.147）

アアルトはその生涯で事務所の場をユヴァスキュラ―トゥルク―ヘルシンキと移している。彼にとって事務所の場所は常に大きな意味をもっていた。第1巻はユヴァスキュラ時代、第2巻はトゥルク時代、そして第3巻はヘルシンキ時代のアアルトを中心に扱っている。

ヘルシンキ工科大学建築学科を卒業したアアルトは7年ぶりに故郷ユヴァスキュラに帰り、若干25才にして自身の事務所を開設する。父のつてを頼り銀行から何とか借金をし

てシティホールの地下に寝食兼用の事務所を開設した。これが後年、近代建築の巨匠のひとりとなったアアルトの第1歩であった。あらゆる状況の中で自分をうまく立回らせ演技できる役者的性格はアアルトの周りを常に明るく彩ったが、この特色は事務所開設時から発揮されたようだ。また、空想的でユーモアに富んだ利発さは時としてジャーナリズム的才能として現われ、ここでは「ツタンカーメン王の窮愛妃」がおもしろい。事務所のスタッフとして雇った年上のアイノ・マルシオとの結婚。新婚旅行で飛行機を楽しみ、進歩的近代技術を好むアアルトの一面が見てとれる。事務所開設時からコンペに意欲的に取り組んだアアルトは、ライバル—ヒルディング・エーケルンドの登場もあって、益々情熱を傾けて行く。

ここではトゥルクに事務所を移し、近代建築スタイルで新境地を開く前の3年半の生活が活写されている。

「白い机」—モダンタイムス—「アルヴァ・アアルトと機能主義の出会い」第2巻

全3巻の中では真ん中に挟まれ地味になりがちな第2巻が、実はもっとも面白い。中央ヨーロッパで興った近代建築運動はスウェーデンを経由し、フィンランドではバルト海を挟んでスウェーデンに近い古都トゥルクで開花する。この風向きの中でアアルトは、ユヴァスキュラを引き払いトゥルクに事務所を移した。この移動とともに自らの作風も古典主義から近代建築へと変え、パイミオのサナトリウムのコンペで1等入選を勝ち取る。このコンペで一躍国際的建築家の仲間入りを果たした新進気鋭アアルトは、一方で機能主義のイデオロギーと硬化していく近代建築の形態に違和感を覚えながら独自の道を進み始める。1930年代前後の近代建築ムーブメントが描かれる第2巻は、建築を学ぶ人にとって貴重な記述が満載である。だが、ここでは新進気鋭の建築家アアルトに身近に接した人々の記憶から写し出されたその当時のアアルトの描写部分を紹介する。

②：トゥルクの事務所（P.39～P.46）

トゥルク時代のスタッフであった二人のノルウェー人を著者ヨーラン・シルツが探し出し、当時の様子を直接聞こうと、存命している老齢な建築家に会いにノルウェーのオスロを訪れる。

彼らから聞くアアルトの創造力は「アイデアはまるで花火のように天空に向かって弾け、そのすさまじい流れ火が地表に落下し、それがコンクリートや煉瓦や木に形を変えるのです。」だったと述懐する。

③：ヴィラ・マレイアとニューヨーク博パビリオンのコンペティション（P.152～P.164）

アアルトのあらゆる作品の中でも、ヴィラ・マレイアとニューヨーク博パビリオンは、特段重要な意味を持つ。アアルトが自らの方向を明確に打出した最初のものだからである。特にここで注目したいのは、当時の若いスイス人スタッフ、リザベート・ザックスのインタビューで、これらの作品が生まれる過程が臨場感をもって描かれる。

④：ある日本人の目から見たアアルト（P.107～P.114）

アアルトと接した人間からアアルトの印象を聞く記述は多いが、アアルト家の様子についてはあまり知られていない。ここにアアルト家と家族同士の付き合いを記した貴重な資料が紹介されている。初代フィンランド日本公使、市川彦太郎・かよこ夫婦が、帰国後に著したエッセイ「フィンランド雑記」である。中では、特にかよこ夫人からアイノ・アアルトの印象がすがすがしい筆緻で語られている。

「白い机」—円熟期—「アルヴァ・アアルトの栄光と憂うつ」第3巻

アアルトの一生を見れば仕事と名誉の両方を得た建築家だと思えるが、この巻では1950年代の黄金期から晩年に向かう中で、同じ様に悲しみや失意があり、あふれるばかりの栄光の影に憂うつな晩年を過ごすアアルトの一面が描かれる。

⑤：妻アイノの死（P.127～P.135, 一部P.125）

ユヴァスキュラで事務所を開いた時からアアルトとともにあり、常に天の良き批評家であった妻アイノの死は、アアルトの想像以上の悲しみを与えた。1948年MITの教授として渡米していたアアルトは、教授職1年分の給与とほとんど変わりない美しいミンクのコートを買い、1949年ムンキニエミの自室でアイノが永遠の眠りにつくとき、彼女の足にそっとコートを掛けたのだ。（P.125より）

⑥：失意の底から立ち上がる（P.136～P.150）

妻アイノの死による絶望の淵からアアルトが立ち直り50年代の黄金期を向かえることができたのは、ヘンリ・ヴァン・デ・ヴェルデの励ましであり、事務所の新しいスタッフとなったエルサ・マキニエミ（エリッサ・アアルト）との出会いであった。

⑦：事務所の現状（P.255～P.265）

アアルトの華やかに彩られた活躍の中で、アアルト事務所の現状はどうだったのであろう。建築事務所で働いている人にとってどんな事務所であったのか？経営はどうだったのかは興味あるところだろう。さまざまな往年のスタッフの証言から事務所の雰囲気が伝わってくる。

⑧：最晩年（P.311～P.320）

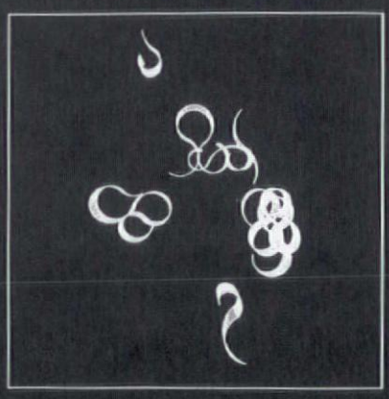
1976年春、アアルトはヘルシンキ市内の病院で死を迎える。入院しているアアルトを見舞う著者ヨーラン・シルツに「このホテルは良くないよ」と愚痴をこぼし、「君もワインを一杯飲むだろう」と、病院のまずいジュースを看護婦に二つのグラスにつがせ「乾杯」。「年代もののワインじゃないが他にいいものがなくてね」といったアルヴァ。自分のセンチメンタリズムを最後まで他人に見せることなく去ったアアルトだった。

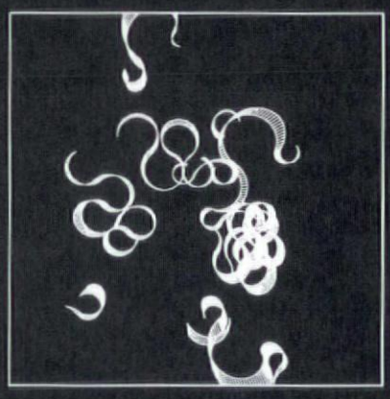
●たなか・まさみ／建築家

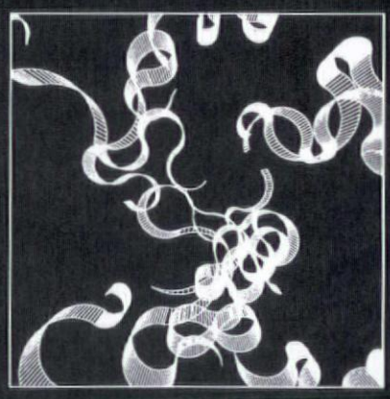
前述のヨーラン・シルツ著、田中雅美・田中智子共訳によるアルヴァ・アアルト評伝「白い机」シリーズ3巻（鹿島出版会刊）が、日本翻訳家協会（ユネスコ国際翻訳家連盟）より第34回日本翻訳出版文化賞を受賞した。アアルトを知る上で格好の書であり、是非一読願いたい。また、さらにアアルトに関心ある方への朗報として、生誕100年記念国際巡回展「アルヴァー・アールト1898-1976：20世紀モダニズムの人間主義」が日本（セゾン美術館／1998年12月19日-1999年2月15日）でも開催される。貴重な多くの資料を目にできる絶好の機会であろう。（編集部注）

HALFTECTURE PROJECT

メタルシート・ストラクチュアによる遠藤秀平の近作

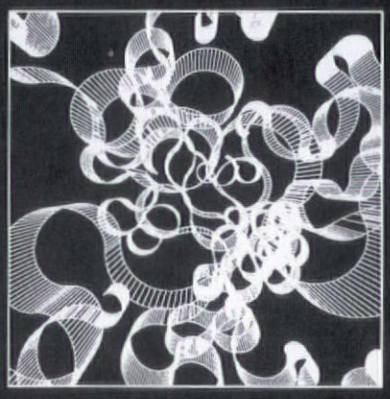


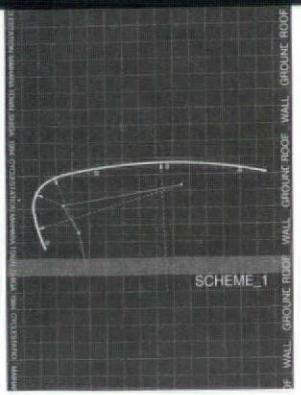




ハーフテクチュア（半建築）

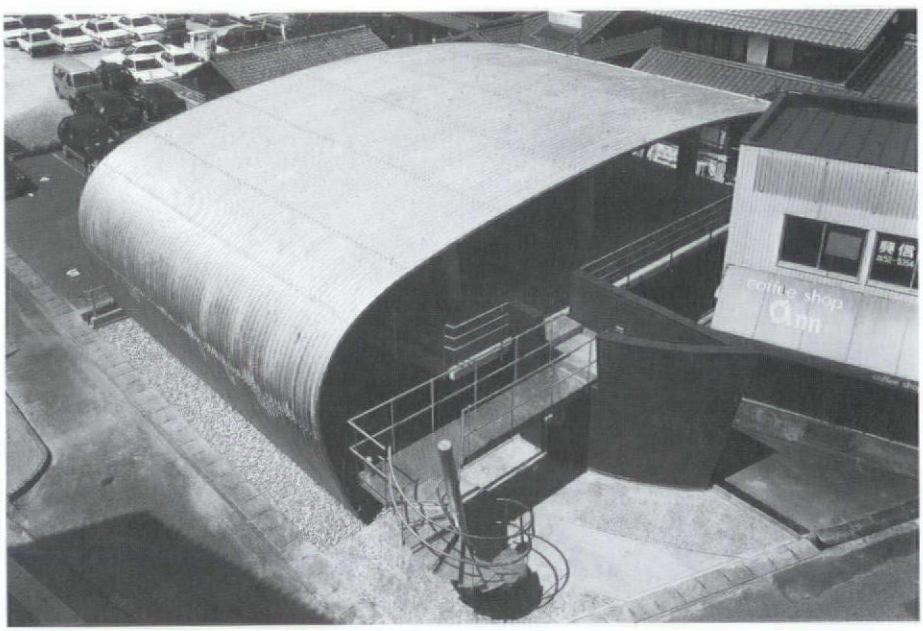
半建築とは滞留を目的とせず、通過と接触を動機とする閉鎖しない状態をいう。建築が空間の分節を目的とすることに対し、半建築は共有による相互作用を生み出す。この具体化を、柱・梁の規定を必要としない面状の連鎖帯の運用により試みている。ここに集められたものはビルディングタイプとしての規範を形成しない小さなものばかりであるが、意図しない不思議な連続がコルゲート鋼板を使用した6つの建築として実現した。これらに使用材料以外に共通点はほとんどないが、このことに主眼はない。強いて上げるならば内外の仕上が同一であり通過可能な状態にある部分を有している点である。これら連鎖帯による自立構造の展開である連続体の運用が生み出したいくつかの試みが、不連続体としてのハーフテクチュア（半建築）である。（遠藤秀平）

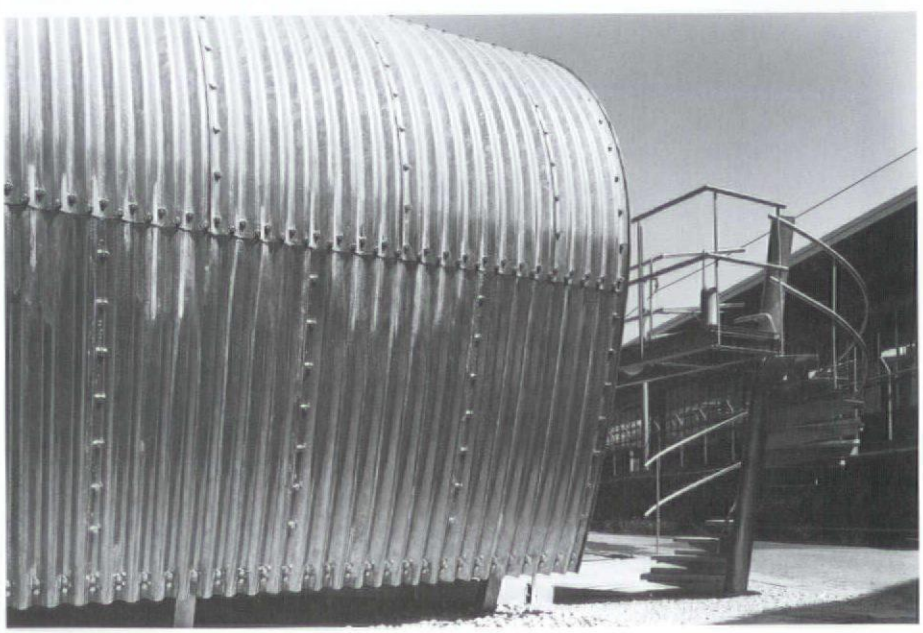


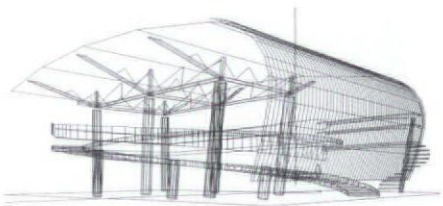


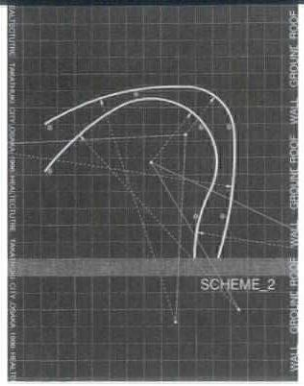
HALFTECTURE PROJECT NO. 1

CYCLESTATION 米原 1994



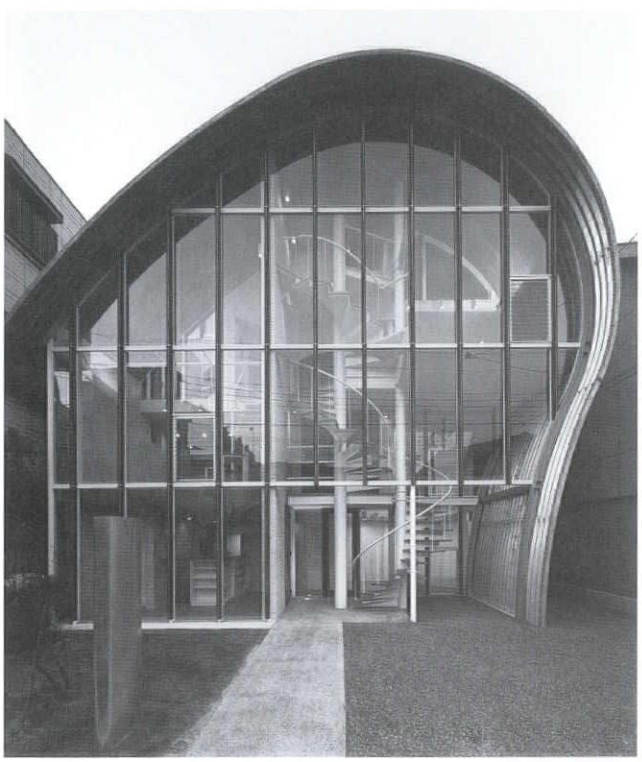


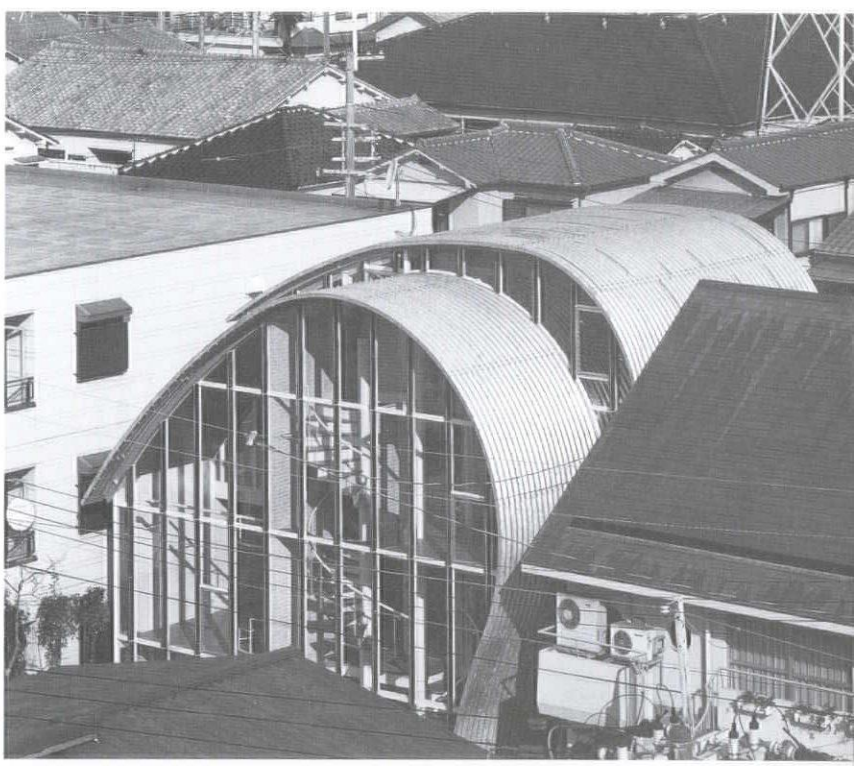


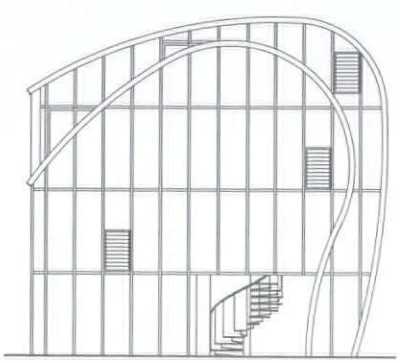


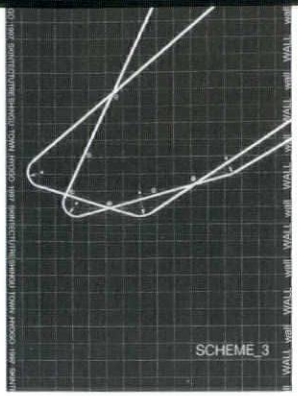
HALFTECTURE PROJECT NO. 2

HEALTECTURE 小森 1996



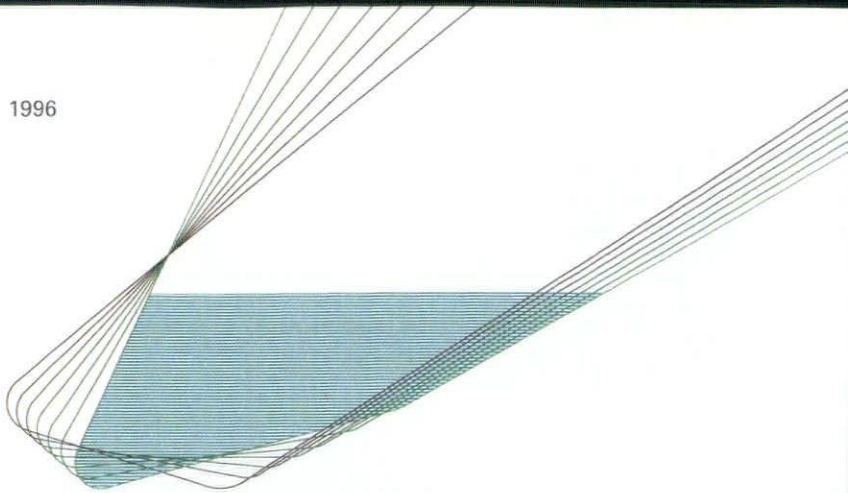


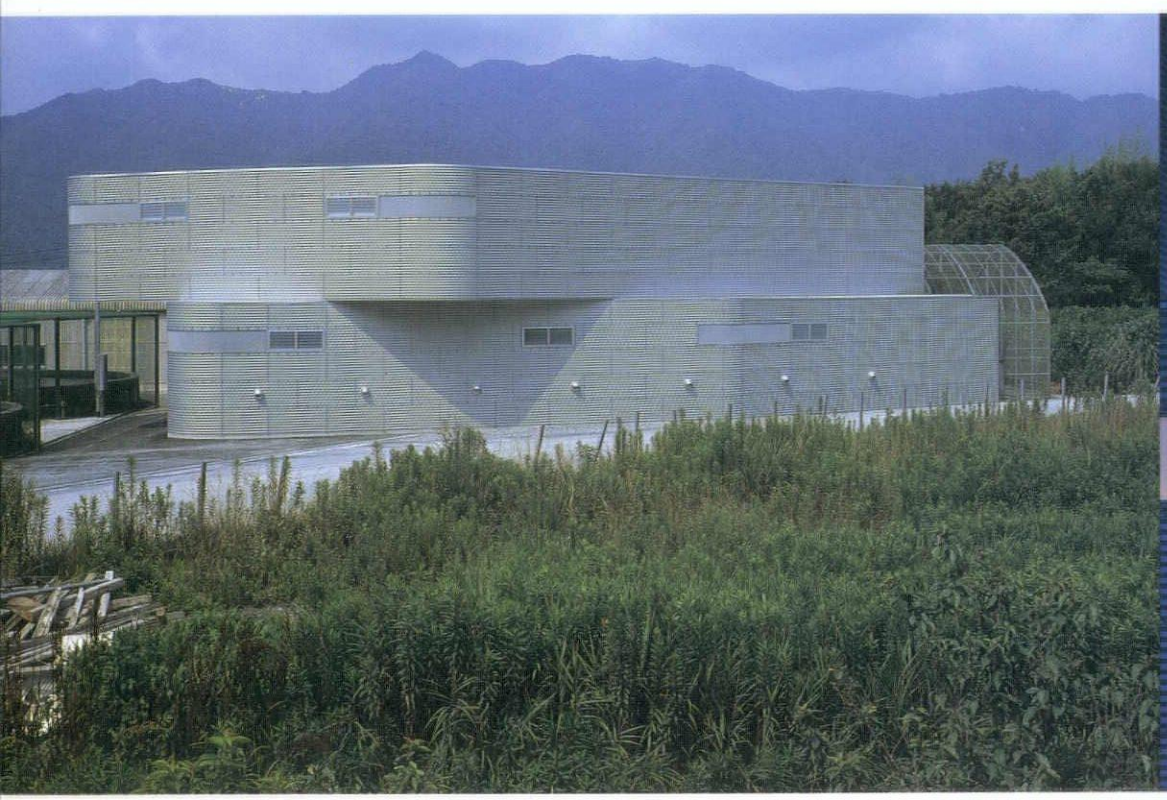


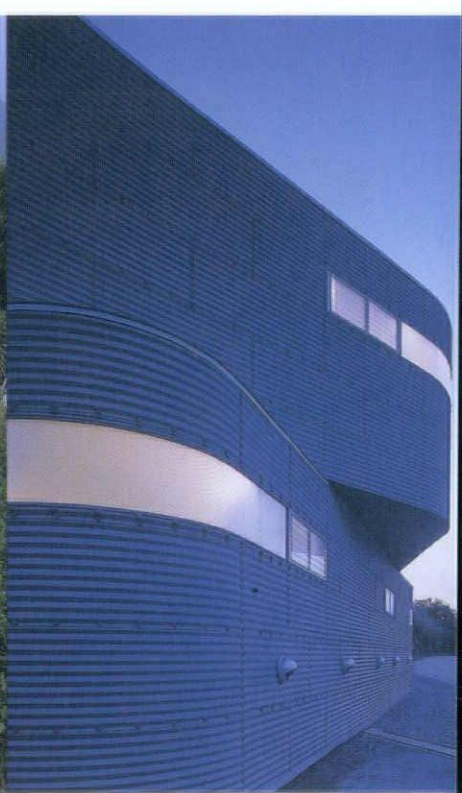


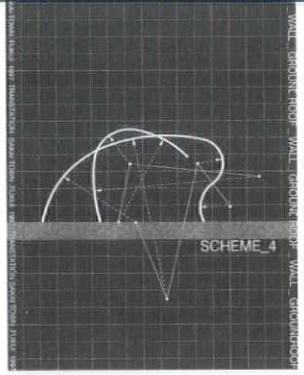
HALFTECTURE PROJECT NO. 3

SKINTECTURE 揖保川 1996



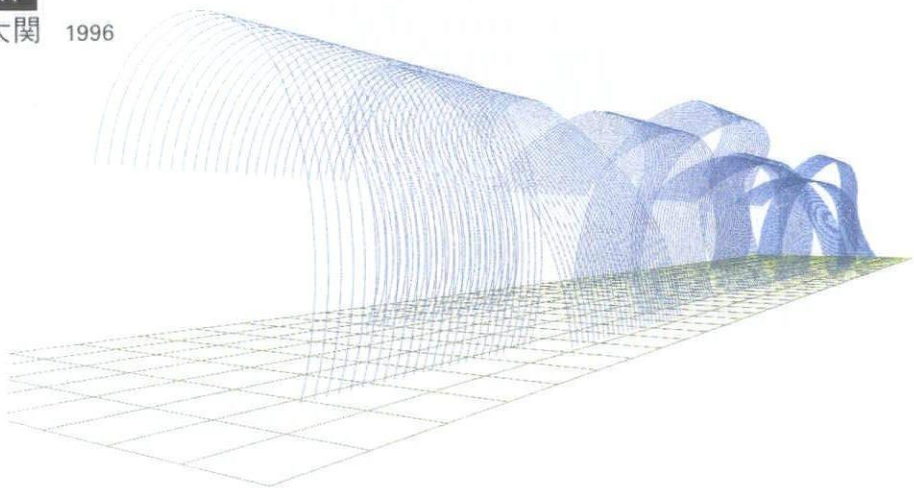






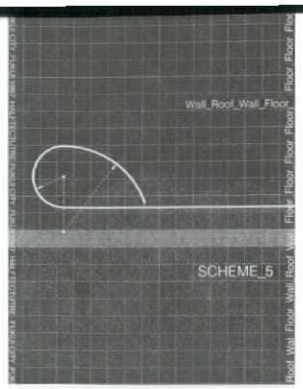
HALFTECTURE PROJECT NO. 4

TRANSTATION 大関 1996









HALFTECTURE PROJECT NO. 5

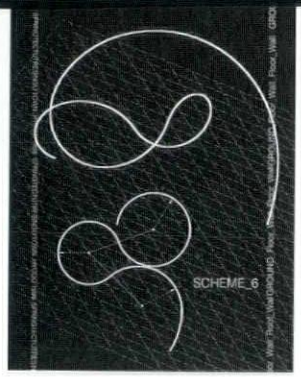
HALFTECTURE 福井 1997









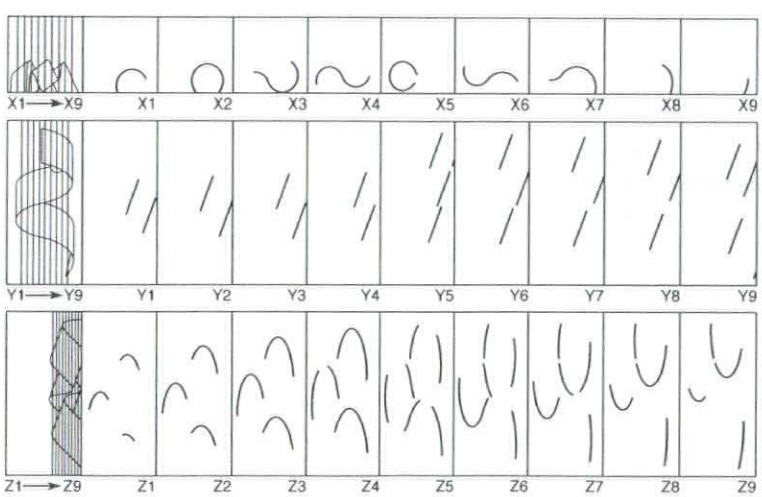


HALFTECTURE PROJECT NO. 6

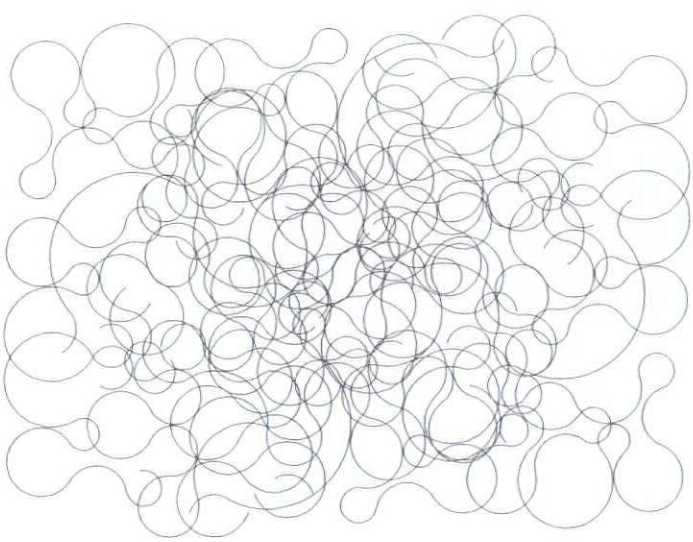
SPRINGTECTURE 播磨 1998











連鎖帯

CYCLESTATION米原

1994



地方の新幹線の駅前に立地する小さな駐輪施設である。閉鎖的になりがちであるが、全体に屋根をかけ側面を開放し視線を通過させ、駅広場側を屋根から連続する壁面として部分的に構造的自立性も持たせている。やや傾く壁面と湾曲するスロープのある通過空間が、自転車の速度感と浮遊する快感を加速する。屋根・壁を連続的に形成するものとしてコルゲート鋼板を使用している。この面材はボルト接合により様々な形状と規模に展開できるが、以後これを連鎖帯と設定しいくつかの運用を試みることになる。

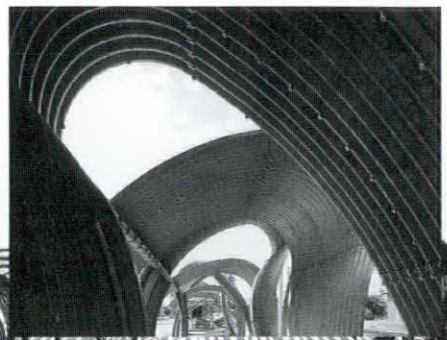
連鎖帯の複合

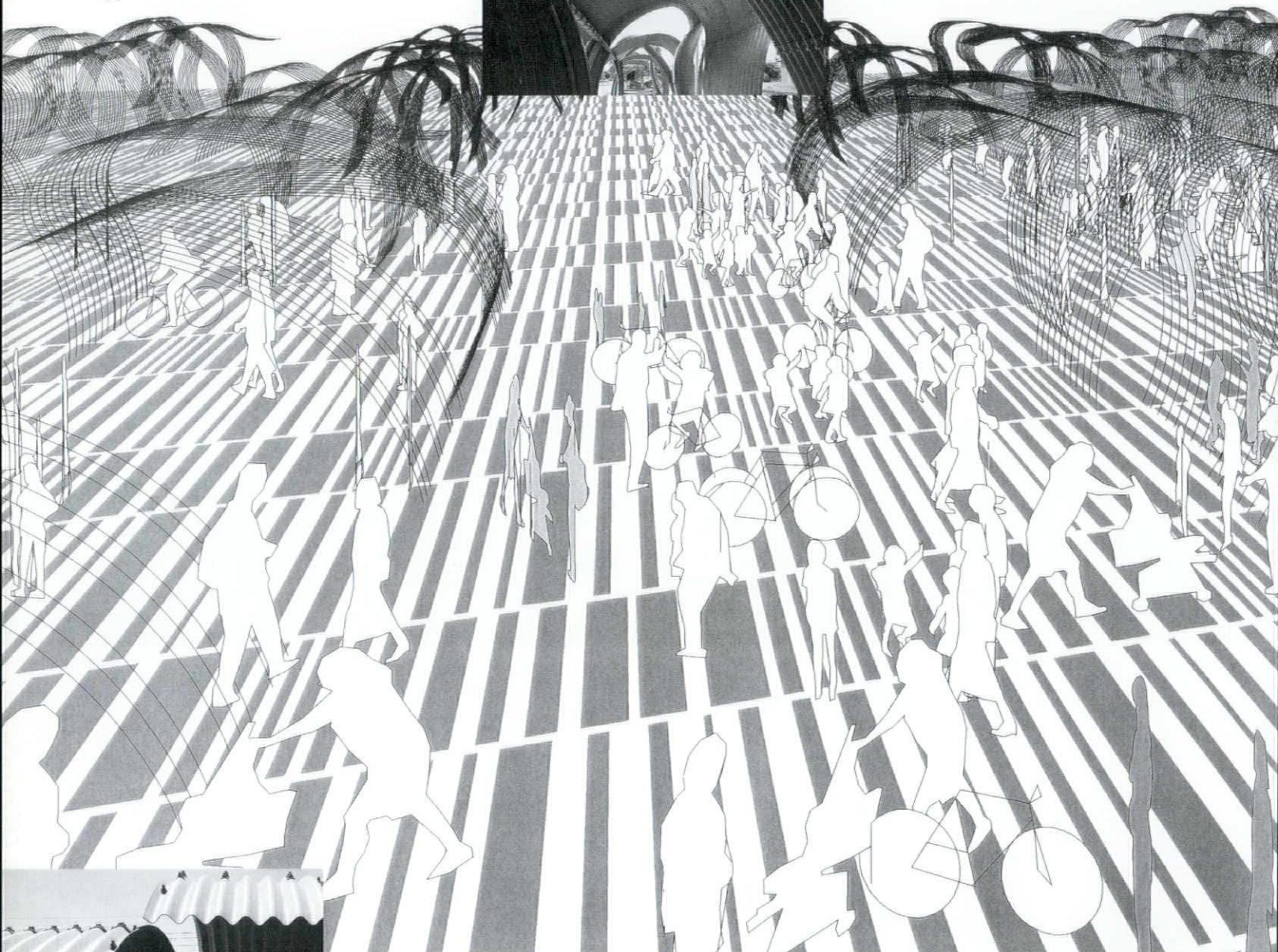
HEALTECTURE小森

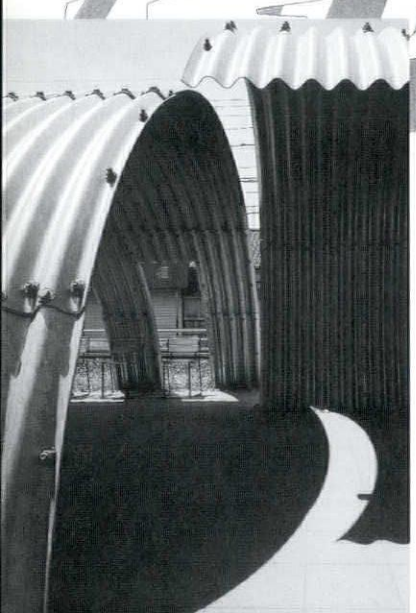
1996



大阪近郊の住宅が密集する地域に計画した店舗付の住宅である。屋根・壁を連続する形式を採用しながら、単一断面による空間の単調な均質性を回避する目的から2枚の連鎖帯（屋根壁）を設定した。この2枚の異なる断面が多様な間隙を生み出し、内部空間に様々な光を取り込んでいる。正円弧の連続による幾何学的線形であるが、ふたつの差異によるスリットは無限定な空間の多様性を見せている。ここではふたつの連鎖帯を被覆する2重ガラス面による、視線の通過状態が運用される半建築を試みている。







連続体の運用

TRANSTATION大関

1996



地方に走る私鉄の無人駅の改新を目的として、線路に平行する細長い引き込線跡地が敷地としてあてられた。駅は電車に乗ることを目的とする単純なものであるが、このプロジェクトはかつて駅が周囲の街に対して持っていた求心力を再度拡張しようとするものである。ここでは連鎖帯に構造性を持たせるために地表から自立する形式として、アーチ形状と逆L状を設定しこれらを連続体として運用している。これらの自立する連続体（屋根・壁）の並列による間隙を運用しながら、非均質な空間を生み出す不連続体（不均質連続体）を試みている。この不連続体は多くの間隙を保有し、内外の通過を可能とし接触を生み出す半建築である。

連鎖帯の平面複合

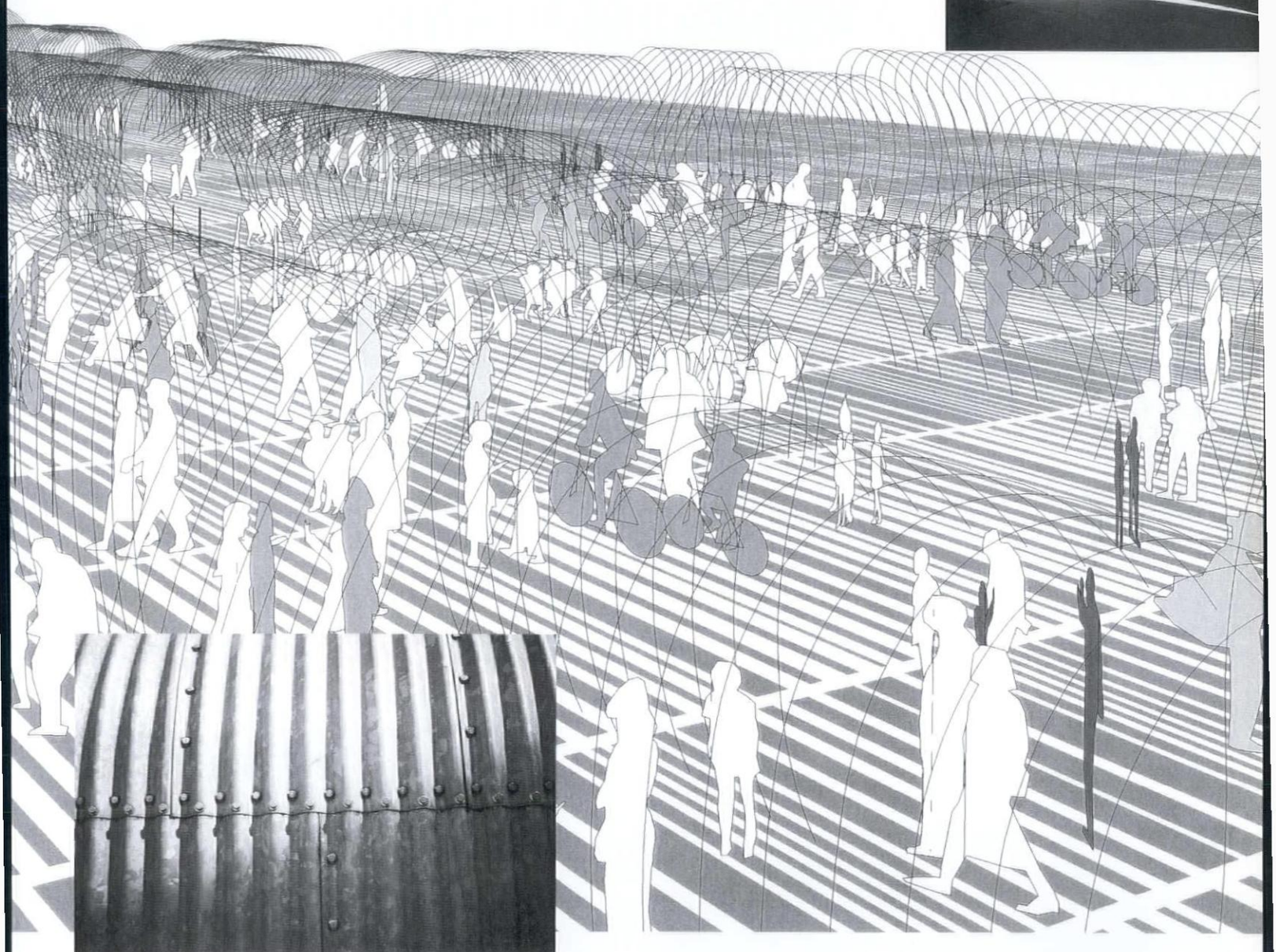
SKINTECTURE揖保川

1996



兵庫県に流れる揖保川を管理する漁業組合の水産施設管理研究棟の増築である。敷地は場内にとり残されていた三角形の残地であった。ここでは2枚の連鎖帯の平面的な運用を設定し、変形な敷地形状に対応している。ふたつの連鎖帯（壁）は多様に変形しながら交点を発生し、この点を貫通する柱が相互に部分共有されている。微妙な差異を示しながら変化する2面の連鎖帯は通行する者に速度変化を引き起こし、見ることの再設定を要請する。部分としての柱を共有することで変形連鎖する壁面が視覚的な接触を喚起する半建築を試みている。





連続体の拡張

HALFTECTURE福井

1997



地方に走る単線の私鉄に急きょ設定されたプラットフォームと待合である。連続体が多様な運用を可能にするものの、地表がもつ拘束力に限定されている。この限定性を人工地盤であるプラットフォームを取り込むことより、一体的な連鎖帯（屋根・壁・床）の設定に拡張することで可能となる連続体とした。部分的にではあるが一断面方向の均質性による限界は留保した状態である。人工地盤を設定することで、動的にまた視覚的にも通過可能な状態が伸展する半建築を試みている。

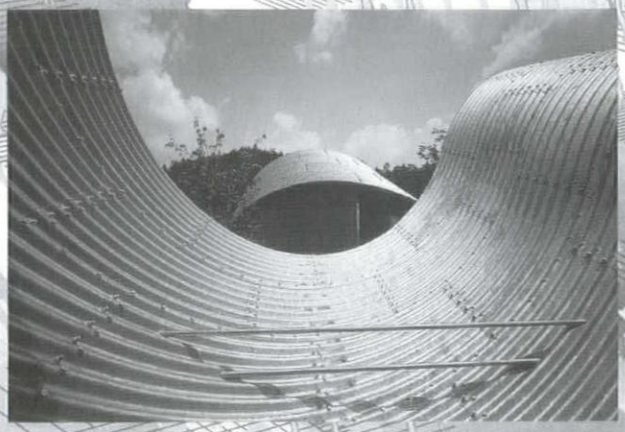
不連続体による増殖化

SPRINGTECTURE播磨

1998

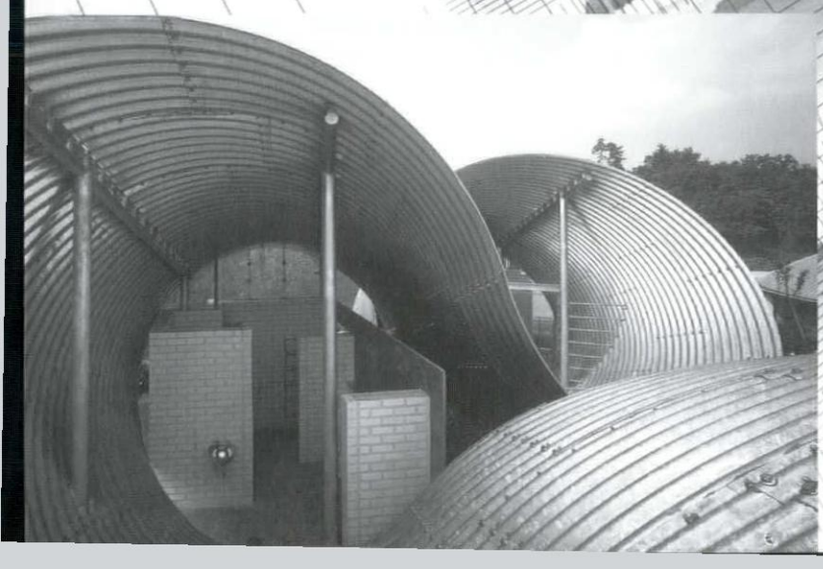


自然に囲まれた公園に要請された小さな管理施設である。ここでは連鎖帯（屋根・壁・床）が無限に増殖し多様な内外空間を捕捉する不連続体（不均質連続体）を設定している。不連続体はどの断面方向でも非均質な状態を示し、増殖による運用の可能性を有している。この不連続体では内外空間を部分共有により捕捉する連鎖帯による相互性を設定することで分有体（部分共有可能体）として運用している。この運用は内外を融合することによる通過を可能とし、分節と排除構造をもたない半建築を生み出す試みである。



螺旋体
螺旋体の設定は曲面平行四辺形の入射角度と部材幅によって決定され連続体を形成する。しかし、一方向性に還元されやすい螺旋には反転が必要である。反転による接続が不連続体を保証する要素であり、方向性の強い螺旋に介入する有効な設定である。

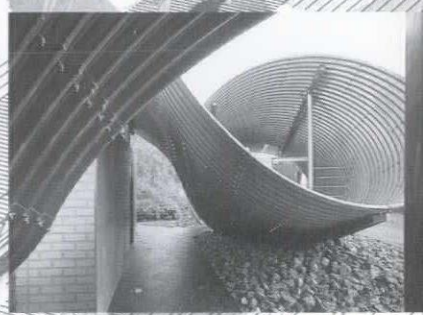
接地
建物には大きな呪縛が地中に隠されている。この目に見えない塊との関係は多くの場合隠蔽され目に触れることがない。建築の地表との接触は、その自重に拘束され安定化を前提とすることから過剰となる。薄い皮膜である連続体は地表との接触においては、地表面から離す場合と地表に敷き並べた玉石に埋め込む関係をとり、接地点の可動性を出すことで隠蔽性を少なくしたい。



構造性
2.7～7mmを規格とするコルゲート鋼板は、その薄さにより波形状と二次曲面との加工を可能にしている。この波形断面により、構造性の低い平面の鋼板が線的方向性を獲得し、構造的強度を持ちえる。部材は工場加工によるため一定の大きさの限界を有しているが、ボルト接合による限定解除を多様に展開したい。



表面処理
鉄は酸化しやすいため表面処理が行われるが、そのなかでも亜鉛メッキは持続的な魅力を有している。経年変化で結晶が徐々に浮き出て変化のある表面となり、鈍く反射しない表情は金属としての重量感も持ち合わせている。ひとつひとつの結晶は大小と異なり微妙に折り重なる状態は見るものを飽きさせない。



不連続
同一部分の連続による成立は単調な均質性を逃れられないが、連続性そのものは有効な展開力を有している。力や情報の流れが連続的であるように、不均質に連続（不連続）する展開こそが重要である。

分有
部分を共有することで種々のもの／ことが成りたっているが、多くは接点を隠蔽することで成立している。小さな部分を共有している点を増幅することで、複数により成立している全体の構成を明確化することが可能となる。あるいは、部分の共有が多様な総体を成立させている実体を視界の中に浮かび上がらせる。

曲面
曲面加工は正円弧であるために、同じ半径の弧またはその軸線上の円弧しか連続しない。円弧部分の連続による多様な展開は、極小グリッドによる設定であり、ヒューマングリッド（経済性・構造性）との比較は恣意的に見えがちであるが同質であることを確認したい。

ビジョナリーな20世紀末モダニズム

松葉一清

技術を即物的な形でいかに採用しうるか。20世紀の建築の歩みを概観するとき、建築家たちがこの素朴な疑問と苦闘し続けてきたことがわかるだろう。ノイエ・ザッハリッヒカイト、つまりは新即物主義。モダニズムの黎明期に青雲の志を抱く表現者たちは、たとえばバウハウスを根城に必死になってその達成を試みた。

だが、技術はしばしば保守的な快適さの感覚と衝突する。上辺ではその荒々しさこそが新時代の表現であると強弁しながらも、ビクトリア朝のイギリスの建築家たちが、鋳鉄の建築にゴシック調の装いを持たせたように、しばしば妥協がはかられた。100年近い時間軸で眺めたにしても、わずかにミース・ファン・デル・ローエだけが超の字のつく精密なステンレス加工仕上げで、即物的な美の殿堂に入城できたに過ぎなかった。

20世紀末の現代建築家である遠藤秀平の作品に、わたしは大仰にいえば「ひとつの奇跡」を見出すのである。多くの建築家たちが到達しようとして手にし得なかった「即物主義の美学」が間違いなく、彼の建築には宿っているのを目の当たりにするからだ。

長く続いた暑さの谷間、雨まじりの曇天の秋の日に、わたしは兵庫県の東の外れにある、相生のテクノ団地の芝生の上に立っていた。彼が設計した近作〈SPRINGTECTURE播磨〉を見学するためである。広大な未開発の土地に横たわるこの作品の建築面積は本当に100m²そこそこ。しかし、建築は揺るぎない存在感を発揮していた。

その存在感の特異さ、すばらしさこそが、遠藤の身上とする「即物主義の美学」なのである。立地にみあわない存在感というのは、小さいながらも大地に根を下ろしているといった類が通例だ。だが、〈SPRINGTECTURE播磨〉は、不思議にも空中に浮遊しているかのような感覚で、荒野に建築家の手の痕跡を刻みつけていた。

コルゲート鋼板は、メビウスの輪の一部を切り取ってきて展開したような、ねじれの躍動感を伴って、どこまでも続く鉛色の空と緑の絨毯が織りなすキャンバスに一幅の絵として描かれていた。鎮座していたのでも、根を下ろしていたのでも、横たわっていたのでもない。それは絵画を見るのに近い不思議な光景だったといってよい。

屋根と呼ぶべきだろうか、鋼板の稜線がもたらした形態のエッジの切れ味が、建築と背景を見事に分離させている。そして、うねる鋼板の立体としての量塊感が、柱梁構造でも、ドーム構造でも獲得できなかった、いうなればテクノロジーの3次元モデルとなって出現したのである。

わたしはそれこそパソコンのディスプレイの上の3Dグラフィックスをズームアップするように少しずつ建築に歩み寄っていった。そこで目にしたのは、これもしっかりとエッジが切られた鋼板接合部にならぶボルトの頭であった。もちろん、それ自体は表現を意図したのではなく、重なり合った鋼板をつなぐ目的で純粋に並べられたものに違いない。しかし、その大きくいえば構造を司る部品の力感にわたしは少なからず魅せられたのであった。これは間違いなく即物主義の完成形である。

コルゲート鋼板といえば、もちろん先駆者としての川合健二やその影響を受けた石山修武を思い浮かべるが、技術者であった川合はともかく、石山の作品（〈幻庵〉や〈開拓者の家〉）は、20世紀の建築が工業化＝商品化されていくことへの異議申し立てのメッセージの色彩が強かった。それは石山が時代に鋭敏な感覚を有する建築家であることをあますところなく証明している。即物的な素材の採用は、暴走する技術に対して、人間がどこまでそれを素朴な形で制御しうるか問いかけているのである。

一方、遠藤の立場は同じコルゲート鋼板を用いながら立脚点が異なっている。もちろん、テクノロジーという観点からは素朴さに変わりはないのだが、彼の視野では、真正面から「美」が見据えられている。もちろん、その美学は先に述べたように、20世紀建築家たちが手にしようとして志なかばにして終わった新即物主義のそれである。同じ素材を使うことがどの建築家にも可能であっても、同じようにいかないことは、誰もが経験的に知っている。およそモダニズムの美というものは、そこに到達できるか否かは、建築家の絶対的な造形力に左右される。それゆえ、モダニズムの建築は幅ひろい形での支持を市民から得られず、歴史的な意匠を具象的にコピーするポスト・モダンの表現が、ある種のデザインのフループルーフ（今流にいえばサルでもできる、である）として広がったのである。

その高いバリアーを超えることが出来たわけだから、遠藤の造形力は卓越したものであると言い切ってよい。一種の反感を呼ぶ素

材、不快感を現代的といいくるめて来ざるを得なかった素材を採用して、彼の作品は、明らかに現代建築の表現として一段の高みに達している。批評者というものは安易に、造形主の手業の霊感（丹下健三には間違いなく備わっている）などというものに美の根源を見出すべきではないと自戒しながらも、遠藤の作品がそれこそ「万にひとつ」の、それではないかと期待するのである。

遠藤の名を建築界に広めた作品である私鉄の無人駅舎〈HALFTECTURE福井〉が連想させるのは、18世紀から19世紀にかけてフランスで活躍した空想建築家たちのドローイングである。

クロードニコラ・ルドゥやエティエンヌルイ・ブレらが残したプロジェクト案に見られる徹底した幾何学の絶対美へのオマージュに通底する思考が、この不思議な無人駅の建築には感じられる。それはいうなれば、「ひと筆書き」の美学といってよい。

ルドゥによる著名な球体の建築〈農地管理人の家〉が、絶対的な幾何学の美を達成しているのは、その造形がいわばひと筆書きによって完成されていることに多くを負っている。一度、紙上に下ろされた筆が勢いをもった一閃で形を生み出すことが、形態の純粋さを保証する。ルドゥーの作品の多くはそうすることよってもたらされる、捨象した思い切りのよさゆえに後世の史家たちはモダニズムの美の始源と位置づけるのだが、〈HALFTECTURE福井〉もまたひと筆書きによって構成されていることを見逃してはなるまい。駅のホームの片方から曲線が立ち上がり、それが片一方の端まで走っていってふたつめの曲線を描いて終端に達する。その単純＝純粋な手の作業が、この建築にやはり絶対美をもたらしている。

空想建築家たちは拡大する市民社会に対して球体やヴォールトの単純明快な形態の大空間を提案した。そこでは、構造技術などは半ば無視されており、それが空想＝ビジョナリーという冠詞を彼らに被せる所以になっている。無論、現代の構造技術をもってすれば、彼らが夢想したようなシンプルな大空間は容易につくりだせるのだが、わたしは遠藤がそれを鋼板という最も簡素な素材で実現してしまったことに興味を覚えもする。

先人たちが閉じた立体で表現したことが、鋼板という空間を開放系で区切る素材によっても手にしうることを彼の一連の作品で教えられたのである。それは、20世紀の建築、そして、そのスタートでもある19世紀建築におけるさまざまな試みでも例を見なかったことであり、今後、遠藤がどのような形でこの造形の作法を発展させていくか大いに注目したいところである。

遠藤と膝詰めで話すまで、わたしは彼の「師匠」が誰であるか考えたこともなかった。このようないわばアヴァンギャルドのきわみのような作品を手がける建築家に、直接、先輩が教えを授けること自体がありえないと思い込んでいたからである。だが、遠藤にキャリアを問うたところ、「美建・設計事務所」に大学卒業後、籍を置いていたと聞かされ、得心がいった気になった。即物的な素材をモダニズムの美に高める手腕においては右に出る者のない石井修が主宰する事務所である。

相生の〈SPRINGTECTURE播磨〉では、コルゲート鋼板の金属質の肌と白いレンガ積みの壁が心地よい衝突を見せているが、そうした巧みなテクスチュアの演出は、石井が最も得意とするところだ。石井が理想としている建築家は、ル・コルビュジエであってミースではない。観念的なモダニズムの機械信奉を抜け出してそこに至った後期のル・コルビュジエに特徴的だったある種のブルータリズムに通じる荒々しいテクスチュアの宇宙が、石井の作品には好もしい形で展開されている。

遠藤の作品が即物的でありながら、決して、意図的な不快感の増幅や無粋な表現に流れない特質は、影響を受けたか否かはともかく、どこか石井の老練な手腕が行き届いた作品に通じている。震災からこのかた、安易な形で阪神間モダニズムというものが文学関係者の間で語られている。それに与することに抵抗はあるが、もしそのようなローカライズされたモダニズムが存在するのなら、石井の作品は最も上質な一例であろう。そして、遠藤が大阪に拠点を構えているがゆえに同じ特質を共有しているとの推論も、あながち無理なものではないのかも知れない。

現時点において、遠藤の建築は規模の拡大は見ていない。そこにとどまっているから理想が形をとっていることも事実だ。だが、卓越した造形力が本物なら、複合的な機能を内含する大建築でも彼の思考は通用するに違いない。次なる次元に向かって、不安よりも期待が大きいとわたしは信じてやまないのである。

●まつば・かずきよ／建築評論家

●建築データ

CYCLESTATION 米原

設計者　遠藤秀平　藤岡あおい
所在地　滋賀県坂田郡米原町米原西
竣工年　1994年11月
主用途　駐輪場
主構造　鉄筋コンクリート　一部鉄骨造　地上2階
敷地面積　219m²
建築面積　186m²
延床面積　325m²
構造設計　清貞建築構造事務所　清貞信一
施工　市川工務店
コルゲート　2形　厚2.7mm　溶融亜鉛メッキ（施工　ナカミツ建材）

TRANSTATION 大関

設計者　遠藤秀平　藤岡あおい
所在地　福井県坂井郡坂井町大味
竣工年　1996年12月
主用途　駅舎
主構造　鉄骨鋼板造　地上1階
敷地面積　825m²
建築面積　365m²
延床面積　365m²
構造設計　清貞建築構造事務所　清貞信一
施工　伊藤工務店
コルゲート　2形　厚2.7～7.0mm　溶融亜鉛メッキ（施工　ナカミツ建材）

HEALTECTURE 小森

設計者　遠藤秀平　藤岡あおい
所在地　大阪府高槻市
竣工年　1996年1月
主用途　併用住宅
主構造　鉄骨造　地上4階
敷地面積　140m²
建築面積　83m²
延床面積　247m²
構造設計　清貞建築構造事務所　清貞信一
施工　相互住宅
コルゲート　2形　厚2.7mm　溶融亜鉛メッキ（施工　ナカミツ建材）

HALFTECTURE 福井

設計者　遠藤秀平　堀江渉
所在地　福井県福井市今市
竣工年　1997年9月
主用途　駅舎
主構造　鉄骨鋼板造　地上1階
敷地面積　200,000m²
建築面積　103m²
構造設計　清貞建築構造事務所　清貞信一
施工　第一技術開発
コルゲート　2形　厚7.0mm　反転2枚重　溶融亜鉛メッキ（施工　ナカミツ建材）

SKINTECTURE 揖保川

設計者　遠藤秀平　藤岡あおい
所在地　兵庫県揖保郡新宮町北村
竣工年　1996年8月
主用途　水産研究施設
主構造　鉄骨造　地上2階
敷地面積　9,428m²
建築面積　148m²
延床面積　243m²
構造設計　清貞建築構造事務所　清貞信一
施工　三和建設
コルゲート　1形　厚1.6mm　溶融亜鉛メッキ（施工　ナカミツ建材）

SPRINGTECTURE 播磨

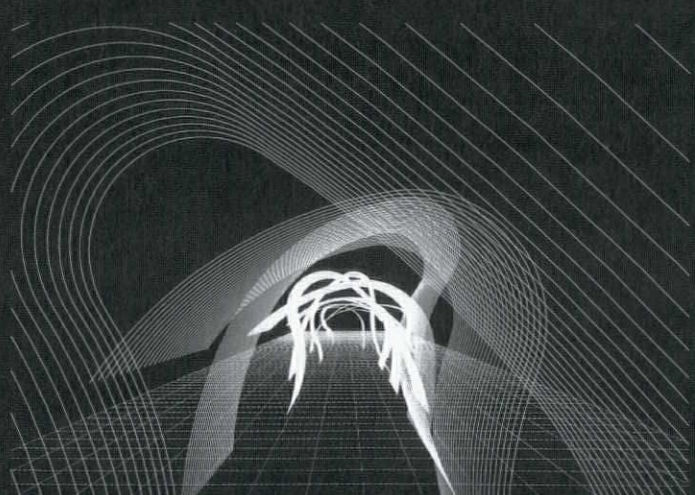
設計者　遠藤秀平　長井俊典
所在地　兵庫県揖保郡新宮町角亀
竣工年　1998年3月
主用途　公園管理施設
主構造　鉄骨鋼板造　地上1階
建築面積　119m²
延床面積　54m²
構造設計　TIS&PARTNERS　今川憲英　岡本克彦　前田正義
施工　井上工務店
コルゲート　2形　厚3.2mm　溶融亜鉛メッキ（施工　ナカミツ建材）

●フォト・クレジット

松村芳治　下記を除くすべての写真
北嶋俊治　p.65左1点、p.70中上1点

●遠藤秀平（えんどう・しゅうへい）略歴

1960年　滋賀県生まれ
1986年　京都市立芸術大学大学院修了
1986年　石井修／美建設計事務所
1988年～　遠藤秀平建築研究所





SPRINGTECTURE 播磨

川鉄のコルゲート鋼板
建築用構造材として、SS400にも対応。

製造：KAWAKEN 川鉄建材株式会社

本社　〒651-0075　神戸市中央区北本町通1-1-28
TEL 078 (232) 5861　FAX 078 (232) 5852

東京　〒136-0071　東京都江東区亀戸6-41-12 (川建ビル)
TEL 03 (5626) 8682　FAX 03 (5626) 7020

施工・販売：ナカミツ建材株式会社

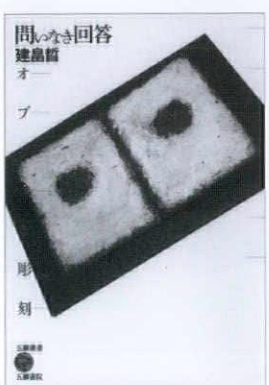
〒101-0047　東京都千代田区内神田3-24-7
TEL 03 (5256) 3133　FAX 03 (5256) 3134

書評

『問いなき回答』

評者＝伊東順二

回答なき問いの彼方に



『問いなき回答』
建畠晢＝著
B6判　272頁
五柳書院　2300円

この本をどんな人が読むのだろうと考えてみた。

美術愛好家に向けられているものではあるが、著者の意図はどうであれ、おそらくその中でも特定の対象を前提とするに違いないからである。また、それ以外の領域の読者にも意識は向けられているが、不特定多数という曖昧な視線の投げかけではなく、はっきりとした読者像が設定してあると言っていいだろう。

書籍には大まかに言ってふたつの類型が存在すると私は思うし、著者もそう考えているに違いない。それは読者を限定せず、最低限の理解を求めるものと、特定の読者に向けて挑戦的に発信されるものとのふたつである。当然、この著作は後者に属するのであるが、著者がそのことを強く意識している証拠は、この本で採集されている評論のほとんどが作品の解説というよりも、美術作品という鏡の前での思考のプロセスを基本的なデザインとするものだということである。つまり、美術評論家である著者は、批評の解説性ではなく、思考性を訴えようとしているのである。

「現代美術はよくわからない」という言葉をよく聞く。この言葉は現代人の怠慢と欺瞞をよく表している。というのも、「わからない」という表現の裏には「わかる」という己の能力への過信が存在しているし、また、過去の美術に対して「わかる」という短絡的情報が伝達される美術解説のシステムが存在していることの証明でもある。しかし、ラスコーやアルタミラの洞窟壁画を例に出すまでもなく、「モナ・リザ」や「マハ」についても、私たちに推理することはできるが、完全に理解することは不可能である。たとえ、ダ・ヴィンチやゴヤが生きていたとしても、彼らにさえその作品の意味するものと意味されるものをすべて詳述することはできないはずだ。そして、そこに芸術作品の普遍性と魅力があるのである。ダ・ヴィンチが「絵画は社会の鏡である」と語った理由もまたそこにある。作品は芸術家の日記ではないし、回答がひとつしかない数学の定理でもない。

しかし、おごれる近代は分類や種別、そして分析によって、推理を理解として確定するという幻想を持ち込んでしまった。マルセル・デュシャン以来の現代美術の軌跡は、そのような限定への抵抗の歴史だった。すなわち、デュシャンが大ガラスで具現化したように多面的で重層的な意味のメカニズムを意識的に構築し、理解不能というプラグインを作品に組み込むことが何よりも重要な課題となったのである。そうすることによって、美術作品はもう一度普遍的なエニグマ、つまり、思考のメディアとして再生されるのである。だから、20世紀美術は作品である前に批評であり、その向けられた先を常に考えなければ、解釈の糸口は到底見つからない。

著者はその命題に忠実に思考を組み立て、また、飛躍させていく。そのきっかけは、村岡三郎であり、デュシャンであり、斉藤義重、中原浩大、草間彌生、というように多様である。しかし、その選択においては常に明確な一貫性が見て取れる。なぜなら対象となる作品やアーチストは、思考の客観的な対象となる客体（オブジェ）の創造者であり、著者はまるで飢えた者のように、持てるすべての知識を傾けて、認識のプロセスを組み立ててゆく。その前照灯となるのは、ボードレール、ロートレアモン、ツェランといった詩人から、ブランショ、ドゥールズ＝ガタリという思想家達まで、実に幅広い。なぜならば、著者が意図しているのは、美術をフィールドとして、文明を、社会を、批評する普遍的なプロセスを確立することだからである。そして、その行為はきわめてオーソドックスな修辞学の上に堅固に組み立てられている。だから、本書は美術評論という狭義なカテゴリーの中で認知されるよりも横断的な批評書として読まれるべきだし、そのような認識を持って挑戦するならばジャンルを越えて期待される「回答」を提供してくれるに違いない。

ただひとつだけ残念なことは、巻末に著者インタビューを掲載したことである。批評という表現行為の重厚な時間を経過してきた読者にとっては、あまりにも、直接的な「回答」は必ずしも心地よいものではない。認識論的切断の道程を著者と共有する楽しみを奪わないでほしいとささやかに願う次第である。

●いとう・じゅんじ／美術評論家

書評

『白い机──円熟期』

評者＝伊藤大介

アアルト研究に欠かせぬ重要資料



「白い机──円熟期」
ヨーラン・シルツ＝著
田中雅美＋田中智子＝訳
A4変型　336頁
鹿島出版会　19000円

ヨーラン・シルツ著による建築家アルヴァ・アアルト評伝の最終第3巻（原著1989年刊）が、田中雅美・智子共訳で『白い机──円熟期「アルヴァ・アアルトの栄光と憂うつ」』のタイトルで刊行された（評者は通常「アルヴァー・アールト」と表記することにしているが、今回のみは訳者のフィンランド語原著からの労多い訳業に敬意を表して、「アルヴァ・アアルト」と書かせていただく）。

アアルトの初期活動を扱う第1巻（原著1982年刊）『白い机──若い時 「アルヴァ・アアルトの青年時代と芸術思想」』が1989年に、中期を扱う第2巻（原著1985年刊）『白い机──モダン・タイムス 「アルヴァ・アアルトと機能主義の出会い」』が1993年に翻訳されて以来やや待たされたが、後期を扱う今回の第3巻で全巻完結である。

1917年生まれのシルツは、生前のアアルトがもっとも信頼していた友人のひとりであり、1969年以後はヘルシンキにあるアアルト財団の会長も務めている。かつては美術評論家として活動していたが、現在ではアアルト研究が完全に彼のライフワークとなっている。全3巻の評伝では、本人や関係者からの聞き取り、アアルト財団所有の図面、スケッチやその他個人的な保管資料などを駆使して、アアルトの生涯と作品を伝記的な記述スタイルでまとめ、さらに彼の思想や作品の分析にも踏み込んでいる。作品分析に関しては、他の研究者による別の論点も多く出てくることが期待されるが、少なくとも本人をめぐる史実や作品成立の経緯を伝えてくれる伝記資料としての価値で、これを越えるものが今後出現することはほとんどありえない。現在の世界のすべてのアアルト研究者は、シルツの整えてくれた資料があって、初めて研究が可能になっていると言っても過言ではない。

ただし第3巻の場合、著者本人も序文の中で認めているように、これまでの第1〜2巻とはやや形式が異なる点が気になる。つまり、本文の記述が、アアルトの行動や個々の作品の成立をめぐる解説よりも、当時の社会的状況の中で彼が置かれた立場についての説明を中心としており、巻末に掲載されてきた年代順の詳細な作品リストも、今回はないのである。この巻で扱う時期に実現する作品の多くは有名なもので、他の文献や写真集が参照できるし、作品リストの欠落も、同じ著者による『ALVAR AALTO - THE COMPLETE CATALOGUE OF ARCHITECTURE, DESIGN AND ART』（1994, London）を見れば補えるということなのかもしれない。しかしやはり、第1〜2巻に目を通してその伝記としての厚みに圧倒された経験のある読者には、第3巻はやや物足らない印象を残す。

それでもなお、ここに盛られた情報は他で得られない性質のものが多いことも事実である。特に、サブ・タイトルに「栄光と憂うつ」とあるように、アアルトの晩年は必ずしも晴れやかな日々ばかりではなく、フィンランド国内での反対勢力との戦いにエネルギーを消耗して、むしろ鬱々としていたことが明らかにされている点は貴重である。これまでの多くの解説書では、ある種の遠慮もあったのか、この間の事情はあまりはっきりと説明されてこなかった。アアルトの「個性」の自由な発露の一方で、モダニズム建築が本来もつ「規格性」へ向かう発想、あるいはフィンランドの「社会性」を重視する国家体制との間で、それがどのような軋みを生み出していたかは、重要な分析課題なのである。これについてのシルツの記述は当然アアルト寄りのものだが、最近日本の建築誌などでも目にすることの多いユハニ・パラスマーによる評論なども、一方で参照するとよいだろう。

いずれにせよ、シルツの第3巻における指摘が及ぼした波紋と、これがきっかけとなった研究の進展は大きかった。

今年はちょうどアアルト生誕100年にあたり、フィンランド本国を中心に世界各地で様々なアアルト関連の催しが行われ、再評価も進んでいる。日本でも、雑誌の特集号や大規模な展覧会が企画され、アアルトに新たな光が注がれつつある。第3巻でシルツがやり残したアアルトの戦後の豊穣な作品群の詳細な解説は、むしろわれわれの世代の研究者に残された課題なのかもしれない。それにしてもシルツの成し遂げた業績は、アアルト研究のすべての出発点として、決して忘れられることのない大きな価値を持ち続けている。

●いとう・だいすけ／北海道東海大学助教授

Book Review

メトロポリタンライブラリー

1998年の評者＝
渡辺武信／太田佳代子／港 千尋

今月の評者＝港 千尋



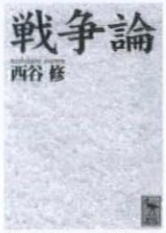
『史蹟論』 羽賀祥二＝著
名古屋大学出版会　5800円＋税



『年表　女と男の日本史』
「女と男の時空」編纂委員会＝編
藤原書店　4800円＋税



『地下のベルリン』
河合純枝＝著
文藝春秋　3238円＋税



『戦争論』　西谷修＝著
講談社学術文庫　900円＋税



『ロルティ伍長の犯罪』 ピエール・ルジャンドル＝著
西谷修＝訳・解説　人文書院　2800円＋税

歴史の地下へ

個展のためにパリと東京を幾度も往復しながら、ふたつの都市空間の違いに、記憶の在り方の違いを思う。記憶には重力のような見えない力があって、それがちょうど断層のように露出している地点に立ったとき、その力を感じるのではないか。その意味で、ヨーロッパの都市は社会的な記憶の断層が、いたるところに露出している。いや、露出していると言うよりも、都市そのものが、「記憶せよ」と語っているようだ。たとえば街の中心には、ふたつの大戦で死んだ兵士のための慰霊碑が必ず建てられて、そのような慰霊碑が仮に見つからない場所でも、通りの名を示す標識の下にひっそりと、その場所で死んだ兵士の名が刻まれていたりする。社会的な記憶は、空間のなかで物理的な存在として露出しているのである。

『史蹟論』は、そうした「社会的記憶」の成立を、日本の史跡や記念碑のなかに探ったものである。本書で著者が対象にしているモニュメントは、いわゆる記念碑から古戦場、神社、遺跡と幅広く、しかもそれぞれのモニュメントが成立するプロセスを丹念に追うことによって、記憶空間がどのような想像力やイデオロギーによって構成されているのかを探っている。わたしたちが日頃、いわゆる「名所旧跡」としてしか見ていない場所に、どのような力学が働いているのかを、本書は明らかにしているのである。フランスでは、すでに『記憶の場所』という大著が近代フランスの社会的記憶を研究しているが、ようやく日本にも本格的なモニュメント研究の書が現れたといっていいだろう。

歴史の流れのなかに、これまで見えていなかった「記憶」の在り方を見つけようとするこういった仕事は、日本全国を歩きながら、次々に視点をズラシてゆくことによって可能となるのだろうか。その意味では、「歴史」のベースとなる年表にも、視点をズラシてゆくことが求められるだろう。「年表」は元来、時間一点透視法とも言うべき、驚くべき単純構図によって書かれ、それが何十年と変わらず使われ続けてきたからだ。『年表　女と男の日本史』は、そんな十年一日の「年表」のスタイルを大きく変えようとする、大胆な試みである。全6巻が完結している『女と男の時空』の別巻としてやっと刊行された本書は、女と男の関係の変遷を原始・古代から今日まで網羅した、おそらく初めての年表である。しかもこれは従来とは異なる、「読む年表」である。1頁に、一般事項と男女関係史、そしてキーワードを3段に分けて載せることにより、読者がそれぞれの事項のあいだに関係性を見つけて読んでゆくことができるような構成になっている。つまり「読む」という行為が必然的に求める「視点の移動」が、歴史を見る目の移動のために利用されているわけである。こうした試みが続々と出てくると、「年表」ももっと面白くなるに違いない。

『地下のベルリン』もまた、視点を移動させた現代史探検の書であるが、著者らは実際に探検靴を履いて、歴史の地下に降りてゆく。そこでは「壁」によってシンボライズされていたベルリンとは違う、異貌のベルリンが姿を見せる。わたしはずいぶんパリの地下を散歩し、わたしたちの足の下にはもうひとつの都市があることを実感してきたが、ベルリンの地下もまたすごい。地上ではきれいに忘れ去られてしまう出来事も、地下にはそっくりそのまま残っているものだ。宮本隆司の迫力ある写真が、地下世界の不気味なリアリティを伝えている。

この秋のヨーロッパは、第一次大戦終結から80周年にあたり、新聞・雑誌はこぞって特集記事を組んでいる。フランスではこの戦争を「第一次」とは呼ばず、「14-18年戦争」あるいは単に「大戦」と呼んでいるが、この「大戦」という呼称には、それがはじめて世界をひとつの戦争のなかに巻き込んだ「大きな」戦争であったという含みが感じられる。『戦争論』は、戦争を単なる出来事の羅列としての戦争ではなく、その思想、哲学的な意味を探求することを通じて、人間の経験としての戦争を徹底的に考察し、すでに広く読み継がれてきたものであるが、今回の文庫版では、90年代以降の湾岸戦争や「世界新秩序」に対する分析が加えられている。わたしたちの生きる世界を地下から支えている、歴史のもっとも暗い中心を凝視し続ける著者の粘り強い視線は、『ロルティ伍長の犯罪』の翻訳を通して、今度は西欧の普遍論理に対し、強烈な疑問符を突きつける言葉となって届けられている。1984年5月にカナダ・ケベック国民議会を単独で襲撃した男の狂気の犯罪の分析を通じて、著者ピエール・ルジャンドルは西欧がよって立つところの規範、その「理性原理」の構造を明るみに出し、「殺人とは何か、裁くことの意味とは」という問いの前に、わたしたちを連れてゆく。この問いは言うまでもなく、今の日本が抱えている最大の問いである。法学と精神分析の交差点で精密かつ大胆な論を展開するルジャンドルは、今最も読まれることが求められる思想家だと確信する。

●みなと・ちひろ／写真家、多摩美術大学助教授

新刊紹介

『林檎の礼拝堂』

田窪恭治＝著
A5判　160頁
集英社　1890円

著者は、フランス・ノルマンディ地方の廃墟となっていた16世紀の礼拝堂サン・ヴィゴール・ド・ミューを、多くの人々の支援を得て再生させた。本書はその記録である。

著者は以前から彫刻、絵画といった枠を越えた表現方法を模索し、1987年「絶対現場」と名づけてプロジェクトを行うなどしていた。その彼が出会い、インスパイアされたのが、この礼拝堂であり、後にこの礼拝堂再生のため、家族とともに移り住む。

本書では、その制作過程がつぶさに描かれている。単なる表現上の問題ばかりではなく、行政との定款に関する作業といった現実的な問題にも言及されリアリティがある。しかしやはり感銘を受けるのは、たとえば、著者がもっとも苦労したという屋根の表現過程である。もとの素焼き瓦の間に透明ガラスと色ガラスを用いたタペストリーのような屋根からこぼれる光は、実際、その場では言葉を失うほど美しいだろう。再生前の礼拝堂は、廃墟とは言っても素朴な建築として、しっかりと土地に溶け込んでいたかに見えるが、再生した礼拝堂は著者が目指した「人々の生活の中で生き続ける美術」を実現させたと言える。



『20世紀建築研究』

20世紀建築研究編集委員会＝編
B5判変型　464頁
INAX出版　3200円

20世紀は、国家、公共性といった概念が崩れ建築が表現の対象を失った世紀とも言える。本書では20世紀建築を「建築の終わり」「素材」「単位」などの軸に従って編年的にたどる。執筆には五十嵐太郎、森川嘉一郎など。



『ヨーロッパ建築案内』

淵上正幸＝著
ギャラリー・間＝編
A5判変型　328頁
TOTO出版　2381円

都市開発計画が目白押しで見所の多いヨーロッパ建築案内。第一弾は、フランス、イタリア・マルタ、スペイン、ポルトガルなど南欧編。最新の現代建築のみならず、必見の古典をも網羅する。641作品を掲載。



『建設ビッグバン――PFIからFAZへ』

竹島清+笹敦＝著
新書判　200頁
KKベストブック　1400円

アメリカの2倍額を公共工事に投資する日本の現状を踏まえ、ゼネコンを頂点とした建設業界を痛烈に批判するとともに、プライベート・ファイナンス・イニシアチブ(PFI)や輸入促進地域(FAZ)といった新しい概念による、現建設システム打開の方法を探る。



『空間の深層――物語としての建築』

渡辺豊和＝著
B5判　288頁
学芸出版社　2600円

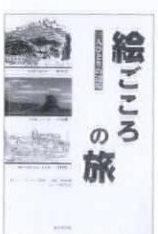
『記号としての建築』の続編。
言語学の手法を用いて、建築記号論、建築による世界の切り分け(あるいは認識)、創作技法などを説く。著者によれば、21世紀はポストモダニズムの真価が問われる時代である。



『絵ごころの旅――一人ひとりの辺境』

吉田桂二+白鳥健二+鈴木喜一＝著
A5判　192頁
東京堂出版　2800円

建築を生業とする著者三人が辺境の旅先で描いたスケッチ集。それぞれサハラ、イスラム圏、南アメリカ、アジアを旅し、そこで触れあった人々、自然をエッセイを交えて描く。立松久昌を司会に迎え、建築と旅をテーマにした座談会を収録。



『フィリップ・ジョンソン　Glass House』

中村敏男＝編
B4変型　270頁
YKKアーキテクチュラルプロダクツ　15000円

フィリップ・ジョンソンが1949年から住み続けているニューキャナンの〈Glass House〉に焦点を当て、ジョンソン本人の協力を得て編纂。
書店販売は行われていないため、問い合わせは03-3862-9301(千広企画)まで。



お知らせ

ホンマタカシ写真展──東京郊外

1995年～1998年の東京郊外の風景と、そこに暮らす子どもたちのポートレイト「ホンマタカシ写真集 東京郊外／TOKYO SUBURBIA」（光琳社出版 5800円）も同時発売。
会期：1998年12月4日（金）～1999年1月10日
時間：10:00～20:30（月曜休館）
会場：パルコギャラリー　東京都渋谷区宇田川町15-1 パルコパート1　8F
入場料：一般500円　学生400円
トーク＆サイン会：12月19日（土）　入場500円
問い合わせ：パルコギャラリー　03-3477-5873

──小さいころからファミリーレストランで食事して、
マクドナルドのドライブスルーがあって、
家のそばには大きな街道が走っていた。
ピカピカとした建物。
殺菌消毒されたプラスティックのテーブル。
ツルツルした女の子の肌。
駐車場、住宅地、団地の中庭。
埋立地、首都高、パーキングエリア。
高層団地の青白い灯、ニュータウン。（ホンマタカシ）



新浦安、千葉　写真＝ホンマタカシ

「Solution：教育現場と設計活動の断面・接点」展

錯綜する教育現場と設計活動の接点を探り、その試行錯誤の過程や成果をプレゼンテーションする。
出展者：新井清一、鈴木隆之、田中充子、葉山勉、浅野静、小津誠一、庄司洋、戸田潤也、中川和也、グンタ・ニチケ、長谷川健吾＋岡田成穂、藤木庸介、松本泰久、皆川隆樹、矢部直輝、他
会期：1998年12月1日（火）～12月13日（日）
時間：10:30～18:30（会期中無休）
会場：京都精華大学情報館「ギャラリーフロール」
Tel：075-702-5137
京都市左京区岩倉木野町137
問い合わせ：新井研究室　Tel：075-723-1505

アルヴァー・アールト1898-1976 20世紀モダニズムの人間主義展

今年生誕100年を迎える20世紀の巨匠、アルヴァー・アールトの過去最大の回顧展。フィンランドを中心とした46の作品を取り上げ、160点のオリジナル図面・ドローイング、模型20点家具・ガラス作品80点、写真資料200点を紹介。さらに5つの建築を撮影した「体験ビデオシアター」や、建築空間の一部再生も予定している。
会期：1998年12月19日（土）～1999年2月15日（月）
時間：10:00～20:00
会場：セゾン美術館　東京都豊島区南池袋1-28-1
入場料：一般1200円、大・高生900円
問い合わせ：セゾン美術館　Tel：03-5992-0155
http://www.mediagalaxy.co.jp/sezonmuseum/



〈コエ・タロ〉アールト夫妻の夏の家
ムーラツァロ（フィンランド）1952-53
photo: Rauno Träskelin
photo: © 1998 The Museum of Modern Art, N.Y.

建築ツアー メキシコと米国西海岸に巨匠を訪ねて ──L. バラガン、L. カーン、R. マイヤー

期間：1999年1月3日（日）～1月10日（日）
費用：298,000円
視察地：メキシコシティ、ロスアンゼルス
視察先：バラガン自邸、ギラーディー邸、ソーク生物研究所、ゲッティ美術館、その他
問い合わせ：トラベルプラン　Tel：03-3403-8911

TNプローブ「ドミニク・ペロー」展

都市のあらゆる要素をすべて許容し、建築を周囲の風景、環境へ統合するというランドスケープ的発想で、場をつくりあげていくペローの建築手法、思想を、ベルリンのオリンピック自転車競技場、スイミングプールなど、6つの近作プロジェクトを通して紹介する。
会期：1998年11月19日（木）～1999年2月13日（土）
時間：11:00～19:30（日、祝、年末年始は休館）
会場：TNプローブ　東京都港区六本木5-14-35
Tel：03-3505-8800　入場無料

川俣正　東京プロジェクト New Housing Plan 東京

住居プランの実施
期間：1998年11月下旬～12月
東京都内数カ所にて住居の組み立て、約1か月間設置、住居人による生活、およびその記録。
展覧会オープニング＋シンポジウム
日時：1999年1月22日（金）
会場：ギャルリー・ドゥ
プロジェクトのインスタレーションおよびドキュメンテーション。川俣正×隈研吾×小林康夫によるシンポジウム
展覧会
期間：1999年1月23日（土）～4月10日（土）
会場：ギャルリー・ドゥ
実際に組み立てられた住居を画廊内に再度組み立て、展示。記録の写真とビデオなどによる報告。
問い合わせ：ギャルリー・ドゥ
東京都目黒区柿の木坂2-10-17　Tel：03-3717-0020

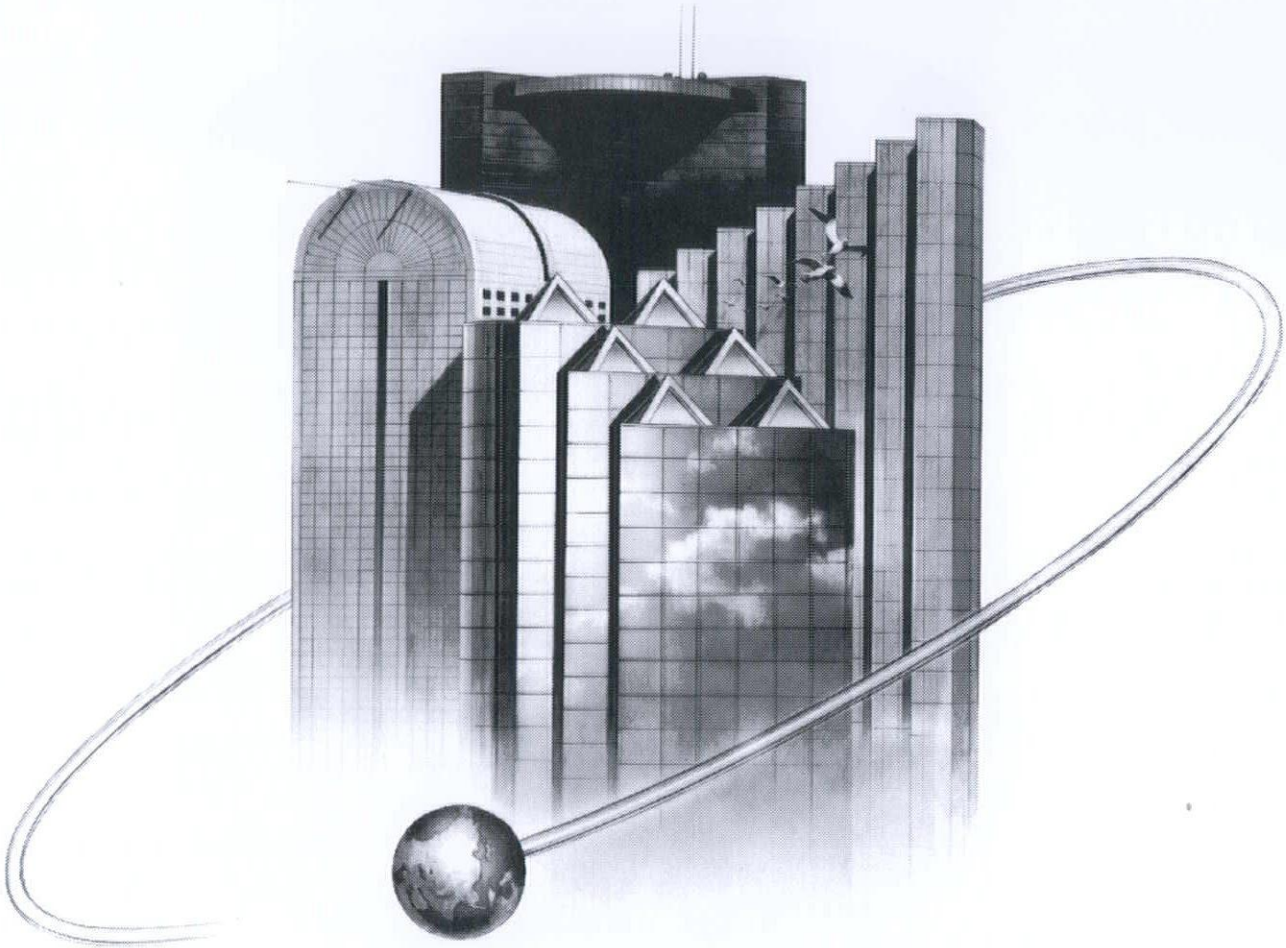
劇場・ホール小委員会シンポジウム 音楽空間研究／音楽文化を育てる場

日時：1998年12月4日（金）　11:00～17:00
会場：新潟市民芸術文化会館　新潟市一番掘通町3-2
参加費無料
プログラム
施設見学会　11:00～13:00
基調講演・シンポジウム　13:00～17:00
講師：長谷川逸子（基調講演）、松葉一清、井上道義、松下功、他
申し込み：ハガキ、Fax、E-mailのいずれかで下記へ。
問い合わせ：日本建築学会研究事業課、榎本和正
〒108-8414東京都港区芝5-26-20
Tel：03-3456-2051　E-mail：enomoto@aij.or.jp

JIA大学「建築家空間講義IV」

期間：開催中～1999年2月26日（全15回）
日時：毎週金曜日19:00～21:00
場所：JIA館3Fセミナールーム
東京都渋谷区神宮前2-3-18
受講料：1500円／1回
講師日程：11／27小川晋一、12／4小林克弘、12／11北山孝二郎、12／18小宮山昭、1／22小林正美、1／29隈研吾、2／5倉本龍彦、2／12大江匡、2／19片山和俊、2／26椎名英三
問い合わせ：社団法人日本建築家協会（JIA）
「空間講義」担当：山岸
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館4F
Tel：03-3408-8291、Fax：03-3408-8294

快適創造

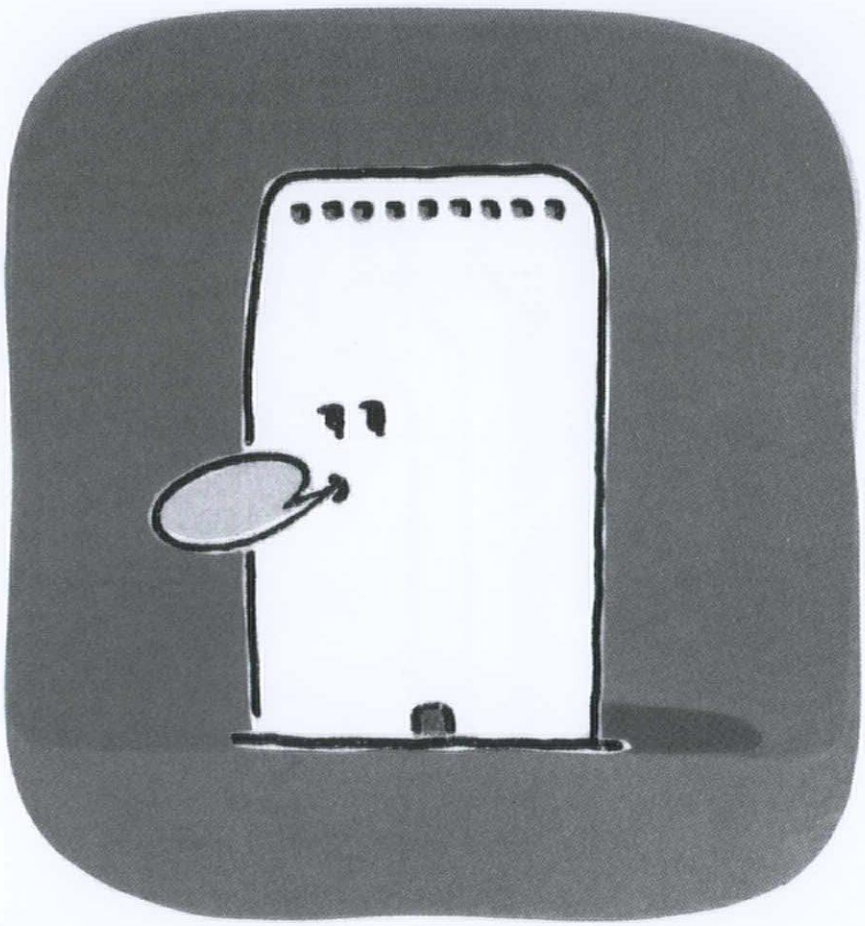


人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。
それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。
都市、コミュニティ、産業施設…人をとりまくさまざまな環境について考え、
その理想を追いつづけている三機工業は、
いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。

三機工業株式会社
〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03(3502)6111

人間すう、はく。ビルすう、はく。



私たちの呼吸は
自然の呼吸に
支えられています。

私たち人間が意識しないで呼吸しているように、人をとりまく環境も、知らないうちに呼吸しています。海も陸地も、動物も植物も。この地球全体が、ひとつの完成された空調システムとなり酸素をつくり、酸素を消費しています。

東熱のめざすひとつの頂点が、この自然の摂理を解明し、システム化することです。温度、湿度のコントロールによる環境を超えて、フィジカルな面から、メンタルな面の可能性のヒントが自然の中に隠されています。

ビルも呼吸しています。中にいる私たちのために。さまざまな分野のさまざまな建物が呼吸しています。だから東熱はいつも考えています。次に求められる環境とは何だろう。より私たちに優しく、より私たちに身近な環境の実現のために。山の朝のさわやかな空気や、冬の夜の透明な空気を東熱は忘れません。

宇宙センターからスポーツドームまで、東熱のマインドはあなたのまわりに息づいています。

時代、呼吸、マインド

東洋熱工業

〒104-8324 東京都中央区京橋2-5-12 Tel.03(3562)1351(大代表)

海外レポート

ヘルシンキ中央駅裏の開発コンペ

from Helsinki

吉崎恵子

フィンランドの首都、ヘルシンキの中央駅裏の国鉄操車場跡地には、現在急速な開発の波が押し寄せている。この中央駅周辺は、市の中心地区に当たるため、関係者や市民そして建築家達の関心が他の地区には見られないほど高く、マスコミでは常に大きく取り上げられ、誌上での意見交換や論争も激しい。地区や建物の計画でコンペを多く採用するのが、フィンランドの特徴である。特にこのような重要な地区では、都市、公園、各種の建築の計画が、それぞれコンペによって決められ、現在建ち上がり始めている。

この地区は、駅裏近くにまで入り込んでいる入江の名にしたがって、「トョーリョンラハティ地区」と呼ばれ、すでに1911年に始まって1985年までに5回ほど開発が計画されている。例えば、1918年のエリエル・サーリネンのグレート・ヘルシンキ計画では、郊外から市の中心に至るグリーンベルトとキングスアベニューの通る高密街区として、また60年代のアルヴァル・アールト(Alvar Aalto)のテラス計画では、主に公共建築群と交通の要所として計画されてきた。だが実現されたのは、アールトのフィンランディア・ハウスだけである。それは、この地区が国家的に重要な意味をもつため、都市構造や用途等の検討に妥協がゆるされず、その上、難しい地表面のレベル差があるので、問題解決への条件が厳しい地区だからである。

1985年に開かれた都市計画の国際公開アイデア・コンペでは、文化・公共施設を周辺に配し、中心部では緑地が駅裏まで入り込んでいるテーマを持った3つの案が、それぞれ1位に入賞した。ヤン・ソーデルルンドとアルト・シピネンおよびイルモ・ヴァルヤッカの案である。これらの案は相互検討・改良され、それを基盤にこの地区の基本計画が作成された。その基本計画を元に、既存の都市構造に接する南端の駅横から、地区計画作成と建築コンペが同時進行していった。最初の建築コンペは、中央郵便局西側の敷地で1993年に開かれた国立現代美術館の北欧公開コンペである。コンペには北欧圏外から、アルバロ・シザ、篠原一男とスティーブン・ホールの3人の建築家が招待された。コンペへの応募数は、フィンランドの不況時と重なったこととも関係するが、通常の2倍を越す516案であった。一等は、スティーブン・ホールが獲得した。彼の案は、直線で構成されたウィングと曲線で構成されたウィングが組み合わさった、彫刻的な作品である。

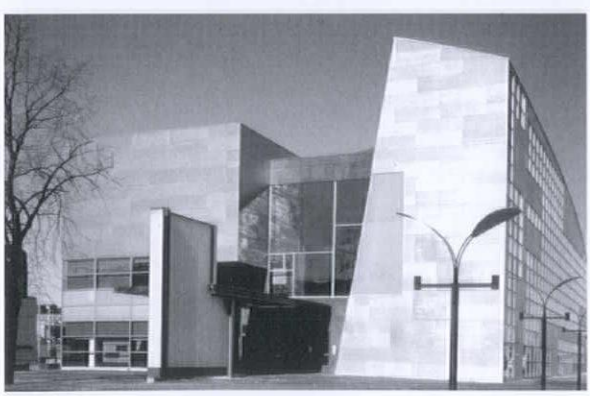
1994年には、中央駅のプラットホーム部分のルーフィングの国内公開コンペが開かれた。外国からもラファエル・モネオなど十名が招待された。1等入選は、エサ・ピーロネンの軽快なつり構造の案であった。

南端の地区計画は、現代美術館のコンペ案を組み入れて決定された。この地区計画にしたがって、中央郵便局北側にフィンランド最大の新聞社、サノマ社の本社ビル2.5万㎡の国内招待コンペが1995年に開かれた。1等はアンッティ＝マッティ・シーカラとヤン・ソーデルルンドの案で、駅から対角線状に通過が可能な平面を持つ、方形のガラス・ファサードの建物である。こうして現代美術館は1998年春に完成し、新聞社ビルは現在建設中である。1997年には、地区の北側のトョーリョンラハティの入江周辺を含めた163haのランドスケープの国際公開コンペが開かれた。ここではアイデア・コンペとして、公園緑地のデザインだけでなく、緑地と建物の組み合わせ方や水辺のデザインが重要視された。1等のハンヌ・ティッカとキンモ・リントゥラの案では東側の鉄道に沿って建築群が並び、中央の広い公園緑地と、入江を引き込んだ水域が、現代美術館に至る南端まで入り込んでいる。

このランドスケープ計画案を基礎にして、北部の地区計画が作成された。この地区計画に示された西側の幹線道路に沿って配置されたミュージック・ハウスの建築コンペは、99年初旬に始まるであろう。ミュージック・ハウスは、音楽大学、各種のコンサート・ホールを含む2.7万㎡の建物である。その後には、1.5万㎡の国鉄ホテルの建築コンペが、新聞社ビルと中央駅の間に予定されている。これらの後も、トョーリョンラハティ地区では、まだまだコンペティションが続いていくであろう。この様に各レベルのコンペを開くことにより、市民に納得のいく解決策を用い重要な市の拠点を開発していく手法は、大いに参考になると言えよう。だが、ほぼ100年近くも計画されながら手が着けられないでいた地区の建設を、急激に、現在の風潮と需要だけを考慮して押し進めて行くやり方には、少々無理があるかもしれない。地区および作品の評価は、時間が経つにつれて変わっていく。もう少し時間をかけて、十分な準備をしてから、コンペを開催しても遅くはないのではないか。

●よしざき・けいこ／ヘルシンキ市役所都市計画局





左：トョーリョンラハティ地区ランドスケープ・コンペ1等入選案（ハンヌ・ティッカとギンモ・リントゥラ）。北からのパース、1997年
右：国立現代美術館建築コンペ1等入選案（スティーブン・ホール）、1993年

Photo: Jussi Tiainen

海外レポート

ベルリン、実現され行く ポツダム広場開発計画から

from Berlin

岩永和幸

去る10月2日、ダイムラー・ベンツ社によって進められているポツダム広場開発に関する部分的なオープン・セレモニーが、ベルリンで開催された。全施設の完成にはまだ若干の時間を要するものであるが、ここではこの開発計画の背景とその経過を紹介しながら、実現されゆく建築家達の構想を検証する。

そもそもこの開発は1989年春、同年11月の壁の崩壊に先がけて、ダイムラー・ベンツ社がベルリンに不動産を購入するという決定によって始動している。この決定を受けてベルリン都市州から3つの候補地を提示された同社は、90年7月にポツダム広場を含む6万8千㎡の土地を購入した後、計画の策定に取りかかる。この後、当該地域の都市計画コンペが市によって実施され、分断されてきたベルリン都心を再構築する手法が求められた。91年10月にミュンヘンを活動拠点とするヒルマー&ザットラーの案が最優秀となった。ここでは米国で実現されてきた高層建築物に基盤を置くのではなく、ヨーロッパ的に、コンパクトでかつ空間的に豊かな複合施設をリジッドに配置することが提案の骨子であった。その背景には都市生活は巨大なスケールの建造物の屋根の下でではなく、街路および広場と共に営まれるものだとする、しごく古典的な概念の再認識があり、これが審査で高く評価されたことは注目しておいてよい。当のヒルマー&ザットラーは、広々としたオープンスペースと統一性を持った都市街区を共存させるべく、優等生的なデザイン指針を提出している。とりわけ、ポツダム広場から南側に水面で公共空間を計画すること、旧ポツダム通りの再生、街区方形ブロックの一辺と高さを35mとするという点は見逃せない。というのも、これらは通奏低音のように後のポツダム広場開発計画の実施案に反映されていくからである。

さて、この都市計画コンペの翌年具体的なプログラムを伴うポツダム広場開発計画建築コンペがダイムラー・ベンツ社によって実施され、92年9月コールベッカーとチームを組んだレンゾ・ピアノ案が、最優秀として発表される。この協働者はベンツ社の本社屋設計を手がけた人物であり、また保守的な審査員を読んで、先行するコンペの結果を墨守するあたり、ピアノは政治的な配慮も怠らなかったと言えよう。彼の案の街区ヴォリュームは、ヒルマー&ザットラー案を忠実に再現しているだけであるが、その大胆な水面の導入には驚かされる。ハンス・シャロウン設計の図書館に寄り添うように劇場と図書館のアネックスを配置し、これらの施設があたかも島の中に在るかのように水空間で取り囲んでいるのである。またシャロウンの図書館が建設されたために袋小路となり、窒息しかけていた旧ポツダム通りは再整備されている。同時にすべての街区ブロックの地上階をセットバックさせてアーケードを設け、歩行者空間のネットワークが意図されてもいる。さらにポツダム広場からの突き当たりには水面上に広場(ピアッツァ)まで計画してある。これはピアノのデザインの大きな主題であったと見えて詳細な図面が作成されているが、そこには伝統的なヨーロッパの都市広場として機能させる意図が明瞭に読み取れる。シャロウンの図書館を教会あるいは市庁舎と見立てて舞台背景としながら、そこに一種の都市空間の焦点と賑わいとを創り出す仕掛けがなされていた。

93年から94年にかけてはピアノによってマスタープランが練り直され、同時に様々な建築プログラムが他の5名の建築家達と共に設計されていく。ピアノ&コールベッカー、コルホフ、ラウバー&ヴェーア、モネオ、ロジャース、磯崎というメンバーで幾度か会議が開かれ、全体調整が進められていく。ここでは建物の軒高をコンペ時の35mから28mとすること、道路幅と軒高の比を1:2とすること(何とこれは終戦までのこの場所での比率!)、外装にはテラコッタ、煉瓦、砂岩を極力使用し、その色彩も暖かみのあるアースカラーとするというガイドラインが決められた。

こうして93年10月の起工式後、建設工事が進められてきているが、ここではすでに実現されたデザインについて寸評を加えてみたい。まず、「マレーネ・ディートリッヒ広場」と命名されたピアノの変則四差路のピアッツァは、カミロ・ジッテが「広場の造形」で抽出した広場空間構成の原理に近い要素を備え、実際歩行者に豊かなパースペクティブを提供してくれる。コンペ応募案の中でも彼だけが旧ポツダム通りのすっぽ抜けを回避しており、この処理による広場は成功しているといって良い。一方彼が設計したdebis(本開発計画実現を主導)の本社屋は、パリのノートルダム寺院の身廊とほぼ同スケールのアトリウムを持つ中層部と、高層棟からなるオフィスビルである。この外装には中空押出し成形セラミックが水平に取り付けられている。建物全体を細かな横桟のユニットで覆い尽くしてしまい、光が必要な部分ではユニットを間引いて自然光を導き入れるというデザイン・コンセプトが貫かれており、その繊細な立面は木材に似た色彩のためか、時として和風建築の趣さえ感じさせる。これと隣接して磯崎新設計のフォルクス・バンク本社棟が完成しているが、大型セラミックパネルで平滑に仕上げたヴォリュームを、セットバックした曲面ガラスで上下から挟み込むという明快な構成が際だっている。12年前の東京都庁舎コンペ案で萌芽していた壁状のオフィス棟のアイデアが、ここベルリンでクリシェと成り果てている中庭型オフィスビルへのアンチテーゼという形で実現されたことに注目すべきである。このファサードのグラフィカルなパターン、および渋く落ち着いた色は、時としてドイツ人の色彩感覚に合わないようではあるが、そのダイナミックな建築形態がランドヴェーア運河側へ非常に強い存在感を主張していることは確かである。

ところでこの計画全体については、ドイツが誇る大企業主導による商業的な開発行為だと批判する声も強い。かつての繁華街の中心をそのまま復活させるといった、ただレトロスペクティブな視点があるだけで、将来へ向けて市民が自発的に都市建設へ参加する機会がないことは疑いのない事実である。イベントを超えて、もはや祝祭とも言えるほど特別に扱われているポツダム広場計画も、実現が進むにつれて都市・建築的な意味ばかりではなく、その社会的な意義が再度問い直されてゆくことは間違いないと思われる。

●いわなが・かずゆき／建築家、在ベルリン

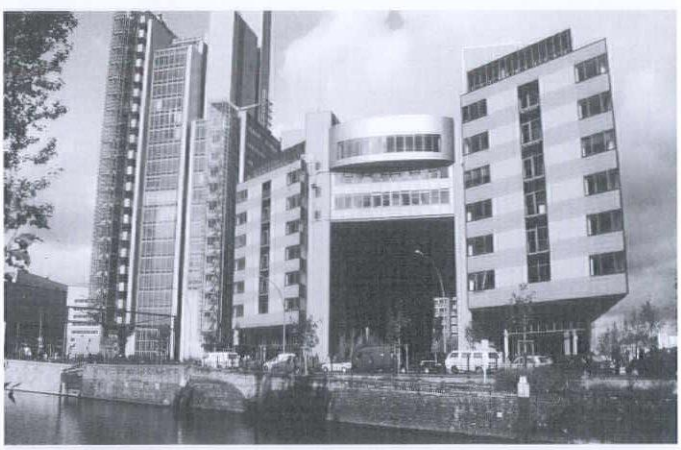


ポツダム広場開発計画現場の航空写真（1998年9月現在）

資料提供＝ダイムラー・ベンツ社、撮影＝Rudolf Schäfer



広場よりデービス本社屋を見る



運河越しに磯崎棟を望む



磯崎棟のファサード・パターン

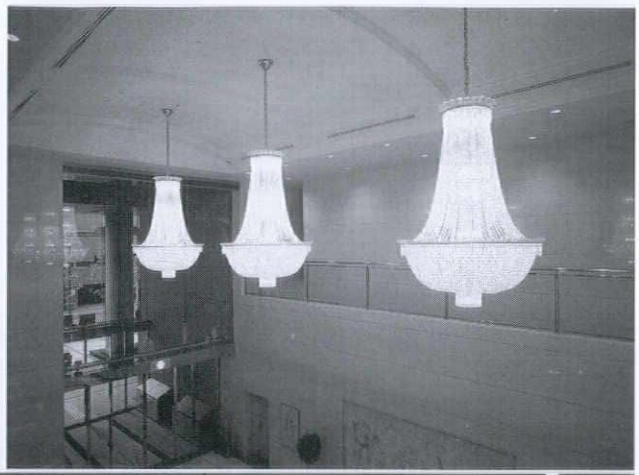


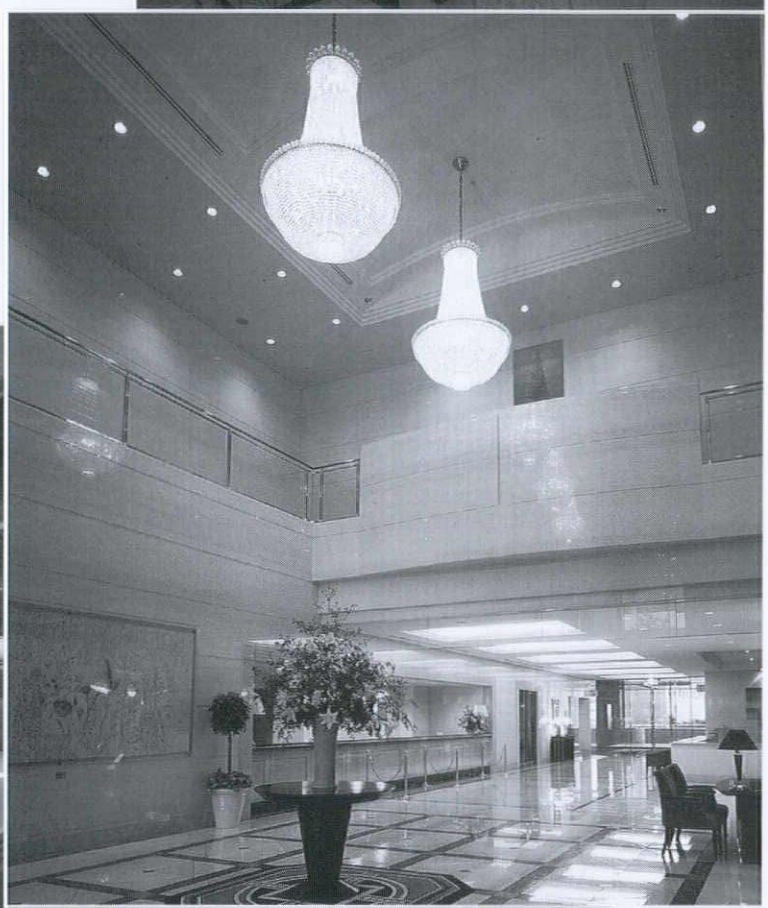
ピアノによる水面と建築群

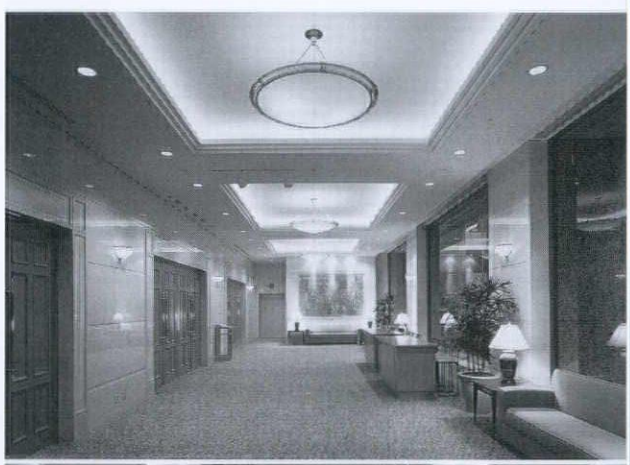
撮影（下4点）＝筆者

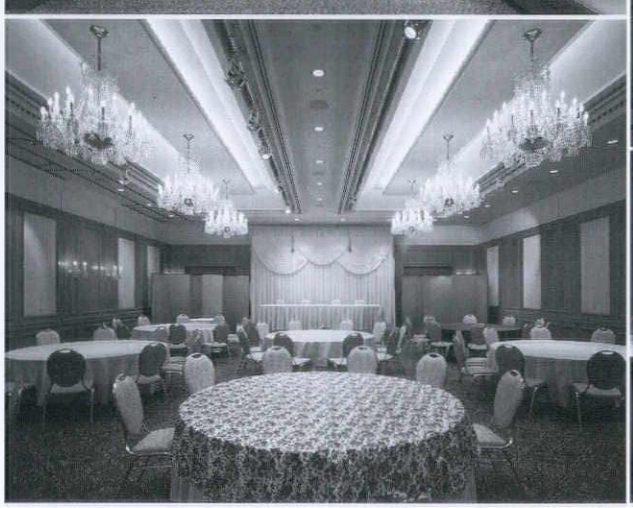
表情多彩

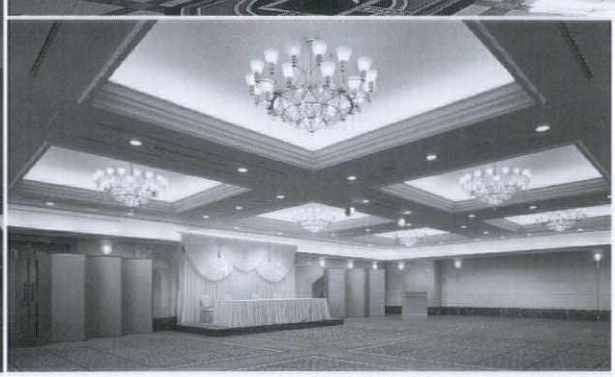
照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。











地方職員共済組合 麹町会館（東京）

yamada

山田照明株式会社

本　　社／ショールーム 〒101-0021 東京都千代田区外神田 3-8-11　TEL.03-3253-5161
横浜支社／ショールーム 〒220-0005 横浜市西区南幸 2-20-1　TEL.045-311-1731

仙台支社 〒980-0824 仙台市青葉区支倉 4-34　TEL.022-267-1630
札幌営業所 〒003-0807 札幌市白石区菊水七条 2-61　TEL.011-811-2215
広島営業所 〒730-0805 広島市中区十日市町 2-2-34　TEL.082-293-6119
大阪支社 〒577-0006 東大阪市楠根 2-2-6　TEL.0 6-745-6811
北関東営業所 〒370-0851 高崎市上中居町 51-1　TEL.0273-26-4111
鹿児島営業所 〒890-0055 鹿児島市上荒田町 23-10　TEL.099-258-0031
福岡支社 〒812-0042 福岡市博多区豊町 1-9-61　TEL.092-414-8531
名古屋事務所 〒461-0001 名古屋市東区泉1-21-35　TEL.052-963-8411
宇都宮事務所 〒321-0971 宇都宮市海道町 818-2　TEL.0286-60-1381

SD

SD1998年　総目次
1●5は1月号5頁を表します。

特集
1●5　SDレビューの15年
1●6　SDレビューが始まった頃　槇 文彦
1●7　SDレビュー15年のメモランダム
1●10　SDレビューの軌跡1章、2章、3章　飯島洋一
96、170
1●13　1982〜1986年入選作品
1●94　巡回展を振り返って　「新しさ」への問いかけ　原 広司
1●97　1987〜1990年入選作品
1●172　巡回展を振り返って　中筋 修、水野一郎、奥保多聞
1●173　1991〜1996年入選作品
1●269　座談会　鈴木了二×元倉眞琴×栗生 明×小嶋一浩
1●277　SDレビュー入選者・審査員一覧

2●5　都市へ向かう透明性：スイス・ドイツ語圏の建築
2●6　四角い建築の楽しみ方　貝島桃代
2●8　スイス連邦共和国データ
2●9　スイス・ドイツ語圏の建築家　作品とオフィス　塚本由晴
2●10　チューリッヒ・ベルグ・ホテル／ブルクハルター&ズミ　ヴァルテクホフ／ディーナー&ディーナー　ダヴォスのスポーツ・センター／ジゴン&グイエ　レミ・ツォーグのスタジオ／ヘルツォーク&ド・ムロン　ルステナウのショッピング・センター「キルヒバルク」／マルケス&ツルキルヒェン　ガンテンバイン邸／ペーター・メルクリ　チューリッヒ中央駅の屋根の増築／マイリ&ペーター+クナプキーヴィッツ&フィッカート　ドライローゼン・クリューベック／モルガー&デゲロ　聖アントニウス・ローマン・カトリック教会／ミロスラフ・シック
2●46　建築家インタビュー：クリスチャン・ズミ、ロジャー・ディーナー、アネット・ジゴン+マイク・グイエ、ジャック・ヘルツォーク、ダニエル・マルケス、ペーター・メルクリ、マルセル・マイリ+マルクス・ペーター、マインラッド・モルガー、ミロスラフ・シック
2●64　クールさの誕生——「スイス・ドイツ語圏の建築」についての覚書　ハンス・フライ　訳＝花田和幸
2●72　スイス・ドイツ語圏の建築における歴史的変遷　パトリック・グムーア+レグラ・ルシャー・グムーア　訳＝花田和幸
2●78　スイス・ドイツ語圏の建築家リスト
2●81　スイス・ドイツ語圏の建築家年表
2●86　ETHの教育とスイス・ドイツ語圏の建築　アーター・リューグ　訳＝ロート・美恵
2●91　建築に関する書物に関する覚書　マリー＝テレーズ・シュタウファー　訳＝長谷川章
2●96　素材主義の快楽　マルティン・チャンツ　訳＝花田和幸
2●105　スイス・ドイツ語圏のネクスト・ウェーブ
2●106　公開質問と公開性の問題　設計競技会が（自分から）課せられた制約と若手建築家　アンドレス・ヤンサー　訳＝太記祐一
2●111　往復書簡　篠原一男×ヘルツォーク&ド・ムロン　訳＝鈴木圭介
2●117　スイス・ドイツ語圏の建築家9人の作品マップ

3●5　表層革命再考：チェコのキュビズム-ロンドキュビズム
3●6　チェコ・キュビズム建築概説　ズデニェク・ルケシュ　訳＝平野清美
3●9　色あせた西欧モダニズムからの脱却　長谷川 章
3●10　ネクラノヴァ通りの集合住宅、コヴァジョヴィッチ邸、ヴィシェフラットの3世帯住宅／ヨゼフ・ホホル　ボフダネッツ・スパ、ブラック・マドンナ、チェコスロヴァキア・レジオン銀行、フラッドチャニーの2世帯住宅、アングロ・チェコスロヴァキア銀行、ブルノ銀行／ヨゼフ・ゴチャール　ファーラ邸改築、アドリア宮、ペルフジモフの家、パルドゥビッチェの火葬場／パヴェル・ヤナーク　ジャーブリッチェの墓地入口／ヴラスティスラフ・ホフマン　ユングマノヴァ広場のランプポスト、フス教会ベツレヘム礼拝堂祭壇、ダイアモンド館／エミール・クラーリーチェック　教員住宅組合アパート、教員組合アパート／オタカル・ノヴォトニー
3●50　建築に見るチェコ・キュビズム　ヴラジミール・シュラペタ　訳＝平野清美
3●52　プラハでの夢想　新見 隆
3●54　チェコ・キュビズム　建築年表
3●55　キュビズム建築地図

4●5　次世代のマルチ・アーキテクトたち：ユニット活動による新たな設計環境
4●6　越境するアーバン・トライブ　五十嵐太郎
4●8　現象としてのアーキテクトたち　宇野 求
4●9　インテンショナリーズ、みかんぐみ、建築少年、パラボリック・ラボラトリ、EPA環境変換装置建築研究所、クライン ダイサム アーキテクツ、H DESIGN ASSOCIATES、アトリエ・ワン、F.O.B アソシエイション、I.C.U.、CLIP
4●75　座談会「制度と建築、そしてユニット活動の展望」　曽我部昌史×長田直之×中村 潔×大西若人×田路貴浩×中谷礼仁　司会：杉山弘樹

5●5　空間演出の最前線：デザイナー、アーティストによるコラボレーション
5●6　座談会「コラボレーション：成功の秘訣」　小倉善明×栗生 明×藤江和子×面出 薫
5●9　新宮 晋：風のメッセージ・雲、宇宙への窓、風の万華鏡、はてしない空
5●17　片山利弘：石の彫刻と壁面レリーフ「Stripe」、「Stair」、ロビーのランドスケープデザインと彫刻、レリーフ彫刻+石壁、壁面彫刻、銅版によるレリーフ彫刻／ホワイエ壁面、回廊壁面
5●25　川上喜三郎：Crystal Chode、プリズムスクリーン I・II、Air Dance、Optical Tower、Optical Gate
5●33　中村錦平：千葉県南総文化ホール、三鷹市芸術文化センター
5●41　藤江和子：60メートルのロビー、カフェ・ボンフィーノ、名取市文化会館カフェ+カウンター、福岡大学A棟、パトリ+清里フォトアートミュージアム、T学園プロジェクト
5●49　面出 薫+ライティング プランナーズ アソシエーツ(LPA)：東京国際フォーラム、名取市文化会館、山梨県立児童・青少年科学館(仮称)、奈良市民ホール、潟博物館

5●57　カーロとリベラの家：ファン・オゴルマンの建築とメキシカン・モダン
5●58　カーロとリベラの家にみる他者的身体　伊東豊雄
5●74　インタビュー：ヴィクトール・ヒメネス　インタビュアー＝伊東豊雄
5●78　ファン・オゴルマンの建築作品　オゴルマンの住宅建築、オゴルマンの学校建築
5●80　メキシコのふたつの家　鈴木 恂
5●84　ファン・オゴルマンと1920、30年代のメキシコ建築　ギジェルモ・エギアルテ　訳＝五十嵐太郎
5●88　3人の画家たち　リベラ、カーロ、オゴルマン　多木浩二
5●93　対談「ラテンアメリカのモデルニスモ」　多木浩二×今福龍太

6●5　風景創出の現在：ランドスケープ・アーキテクトの挑戦
6●6　鼎談「ランドスケープ・アーキテクトが創る風景」　佐々木葉二×古谷誠章×三谷 徹×宮城俊作
6●13　1. 都市活動との結合：West 8、佐々木葉二、ケン・スミス　2. 大地への融合：三谷 徹、プレイスメディア、キャサリン・ギュスタフソン、佐々木葉二　3. ヴィラの風景：長谷川浩己、プレイスメディア、三谷 徹　4. 都市のエッジ：長谷川浩己、他　5. 幾何学に宿る自然：三谷 徹、他　6. 拡張する機能の庭：ダグラス・リード、ナンシー・フィンレイ+千葉 学、登坂 誠（日建設計）、トーマス・オスランド、クリスチャン・チュミ
6●90　ヨーロッパのランドスケープ・アーキテクチュア／ロベルト・シェーファー　アメリカのランドスケープデザイン　エコロジー——パターン、実践／マーク・トライブ　ランドスケープ・アーキテクチュア、フランスの事情／ドロテ・インバート
6●101　フォトグラファーの視線No.1　細川和昭
6●105　近代ランドスケープの遺産：ラス・アルボレダス／齋藤 裕　京王プラ

ザホテル4号街路外構／鈴木隆行　森の火葬場／本多友常　ベイリーパーク／都田 徹　ブリオン家墓地／豊田博之　カルフォルニア・シナリオ／川村純一　インゼル・ホンブロイヒ／栗生 明　タナー・ファウンテン／宮城俊作　アンドレ・シトロエン公園／奥貫 隆
6●125 フォトグラファーの視線No.2　廣田治雄
6●129 風景を生むディテール：NTT基町クレド、広島アートプロムナード、飛騨高山美術館、パトリ+清里フォトアートミュージアム、風の丘、タウンセンターH、大沢野町健康ふれあい広場、横浜ボートサイド地区水際公園、大阪市立大学学術情報センター広場、和洋女子大学佐倉セミナーハウス
6●141 フォトグラファーの視線No.3　奥村浩司
6●145 年表　近代ランドスケープの系譜

7●5 シーラカンス：12年の活動と次なる展開に向けて
7●6 吉備高原小学校、プロジェクトTS、大阪市水上消防署、（仮称）外ヶ岡交流拠点施設、福岡市立博多小学校、他
7●23 シーラカンス：1986-1998
7●26 可能態としてのシーラカンス——シーラカンスは21世紀の爽やかな風になれるのか　原 広司
7●28 インタビュー　工藤和美、堀場 弘　インタビュアー＝西沢立衛
7●44 世界はエーテルで満ちている——シーラカンスにおけるスペースブロックの概念　土居義岳
7●45 インタビュー　小泉雅生　小嶋一浩　三瓶満真
7●58 スペースブロック上新庄、（仮称）鴻巣市文化センター、吉備高原幼稚園、K総合学科高校、WHITE/BLUE 西脇の住宅、他
7●72 インタビュー：強い意志をもった建築へ向けて　山本理顕
7●73 インタビュー　伊藤恭行　宇野 享　日色真帆
7●85 シーラカンス建築用語集
7●93 大阪市水上消防署仮設庁舎、千葉市立打瀬小学校、ART HUT SD、永福の住宅、鎌倉の住宅、、CREVASSE（井草プロジェクト）、大阪国際平和センター（ピースおおさか）、幕張新都心住宅地基本構想+基本計画、マインズ北堀江、大阪ガス NEXT21 303住戸、横浜大桟橋コンペ案、埼玉環境科学国際センターコンペ案、HOUSE TM、空の中庭、GJ LEAGUE 94（スペースブロックワールド）、他
7●134 掲載作品建築データ

8●5 光のデザイン・ヴォキャブラリー：LPAの仕事1990-1998
8●6 照明デザインの目指すもの：LPAのデザイン思想　面出 薫
8●10 「空間」に光をあてる　磯崎 新
8●13 LPA照明デザイン年表1990～1998
8●21 照明計画の作法：光のデザインと監理のプロセス　面出 薫
8●27 1章コンセプト：1. ブルーモーメント、2. 時間、3. 反転、4. エンターテイメント、5. 光の紙芝居、6. ランプ&ホルダー、7. 都市の行灯、他
8●51 2章 メソッド：14. ウォッシュ・ライト、15. 光のカーペット、16. 膜、17. 蛍光灯天国、18. 光床・光壁・光天井、19. スーパー・アンビエント、他
8●7 3章 ディテール：28. ダウンライト、29. 定点照射、30. 面一、他
8●94 4章 アクティヴィティ：36. 色鉛筆、37. 模型シミュレーション、38. 丸テーブル、39. プレゼンテーション、40. フォーカシング
8●103 座談会「新たな光環境を探る」　内藤 廣+黒川 勉+面出 薫+東海林弘靖
8●109 光の辞典
8●113 新照明デザイン用語解説
8●115 プロジェクト・データ

9●5 ディテールが創る風景：細部に宿る美と技巧
9●6 対談「全体を創る部分／部分を導く全体」　宮崎 浩×赤坂喜顕
9●10 現代建築ディテール巡礼——建築家が細部に込めた寡黙な意図を探る
9●12 NSP Building／宮崎浩（Plants Associates）　成城の住宅 1996／渡辺明設計事務所　東京自転車健康保険組合会館／竹中工務店東京本店　豊田市美術館／谷口建築設計研究所　東京会場東日本研修センター／KAJIMA DESIGN　GLASS HOUSE／小川晋一都市建築設計事務所　山口大学医学部創立50周年記念会館／岸和郎+K. ASSOCIATES　風の丘葬斎場／槇総合計画事務所　川上村林業総合センター　森の交流館／飯田善彦建築工房
9●84 細部へのまなざし——現代のディテール・マイスター達が描く情景と射程
9●86 石を読む——石のまち、香川県牟礼町で見た「石達人の極意」　和泉正敏（石のアトリエ）　型を極める——アルミ押出し材に宿るクラフトマンシップ／新日軽　スティールに息づく寡黙な美／宮崎 浩
Transscale Matrix／トランススケール・マトリックス／小川晋一都市建築設計事務所
9●102 ディテール写真館——写真家がとらえた桂離宮の細部意匠　文+写真＝岡本茂男

10●5 オフィス環境の近未来
10●6 Thrilling Office／仲 隆介
10●8 現代オフィスインテリアの変遷／岸本章弘
10●12 国内事例：電通インタラクティブ・ソリューション・センター、日本ヒューレット・パッカード八王子事業所ビジネスセンタ、宝島社、横商エンジニアリング、高橋土建カムホームアクト新堀、ケット科学研究所札幌営業所、ベルシステム24、ボルシェ・ジャパン本社、アルソア本社、NTT中央研修センタ、乃村工藝本社4号館、宝酒造、JRバス関東、ソニー・ピクチャーズ・テレビジョン・ジャパン、チューリッヒ保険日本支社ダイレクト・カスタマー・ケア・センター
10●40 未来のオフィス　イトーキ総合研究所　地主廣明+オフィス環境研究所
10●44 オフィスを彩るモノ　益田文和
10●46 Future@Work—The Exhibit at Seattle
10●50 海外事例：Hummer Winblad、Wired Digital、LA Cellular Customer Call Center、Sullivan Higdon & Sink、Scottish Enterprize National、DEGW
10●113 オフィスを知るためのキーワード　月舘君枝（システム・オー）

11●5 「白」と「透明」の詩：モダンデザインの秀作135
11●8 原点あるいは原理をめざし　そして　超正統へ　羽原肅郎
11●12 白陶磁器：ティー・サービス／カシミール・マレービッチ　ティー・サービス／ゲートルード・ヴェースガルト　コーヒー・サービス／トゥルーデ・ペトゥリ　カップ・アンド・ソーサー／カリーナ・アホ　コーヒー・サービス／スティグ・リンドベルク　ティー・サービス／エベ・サドリン　ティー・サービス／ワルター・グロピウス、他
11●46 インタビュー「伝統、文化、生活——デザインと現代社会について」　柳 宗理　インタビュアー＝河合俊和
11●68 デザインの意味　アンジェロ・マンジャロッティ
11●71 陶磁器デザインのこれから　長井千春
11●72 透明ガラス器：ティー・サービス／ウイルヘルム・ワーゲンフェルド　インク・ボトル／ウイルヘルム・ワーゲンフェルド　ワイン・ゴブレット／ヨセフ・ホフマン　湯沸かし器／ピーター・シュラムボーム　グラス／オズワルド・ハーデル　スタッキング・グラス／グレス・メイヤー+イビ・トリアー　花瓶／アルヴァ・アアルト、他
11●117 クリスタルガラス企業内37年のデザインワークからのメッセージ　船越三郎
11●130 まず、白い食器から　森 正洋
11●146 オリジナリティの尊厳　河合俊和

12●5 SDレビュー1998
12●6 審査員総評　林 昌二、播 繁、岸 和郎、團 紀彦
12●10 尾沢俊一、ジン・タイラ+三好隆之、手塚貴晴+手塚由比／手塚建築研究所、山田幸司建築都市研究所、アンドリュー・バリー+ ミヌストリー・アーキテクチュア、和田吉貴、駒井貞治／駒井貞治の事務所、遠藤政樹+池田昌弘、岡村和典+石井米二郎+清水里司／日本設計九州支社、廣谷純弘+石田有作／建築研究所アーキヴィジョン、長倉威彦、三上晴久+三上建築事務所、川嶋彦一郎、アルヴァロ・ヴァレラ+サイード・シエド、手島浩之+都市建築設計集団／UAPP
12●50 作品講評
12●54 印象に残った住宅計画3点　植田 実
12●55 1997年入選作実作

作品、その他
3●57 香山壽夫のドローイングと空間
3●58 彩の国さいたま劇場
3●72 対談「アーティストにも観客にも理想的な劇場」　諸井 誠×香山壽夫

3●74　東京大学工学部建築学科土木工学科棟、関川村歴史資料館、東京大学農学21世紀館、聖学院大学礼拝堂、長久手町文化の家、瀬高町立図書館、小品集
3●84　旅の記録
3●89　描くということ　香山壽夫
3●90　ドローイングによる建築意匠講義　八木幸二
3●91　過程の輝き　鈴木恂
3●91　ドローイング・光・イメージ　青木淳

4●81　デスクトップ・コミュニティ　空間概念の変化とその記述
構成+文＝吉松秀樹+山家京子+遠藤幹子+藤村憲之
4●84　デスクトップ・コミュニティ1995、ノーテーション、感覚の変容、都市的身体、柔らかい建築　柔らかい都市、バディ・ハウス、都市でない都市、低密度都市モデル

10●73　木造密集市街地の将来像を考える：向島国際デザインワークショップ
10●74　ワークショップのすすめ　山本俊哉
10●77　Making FAC(ad)ES　クライン ダイサム アーキテクツ
10●77　継続されるべき「模索中」　藤野雅統
10●78　活気のある文脈の継承法　ティートス・スプリー

10●81　京町家再生の手法：時を超えて生きる空間を求めて
10●82　失われた時と空間を求めて　長尾重武
10●84　祇園望月、橋弁慶山町会所、アルトレタント、ミホプロジェクト、セカンドハウス
10●100　景観保全から京町家再生へ　望月秀祐
10●102　再生する町家――京都都心部の将来と町家再生の展開　宗田好史

12●61　シャルロット・ペリアン
20世紀を生き抜くインテリア・デザイナーの思考のプロセス
12●62　「住まいの空間　パリの屋根の上」の改修、1994年
12●64　インタビュー：「シャルロット・ペリアン」展におけるデザイン・プロセス――パリの装飾美術館、ロンドンのデザイン・ミュージアムを経て東京へ　進来廉　インタビュアー＝松隈洋
12●69　モダニズムの広がりとペリアンの日本
シャルロット・ペリアン展の向こうに見えるもの　松隈洋
12●72　インタビュー：ペリアンが日本の伝統文化に見出したもの　柳宗理

12●73　「ハプニング」展デザイナーズ・カタログ：インテリア・家具のインディーズ・デザイン展in東京
12●74　「ハプニング」レポート　90年代リアリズムはストリートに分散する
岡田栄造
12●75　インテリアデザインにおけるインディーズはいかにして可能か？
岡田栄造

12●85　アアルトの空間構成　有機的建築手法の考察
12●86　採光の仕掛けに対する考察　小野正弘
12●88　人間的な性格を持つ素材に対する考察　シルッカリーサ・イェツォネン
訳＝櫻井義夫
12●90　外部空間あるいは庭の考察　田中雅美

12●93　HALFTECTURE PROJECT　メタルシート・ストラクチュアによる遠藤秀平の近作
12●94　CYCLESTATION 米原、HEALTECTURE 小森、SKINTECTURE 揖保川、TRANSTATION 大関、HALFTECTURE 福井、SPRINGTECTURE 播磨
12●106　ビジョナリーな20世紀末モダニズム　松葉一清

連載：森島紘史の起こし絵図――日本のかたち紙考
1●282　1. 正月
2●122　2. 節分
3●94　3. 雛祭
4●98　4. 花見
5●104　5. 鯉のぼり
6●162　6. 梅雨
7●138　7. 七夕
8●122　8. 夏祭
9●110　9. 月見
10●70　10. 秋風
11●150　11. 七五三
12●58　12. 聖夜

連載：世界の現代美術館探訪――美術館は生まれ変わる
2●122　7. ミュージアムとその場への参加　カトリーヌ・グルー
訳＝松岡智子
3●97　8. 旅への誘い――ベルリンの新現代美術館　水沢勉
4●101　9. 天の窓――スカイライトという問題構制　渡辺真理
6●165　10. 21世紀を目指す人文科学の理想郷　太田泰人
7●141　11. 都市に息吹を吹き込む美術館　丹下敏明
8●129　12. 混在による解放のための工場　水沢勉
11●153　13. （最終回）座談会：21世紀の美術館はどうなるか
太田泰人×水沢勉×渡辺真理×松岡智子

◇海外レポート
7●155　［ベルリン］コールハース、オランダを語る　上原雄史
［ニューヨーク］ブロック・ケンチク――ニューヨーク長老教会
桑原茂
［アムステルダム］都市計画とランドスケープデザインに境界はない
――ボルネオ・スポールンブルグ島開発　吉良森子
8●148　［バルセロナ］バルセロナ、次世代建築家の現実感　福田誠
［サンフランシスコ］オルムステッド計画に戻る、スタンフォード大学の21世紀キャンパス計画　瀧口範子
［ロンドン］アポリアとしてのコンペ――「カーディフ・オペラハウス」の顛末　渡辺研司
9●128　［バーゼル］古いものと新しいもの――バーゼル市立劇場増築計画コンペティション1997　久野靖広
［香港］郊外化した香港　萬谷健志+鄧天斎
［リスボン］リスボンEXPO'98にみるポルトガル現代建築の動向
戸室太一
10●118　［ニューヨーク］給水塔　セドリック・シュレー
［ミラノ］1968年とミラノ――30年前の熱狂と陶酔　杉本あり
［パリ］建築教育におけるアトリエの存在　山名善之
11●174　［サンフランシスコ］ディズニー・コンサート・ホールとフィランソロピーの相関関係　瀧口範子
［上海］「海派（ハイパイ）建築」案内　陸鐘驍
［ロッテルダム］21世紀へのヴィジョン――オランダ建築博物館の野望
吉良森子
12●117　［ヘルシンキ］中央駅裏の開発コンペ　吉崎恵子
［ベルリン］実現されゆくポツダム広場開発計画から　岩永和幸

◇書評
1●289　情報美学入門：基礎と応用
M.ベンゼ＝著　草深幸司＝訳　勁草書房
下村千早＝評
1●290　彫刻の絆
酒井忠康＝著　小沢書店
建畠晢＝評
2●134　アンコールの神々
中川武＝監修　BAKU斎藤＝写真　小学館
神谷武夫＝評
2●135　予感の形式
細田雅春+岡河貢+鳴海雅人＝著
日刊建設通信新聞社
渡辺光雄＝評
3●106　芹沢銈介の文字絵・讃
芹沢長介+杉浦康平＝著　里文出版

田中一光＝評
3●107 メタボリズム
八束はじめ+吉松秀樹＝著　INAX出版
米山 勇＝評
4●110 建築家の住宅論——富永譲
富永 譲＝著　鹿島出版会
植田 実＝評
4●111 光と影——甦る近代建築史の先駆者たち
近江 栄＝著　相模書房
川向正人＝評
5●118 ルーブルにピラミッドを作った男
マイケル・キャネル＝著　松田恭子＝訳
三田出版会
穂積信夫＝評
5●119 ジュゼッペ・テッラーニ
矢萩喜三郎＝著　アー・ドゥー・エス・パブリシング
新見 隆＝評
6●176 ルタルイー——近代ローマの建築
長尾重武＝監修　玲風書房
鈴木博之＝評
6●177 建築設計の新しいかたち
両角光男＝著　丸善
渡辺仁史＝評
7●150 DISCONT不連続統一体——吉阪隆正+U研究室
アルキテクト＝編　丸善
古谷誠章＝評
7●151 コンピュータ・グラフィックスの軌跡
藤幡正樹＝監修　ジャストシステム
竹内オサム＝評
8●142 再発見される風景——ランドスケープが都市をひらく
TNプローブ
コリン・コバヤシ＝評
8●143 鉄道考古学を歩く
浅野明彦＝著　JTB
石上申八郎＝評
9●122 環境デザインの方法
仙田 満＝著　彰国社
西沢 健＝評
9●123 反対称の物学
黒川雅之＝著　TOTO出版
小池一子＝評
10●112 シュタイナー・建築
上松佑二＝著　筑摩書房
子安美知子＝評
10●113 西洋の建築——空間と意味
クリスチャン・ノルベルグ＝シュルツ＝著
前川道郎＝訳　本の友社
五十嵐太郎＝評
11●162 市民社会のデザイン
浜口隆一＝著　而立書房
伊藤ていじ＝評
11●163 集合住宅原論の試み
黒沢 隆＝著　鹿島出版会
室伏次郎＝評
12●110 問いなき回答
建畠 晢＝著　五柳書院
伊東順二＝評
12●111 白い机——円熟期　アルヴァ・アアルトの栄光と憂鬱
ヨーラン・シルツ＝著　田中雅美+田中智子＝訳　鹿島出版会
伊藤大介＝評

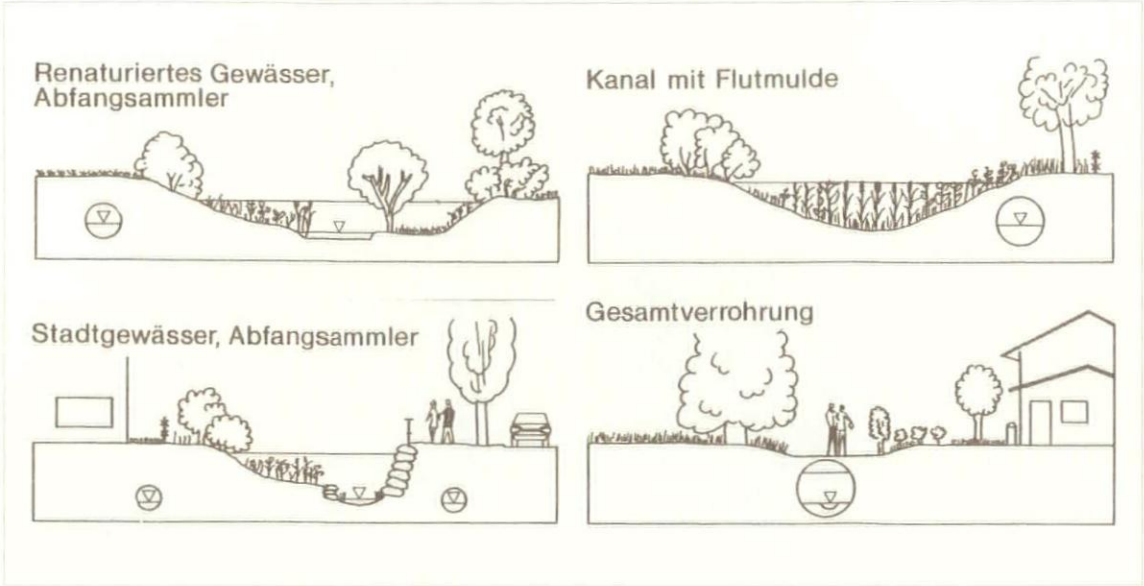
◇ニュース
1●285 表現から構成へ——「国際期」デ・ステイルと日本　梅宮弘光
3●113 「新しい都市環境」展とシンポジウム
5●106 俊英登場への期待——第5回Kajima彫刻コンクール展より　渋澤和彦
5●113 現代美術のための新しいインスティテューション——CCA北九州
槻橋 修
6●161 ヒルサイドテラス30周年の夕べ　宇野 求
7●160 第2回設計方法シンポジウム「建築設計におけるネットワークコラボレーションの可能性」
8●125 FREE LIVINGな家具たち　榎本文夫
8●137 フィンランドのヘルシンキ現代美術館と「風呂&SAUNA展」　小松清路
8●138 GG主宰アイデア・コンペ「ミース・ファン・デル・ローエ財団本部」結果発表
8●140 第9回アジア・デザイン・フォーラムに参加して　葛西玲子
9●115 「生きた」かたちの発見　伊藤 節
10●110 ベトナム、ホイアンでの民家修復　篠崎正彦
11●166 ヨーロッパというジレンマを超えて——社会との距離がもたらしたもの
ロート・美恵
11●168 ワイズマンの捉える場所／空間、あるいは欲望——フレデリック・ワイズマン映画祭　緒方恵一
11●170 中心市街地活性化へのアクション　後藤幸三

◇展覧会レポート
2●133 等身大の技術論——響き合う場　矢島雲居展より　杉村浩哉
3●110 脳内空間の現在形？——建築家・高松伸展より　末包信吾
5●109 時間の中で変容する空間の原質——宮本隆司写真展「オクタゴン」
5●110 美術館の現代性——Medialogue日本の現代写真'98
5●122 存在感ある実物展示——アントニオ・ガウディ展より　下村純一
6●164 近代産業構造物のリサイクルとテクノスケープ——都市港湾のプロセスデザイン展より　岡田昌彰
6●172 素材がメッセージを発するとき——アンドレ・ブットマンによるカーペット・デザイン展より　河合俊和
6●181 スプーンからハイウェイまで——柳 宗理のデザイン　戦後デザインのパイオニア展より　戸村 浩
9●114 ミラノ国際家具サロン——SETSU ITO展より　宮城志信
9●117 バレエ・リュス、あるいは漂流者たちの類稀なる邂逅の場　五十嵐太郎
9●118 「新世紀末都市——東京」展——東京新世紀from東京世紀末をふりかえって　若松久男
9●120 世紀末の決算——建築の20世紀をめぐって　飯島洋一
10●107 自然の中に展開された「夢」　村井久美

◇Metropolitan Library
1●293 渡辺武信＝評
2●136 太田佳代子＝評
3●108 港 千尋＝評
4●112 渡辺武信＝評
5●120 太田佳代子＝評
6●178 港 千尋＝評
7●152 渡辺武信＝評
8●144 太田佳代子＝評
9●124 港 千尋＝評
10●114 渡辺武信＝評
11●164 太田佳代子＝評
12●112 港 千尋＝評

SD

1月号予告



エムシャー・パークの4つの河川水質改善手法

9901

特集

環境共生の現在

20世紀の終わりへ向けて、限られた地球環境の中で社会を永続させるには、環境に与え、与えられるインパクトのトータルな評価が必要であることが認識されてきた。もはや建築・都市機能の中で、環境共生のプライオリティは高まる一方である。ここでは、環境共生あるいはサスティナブルという問題に対してひとつの解答を出した幾つかのプロジェクトを紹介しながら、その近年の動向を俯瞰し、次世代へのヴィジョンを示唆する。

●事例
自然循環系の回復・創造
エムシャーパーク、ウォーターワークス・ガーデン／ジョーンズ&ジョーンズ、他
資源の合理的利用
東葛テクノプラザ／日建設計、コメルツ銀行／ノーマン・フォスター、他
ライフスタイルの提案
世田谷区深沢環境共生住宅／岩村和夫、鹿島京都山科寮／鹿島建設、他
歴史的価値・自然風土の保存・修復
デュイスブルク北ランドスケープ公園／ペーター・ラッツ、他

●次世代へのヴィジョン
愛知万博／隈研吾、宮城俊作、東京サイクルグリーンリング構想／宇野求+フェイズ・アソシエイツ+千葉大学

●3章：環境共生へ向けた5つのアクション
建材一体型太陽光発電システム／YKK-ap、余暇住宅「山海齋」／エポネット、他

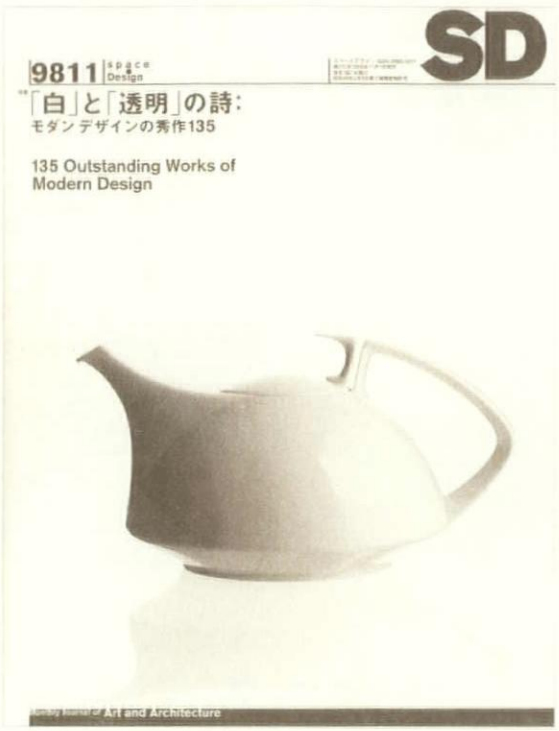
●論文：小玉裕一郎、梅干野 晃、伊香賀俊治、他

連載：
海外レポート：バルセロナ、フランクフルト、シンガポール
新連載：
エントロピーの森―東京アーバン・ランドスケープ　写真：ハイナー・シリング　文：山形浩生

SD

バックナンバー





9810

特集

オフィス環境の近未来

ノンテリトリアルなレイアウトや、SOHO(Small Office Home Office)、サテライトオフィスといった国内、海外の先端的オフィスの状況を対比的に紹介しながら、今後のオフィス環境の姿を考察する。
事例：日本＝電通インタラクティブ・ソリューション・センター、日本ヒューレットパッカードビジネスセンタ、NTT中央研修センタ、乃村工藝社商環境事業部、チューリッヒ・ダイレクト、他
海外＝DEGW、ハマーウィンブラッド、ワイアード・デジタル、L.A.セルラー、他
文：仲隆介、小倉善明、岸本章弘、月館君枝

失われた時と空間を求めて
京都町屋再生の手法

店舗付住宅として調和のある街並みの美を示してきた京町屋が徐々に失われつつある現在、単に保存するということだけでなく、その歴史・文化を継承しつつ現代性のある建築空間として再生しようとする、京町屋再生研究会の活動を紹介する。
事例：橋弁慶山町会所、祇園望月、ミホプロジェクト、他
文：宗田好史、長尾重武、野間光輪子、大谷孝彦、望月秀祐
対談：野間光輪子×小島冨佐江

木構造密集市街地の将来像を考える
向島国際デザインワークショップ報告

文：山本俊哉、ティートス・スプリー、他

連載：
海外レポート：ニューヨーク、ミラノ、パリ
森島紘史の起こし絵図——日本のかたち紙考 10／森島紘史

定価＝2,000円／本体1,905円

9811

特集

「白」と「透明」の詩
モダンデザインの秀作135

私達の生活の中で何気なく使われている小モノたち(ティーポット、ティーカップ、コーヒーカップ、ソーサー、水差し、グラス、灰皿、花瓶など)。そうした小モノたちにも、その素材の特質を生かし、形態的にもすぐれ、デザインの創造力をかきたてるモノたちがある。本特集では、そうした小モノたちの中からその特徴を最もストレートに表すものとして、白い陶磁器と透明ガラスのモノに焦点をあて、そうしたモノたちに見るデザインのミクロコスモスを逍遥する。好評を博したSD96年6月号「建築家の椅子111脚」に続くデザイン紹介の特集である。
紹介予定作家：
アルヴァ・アアルト、アイノ・アアルト、タピオ・ウィルカーラ、カイ・フランク、ティモ・サルパネバ、ワルター・グロピウス、ウィレム・ワーゲンフェルト、グレス・メイヤー、ヘインリッヒ・ローフェルヘルト、ヨーゼフ・ホフマン、ロベルト・サンボネ、レイモンド・ローウィ、ピーター・シュラボーン、エンゾ・マリ、アンジェロ・マンジェロッティ、アキーレ・カスティリオーニ、柳宗理、森正洋、船越三郎、他
文：
柳宗理、アンジェロ・マンジャロッティ、羽原肅郎、船越三郎、森正洋、長井千春、川上元美、河合俊和、他

連載：
海外レポート：ロッテルダム、上海、サンフランシスコ
世界の現代美術館 13　座談会：21世紀の美術館はどうなるか
森島紘史の起こし絵図——日本のかたち紙考 11／森島紘史

特別定価＝3,000円／本体2,857円



SD別冊32号

スポーツのための空間——スポーツ施設の新しい風

日本設計＋SD編集部　総頁数：180頁　価格：3800円（本体3619円）

スポーツを行い、楽しみ、観戦するための空間は、多くの課題を抱えている。

巨大化する競技イベントへの対応、利用頻度の向上を求めての多目的化、新たな魅力付加を求めての複合化、高度な観戦空間を求めての専用化、あるいは既存施設の再利用や機能の向上など。

また、高齢者、身体障害者、女性など、スポーツ参加層の急激な拡大や変化に対応することも早急に求められている。

本書では、そうした課題の解決に挑戦し、大きな成果をあげている最新事例を豊富に取り挙げ、詳しい解説を付し、今後のスポーツ施設の設計に明瞭な指針を与える内容としている。

第1部：スポーツの空間の新しい風
1：専用または共用
2：屋外または屋内
3：都心または郊外
4：複合化と多目的化
5：再生と改修
6：仮設と転用

第2部：最新事例紹介
海外：ベルリン・オリンピック自転車競技場及び水泳場、フランス競技場、ウィンブルドン新コート、2000年シドニーオリンピック公園、香港スタジアム、アムステルダム・アリーナ、アトランタブレーブズ新球場、オリオールパーク球場、バンク・ワン球場、シアトル・マリナーズ新球場、マディソン・スクエア・ガーデン改修、ミレニアム・ドーム、ナッシュビルアリーナ、ユナイテッドセンター、ユービック地下スポーツホール
国内：横浜国際総合競技場、武蔵野の森競技場、東京ドームシティ、大阪ドーム、西武ドーム球場、Jヴィレッジ、ツインリンクもてぎ、他全40例

第3部：空間の拡張と参加層の拡大
スポーツの空間の拡張：代用、自然、ヴァーチャルリアリティ、放送メディア
スポーツ参加層の拡大：簡易スポーツ、高齢者、身体障害者、女性

SD別冊

鹿島出版会の建築図書案内



不気味な建築

A. ヴィドラー著　大島哲蔵・道家　洋共訳
四六判　312頁　定価(本体3,400円+税)

現代建築のもつ一つの側面を美術史家が探る。ヴィドラーによって著された問題の書



住宅建築のリノベーション

樫野紀元・三木　哲・石本徳三郎・知久昭夫著
A5判　208頁　定価(本体3,300円+税)

住宅建築をリニューアルするために、建物の診断方法から計画・工法までを詳細に記述した解説書



次世代街区への提案

安全で環境にやさしい街づくり

三宅理一・林　明夫編
A5判　204頁　定価(本体3,000円+税)

鉄を素材とした長寿命の集合住宅システムの具体的な提案がなされているのが特色



これからの家—健康で快適な住まい

快適住居研究会編著
四六判　208頁　定価(本体1,800円+税)

住宅における健康及び快適とは何か、建設省建築研究所及び住宅メーカーの専門スタッフが詳述



アントニン・レーモンドの建築

三沢　浩著
A5判　244頁　定価(本体3,500円+税)

日本近代建築の巨匠レーモンドの建築と人生。レーモンド研究として、最も充実した書



同潤会のアパートメントとその時代

佐藤滋・高見澤邦郎・伊藤裕久・大月敏雄・真野洋介著
B5判　260頁　定価(本体3,300円+税)

同潤会の誕生した時代背景、そして代官山アパートを中心にその建築や居住者の生活を記述



集合住宅原論の試み

黒沢　隆著
B5判　168頁　定価(本体3,800円+税)

集合住宅論を建築の社会的側面と計画原論との関連を軸に総合的に捉え直した具体的・実践的な書



建築とリアル

松畑　強著
四六判　240頁　定価(本体2,700円+税)

建築や都市デザインを単体として考察するのではなく、広く経済や政治情勢などを接点として捉える



庭の楽しみ—西洋の庭園二千年

A.S. ジェイムズ+O. ランカスター著　横山　正訳
四六判　200頁　定価(本体2,700円+税)

古代ローマから中世、近代、現代に至る庭園の様々な様相を楽しいイラストとエッセイで紹介

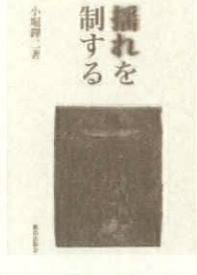


20世紀の建築思想

キューブからカオスへ

杉本俊多著
四六判　224頁　定価(本体2,800円+税)

20世紀の建築のパラダイムの崩壊から、再生、転生を経て爛熟に至る段階的変化を21世紀に向け示す



揺れを制する

小堀鐸二著
四六判　384頁　定価(本体2,500円+税)

21世紀に向け自から各種媒体で語り綴られた思考・行動・論理の根幹を文筆成果より収録



北　京—都市空間を読む

陣内秀信+朱自煊+高村雅彦共編
四六判　248頁　定価(本体2,900円+税)

中国の首都北京を対象にその歴史的都市空間の特質を描く。アジアの都市を解析するための手引書

鹿島出版会の建築図書案内



サウンドスケープ(SD選書229)

その思想と実践

鳥越けい子著
四六判　216頁　定価(本体1,800円+税)

サンドスケープについて思想と計画の両面から理論的に紹介するもの



風景のコスモロジー(SD選書230)

吉村元男著
四六判　224頁　定価(本体1,800円+税)

古代世界の風景の中に、楽園の思想を探り、持続可能な世界とは何かを考える



庭園から都市へ(SD選書231)

シークエンスの日本

村野博司著
四六判　224頁　定価(本体1,800円+税)

回遊式庭園の空間特性であるシークエンスの分析から都市空間の演出を学ぶ



都市・住宅論　(SD選書232)

東　孝光著
四六判　224頁　定価(本体1,800円+税)

戦後日本の都市発展とともに変化してきた都市居住の解析をふまえ、21世紀に向けて提案する



ふれあい空間のデザイン (SD選書233)

清水忠男著
四六判　216頁　定価(本体1,800円+税)

望ましいふれあい環境のデザインについて幅広い調査と実例を駆使し新しい視点と方法を紹介



地球のためのデザイン

建築とデザインにおける生態学と倫理学

ヴィクター・パパネック著　大島俊三他訳
A5判　288頁　定価(本体4,100円+税)

21世紀のヒトと地球を救うデザインとは?　作られる状況、使う環境を考える独自のデザイン論



富永　譲 (建築家の住宅論)

富永　譲著
菊判　128頁　定価(本体2,500円+税)

建築家が自らの作品を通じて語る住宅論。コルビュジエのエピソードを交えながら住宅を語る



吉田研介 (建築家の住宅論)

吉田研介著
菊判　128頁　定価(本体2,500円+税)

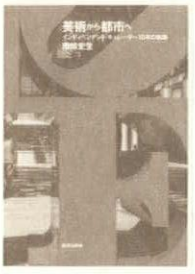
著者が一貫して追求してきたテーマを建築家としての設計論を様々に展開



イタリアのヴィラと庭園

P.ファン・デル・レー他著　野口昌夫訳
A5判　272頁　定価(本体4,100円+税)

イタリア中・北部にある6つの地方の代表的なヴィラ40余りを紹介するガイドブック



美術から都市へ

インディペンデント・キュレーター15年の軌跡

南條史生著
四六判　240頁　定価(本体2,700円+税)

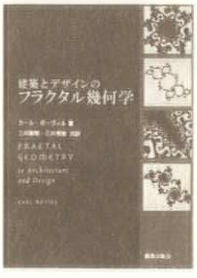
現代美術の最前線で活躍する著者の初めてのエッセイ集。様々なテーマについて語る



フランク・ロイド・ライトと日本文化

K.ニュート著　大木順子訳
A5判　256頁　定価(本体3,800円+税)

ライトの建築作品に新たな光をあてた、建築論であり、比較文化論



建築とデザインのフラクタル幾何学

C.ボーヴィル著　三井直樹・三井秀樹共訳
A5判　208頁　定価(本体2,900円+税)

フラクタル幾何学を平易に解説した入門書で、建築とデザインの新しいアプローチ

第34回 日本翻訳出版文化賞受賞

鹿島出版会の建築図書案内

近代建築の巨匠アアルト生誕百年に適えた全三巻翻訳完結成る

各巻A4変型・ヨーラン・シルツ著　田中雅美・田中智子共訳

[最新刊] 白い机—円熟期3

[アルヴァ・アアルトの栄光と憂うつ]

336頁　定価（本体19,000円+税）



既刊の「白い机」一、二巻では、
1898～1939年までのアルヴァ・アアルトの建築家としての成長過程、
交友関係、仕事、合理主義との関わり、思想、作品などを、
本人が書いた記事や手紙や講演の草稿を交えながら紹介した。
本書第三巻は、戦争による激動期から、建築が栄えた平和な時代、
つまり彼の人生の中で最も実りの多い時代を経て、他界するまでを扱っている。
第二次世界大戦が勃発した1939年にはすでに世界的な名声を持つ建築家であり、
自国でも評価を得ていた。
彼の建築家としての道は、そのほとんどが輝かしい成功に彩られていたが、
数々の失望を味わったのも事実である。中でも一番痛手が大きかったのは、
ヘルシンキ中心地計画が紆余曲折の末、中止になったことだ。
しかし、だからといって創造意欲が萎えることなど決してなかった。
彼の精力、熱意、自信、社交性、カリスマ性は、どこへ行っても人々の心をつかんだ。
第三巻は、そんな革新的な建築家が迎えた、人生の絶頂期の栄光と苦悩のドキュメントである。

[主要内容]　戦場からの逃避／「オフィスA」の活動／アメリカがフィンランドにつくる町／スイスでの講話／きびしい現実／フィンランド継続戦争／スウェーデンでの果たせぬ夢／建築家協会会長として／再びアメリカへ／アルテク・センターとアイノ・インスティテュート／MITでの活動／妻・アイノの死／失意の底から起き上がる／世界は救えないのか／国際人／フィンランド・アカデミー／事務所の現状／自然,人間,科学技術／地域計画／フィンランドの心臓・ヘルシンキ中心地計画／名声が生む二つの側面／最晩年

白い机—若い時1

[アルヴァ・アアルトの青年時代と芸術思想]

296頁　定価（本体9,500円+税）

本書は、アアルトの作品紹介といったものではなく、類い稀な天分をもった建築家の人間としての成長、行動、哲学、人生という面に光をあて、全人格と人生を浮き彫りにしようと試みられた評伝である。

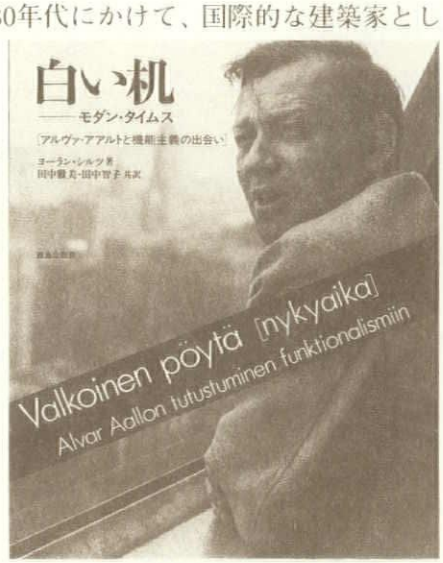


白い机—モダン・タイムス2

[アルヴァ・アアルトと機能主義の出会い]

288頁　定価（本体14,300円+税）

1920年代後期から30年代にかけて、国際的な建築家として名を馳せたアルヴァ・アアルトの人生・思想・仕事について記述する。最近発見されたばかりのプランや図面も初めて紹介している。写真・図版等315点。



SD Space Design
Back Issues

Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm



9708 Venturi, Scott Brown and Associates: 1990's Works: Focuses on the first work in Japan, Mielparque Nikko Kirifuri and introduces 1990's works such as Seattle Art Museum and Additions, Renovations and Restoration, San Diego Museum of Contemporary Art. **Toward a New Living Environments:** Gifu Kitagata Housing Project
¥2,400



9709 A New Phase of Railway Station Space:
Introduces Railway Stations having additional value and tie with community such as JR Yabuki and JR Ohmagari. Also Introduces JR Kyoto widely noticed as International Competition. Text: Takayuki Miyabayasi etc. Talk: Tadanori Yokoo×Hiroshi Hara ¥2,000



9710 Architecture in Glass: Introducing architectures which adopt the characters of glass in such as optical and structural aspects. Searching for the present situation and possibility in the future: Extension of the Winterthur museum of Art, Hotel P, Konami Nasu Seminar House, etc. Text: Kazuhiko Nanba, Masao Ando, etc. ¥3,000



9711 Kengo Kuma: Digital Gardening: Introduces recent leading works of Kengo Kuma, advocate of post-modern architecture and winner in 1997 of the Architectural Institute of Japan Prize and the Benedicta Prize. Memorial Park and other designs. Articles by Youichi Iijima, Greg Lynn, etc. Discussion: Fumihiko Maki and Kengo Kuma. ¥2,800



9712 SD Review 1997: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening commmittee. Participants: Shigekatsu Takayasu Architects+Tatsuya Sakuma+Hirotada Hashizume+Hiroyuki Shigetomi, Hiroshi Kawahito, Sosuke Hujimoto, etc. **Spaces of Lighit and Color: Glass Artsits of Czecho** ¥2,000



9801 SD Review 1982-96
16th anniversary retrospective of SD Review looks at entries later built, examines relation to and significance in the world of architecture, and considers future directions. Text: Fumihiko Maki, Hiroshi Hara, Youichi Iijima, Osamu Nakasuji, ect. Round-table discussion: Makoto Motokura, Ryoji Suzuki, Akira Kuryu, and Kazuhiro Kojima ¥2,800



9802 Transparency in Architecture and the City: Swiss German Architecture Explores the appeal of the Swiss German sphere through an understanding of the background of Swiss architectural works and the context in which they came into being. Architects introduced are Herzog & de Meuron, Gigon & Guyer, etc. Texts by Momoyo Kaijima, etc. ¥2,200



9803 Czech Cubist/Rondocubist Architecture: A Reappreciation of the Revolution: Featuring extant Cubist and Rondocubist architecture in Prague; original photos. **Hiaso Kohyama: Drawings and space:** introduces Hisao Kohyama's architectural space and handling of detail through the architect's own drawings.
¥2,000



9804 Versatile Architects of the New Generation: Introduces the works and creative activities of young architects in their thirties to portray a sense of the times: INTENTIONALLIES, MIKAN, etc.
Desktop Community
¥2,000



9805 The Cutting Edge in Space Design:
Introduces specific examples of collaboration between architects and designer artists:Kazuko Fujie, Kinpei Nakamura, Susumu Shingu, etc.
House for Frida Kahlo and Diego Rivera:
Juan O'Gorman's Architecture and Mexican Modern
¥2,000



9806 Landscape Creation Today: The Challenges for Landscape Architects: Introduces landscaping set apart from the natural environment and purposefully designed to serve society. Architects introduced are Yoji Sasaki, PLACEMEDIA, Hiroki Hasegawa, Toru Mitani, Makoto Noborisaka, N. Finley+M. chiba, Ken Smith, Kyathryn Gustafson, Douglas Reed, etc. ¥3,000



9807 Coelacanth Architects: Traces their activities over twelve years, mainly through introduction of their works. Kibikougen Elementary School, Suijo Fire Station of Osaka City, Sotogaoka Exchange Forum, etc. Text: Hiroshi Hara, Yoshitake Doi. Interview: Riken Yamamoto ¥2,600



9808 Design Vocabularies of Light: LPA Works 1990-1998: Introducing a selected list of 40 concepts from LPA's design vocabulary, this book is a bible of illumination lore for the overall study of space created by light. Text: Arata Isozaki, Kaoru Mende ¥2,500



9809 The Landscape of Detail:
Its Art and Techniques
Introduces the details of architectural works with photos and drawings. Hiroshi Miyazaki, Akira Watanabe, Takenaka Corporation, Yoshio Taniguchi, Kajima Design, Shinichi Ogawa, Waro kishi, Fumihiko Maki, Yoshihiko Iida.
¥2,300



9810 Office Environments for the Near Future
Introduces recent developments in office environment design through specific examples. Works: Dentsu Interactive Solution Center, etc. Text: Ryusuke Naka, etc.
Machiya Restored: The Future of Central Kyoto and The Development of Machiya Restoration
¥2,000



9811 135 Outstanding Works of Modern Design
Introduces 135 coffee and tea services, glassware, and other utensils made of white ceramic or clear glass.
KasimirMalevich, Gertrud Vasegaad, Trude Ptri, Wilhelm Wagenfeld, Josef Hoffman, Peter Schlumbohm, etc.
Text: Sori Yanagi, Angelo Mangiarotti, Shukuro Habara, etc. ¥3,000

SD

Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to Space Design and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card
Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:
☐ Please enter my SUBSCRIPTION to Space Design, starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of SD:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto
A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2
His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2
Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake
Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2
13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai
Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sassetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo
Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brough forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3
29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2
Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito
9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu
All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa
His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii
His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany
Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989
Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoei Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut
Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates
Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

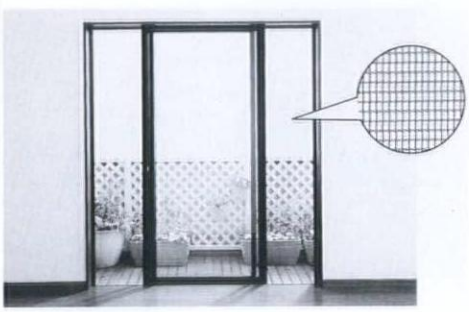
Kim, Swoo Geun
Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World
Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

●
サッシ

ウインドエース

●
新日軽株式会社



新日軽㈱では，マンションなど集合住宅向けの商品として，必要なだけ，網戸を引き出して使え，使用しない時は網戸框を左右のサッシ縦枠側に収納できるロール網戸一体サッシ，ウインドエースを新発売した．

特長

①サッシ枠見込み70㎜内に障子と網戸框(網を巻取り収納した框) をスッキリと納めた． 網戸はサッシ枠(上枠・下枠) のレールを利用して開閉する． 使わない時は網戸框をサッシ縦枠側に収納する．

②引き違い窓の場合，障子の両側を開けた状態で網戸の使用ができる．

③障子を左右開放にした状態で網戸を使用できるので，通風（換気）効率に優れている． 従来の網戸とは異なり，必要に応じて通風が調整できる．

④使わない時はサッシの縦枠側に網戸框部分を収納するので眺望を妨げない． ベランダなどへの出入りがスムーズ，汚れがつきにくく掃除の手間が従来よりも低減できる．

⑤網の収納時は巻取り装置により網のたるみを抑えるのでスムーズに開閉できる．

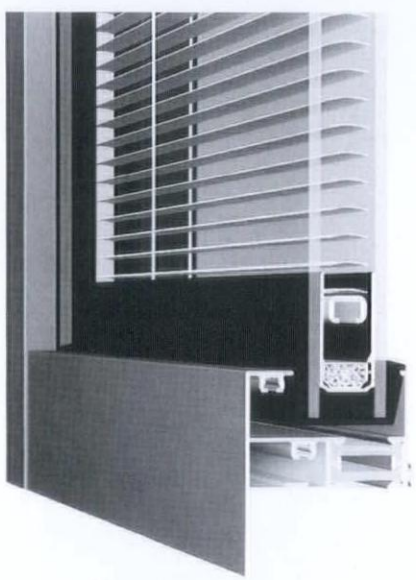
⑥網は室内側から簡単に取り外すことができるので，クリーニングやメンテナンスが容易である．

新日軽株式会社 広報課
東京都江東区木場2丁目7番23号
〒135-0042 Tel 03-3820-2127

●
ブラインドイン複層ガラス

ブラインドイン複層ガラス

●
トステム株式会社



トステム㈱では，複層ガラスとブラインドを一体化した，ブラインドイン複層ガラスを新発売した．

特長

①従来の複層ガラスの性能をそのままに遮熱効果を持たせた． 冬場は遮熱ガラスと異なり，ブラインドの羽根の角度を調節することにより，暖かな日射しを採り入れ，年間を通じて省エネ効果を発揮する．

②羽根の角度を調整し，自由な調光が可能である． 羽根は部屋のインテリアとマッチするオフホワイト色，ガラスは透明と型板の2種類から選択できる． 目隠し効果でプライバシーの確保にも効果的である．

③ブラインドは2枚のガラスで密封されているので，羽根が汚れたり折れたりする心配がない． 汚れや湿気が気になるキッチンや浴室にも使用できる．

④ブラインドの羽根の幅を業界初の10㎜とし，空気層内にブラインドを内蔵することにより，複層ガラス全体の厚みを21㎜に抑えた． その結果，引違いサッシに装着した場合，網戸を使用しながら開閉可能である．また，室内側からのガラス面の清掃が可能である．

⑤空気層が12㎜以上の複層ガラスを用いる断熱サッシにアタッチメントなしでガラスとしてそのまま使用できる．

トステム株式会社 広報部
東京都江東区大島2丁目1番1号
〒136-8535 Tel 03-3638-8115

●
プレスタイル

フラグメントチップ
フラグメントプレーン

●
東リ株式会社



東リ㈱では，プリントタイルに代表される石や木といったカテゴリーの「本物の模倣」というコンセプトではなく，「塩ビ素材の良さを生かした，プリントでは真似のできない本物の塩ビらしさ！」を表現したプレスタイル，フラグメントを新発売した． 大柄，小柄のチップものと，同系色の無地の3柄を1セットで，5セット15色の構成とし，白の無地を共通の組合わせ色として持ち，合計16アイテム構成で，デザイナーに色・柄の組合せを提案できる構成としている． 百貨店のテナント，ブティックなどの専門店の個性的な店舗に最適である．

フラグメントチップ

規格：3㎜厚×450㎜×450㎜
価格：6,900円/㎡（材料価格・税抜き）
色数：10色

フラグメントプレーン

規格：3㎜厚×450㎜×450㎜
価格：5,000円/㎡（材料価格・税抜き）
色数：6色

東リ株式会社 販促宣伝部
兵庫県伊丹市東有岡5番125号
〒664-8610 Tel 06-494-6604

塗料

ハイライト#900

大日本塗料株式会社



大日本塗料㈱では，建築汎用アクリルエマルション塗料，ハイライトシリーズの最高級商品として，ハイライト#900を新発売した．　同製品は，ハイライト#700の隠蔽力，塗装作業性などの品質性能を更に向上させ，建物の内・外壁に塗装可能で，被塗物もコンクリート，モルタル，スレート板，その他各種ボードと用途も広い．　他社の同等品と比較しても刷毛目，ローラー作業性，タッチアップ性やチリ廻り性など多くの優位性を発揮する．

特長

①抜群の隠蔽力と均一で美しい仕上がりが得られる．
②タッチアップ性が良く，ローラーと刷毛塗りとの仕上り差が殆どない．
③耐水性，耐アルカリ性に優れ，屋外用(JIS K　5663 1種）にも使用できる．
④従来のエマルション塗料と比較し，臭いが非常に少ない．
⑤塗料の腰と伸びのバランスがよく，塗り易い．

価格

11,000円/白，20kg

大日本塗料株式会社
大阪市此花区西九条6丁目1番124号
〒554-0012　Tel　06-466-6661

ドア

引込み戸

TOTO



TOTOでは，新構造の住宅用内装ドア，引込み戸を新発売した．　引込み戸は，ドア本体が側面の壁に沿うようにスライドしながら開閉するドアで，開き戸のような開閉スペースを必要とせず，開閉の軌跡がコンパクトなため身体の位置を動かさずに扱える．

特長

①吊り位置を変化させながらドアが開閉する．　開閉時にドア本体が描く軌跡がコンパクトで，前出スペースは通常の開き戸の約半分である．
②身体を移動させずに引き戸感覚で開け閉めできる．車いす使用者にとっては特に便利である．
③前出スペースが小さいので，不意にドアを開けてしまった時などに通路を通る家族にぶつかるもことも少なく，安全である．
④ドアとドア枠があらかじめセットされたユニット品なので，ドア枠をビスで止めるだけの簡単施工である．
⑤幅770㎜は日本の住宅のトイレドアモジュールに合わせたサイズで，既存のドアからの取替えもできる．
⑥カラーは，ナチュラル・ブラウンの2バリエーションで，住宅になじむ木目調ドアである．

価格（写真タイプ）

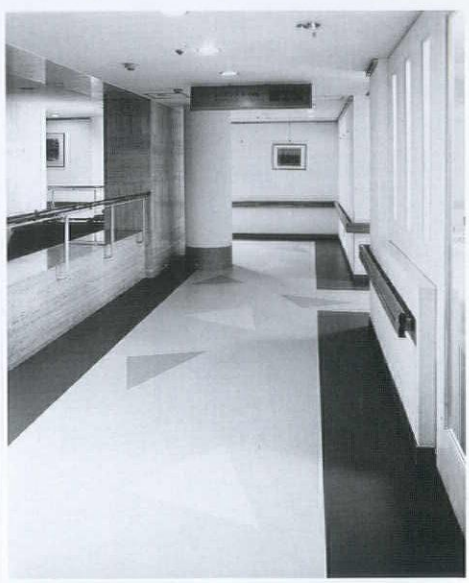
129,000円（消費税・工事費別途）

TOTO　広報室
東京都港区南青山1丁目24番3号
〒107-0062　Tel　03-3595-9422

クッションフロア

H.FLOOR 1998-2000
S.FLOOR 1998-2000

株式会社サンゲツ



㈱サンゲツでは，クッションフロアの新商品を収録した見本帳2種「H.FLOOR　1998-2000」（フロア住宅用）と「S.FLOOR 1998-2000」（フロア店舗用）を新発売した．　最近のトレンドに合ったシンプルでナチュラル，明るくカジュアルな柄を多数展開した．

特長　H.FLOOR 1998-2000（フロア住宅用）

①全点抗菌仕様．
②リアルな木目が好評の「ウッド」に，明るいオレンジイエロー系の新色を追加するなど，木目の充実（16柄35点）．
③衝撃音を緩和し，断熱性に優れることから集合住宅で人気の3.5㎜厚商品の充実（7柄15点）．

特長　S.FLOOR 1998-2000（フロア店舗用）

①廉価で豊富なカラーバリエーションを持つ2㎜厚の抗菌長尺シート「エスリューム」を新発売した．
②ウンボロ（リノリウム）の色数充実．
③2.3㎜厚商品について価格据え置きのまま，全点抗菌仕様に変更した．
④ノンスリップ性に優れた，マンション開放廊下用の長尺シートの点数がアップ．
⑤病院や老人福祉施設などで車椅子や台車の衝突から壁面を保護する高さ35㎝巾木（抗菌）を新発売した．

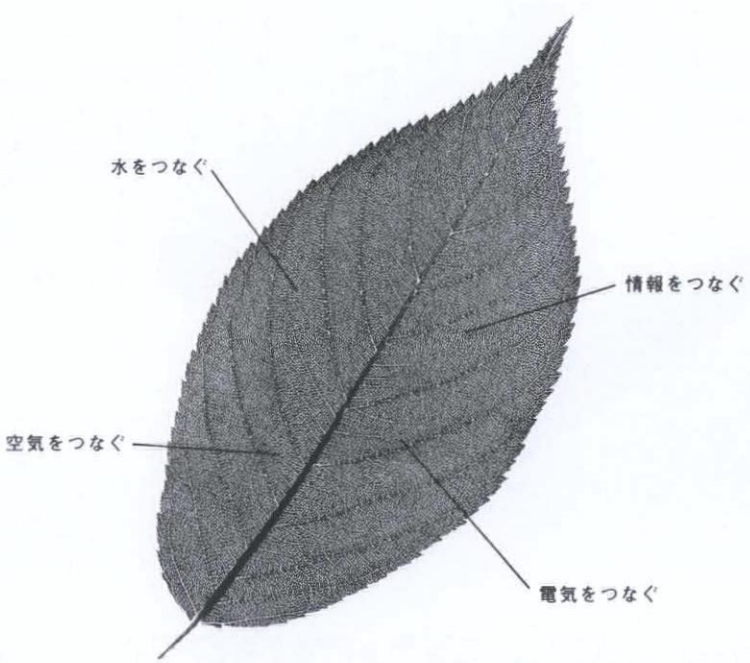
株式会社サンゲツ営業推進課
名古屋市西区幅下1丁目4番1号
〒451-8575　Tel　052-564-3111

SEM

ビルの、工場の、街の、
すみずみに、つながろう。

私たちの仕事は、ビルに、工場に、
街に、生命を与える葉脈として、
そのすみずみにつながっています。
もっと、人が快適になる環境へ。
総合設備業の
リーディング・カンパニーとして、
先端の技術で、高度な未来を
提案し続けます。

あなたと快適をむすびます。



住友電設株式会社

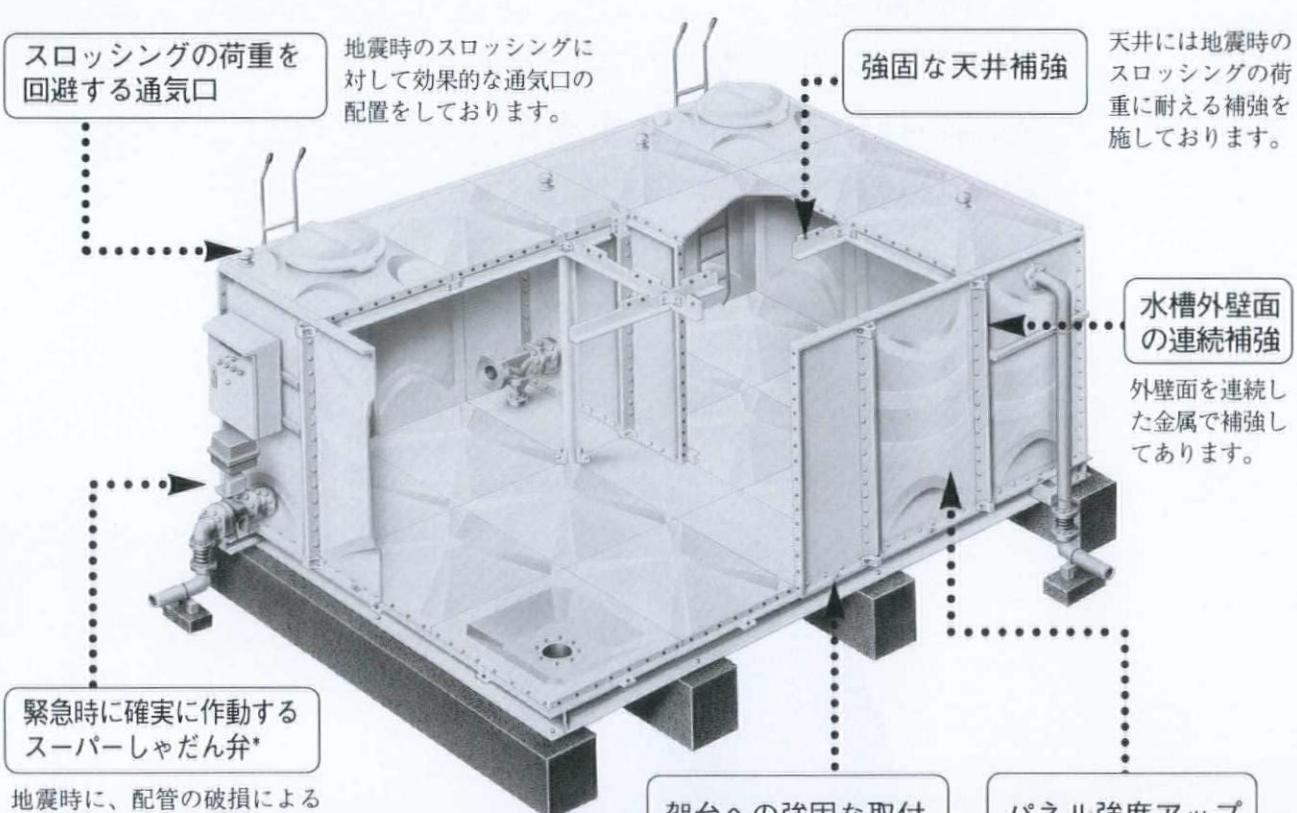
大阪本社 〒550-0011 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06(537)3400
東京本社 〒105-0014 東京都港区芝2-2-17 Tel 03(3454)7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／
プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他

BRIDGESTONE

新・耐震基準
優れた耐震性でひとつ上をいく
安心をお届けします。

ブリヂストンパネル水槽は、衛生性、保温性、配管仕様、止水性といった独自の技術により高い評価を頂いております。そして、この度、求められる耐震基準に適合させ、緊急時には水槽内の水確保のために作動する緊急遮断弁も品揃えさせる等、皆様により安心してお使いいただける商品として生まれ変わりました。



スロッシングの荷重を回避する通気口

地震時のスロッシングに対して効果的な通気口の配置をしております。

強固な天井補強

天井には地震時のスロッシングの荷重に耐える補強を施しております。

水槽外壁面の連続補強

外壁面を連続した金属で補強してあります。

緊急時に確実に作動するスーパーしゃだん弁*

地震時に、配管の破損による水の流出を防ぎ、水槽内の水を確保する事を目的とした緊急時の保水用遮断弁です。
＊［オプション仕様］

架台への強固な取付

新耐震基準に基づいて本体と架台を確実に締結しています。

パネル強度アップ

耐震性に優れたパネルを採用しています。

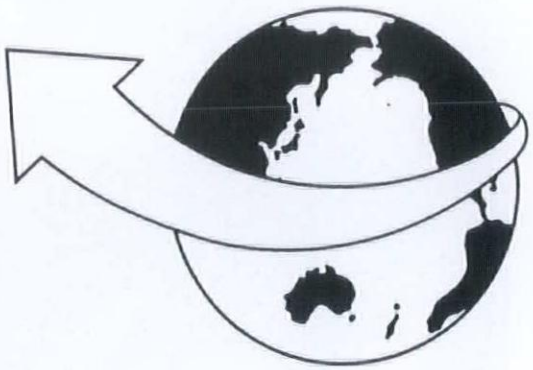
スーパーウォータータンク HI型 1.0G/1.5G/2.0G

スロッシング対策適合品

株式会社ブリヂストン 建築用品販売部 東京都中央区日本橋3-5-15同和ビル 〒103-0027 TEL. (03) 5202-6864 FAX (03) 5202-6869

未来に向って…

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。



●営業品目
空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工

株式会社朝日工業社

本社・東京支社　〒105-0013 東京都港区浜松町1-25-7　電話 03(3434)5711
大阪支社　〒532-0031 大阪市淀川区加島1-58-59　電話 06(302)2273
支店　北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州

日章工業株式会社

代表取締役社長　福田三丈

●本社 〒101-0047 東京都千代田区内神田3－11－7（日立神田別館）☎03-3254-3000
●大阪支店 ●横浜支店 ●仙台支店 ●広島出張所 ●福岡出張所

日立製作所電機特約店
日立化成工業特約店
日立機材特約店
日立建機特約店
旭化成建材代理店
新明和工業特約店
大和ハウス工業特約店
大昭和製紙特約店

施設商品

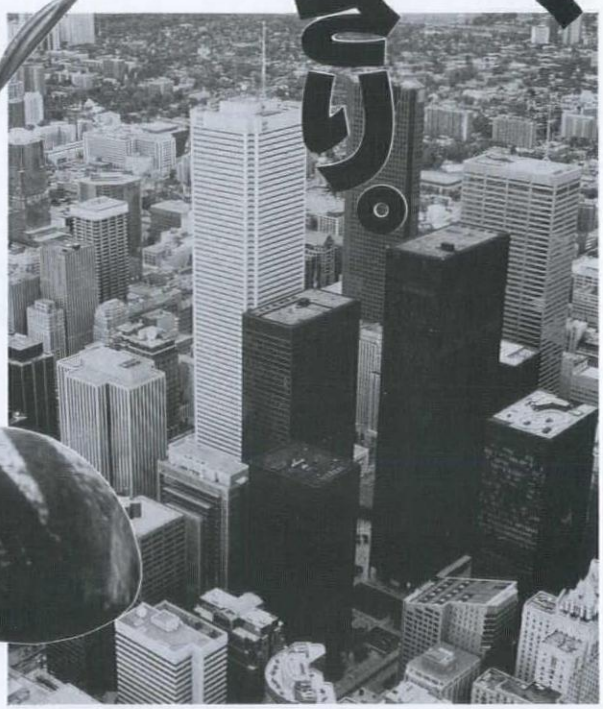
エレベータ・エスカレータ
ホームエレベータ
機械駐車設備
ゴミ処理設備
バスユニット・流し台
洗面化粧台
集中浄化槽・パネルタンク
空調衛生電気設備工事
受変電・自家発電設備
空調機・ポンプ・送風機
監視防犯システム
節水バルブ・節水トイレ

建材商品

PHCパイル・シテイガイ
イーゼット・現場造成杭
地盤改良
ヘーベル・グランデ
押出成形版・金属パネル
屋根・硝子工事
フリーアクセスフロア・OAフロア
クリーンルーム床工事
ハイベース・ハイスプリット
ユーボード・軽量鉄骨
プレハブ規格建築
大昭和ユニボード
九木ライトフォーム・シールド
クローラクレーン・耐火被覆



この世に雨の、降るかぎり。



自然が私たちに雨と光を与えてくれる限り、
今日もどこかで新しい生命が芽生えます。
私たち日新工業の防水材料も、
人々が快適な暮らしを望む限り、
建築と共に今日もどこかで生まれています。
多様化する都市空間の生活環境づくりにおいて、
日新工業はつねに新しいトレンドを見据え、
時代のニーズにフレキシブルに応える
防水材料・工法を開発しつづけています。

アスファルト防水　合成高分子シート防水　塗膜防水　改質アスファルト防水　土木防水　シングル葺き

マルエス S 日新

総合防水メーカー

日新工業株式会社

営業本部 〒103-0005/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

札幌 ☎011(281)6328(代表)　名古屋 ☎052(933)4761(代表)
仙台 ☎022(263)0315(代表)　金沢 ☎0762(22)3321(代表)
大宮 ☎048(642)5811(代表)　大阪 ☎06(533)3191(代表)
東京 ☎03(5644)7221(代表)　高松 ☎0878(34)0336(代表)
千葉 ☎043(227)9971(代表)　広島 ☎082(294)6006(代表)
横浜 ☎045(316)7885(代表)　福岡 ☎092(451)1095(代表)



ミズ太郎

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい（五十音順）

●共栄通信社

東京――東京都中央区銀座8-2-1
新田ビル（3572）3381
FAX（3572）3590

大阪――大阪市北区西天満3-6-8
笹屋ビル06（362）6515
FAX06（365）6052

●建報社

東京――東京都文京区湯島2-30-8
（3818）1961
FAX03(3818)1968

大阪――大阪市中央区淡路町1-4-9
昭栄ビル06（231）4548
FAX06（227）0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10
ハヤシビル（3552）8247㈹
FAX（3552）8249

●中外

大阪――大阪市北区浪花町14-25
日本生命天六ビル06（379）1791

東京――東京都千代田区神田須田町2-5-2
須田町佐志田ビル（3255）8411

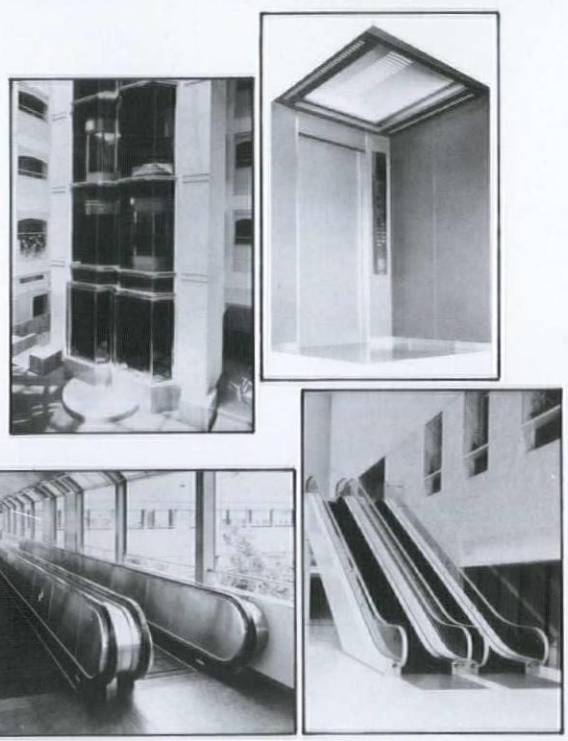
名古屋―名古屋市中区錦2-2-13
名古屋センタービル052（221）7641㈹

ア ㈱朝日工業社――A21
オ 大崎電気工業㈱――A12
カ ㈱関電工――A3
鹿島――A4・A5
軽井沢ホテル鹿島ノ森――A6
川崎電気㈱――A15
ク 栗原工業㈱――A14
コ ㈱弘電社――A16
サ 三機工業㈱――115
ス 住友電設㈱――A19
セ セゾン美術館――60
タ 大興物産㈱――A8
高砂熱学工業㈱――表3
チ ㈱中電工――A15
ト 東陶機器㈱――A1
東光電気工事㈱――A9
㈱トーエネック――A14
東洋熱工業㈱――116
㈱東芝――A24
ナ 中立電気㈱――A11
ナカミツ建材㈱――109
ニ 日本電気㈱――A10
日章工業㈱――A21
日新工業㈱――A22
ヒ ㈱日立製作所――表4
フ ㈱ブリヂストン――A20
ホ ホテルイースト21東京――A7
マ 松下電器産業㈱――A2
ミ 三菱電機㈱――表2
ヤ 矢崎総業㈱――57
山田照明㈱――120
ロ ロンシール工業㈱――A13



乗る人の気持ちを考える。
そこから始まる技術、
すすめています。

21世紀を生きる、私たちの子供たち、そのまた子供たちが安心して利用できるエレベーター・エスカレーターづくりを。
そのために東芝が理想としている技術をひと言でいえば、それは、技術を感じさせない技術。乗っていることを感じさせない技術こそ、私たちの理想です。
人やモノを運ぶタテの輸送機関から、人の気持ちを考えたアメニティ空間へ。
私たち東芝は、21世紀を見すえた都市環境づくりに取りくんでいます。



東芝エレベーター・エスカレーター

株式会社 東芝　　昇降機事業部

本社 〒105-8001 東京都港区芝浦1-1-1(東芝ビルディング)　TEL (03)3457-4621